

愛こそが最高の宝と信じるラブヒーローはどこか壊れてる

ペン汁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンピースにラブヒーローという男がいるだけのお話。

2022/8/8 20:00 完結

目次

ラブヒーローは島の浜辺で立っている	1
ラブヒーローは全てを見届け礼を尽くす	9
ラブヒーローはあまりに下らない呼び出しに呆れ返る	21
ラブヒーローは大犯罪者である	27
ラブヒーローは知らないところで過去を明かされる	32
ラブヒーローは割と申し訳なく思っている	39
ラブヒーローはいつかの過去を思い出す	46
ラブヒーローは次こそ約束を守ることを誓う	52
???はゴミの掃き溜めで生きるしかなかった	57
???はみつともなく生きてきた	64
???は覚醒する	75
ラブヒーローは約束を果たしに戦火の中へと訪れる	86
ラブヒーローは本気で戦う	95
ラブヒーローは反省する	105
???は『ラブヒーロー』と命名される	110
???は海賊王と語らい時代の変革を見届ける	118
???は忘れていた過去を思い出す	125
ラブヒーローは仕置きのためにルスカイナ島を訪れる	133
ラブヒーローのいないところで	142
ラノアはどこにでもいそうな平凡な子供だった	150
ラノアはマリージョアを訪れ憎き男の場所に向かう	165
愛こそが最高の宝と信じるラブヒーローはどこか壊れてる	171
ラブヒーローはダイナ岩を手に入れる	184

ラブヒーローはサニー号に現れる	191
ラブヒーローは圧倒する	201
ラブヒーローの目的を明かそうとする	207
ラブヒーローは海軍本部を襲撃し世界へ宣言する	216
ラブヒーローの居場所を探す	221
ラブヒーローはエンドポイントで待ち構えている	229
ラブヒーローは計画の全貌を語る	243
ラブヒーローと戦う者たち	250
ラブヒーローは戦う	257
ラブヒーローは麦わらの一味と邂逅する	269
ラブヒーローは宇宙を生み出す	280
ラブヒーローのからくり	295
ラブヒーローはかくも愛のために生き続けた	311
ラブヒーローは終わりを迎える	330
ラブヒーローのいなくなった世界で	347
蛇足	
海兵と成りし貴方はそれでも生きていく	372
海賊と成りし貴方はそれでも生きていく	382
何にも成れなかった貴方はそれでも生きていく	391

ラブヒーローは島の浜辺で立っている

ゴールドロジャールが死に際に発した一言から始まった大海賊時代。数多の海賊たちは、グランドラインの最終地点にあるワンピースを求めて航海を始めた。

そして、そんな大海賊時代に産声をあげ、今まさに海に出た者が一人。

青年の名は『モンキー・D・ルフィ』。ゴムゴムの実を食べてゴム人間になった、麦わら帽子を被る男である。

「……………し、しぬー、はらへったー」

ルフィは危機的な状況にあった。

フーシャ村を出たはいいものの、彼には航海術がない。

持ってきた海図の読み方すらわからず、今自分がどこを彷徨っているかもろくに検討がつかないまま食糧が底をつき、3日も遭難している始末であった。

船の縁に背中を預けて座り込むと、グデーっと体から力を抜ける。

飢えからか？ 脱水症からか？ 段々と意識が朦朧とし始め、こつくりこつくりと船を漕ぐように頭を揺らし……………。

ついには意識が途絶えてしまった。

「……………」

「……………おい」

「おい」

誰かの呼び声で目を覚ますルフィ。

気を失っている間に、何処かの島へ漂着したようだ。砂浜に船が中程あたりまで打ち上がっている。

「寝ぼけるのはいいが、何か食わないと死ぬぞ」

ぼんやりと薄れる視界の中、ハッキリと鼻腔を貫く匂い。

腹の虫が暴れ狂う音と共に、口から滝の如く涎を垂らす。間違いない、これは……………」

「肉……ッ!!」

その場から飛び上がり、砂浜にあるテーブルの上にドン!と置かれた骨付き肉に飛び付いた。

三口で自分の顔よりも大きな肉を平らげ、ジョッキ一杯の水を一気に飲み干す。

飢えと渴きを満たすために暴飲暴食を続け、10分ほど経ったところでようやく「ぷふうっ」と心地よさげな満腹の息を吐いた。

「助かった! ありがとな、誰か知らねーけど」

ルフィはお礼を言うために、先程男の声がした方角に目を向けた。そこには。

頭から靴先までピチピチの白タイツスーツを纏い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーを嵌め込んだ、身長3mで筋肉モリモリの変質者が立っていた。

数拍、時を置いてから、ルフィが一言。

「おめー、変な格好してんな」

失礼極まりない一言であった。

変な格好、変質者と称された男は腕を組み、海の水平線の方に体を向ける。

ルフィはその場に胡座をかいたまま、男に話しかけた。

「おっさん、こんな所で海見て何やってんだ?」

「…………… 伝説を、待っている」

「? 何の?」

「この島に伝わる『人魚姫』という愛の伝説だ。

海の怪物が消え去った時、怪物に捕らえられていた魚が美しい姫となりて、浜に現れた愛する人と結ばれる……………」という話らしい」

ルフィは首を傾げた。

「その愛の伝説……ってのは、つまり……おっさんが美しい姫つてのと結婚できるって事か？」

「違うな。私はただそれを見たいだけだ。愛の伝説とまで噂される、2人の愛をな」

「ふーん……」

恋愛に一ミリも興味が無いルフィには、到底理解できない話であった。

興味がなさげなのは男も気付いたのだろう。

組んでいた腕をほどき、自身の背後を指差した。

「この方角をまっすぐ行くと村がある。そこで色々揃えろといい。酒場もある。代金は私の名前でツケておけ」

「ホントか!? やさしいなーおっさん!! なあ、名前はなんて言うんだ？」

「……私の名前は『ラブヒーロー』だ」

「ラブヒーロー……? おっさん、名前まで変わってんな。まあいいや、ありがとう白いおっさん！」

ルフィは彼に手を振りながら、島にあると言う村まで走っていく。

『ラブヒーロー』と名乗った男は振り返ることもなく、右手を挙げることで返事を返した。

「へー……フーシャ村と似たような感じだな」

ルフィは村の中をテクテクと歩いていった。

村の人々は他所者のルフィを邪険にこそしないが、少しだけ奇異の視線を向けていた。他所者自体が珍しいのだから、仕方ないのかもしれない。

主に食糧、その他諸々、調達しなければいけないものは多いが、とりあえずは。

「ちよつと走ったら腹減ってきちゃったな。まずは何か食ってからにすつか！」

そう言いながら、ルフィは村唯一の酒場の中に入った。

酒場の中にはまだ日が高いというのに、すでに飲んだくれてる者もいた。

こういう狭い村だと、その日の仕事が終われば時間関係なく飲んだくれるのは割と当たり前なのかもしれない。

他所者のルフィに気を取られる者もいたが、大抵は酔っ払っているので気にすることもない。

カウンター席にどかっと座り、酒場のマスターに山盛りの食事と水を注文した。

ガツガツと料理を胃袋にかっこんで行く。

そしてチャーハンを口の中に入れてまま、マスターに尋ねた。

「なー、ちよつと聞きたいんだけどさ」

「どうしたお客様」

「浜辺で立ってる『ラブヒーロー』っておっさんの事だけど」

その瞬間。

酒場の中の雰囲気が一気に静まり返り、シンとした静寂が広がった。

頭に「？」を浮かべたルフィは、酒場の中をぐるっと見回す。誰も誰かが辛そうに、申し訳なさそうに顔を顰めているのが見てとれた。

そして1分もしない内に、酒場から全ての客が出ていってしまう。

マスターは背後の棚にある酒瓶を出し、ルフィの前でグラスに注ぐ。そしてそれを一気に飲み干した。

「誰もいなくなっちゃったな…… 今日はまだもう店じまいだ。それ食ったら帰んな」

「…… なんかあんのか？ あのおっさんに」

「……」

マスターは何も言わない。

その様子にルフィは口の中のチャーハンを飲み込み、持っていたスプーンを置く。

「もしかしてあのおっさん、悪いやつなのか」

「…… 違う。悪いのは…… 俺たちの方なんだ」

「え？」

「……これ以上は言いたくねえ。もう俺は引つ込む。食器はそこに置いてきな」

そう言つて、本当に、マスターは店の奥へと引つ込んでいった。ルフィには事の経緯が読めなかった。

言われた通りに食器を置いたまま店を出て、もやもやとした気持ちで村を歩く。

食糧を調達するために向かった店でも、『ラブヒーロー』の名前を出した途端。

「……悪いのは私達の方なの。一方的に利用して、怯えてる私達の……」

店主のおばさんがそう言葉を漏らし、申し訳なきような表情で顔を歪めた。

ますます事の経緯がわからなくなってきたルフィ。

その後も道ゆく人に何度か聞いたが、皆が皆辛そうな顔をしていった。

小さなやんちゃくれの坊主でさえ、悲しそうな顔はしたりしないが、悪口を言うこともなかった。ルフィでさえ「変な格好」だと言つたのだ、小さなやんちゃ坊主ですら一言も悪態を吐かないというのはなんとも違和感のある光景だった。

そうして何度も何度も聞き回っていた頃、とある老人がルフィの前に現れた。

右足を怪我しているのだろうか。杖をつきながらのろのろと歩き、ルフィと一緒に近くにあつたベンチへと座り込む。

「君が……浜にいる『ラブヒーロー』さんについて聞き回っている子かね」

「ああ。じつちゃんは誰なんだ？」

「この村の村長じゃよ。そして……私たちが背負った罪について話に来たのじゃ」

「罪？」

「うむ。気になるんじゃない？ 君も」

「ああ。気になる」

ルフィの強い意志がこもった返答。

杖の持ち手で指を何度も組み直す村長。

やがて意を結したように、この村の背負った罪についてとやらを話し始めた。

「……十数年前、村の付近の海に突然、化け物達が現れたのじゃ。海王類、と呼ばれるものでな。ワシたちはその化け物にずっと苦しめられてきた」

ルフィは過去、シャンクスの腕を奪った近海の主のことを思い出した。

恐らくあれに近いものだろう。そう納得し話の続きに耳を傾けた。

「村の人間が何十人も食われた。ワシの息子もな。何度も倒そうとしたが、一匹も仕留められなかった。

そして……2年前。化け物を倒そうとしたが、負けかけていたワシ達の所に、『ラブヒーロー』と名乗る彼が現れたのじゃ」

当時を思い出したのか、ぐくりと生唾を飲む村長。

「もの凄い強さじゃった。とつぜん空から現れ、あれだけ苦しめられた化け物を一撃で、跡形もなく消しとばした。

ワシら村の人間は大いに喜んだ。じゃが化け物はまだまだ残っている。そしてワシらは……一つの『嘘』を吐いた。」

「嘘？」

ルフィが聞き返す。

「彼は『愛』に固執していた。だから……それに関係する嘘を吐いたのじゃ。

ラブヒーローさんは、この島に伝わる愛の伝説の話をしてもらなかったかの」

「ああ、してた。……まさか」

「そのまさかじゃ。彼の言っていた伝説はワシ達で作った『嘘の伝説』。村の周りの化け物が消えれば、美しい姫が現れ、結ばれるなどという陳腐なものじゃが……」

じゃが彼はそれを信じ、1日で村の周りの化け物を一匹残らず消し去った。ワシらは喜んだよ。

しかし、彼はそれから2年間ずっと、あの砂浜で伝説通りの姫を待ち続けた。そんなものありはしないというのに。村の恩人に向かつて、ワシ達は、とんでもない嘘を吐いてしまった。

それがこの村の『罪』なのじゃ」

村長は最後まで話した後、顔を伏せた。

少しの間黙っていたルフィは、村長に言う。

「そんなの、嘘って言えばいいんじゃないか？」

「……彼はもの凄い強さじゃった。この島なんか簡単に吹き飛ばせるぐらいにのう。」

もし彼が嘘だと知り、怒ればどうなる？ 最悪、この村ごと島を滅ぼすじゃろう。村長として、村の皆を守る義務があるワシには、そんなことはできんのじゃ……」

そんな風に言った後。

血が出そうなほどぎゅうつと杖を握りしめ、村長はボロボロと涙を流し始めた。

「違う……違う。本当は、彼の強さが心の底から怖いだけなんじゃ。」

恩人に対して恐怖し、嘘を吐いたことが怖くて言い出せないなど……そしてその恐怖を隠すために今、嘘を吐いてしまうなど……

弱い自分が情けない……情けのうて仕方がない……！

村長の流した涙が足下に水溜りを作るのを見て、ルフィは優しい声で返した。

「違えよ、村長のじっちゃん」

「え……？」

「じっちゃんがおっさんの事を怖がってるのは本当だ。けど、村のみんなの事をも考えてるのも本当だろ。」

どっちも本当なんだ」

麦わら帽子を外し、ニコリと笑うルフィ。

「だからよ。その嘘の伝説って奴も、『本当』にしちまえばいいんだ」
「……どういう、ことじゃっ」

「村全員で、その嘘の伝説を再現をするんだ。そしたら、あのおっさんもきつと騙されたなんて気づきやしないさ。」

嘘を重ねるんじゃない、全て本当にしちまうんだ。これなら大丈夫だろ?」

ルファイが出した案に、村長は感動する。

「そりゃ、ええのう…… ええ案じゃ……！」

村長は立ち上がった。

「すぐに村全員で準備に取り掛かる。申し訳ないが、協力してくれるかの?」

「ああ、もちろんだ。ニシシ、おんもしれくことになりそーだな!」

「…… ふふ。君は、名前はなんて言うんじゃない?」

「俺か? 俺は、モンキー・D・ルファイだ!」

…… かくして。

村を興した、一世代の、『嘘を本当にする』ための準備が始まった。

ラブヒーローは全てを見届け礼を尽くす

その日は、太陽が水平線に顔を出した頃から少し様子がおかしかった。

嫌な予感…… 何かが起こりそうだと第六感が叫んでいる。

それ故に、ラブヒーローは腕を組みながら、普段よりピリピリとした空気を体に纏わせていた。

「白いおっさん！」

背後から声を掛けられる。

振り返ると、そこにいたのは、昨日この島に漂流してきた青年だった。

そして彼の背後には、村の住人がゾロゾロと連れ添って歩いてきている。

訝しげな声色で、ラブヒーローは問い掛けた。

「何があった」

「今日は伝説の日なんですよ」

「……何？」

住民の1人がそう答えた。

ラブヒーローは意味がわからず、再び問い直す。

そうすると、何かを誤魔化すように、村人達が矢継ぎ早に言葉を発し始めた。

「今日がずっとずっと昔に愛の伝説通りの話が起きたとされている日なんですよ」

「数年に一度、この日にここで伝説を讃えるパーティーを開くんです」

「ラブヒーローさんも一緒に参加しませんか？ 色々準備してますから！」

思案。

そんなパーティーが存在することなど今初めて知ったが……。

だが、彼ら村人は、実際に多くの物資を担いで持ってきている。酒や食料など、宴するには十分な量だ。

…… いや、これ以上疑うこともあるまい。

ただ私が、そういう宴があるという事を知らなかったただけなのだからな。

「もし邪魔でないのなら、参加させて頂こう」

「……！ ええ、それは是非！」

村人達は一齐に顔を輝かせ、急いでパーティーの準備を始める。

ラブヒーローも彼らが持ってきた中で一番重そうな荷物を片手で持ち上げ、宴の準備を手伝い始めた。

その裏で、村人達の本当の計画が進んでいるとも知らずに。

—————

村人達が立てた『その嘘ホント』作戦の内容はこうである。

①まず、ルフィを含む村人達がラブヒーローと宴を始める。

②その隙に、彼に見えないように、村一番の美女『サラモナ』と村人数人が海の中へ潜る。

③ラブヒーローが上手い具合に酔ったところで、天女の衣装をしたサラモナが海の中から登場。

④サラモナが村一番の美男子を「愛していました」と言い、2人が抱き合ってキスを終了。

…… 中々にボロがある作戦である。

そのボロに違和感を持たせない為に、手順③の時点で、どれだけラブヒーローを酔っ払わせられるかが重要だ。酔っ払えば人は冷静な判断を失い、多少演技臭くとも気づきやしないだろう。

そこで村人は、村一番の酒豪にアルコールを分解しやすくなる食材をありったけ食わせ、とある催しを開催したのだった。

ワイワイ。やいのやいの。

周囲からガヤが飛ぶ中、宴の中心にあるテーブルで、ラブヒーローと1人の男が向き合って座っていた。

2人はダンツ！と空になった木製のビールジョッキを机に叩きつけるように置く。

「こ、これでジョッキ8杯目エ！どこまで飲めるんだこの2人!？」

「ちつともキツそうじゃねえじゃねえか……！」

周りのガヤを聞きながら、ラブヒーローと対峙する男はぎゅつとジョッキの持ち手を握りしめた。

(キツイに決まってるんだろバカヤロー……！　こんなハイペースで飲むのは初めてだ……!!)

心の中で悪態を吐いた村一番の酒豪、酒場のマスター。

マスターは、ラブヒーローを酒で酔わせる為に、彼に酒の飲み比べ勝負を挑んだのだ。

今まで飲み比べ勝負で負けるどころか、危うい状況になったことすらないマスター。

だが2分足らずでジョッキいっぱい of ビールを8杯も飲むというのは、さすがにキツイらしい。

しかし、こんなにハイスピードで飲み比べ勝負が進んでいるのには理由がある。

「……9杯目、だな」

ラブヒーローは、顔を赤いバイザーですっぽりと隠している。

だがバイザーがあってはジョッキの飲み口に口をつけることすらできない。

よって、左手で一瞬だけバイザーを外し、一気にビールを飲みほしてから、再びバイザーを付け直すという、恐ろしい業をやっていた。

「くそっ……こつちも9杯目だ!!」

今やっているのは飲み比べ勝負だ。

相手が一瞬でジョッキを空にし、自分はこれを飲み干すまで待つていてくれだなんて情けないことは口が裂けても言えない。

それに、彼にはとても返しきれない恩と償い切れない罪がある。

自分もラブヒーローの戦う様を見たことがあるが、あれは……昔入ったことのあるグラウンドラインでさえ、あそこまでの強さを持つた者は見たことがなかった。

助けてくれた恩に報いるため。ここまで強大な者を、2年も、この島に繋ぎ止めてしまった罪を償うため。

酒を飲むだけでそのための一助になるなら、自分は喜んで限界まで飲み続けよう。

そう心のふんどしを締め直し、新たに注がれた10杯目のビールを口の中に流し込むのだった。

「いやー、向こうの方も盛り上がってんなー」

ズバババツ！と口の中に料理を放り込みながら、飲み比べ勝負を遠目から眺めるルフィ。

彼は未成年だから酒は飲めない……。のではなく、単純に酒の味が嫌いで飲まないのです、料理を食べることに専念していた。

そのテーブルにある料理をあらかじめ食い尽くしたところで、ふと村人の殆んどが盛り上げるために参加している飲み比べ勝負から離れ、ルフィと同じように、1人モクモクと食事をしてる青年がいた。

たしか『ダリン』とか言う名前だった男だ。

なんとなくダリンの様子が気になったルフィは、彼の元へ近づく。ルフィが隣に立っても彼は一切気付く様子がなく、食事をしながら、何度かため息を吐いていた。

「お前は参加しないのか？ 飲み比べ勝負の観戦」

「え？ あ、ええ……。今は少し、考え事を……。」

「考え事？」

ルフィがそう聞き返す。

青年は飲み比べ勝負の方を見て、ラブヒーローがそちらの方に熱中しているのを確認してから、小さな声で言った。

「今回姫の役をやる『サラモナ』ですけど……彼女とは、小さい頃から仲が良かったんです。年も同じで、よく遊びました」

「ふーん」

「まあ、なんというかその……村一番のイケメンのアイツが、姫の相手役をやるのが一番見栄え的にはいいんでしょうが……」

言葉を濁す青年。

ルフィは首を傾げ、何秒か腕を組んで考え込んだ後……。

「なーんだ。お前、あのサラモナって奴が好きなのか」

「えっ!? ちっ、ちち、違いますよ!」

「そうならそうって最初っから言やーいいのに」

慌てて否定するダリンの様子に、さしものルフィもそれが嘘だと気づいたらしい。

顔を真っ赤にして否定するダリン。だがすぐに、落ち込んだように顔を伏せた。

「でも、彼女は……きっと僕のことなんか何とも思っちゃいないですよ。小さい頃にした結婚の約束を未だ覚えてるような男の事なんか……」

「結婚?」

「……いえ、何でもありません。どうぞ、このまま食事を続けてください」

そう言うと、ダリンは立ち上がり、飲み比べ勝負の方へ歩いて行く。ルフィはそんな彼の寂しそうな後ろ姿を、肉を頬張りながら見つめていた。

酒場のマスターが17杯目のジョッキを飲み切ったところでぶっ倒れ、しばらくが経過した。

マスター以外の酒自慢が悉くラブヒーローに飲み比べを挑むが、誰もがそのハイペースな勝負についていけずに地に伏せる。

だが、流石のラブヒーローも何十杯と飲んだせいか、ほんのりと酔っ払ってきてしまったようだ。

木製のジョッキを片手で握り潰し、「力加減を間違えた……。」と言
い出す始末である。

これ幸いと、村人達の立てた計画は順調に進んでいく。

ちようど夕日が海の向こう側に沈む時間帯だ。

美女のサラモナがバックに太陽を背負って入れば、それはそれは、
伝説のように映える絵になることだろう。

「……」

村一番の美男子が緊張した様子で服の裾を整える。

それをどこか羨ましそうな表情で見つめるダリン。しかしすぐに
視線を逸らし、海の方に視線を向ける。

さあ、もうすぐだ。

パーティーと今までの嘘に決着をつける時が来た。

ブクブクブク……ツと、海の方から泡の湧く音がした。

村人達はこれから何が起こるのかは知っているが、全員がいかにも
困惑しているといった風な演技をして、海の方に顔を向ける。

ルフィはラブヒーローの近くにあぐらをかき、彼と同じように海に
顔を向ける。

元々演技の類も苦手、恋愛のこともわからないルフィは、少し冷静
な顔つきでそれを見ていた。

やがて海の中から、シャボン玉の中に入った美しい女性が姿を現し
た。

後のシャボンディ島で使われる、シャボンコーティングという技法
だ。

シャボン玉がパチンと割れ、水面を滑るように、サラモナが陸の方
に近づいてくる。

「おお……」

事情を知っている村人達ですら声を漏らすほど美しき。

その時、ルフィがチラリと、ラブヒーローの方を目だけで見上げた。まさに伝説通り。

2年も追いつけた愛の伝説通りの出来事が今、目の前で起きているというのに。

ラブヒーローは非常に退屈そうに、肘を突いてそれを眺めていた。

麗しい姫の格好をしたサラモナが、村一番の美男子の名を呼ぶ。

『メンケイ』様、どうぞこちらにおわし下さい」

彼は息を飲み、海水が裾を濡らすのも厭わず、サラモナに近づいていく。

メンケイとサラモナが手を取り合う。

「私は海の怪物に囚われておりました。ですが、数年前に海の怪物が消え、やっとこうして、貴方にお会いすることができました。」

「昔、貴方を一目見た時から、ずっとお慕いしておりました。

……どうか私の、この気持ちを……。受け止めて、いただけないでしょうか？」

サラモナが予定通りの台詞を吐く。

この後は、彼女とメンケイのキスだけだ。

美女と美男の顔が近づく。

側から見れば、とてもとても美しい光景だ。

だが、ルフィやラブヒーローのようなある程度のラインを超えた強者には。

サラモナの唇がフルフルと震えているのが見えた。

見えてしまったのだった。

「……愛を、愚弄するか貴様ら」

「!？」

口の中で何かを小さく呟きながらラブヒーローが立ち上がった。

おどろおどろしいほどの殺気を感じたルフィも反射的に立ち上がるが、その瞬間。

シユルルルッ!

「えっ!? きゃっ、きゃああああああつ!!!」

突然現れた巨大なタコの足がサラモナの体に巻き付き、彼女の体を天高くに持ち上げた。

全ての村人が顔を青くして、次に現れた巨大タコの顔を指さす。

「うっ…… 海の化け物だあああああ!!!」

タコの足を必死に叩きながら叫ぶサラモナ。

「いやっ、やめてよ! 誰か助けて!」

彼女に一番近いところにいたメンケイはすでに逃走している。

まあ、仕方のないことだ。自分より数十倍以上も大きな生き物に對峙しては、普通逃げるだろう。

その普通を超える者は、ごく稀にいるが。

「サラモナアアあああああツツ!!」

村人達の後ろの方で叫び声が聞こえる。

誰かが止めるのも気にせず、振り払い、一目散に彼女の元へ走っていく。

勝てる見込みもない、助けられる見込みもない。

ドロドログシャグシャで、クールで格好いい所なんか何一つもないその姿。

そんな彼の姿に、ラブヒーローは溢れ出る殺気を霧散させ。

「…… ふっ。 エア、ウォール 空気の壁」

ルフィですら一切捉えきれない、神速とも言えるスピードで化けタコの頭上に移動し。

「今朝の妙な気配は貴様だったかッ!」

大きく振りかぶった右のパンチで、タコの体をバラバラに砕け散らせたのだった。

赤い肉片が辺りに飛び散る中、血の匂いに釣られ、蛇のような見た目をした新たな海王類が姿を現した。

「サラモナっ!」

「あぶねえダリン! 横にもう一匹だ!!」

村人達の叫びも聞こえていないと言った様子で、落ちてくるサラモナの元へ向かうダリン。

ラブヒーローがもう一匹の海王類も仕留めようと、右の手の平を向けた瞬間。

「ゴムゴムのおく……ピストルツ!!!」

弾丸のように飛来した拳が、海王類の頬を撃ち抜いた。

相当な威力だったのか。蛇型の化け物も一撃で気を失い、海の底へ沈んでいく。

シユルルルツ、パシン!

もちろんゴムのように腕を伸ばし殴ったのは、ゴム人間であるルフイだ。

ニシツツと笑う彼。明らかに人間ではない体をした彼だが……村人達の視線は、先ほど駆け出したダリンとサラモナの2人へ注がれていた。

「サラモナ、サラモナ……ああ、よかった……」

「ダリン、私……ごめんなさい……」

無事に彼女のことをキャッチしたダリン。

海の中で、2人は互いの体を抱きしめ合う。

「ダリン、覚えてる……? 小さい頃に、2人で結婚の約束をしたこと……」

「!? あ、ああ……!」

「貴方は私のことなんか、とつくに興味がなくなっちゃったと思っただけど……私も忘れようとしていたんだけど……! こうして貴方を見たら、もう忘れられそうになくなっちゃったよ……」

涙目でそう話すサラモナ。

そんな彼女を、ダリンは強く抱きしめ直し。

「忘れなくていい! 俺もずっと、ずっと覚えてたんだ……!」

「ホント?」

「嘘なんか言わないって……」

「私たち、これからも一緒にいられる？」

「うん、いよう……。君が許してくれるなら……。」

2人が抱き合いながらそう話しているのを見て。

彼らの上空で立っているラブヒーローは、少し嬉しそうに呟いた。

「人魚姫の、愛の伝説……。しっかりと、見届けさせてもらった」

—————

あの後、パーティーはダリンとサラモナの結婚式へと変貌し。

全てが終わったのは、夜が明け、朝になった時だった……。

ルフィは一際大きなテーブルの上で目が覚める。

どうやらあのまま村人達と騒ぎ、そのまま寝てしまったようだ。

麦わら帽子を頭にかぶり直し、辺りを見回すと、ラブヒーローが砂

浜で直立しているのが見えた。

「白のおっさん！ 何してんだ？」

「…… お前が起きるのを待っていたんだ」

「俺？」

彼がルフィに近づいてくる。

「あの杜撰な計画を村人に考えさせたのは、お前だな」

「なんだおっさん、演技ってわかったのか」

「世の中には見えない場所の気配を察知する技もあるからな。海に人

がいるのはわかっていた、酒で海王類が寄ってきていたのに気づかなか

かったのは情けないが……。それより、お前に礼が言いたくてな」

ラブヒーローは懐から、コイン程の大きさの緑色の宝石を取り出し

た。

「俺なんもしてねえからお礼なんていらねーよ。村のみんなに送って
やってくれ」

「いいや。発端が演技であれどうあれ、最後に私は真の愛が生まれるところを見た。それを生み出し、守る一助を担ったお前には、心からの礼を尽くしたい」

「……………なんだこの宝石？ たけーのか？」

「高くはない。売れもしない」

宝石をルファイの手に握らせる。

怪しく光る緑の宝石。

透明度は低く、向こうの様子は見えない。ルファイの顔だけが反射して見える。

「それは少し特殊な作りをした宝石だな。お前が心の底から助けてほしいと願った時、私にお前の居場所が伝わるというものだ」

「伝わる？ それでどうなんだ？」

「今回の恩に免じて一度だけ助けてやる」

「助けなんかいらねエよ」

「礼だと言っているだろう。何もなければ助けもしない。持つだけ持っておけ」

無理やり宝石を握らせる。

ルファイは宝石を渋々と言った様子で受け取り、懐に収めた。

それを見届けると、ラブヒーローは何もないところに足を乗せ、ずかずかと空中を階段でも上るみたいに少しずつ昇っていく。

「お、おっさん!? それどうなってんだ?!」

「悪魔の実だ」

十メートルぐらい昇ったところで、ラブヒーローは己の眼下にいる男の方に向き、問いかけた。

「最後に一つ、名前を聞いてもいいか？」

そう言われると、ルファイは、ニカツと笑う。

「俺か？ 俺の名前は『モンキー・D・ルファイ』！ 海賊王になる男だ！」

「……………『モンキー・D』……………ふ、ハハハハッ！ ガープの息子が!?」

「え!?! お、俺のじいちゃんを知ってたのか!?!」

ルフィは心底驚いた様子でそう言った。

「じいちゃん… 孫か。ああ、英雄ガープのことはよく知っている。しかしまあ… によく海賊になるのを許してもらったな」

「いや、じいちゃんからは許してもらってねエんだ。海賊王になるって言ったら何回も殴られたしさ」

「だろうな。あのスパルタ爺の拳は痛いだろう、私も何度も殴られた」
「じ、じいちゃんと戦ったことあんのか!？」

「何度かな。化け物だ、アレは」

ガープの強さと恐ろしさを知っているルフィからすれば、何度も戦って尚且つ生きているラブヒーローも十分化け物に見えるが。

「しかし、ガープの孫で、なおかつ海賊王を目指すか…。これはすぐに再会することになりそうだな」

「? どういうことだ?」

「お前が危険な運命の星に生まれついたという意味だ…。では、私は今度こそ行こう。ではな」

そう言い残して、ラブヒーローは、一瞬で姿を消してしまった。

後にルフィは、六式の『剃』という技を見ることになるのだが、ラブヒーローの移動速度はアレよりも段違いに速いと思いついている。

まあ、今のルフィはただただ目の前からいなくなったとしか思えないのだが。

誰もいなくなった空を見上げながら、彼は一人呟いた。

「ん、待てよ? じいちゃんと戦ったことがあるってことは…。も

しかして、あの白いおっさんも海賊なのか?」

その真偽は、次に会う時までわからない。

ラブヒーローはあまりに下らない呼び出しに呆れ返る

ルフィはラブヒーローと別れたあの時から冒険を続け、今では世界政府相手に喧嘩を売り、世界政府直下諜報機関『CP9』を倒す程までに成長していた。

麦わらのルフィ。

海賊狩りのゾロ。

泥棒猫のナミ。

黒足のサンジ。

わたあめ大好きチョッパー。

悪魔の子 ニコ・ロビン。

そして今は諸事情により抜けている、狙撃の王様そげキングことウソップ。

なかなかの粒揃い。

他の海賊に比べ人数は圧倒的に少ないに関わらず、その総合戦力は、グランドライン前半の海ではトップクラスと言ってもいいほどに高まっていた。

麦わら海賊団がエニエスロビーで、スパンダム率いるCP9を倒し。

ウォーターセブンにて、これからの海を航海する新しい船の完成を待っている時のことだった。

「起きんかア〜!!!」

麦わらの一味が宿泊しているホテルに、海軍の英雄こと海軍中将『モンキー・D・ガープ』が訪れていた。

「い!? 痛エ〜!!」

サンジやチョッパー、フランキーが応対するも、何もできず。部屋の奥で座ったまま爆睡していたルフィの顔面をガープが殴り飛ばした。

座っていた椅子どころか地面にヒビが入るほどの勢いでぶん殴られたルフィは、頭を抑え悶絶する。

「痛え!? ゴムにパンチが効くわけ……………」

黒足のサンジが困惑した様子でそう叫ぶ。

彼らはまだ知らないが、広い広いグラウンドラインには、悪魔の実の能力を貫通してダメージを与えられる技が存在するのだ。

「暴れとるようじゃのお、ルフィ……………ん?」

コロんと。

ルフィの懐から、深緑色の宝石が一つ、転がった。

「……………!」

それを見て、ガープは恐ろしい形相に顔を変え。

「ルフィ……………!!! なんてこんな物を持つとるんじやアア!!!!」

「ギヤアアアア……………!!!」

二発目の愛ある拳が、ルフィの顔面に突き刺さった。

ガープ、ルフィが共にある程度落ち着……………くわけもなかった。

「ルフィ! お前と言う奴は、赤髪に続いて次から次へと……………!!!」

「痛エー! やめてくれ爺ちゃん……………!!!」

ルフィの胸ぐらを左手で掴み上げたガープが、右手でボカスカとルフィの顔を殴る。

ゴムに打撃は通じない……………筈なのに、見るも無残なほどルフィの顔面はボコボコに腫れ上がってしまったている。

「この緑色の宝石を誰から貰ったんじや……………!!!」

ガープが人差し指と親指の間に挟んだ宝石を、ルフィの目に押し付けんばかりに見せつける。

「し、白いおっさんに貰ったんだ!」

「どこにいた……………!!!」

「ふ、フーシヤ村を出てすぐの島!!」

「何イ!? そんな所に奴がいる訳あるかア〜!!」

「ギャアアアア!!」

再び殴られるルフィ。理不尽である。

意味不明な状況にサンジやナミ、チョッパー、フランキーは身動きもできない。

海軍の英雄ガープがルフィの祖父だったと言うのも驚きだが、そのガープが恐ろしい形相でルフィに詰め寄っているのだ。しかもルフィが偶に手のひらで弄んでいた緑色の宝石を持って。

なんともおかしな状況だが、今下手に動いたところでいい方向に事が転ばないのは事実。

ガープ側にルフィを捕まえたり殺したりする気はないようだし、残念ながら、ルフィにはしばらく痛みを我慢してもらおうと言うのが一味の暗黙の決定だった。

「これは『ラブヒーロー』の宝石じゃあ! これを持つてると碌なことにならない! いつあの男が飛んでくるのかわからんのじゃぞ!」

「あ……. そーそー、確かそんな名前だった。すっかり忘れてた」

「ふざけとる場合かあ〜!!」

一瞬間の抜けたのようにポンと手を叩いたルフィの顔面に拳をぶち込む。

そして、ガープの出した名前に、ナミが何かを思い出すように眉間にシワを寄せた。

「……. ラブヒーロー…….」

「知ってるのか、ナミさん」

「本当に小さな頃だけど、ベルメールさんから聞いたことあるわ。とんでもない事をやらかした大馬鹿者だって…….」

「私に向かって随分と失礼な事を言ってくれるな」

「失礼って……. え?」

突然背後から聞こえた、聞き覚えのない声。

顔を青ざめたナミは、ゆっくりと肩越しに背後の景色を伺う。

そこに立っていたのは。

「まったく……何事かと来てみれば、祖父との喧嘩か……」

身長3m。筋肉モリモリ。

ピチピチの白タイツスーツを足先から頭の先まで纏い、顔には表情がわからないほど濃い赤色のバイザーが嵌め込まれている。

明らかに不審者然とした男は、ガープとルフィの方をじっと見つめていた。

「!? いやああああ!!」

「ツてめエ!! ナミさんから離れろ!! 首肉シユート!!」

ナミが悲鳴を上げ、真つ先にサンジが動く。

彼女の背後に突然現れたラブヒーローに向かって飛び上がり、首に向かって強力な蹴りを放った。

ドンッ!

鈍い音。完璧に決まった首への蹴り。

常人、グランドラインにいるような海賊でもかなりの怪我を負うだろう蹴りだ。

だと言うのに。

「……」

ラブヒーローは首に蹴りが突き刺さっても、一ミリも体を動かさず。

そのままじつと、何もなかったかのように腕を組んでいた。

弾かれたように跳び下がったサンジは、驚きの表情を隠せないまま立ち上がる。

「! 嘘だろ……クソツ、ディアブル悪魔のー」

「やめろ」

高速回転を始めようとしたサンジの首元に、人差し指を当てるラブヒーロー。

「その技は強力だ。グラウンドライン後半の海にいる海賊にもある程度は通じるだろう。だからこそ、そんな技を打とうとするなら……
こちらも相応の対応をしなければならなくなる」
「ッ……」

サンジは動きを止め、その場にしゃがみ込む。
彼が近づいてくる時の動きがまったく見えなかった。いつの間にか目の前に立っていたのだ。

そして指が首に当たった瞬間に感じた威圧。アレだけ苦戦したC P9よりも、次元が違うほどに強いのが本能でわかった。

崩れ落ちたサンジを見て、焦ったような声を出すルフィ。

「白いおっさん！」

「誓って何もしていない。すまないな、仲間に向かって脅すような真似を。……そして」

「……ラブヒーロー……」

ルフィを地面に落とすガープ。

明らかかな敵意を放つ海軍の英雄に、真正面から立つ男ラブヒーロー。だが組んでいた腕は解き、誰が見ても分かるような臨戦態勢を取っている。

「お前、この2年間一体何処で何をしとったんじゃ」

「浜辺で立っていた」

「舐めとるのか」

敵意はあるが、どこか親しげな様子の2人。

地面から2人を見上げるルフィは、何度か互いの顔を目で行ったり来たりした後、ガープに問いかけた。

「なあ爺ちゃん。白いおっさんって何者なんだ？」

彼の問いに、少し悩んだ様子のガープ。

「だがいざれ知ることだろうと悟ったのか、ため息をつき、静かな口調で話し始めた。

「……こいつは、ゴールド・ロジャーがいた頃から活動していた大犯罪者じゃ。昔はこんな姿ではなかったがの。」

その首に掛けられた懸賞金は『32億2000万ベリ』。

通称…… 『天竜人殺し』のラブヒーロー」

ガープの語った内容に、麦わらの一味全員が目を見開いた。

「「32億2000万ベリ……!!??」
「」

そして、当のラブヒーローは。

「…… そんなに高かったか？」

と一言漏らした。

ラブヒーローは大犯罪者である

ラブヒーロー。

懸賞金32億2000万ベリ。

異名は天竜人殺しのラブヒーロー。

「て、天竜人殺し〜!?」

ガープの背後で会話を聞いていた海兵たちが叫んだ。
当たり前だ。

天竜人とはこの世で最も高貴で身分の高い存在であり、目の前を横切る事すら死に値する重罪。

そんな人物を殺すと言うことは、世界政府に真正面から唾を吐きかけ中指を立てるような物だ。海軍に姿を見られた瞬間バスターコールをされたっておかしくない存在である。

天竜人は絶対。

この世の殆どの人物に刷り込まれている当たり前である。

さて、その当のラブヒーローはと言うと。

「ガープ。私の懸賞金は20億ぐらいではなかったか？」

「ぬかせ大馬鹿者。マリージョアを30回以上も襲撃しといて何言つとるんじや。20億はゴルモンド聖を殺害した時の懸賞金じゃわい」

「ま、マリージョアを30回以上襲撃イ〜!?!!」

マリージョアとは、天竜人たちが住む場所のことである。

レッドラインの最も高い場所にあり、立ち入る事すら容易ではない場所だ。

そんな場所を30回以上も襲撃したらしい。

海兵達は既に顎が外れそうであった。

「天竜人殺しにマリージョア襲撃だと……!!」

「ルフィ、あんたいつの間にかこんなとんでもない男と関係持ったのよ!?」

天竜人の意味がよくわかるフランキーが動揺し。

懸賞金32億2000万ベリーに気圧されたナミがルフィの体を揺さぶる。

「懸賞金32億かー…… おっさん、実はとんでもねえ奴だったんだな。サンジ、飯!」

「のんきか!!」

ビシツとルフィの頭にナミの手刀が刺さる。

「まあ、白いおっさんは別に悪い奴じゃねえからな。変ではあるけど」

「悪い奴じゃあ! 勝手なこと言うなルフィ!」

「愛のために動く私が善か悪かは後の世が決めることだ」

三人の意見が交錯し、場の状況がいささかカオスになってきたところ。

突然、背後の海兵達が騒ぎ出すと共に、刀と刀のぶつかり合う金属音も聞こえてきた。

ガープが背後を肩越しに見る。

「ん? 何事じゃい!!」

「賞金首の海賊狩りのゾロですね」

背後で控えていたガープの補佐役、シルクハットを深めに被ったボガードがそう言った。

「ルフィの仲間じゃな。威勢がいいのはいいが、今の状況で……」

「好きにすればいいだろう」

「何?」

「確かに海軍と私は敵同士だが、海軍の英雄とは戦いたくない。今回呼び出されたのは明らかに無駄足なようだし、私は帰るとしよう」

「…… あー、そーかい。ならとつと帰るんじゃない」

冷たくあしらうガープ。

その様子に、近くにいたボガードが問い掛ける。

「いいんですかガープ中将。その大犯罪者を捕まえなくても」

「ここで奴を捕まえたら、この場にいるルフィも捕まえなきゃならん。それにワシでは奴の逃げる速度に追いつけんからな」

彼の言葉を背後に、ルフィの方へと歩いていくラブヒーロー。

ルフィは海兵達を相手に暴れているゾロを止めに行こうとしたまさにその時であり、スツクと立ち上がった。いた。

「モンキー・D・ルフィ」

「ん？ おっさん、悪いけど俺ゾロを止めなくちゃ！」

「聞け……。今回は下らない用だったから、ノーカウントにする。

もう一度、本当に困った時に駆けつけてやろう」

「ああ……。じゃあ宝石を持ってろってことか？」

「そういうことだ。察しが良くて助かる」

そしてゾロの方向へ走っていくルフィ。

それを一瞥し、静かに呟いた。

「強くなったな、以前より数十倍も……」

瞬間。

彼は姿を消した。

『こっから俺たち、本気で逃げるからな!!! またどっかで会おう!!!』
『そう言い残して、麦わら海賊団の乗るサニー号は何処かへと飛んで行ってしまった。』

船が空を飛ぶなど普通ありえないが、それをありえるにするのが麦わらの一味の特徴……。と言っても過言ではないのかもしれない。

もつと言ひ換えると、何を仕出かすかわからない危険分子になるのだが。

「まったく、あんの馬鹿者が……」

大量の砲弾を横に、その場に座り込むガープ。

手のひらで顔を隠すが、そこから見える口元は、につこりと笑っていた。

数分そうしていた後、正義のコートを着て立ち上がった。

砲弾を片付けておくよう部下に指示し、船の甲板で寝ていた海軍大將『青雉』の横へ行く。

「ワシらも帰るとするか。その前に、ラブヒーローのことも報告せにやいかんがのう。……代わりにやってくれんか？」

そう話しかけられた青雉は、アイマスクを片目だけ外し、寝っ転がったまま答えた。

「勘弁してくださいよガープさん。ラブヒーロー絡みの報告って、海軍元帥と……『あの人』にでしよう？」

「ああ。けどラブヒーローの話題を出すと面倒臭いんじゃないやアイツ。どうか代わりに……」

「ぐー」

「ね、寝おったこいつ……！」

青雉は一瞬で寝ることで、ガープから厄介な仕事を押し付けられるという窮地を脱した。

まあ、絶対にバレないように様々な細工を施しただけの寝たふりだが。

仕方なく、本当に仕方なく、渋々とボガードの持ってきた電伝虫を受け取るガープ。

元帥であるセンゴクに報告しても面倒なのは事実だが、それよりもさらに面倒臭い男が1人。

先にそちらの方から片付けることにしたガープは、電伝虫の受話器を口に近づけた。

プルプルプル……ガチャ。

『何の用だ、ガープ』

ラブヒーローは知らないところで過去を明かされる

ラブヒーロー。

革命家ドラゴンほどの知名度はないものの、知る人は知っている大犯罪者。

行き過ぎた愛への執着と行動は、時に一般市民に危害を及ぼすこともあるが。

その行動の大抵は、一般市民の生活を危ぶむ危険分子を排除するものである。

グランドライン内に限らず、彼に助けられたことがあると言う者は多い。

天竜人殺しという異名を持つが、「フィツシャータイガーの猿真似だ」とやっかみを持つ海賊もいる。

だが殆どの海賊はラブヒーローに敵わないため、手も出そうとしない。

また、一部の古参海賊や海兵は、ラブヒーローの素顔を知っているというが。

その真偽は定かではない。

シャボンディ諸島。

麦わらの一味は人間オークション会場にて天竜人を殴り飛ばすという世紀の大罪を犯し。

偶々オークション会場に商品としていた『シルバーズ・レイリー』と共に、安全地帯である『シャツキー』s ぼったくり BAR』へと駆け込む。

そしてそこで、レイリーが海賊王の船の副船長であったこと、シャンクスが海賊王の船に乗っていたことを知ったのだった。

「シャンクスが海賊王の船に……ハハッ、やっぱりシャンクスはすげエヤ」

「……そういえばルフィ」

愉快げに笑うルフィに話しかけたのは、サンジだった。

「あの例の白い男……確か、お前のじいさんが海賊王がいた頃から活動してたって言ってたろ。聞いてみたらどうなんだ？」

「白い男って誰だ？」

「私も知りませんね、ヨホホ」

「話を聞いてりや分かるさ」

ウオーターセブンで偶々一味を抜けていたウソップ、スリラーバークで一味に入ったブルックはラブヒーローの事を知らない。

サンジに「わかった」と返したルフィは、懐から緑色の宝石を出して、レイリーの方に向けた。

それを見た瞬間、彼は目をカッと見開く。

「こ、これは……ハハハハハ！ 『ラブヒーローの宝石』じゃないか!!

これを何処で手に入れた?!」

「本人から貰った」

「そうか……フフフ。面白い物を持っているな、いや、そういうものが集まる星に生まれたのか……」

「白いおっさんの事知ってるのか？ 俺らは懸賞金ぐらいしか知らねエんだ」

ルフィがそう言うと、レイリーは懐かしそうな目をしながら顎髭を触る。

「よく知ってるとも。初めて会った時…… 奴は13歳だったか。私達の船に突然乗り込んできてな。」

『愛を邪魔するお前らを潰す』とか何とか言って、シャンクスとバギーを薙ぎ倒していたよ。まあ、それを面白がったロジャーにボコボコにされていたがな」

「しゃ、シャンクスを!?!」

「あの時点で既に新世界を一人で渡り歩いてきたからな。入ったばかりの見習いでは勝てんさ」

「す、すっげー……」

大海賊時代以前から活動していた上、伝説の海賊王の船へ殴り込む。

その上今の懸賞金は32億2000万ベリー。

麦わらの一味が戦々恐々とした顔をしている中、レイリーは一人で微笑みながら、あの面白かった坊主の事を思い出していた。

ゴールド・ロジャーが海賊王と呼ばれる6年前のこと。

彼らの海賊船は、グランドラインの後半『新世界』へと入っていた。

——ドドンツ!!

「な、なんだア!？」

「敵襲!・ 敵襲だー!!」

ロジャー海賊団の船であるオーロジャクソン号が少し傾くほどの衝撃。

どこかの船から砲弾でも撃ち込まれたのかと、ドタドタと甲板に集まってきた船員たちは、目を見開いた。

「……子供?」

「何でこんなところに……」

船の縁の近くに、ボロボロの黒髪の子供が立っていたのだ。

年齢は10も行っているか怪しいだろう。身長はおよそ140〜150cmほど。

顔を隠すようにボロい布をグルグル巻きにしているため、表情はわからない。が、頬の痩せこけた顔をしているだろうことは見なくても分かった。

「一体何事だ」

「あつ、レイリーさん。どうしたもこうしたもないつすよ〜」

遅れてやってきたレイリーが問いかけると、すぐ近くにいた赤鼻が特徴の『バギー』がおちやらかした様子で答えた。

「襲撃者かと思えば、只の小汚いガキが紛れ込んだみで。つたく、しようがないつすよねえ〜」

完全に油断しきったバギーが、大股で例の子供に近づいていく。

「おいバギー！ 危ねえぞー」

「何があぶねえんだこんなガキ相手に。お前はビビりすぎなんだよ、シャンクス。ほれ、ほれほれ」

バンバンと子供の背中を叩くバギー。警戒のけの字すらない。

そもそもの話、どこにも障害物がない大海原の中で突如現れた子供。警戒しない方がおかしいのだ。

「おいおい痩せすぎだぜ？このガキ。ちゃんと飯食って——おげぶふッ!!!」

バギーが頭の布を取ろうとした瞬間。

目にも止まらぬ速さで子供がその腕を取り、甲板にバギーを頭から叩きつけた。

「バギー!!」

のちに赤髪、と言われるシャンクスがいの一番に駆け出した。

腰のサーベルを抜き放ち、子供に向かって思い切り振り下ろす。

……しかし、相手は自分より一回り以上小さな子供。

『サーベルでぶった切るのはまずいか——!?』と一瞬、力を緩めてしまったのが命取りになった。

「い!? 嘘だろッ——ぐふっ!!」

速度の落ちたサーベルの刃を二本指で挟んで受け止められた。

ぐいつとサーベルごと体を引き寄せられ、崩れた体勢と無防備な腹に強力な殴打を叩きこまれてしまい、その場に倒れ伏す。

何でもないと言った様子で倒れた二人を見下す子供は、他の船員たちに指を差し、声変わり前の声を努めて低くしこう言った。

「……お前ら、海賊だな。」

海賊は世界中の愛を乱してしようがない存在だ。だから——俺がここで潰してやる」

普通なら、少し勘違いした子供が身の丈に合わない事を言っているだけだと、たいがいの大人は微笑ましく見守るだけだろう。

だが彼は見習いとはいえ海賊の一員を倒してしまった。実力を見せてしまったのだ。

こうなればいくら子供とはいえ、海賊側も警戒せざるをえない。

一人でここまで来たとなると、悪魔の実の能力者であることも考えられる。

仕方なく、この場で一番強いレイリーが「鎮圧するしかないか」と動き出した瞬間。

「おうおう。面白いガキが乗り込んできたじゃねえか」

レイリーの背後から聞こえてきた声。

甲板に積み上げられた荷に体重を掛けながら、腕を組みつつ、子供をにやにやと眺める男。

それは後に、海賊王と呼ばれる——。

『ゴールド・ロジャー』その人であった。

その後は、まあ、語るまでもなく。

船で一番強いロジャーに、意外にも食い下がる子供が、余計にロジャーを面白がらせ。

割と悲惨なぐらいにボコボコにされ、子供はすごすごと逃げ帰っていった。

名も名乗ることなく。

時を今に戻し、シャボンディ諸島の一角では。

麦わらの一味が天竜人を殴ったことにより、海軍から最高戦力である大将の一人が呼び寄せられていた。

「まったく……困ったことになったねエ〜」

呼び寄せられたのは、大将『黄猿』。

普段からひょうひょうとした喋り方と性格をした彼は、大抵の事では感情を表には出さない。

しかし今の彼は眉をひそめ、どことなくやりにくそうな顔をしていた。

部下である戦桃丸とはぐれたことは、困ったと言えば困ったことだが、その程度は問題ではない。

寧ろ、彼の困りごとの種は、今後ろにいる人物の方であった。

「何が困ったことなんだ？ ボルサリーノ」

「いえいえ、何にもありませんよオ〜。『ゼファー先生』」

そう。

彼の背後にいた人物とは、元海軍大将であり、今は海軍の教官。

長らく海軍で教官を務めており、今の中将や大将には彼の教え子も多く含まれていることから、『すべての海兵を育てた男』とも呼ばれるほどの人物。

72歳。右腕に大きな機械の腕『バトルスマッシャー』を付けた大柄な男。

それが『ゼファー』であった。

そして、黄猿もゼファーの教え子ではあるのだが。

二人はあまり仲が良くなく、場の空気は絶対零度に近い状態になっていた。

「にしても、ゼファー先生。どうしてわっしと一緒に出てきたんですく？ いくら海賊が天竜人を殴ったとはいえ、わっしとあなた二人が出る必要はないでしょうに」

「俺が出てきたのはそっちじゃない。『麦わらのルフィ』はお前に任せる」

「となると、目的はく……この間の報告で上がってきた『ラブヒーロー』の事ですかい？」

ゼファーは黄猿の質問に、うなづくことで肯定した。

「あの男……『ラブヒーロー』だけは俺の手で捕まえてやらねばならん」

「……まあ、天竜人殺しまで出てくる可能性があるとなると、あながちこの対応も間違っちゃいないのかねえ」

そうして、海軍最高戦力の二人が歩き始めた。

シャボンディ諸島に滞在する、麦わらの一味を目的として。

ラブヒーローは割と申し訳なく思っている

シャボンディ諸島から次の島へ行くには、サニー号に『シャボンコーティング』という物を施さなければならぬ。

コーティング師のレイリーが言うには、最低でも3日はかかるそうだ。

そのため麦わらの一味は、3日後まで海軍大将がいる島の中で命を懸けたサバイバルを行う事になった。

しかし……。

海軍の人間兵器『パシフィスタ』。

海軍本部化学部隊隊長であり黄猿の部下『戦桃丸』。

パシフィスタ一体だけでも、麦わらの一味が集まってやっと勝てる程の相手である。

それを総括する戦桃丸まで出てきたとなると、もはやルフィ達に勝ち目はない。

「ここは逃げよう！ 一緒じゃダメだ、バラバラに逃げるぞ！」

船長であるルフィが、一味全員に号令を掛ける。

ようは3日後まで生き残ればいいのだ。何も馬鹿正直に真正面から戦う必要はない。

そうして、彼らが逃げようとした所で。

「やっと来たか…… 黄猿のおじき」

海軍最高戦力の1人である大将黄猿が、その場に現れたのだった。

—————

「ヤベエぞ！ 何とかしろ！ そんな距離で食らったら死ぬぞ！」
フランキーが叫ぶ。

彼の目の前には、黄猿に背中を踏みつけられているゾロの姿があった。

黄猿の右足はピカピカと光っており、人の命など簡単に奪えるレーザーが充填されているのが一目で分かる。

「今、死ぬよオ」

ゾロの命を奪わんと、黄猿が足を振り下ろそうとした瞬間。

何処からともなく現れたレイリーが彼の足を蹴り上げ、ゾロの命を救った。

弾かれたレーザーは空に飛んで爆発し、太陽よりも明るく付近を照らす。

「……冥王、レイリー」

「おっさん！」

鬱陶しげに伝説の海賊を見つめる黄猿と、ボロボロの姿で叫ぶレイリー。

「ゾロを連れて逃げろオ！ 今の俺たちじゃあ、こいつらには勝てねエー！」

「……潔し。腹が立つねエ」

レイリーは逃げていくルフィ達を見送り、今この場で一番厄介な黄猿を食い止める為に戦闘を始めた。

老いたとはいえ伝説の海賊団の副船長。

久しぶりに握った剣だというのに、海軍本部大将の黄猿とほぼ互角に渡り合っていた。

「ルフィ君達の方にも手を貸したいが……！」

「海軍大将！ 人止めてまだ欲張られちゃあわっしの立つ瀬がない。い加減にしなさいよオ……それに」

黄猿は戦闘の最中、ニヤリと笑う。

「向こうにはどっちにしろ、ゼファー先生が向かってるんでねエ。何をしても無駄なこつてエ」

「!? ゼファー……!! あの男まで来ているのか……！」

元海軍大将ゼファア。

大海賊時代以前に第一線で戦っていた海兵であり、いくら老いているといえど、今の麦わらの一味が到底敵うような相手ではない。

手助けをしようにも、老いた自分では黄猿を止めるだけで精一杯。

「どうする……!?」と汗を流し焦っていたその直後。

ーシャボンデイ諸島の空に、一筋の白い光が走った。

――

「やべエ、このままじゃー」

あしがらどっこい
「足柄独行!!」

「うわッ!!」

ズドン!!

戦桃丸が放った見えない一撃により、ルフィが吹っ飛ばされる。

一番強い黄猿が食い止められているのに、戦桃丸とパシフィスタの二体だけで麦わらの一味は壊滅状態に陥っていた。

「やめろよお前らア……ランブルボール!!」

チョップパーがランブルボールと言われる、自身の悪魔の実の能力を引き出す薬を3つ噛み砕く。

過剰摂取によりチョップパーの能力は暴走し、大きさ20 m程の巨体に変化した。

巨大さは強さ。

その一撃は戦桃丸でさえも回避を選択する程であるが、いかんせん暴走状態のため、敵味方区別なく暴れ回っている。

そんな時だった。

「エアウォール
空気の壁」

何処からともなく聞こえてきた、低い声。
その瞬間。

ーードゴントツ!!

響き渡った轟音と共に、暴走チョツパーが勢いよく頭から地面に叩きつけられた。

その一撃でチョツパーは白目になって意識を失い、シユルシユルと素のサイズに縮んでいく。

「チョツパーツ!!」

巨体が倒れたことにより巻き上がる砂煙。

ルフィはその方向に叫び、麦わらの一味もそちらの方へと意識を向ける。

戦桃丸でさえも一旦追跡をやめ、砂煙の方を見るほどだ。

そんな中、真っ先に動いたのは、冷徹な兵器であるパシフィスタだった。

赤い目をパッと明滅させ、口元からレーザー砲を砂煙に発射する。

「……!?!」

放たれたはずのレーザー。

それが何故か、爆発しなかった。

黄色いレーザーは砂煙を晴らし、訪れた人物の正体を衆目に晒すだけに留まってしまったのだった。

「ーー白いおっさん!!」

そこにいたのは。

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭の中から靴先まで覆い、顔には表情が見えない

ほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

天竜人殺しのラブヒーローだった。

彼は砂煙を手で払い、呆れた様子で言う。

「まったく、家族喧嘩の次は化け物か。忙しい男ツーーー」

「何やってんだおっさん!!!」

「は?」

「俺の仲間に手エ出すんじゃないねエ!! JETピストル!!」

「!? 何をするツ!!」

ルフィのJETピストルを回避し、困惑した様子で問い掛けるラブヒーロー。

蒸気を体から発したまま、怒りの形相でルフィが答えた。

「チョッパは俺の大切な仲間だ!!」

「……まさか、今私が殴り倒したのはお前の仲間だったのか?」

「……それは悪い事をした。すまない……」

ラブヒーローがルフィに対して平謝りをする中、遠くから眺める戦桃丸が冷や汗を流す。

「て、天竜人殺しのラブヒーロー……まさかこんな男が出張ってくるとはな……」

彼の独り言など聞く者は誰もおらず。

ラブヒーローは怒るルフィに対して申し訳なさに問いかけた。

「それで、私はどうして呼ばれたんだ? 困り果てるほどの強敵がいるんだらう?」

「敵!? 敵なら、あそここの赤いアイツとでかいクマのアイツだ!!」

「……赤いのは知らん。クマの方は……パシフィスタか。とり

あえずパシフィスタの方を潰せばいいか?」

ラブヒーローは懐からチャラツと、何かを取り出した。

それは二つの、小さな黒い球。小指の爪先ほどのサイズだ。

黒いそれを親指と人差し指の間に挟み、パシフィスタの方に向け
る。

「ラムルショット
圧縮弾」

ピピッと撃ち出された黒い球。

それは銃弾より何倍も早い速度でパシフィスタに向かっている。きーーーー着弾する直前。

ーーーーズガァン!!

「!?」

突如現れた、山のように積み上がった瓦礫や鉄骨。

その全てがパシフィスタの体に深く深く突き刺さり、自爆することすらできずその機能を停止させた。

「な、あのクマを一撃で……!」

「すっげー! あのおっさんめちやくちや強いじゃねーか!!」

戦慄するサンジと興奮するウソップ。

ラブヒーローは当然だと言わんばかりに無反応。そして次の黒い球を取り出す。

当然、次の照準は戦桃丸だ。

戦桃丸は自身のガードは世界一と自負している。

だがラブヒーローと言えば天竜人を殺した拳句今ものうのと生きていくほどの大犯罪者であり強者。無事でいられる保証は何処にもない。

何よりあの男の覇気は……己の覇気よりも硬い。

ラブヒーローがググツと黒い球を撃とうとしたところで。

「次はあの赤い方ーーーーッ!! 退け!!」

ラブヒーローはルフィを思い切り遠くへ蹴り飛ばした。

次の瞬間。

「ーーーーラブヒィィロオオオオオオオオ!!!」

空から降ってくる、右腕に機械の腕を取り付けた紫髪の男。重力と自身の腕力を掛け合わせた強力な一撃をラブヒーローに振り下ろした。

ラブヒーローは持っていた黒い球を捨て、交差した両腕で男の攻撃

を受け止める。

攻撃を受け止めたと思った瞬間、ガチリ！という音と共に機械の腕が爆発した。

その爆発の余波で麦わらの一味は体勢を崩す。軽い上に気を失っているチョッパはコロコロとどこかへ転がっていった。

爆発によつて発生した煙はすぐに晴れる。

人1人なら簡単に消し飛びそうな爆発の中心にいた2人は、まるでそれが当然だとも言うように無傷で立っていた。

「会いたかったぞラブヒーロー……！ 姿を消していた2年間、何処で何をしていたア！」

「浜辺で立っていた」

「舐めるなア!!」

声を荒げ、右腕に付けたバトルスマツシヤーをガシヤリと鳴らす高齢の男。

ラブヒーローは少しだけ面倒くさそうに顔を逸らした。

彼は海軍で唯一、ラブヒーローに大きな執着を見せる男。

元海軍大将、ゼファーであった。

ラブヒーローはいつかの過去を思い出す

シャボンディ諸島。

ラブヒーローは麦わらの一味を助けにきた筈だったのに。

「ラブヒーロー！ 大人しく捕まりやがれエー！」

どこぞの元海軍大将が全力で邪魔をして来る。

鬱陶しいことこの上なかった。

「白いおっさん！」

「この男はお前達では相手できん……！ 早く行け！」

ルフィに大声でそう返すラブヒーロー。

何処からともなくパシフィスタがもう一体現れ、麦わらの一味が追われているが、向こうは自分達で何とかしてもらおう他はない。

パシフィスタや変な赤い前掛けの男より、ゼファーの方がよっぽど危険だ。こいつを通せば麦わらの一味なんてチリの様に吹っ飛ばされる。

ゼファーと何度かぶつかり合った後、お互いに覇気を纏った腕を鏝迫り合わせながら話し合う。

「ほう……海賊相手に随分と優しくなったじゃないか、ええ？」

「あの海賊には恩があつてな。そつちこそ、そろそろ引退したらどうなんだ？」

「ほざけ!!」

ゼファーがバトルスマツシャーを爆発させ、お互いに距離を取る。そしてすぐに、ギャルルルと嫌な音を立てるバトルスマツシャー。

彼と何度も対峙した事のあるラブヒーローは、目の前に両手を突き出した。

「エアウオール空気の壁」

瞬間。放たれる弾丸の嵐。マシンガンだ。

しかし撃ち放たれた弾は全て、ラブヒーローの前で見えない何かに弾かれるようにギャギャギャ！とどこかへ飛んでいった。

マシンガンを止め、ゼファーが口惜しげな顔をする。

「むう……相変わらず、実の能力の練度は凄まじいな。海兵になっていけば、最年少で大将の座も狙えただろう……」

「海兵になる気はない」

「……天竜人さえ殺していなければ、俺はお前を七武海に推薦していた」

「私は厳密には海賊でもない。たれば話はやめろ」

ゼファアの言葉に、若干ラブヒーローが苛ついたように返した。

本来、ゼファアは優しい男だ。海賊が必死で命乞いすれば、その場で逃してしまうほどに。甘いとも言える。

だがそんな彼でも七武海制度には反対だった。

海軍の名を借りて海賊が好き勝手にやるのは、人々の平和を著しく乱していると考えていたからだ。

そんな彼が、ラブヒーローだけは七武海に誘いたかったという。

これはどういう事か。

「俺はあの時……10歳のお前を止めなかったことを今でも後悔している。だから……お前だけは、せめて俺の手で捕まえてやらずにちやならん。それが俺の責任だ」

—————

ラブヒーローが10歳の頃。

ゼファアにしてみれば、忘れもしない、34年前のことだ。当時、海軍大将だったゼファア。

彼の元に、伝電虫による電話がかかってきた。

通話の先にいたのは……愛する妻だった。

「どうした？」

『あ……あ……い、今、家の中に海賊が入ってきて、子供が……』

「何ッ!？」

不明瞭な妻の話。

だがかろうじて耳に入ってきた『海賊』と『子供』という言葉から、自分の息子に何かがあったのではないかと思う。

海軍の中で一番速い船を手配し、自分の家族がいる島に向かう。

一時間ぐらいで島が見え始めた。だが居ても立っても居られなくなったゼファーは、月歩を使って島へ飛んで行った。

「大丈夫か!!」

ゼファーは自分の家に飛び込む。

入ってすぐのリビングにへたり込んでいた妻。そしてその腕の中にいるまだ小さな息子。

彼は顔を安堵で弛緩させながら、2人を抱きしめた。

「ああ、無事で本当によかった……………。海賊は何処に?」

「こ、子供が……………」

「子供?」

まだ落ち着いていない様子の妻をなだめ、一体何があったのか話を聞く。

「海賊が家に入ってきたと思ったら、布を顔に巻いた10歳くらいの子供が突然現れて、その海賊を倒したの……………」

「!？」

ゼファーは戦慄した。

この島は新世界に近い場所にある。よって、付近の海賊の強さも並大抵ではない。

それを10歳くらいの小さな子供が倒した? 悪魔の実の能力?

それとも顔を隠している魚人?

いや、それでも厳しいはずだ。

「それで、その子供は何処に?」

「その海賊を引きずって、海賊船を潰しに行くって……………」
……………まずい。

海賊を運良く一人倒せたかもしれないが、多くの海賊が乗っている海賊船となると話は別。数の力は運では倒せない。

見聞色の覇気で海賊船の方向をおおよそで探り、妻に海兵がすぐ来

ることを伝えてから、剃と月歩で子供を追いかけた。

「……嘘だろ……」

急いで海賊船の場所に駆けつけたゼファーが見たものは。

巨大な海賊船に無数の丸い穴が空いており、水飛沫を上げて今まさに沈んでいく姿であった。

そしてそれを陸から眺める、布を頭に巻いた子供。右手には、ボロ雑巾のようになった海賊船の船長らしき男が掴まれている。

「君は……」

子供が振り返る。

海兵の着る白い正義のローブを見た彼は、右手に持った海賊をゼファーに投げつけた。

受け止めた海賊はゼファーも僅かながらに見覚えのある顔。恐らくゼファーに恨みを持ったこの海賊が、彼の家族を襲うという凶行におよんだのだろう。

そしてそれを、目の前の子供が阻止した。

「家族を助けてくれたのは、君か？」

「……俺は、壊れようとした愛を守っただけだ」

子供が足に力を込める。

何処かに去ろうとしているのだろう。

ゼファーは子供を引き止めるか、引き止めないか、悩んだ挙句に声を張り上げた。

「あ、ありがとう！」

「……」

「君がいなければ、俺の家族はどうなっていたことか……本当にありがとう！」

海軍大将のゼファーとしては、海賊団を一人で潰せる危険な子供を捕まえるべきなのかも知れない。その実力も十分にある。

だが、自分の家族を救ってくれたヒーローを、ここで捕まえようとはどうしても思えなかった。

子供は無反応で、振り返りもせず、何処かへ行ってしまった。

名も名乗らずに。

「……あの時、俺はお前を止めておくべきだった……。あそこでお前を海兵にしてやっていたら、いや、保護するだけでも、お前は今は違う人生を……」

「おい」

ラブヒーローは低く重い声を放った。

「……貴様、家族は息災か」

「……ああ。数年前に孫もできた」

「ならそれだけを気にしておけ。私の人生は私が選んだものだ、誰の責任も介在しない」

ゼファアは目を細める。

あまり納得がいつていない様子だ。

それを見て、ラブヒーローは自身の右手を硬く握り締めた。

「そうか。そこまで気にするなら……そろそろ海軍を引退できるよ、本気でぶちのめしてやる」

ラブヒーローは右の拳を前に突き出した。

ゼファアとラブヒーローは互いに新世界で争っていた身。どちらも覇気を扱うことができる。

ゼファアの異名は『黒腕のゼファア』。

武装色・硬化を行った際、鎧のように纏った覇気は黒くなり、纏った部位は刀を弾くほど硬くなる。そして何より、悪魔の実の能力者の実体を捉え、能力に関係なくダメージを与えることができる。

取り分けゼファアの武装色は練度が高いので、とてつもなく硬い。よって黒腕とまで名前がつくほどになったのだ。

だが、しかし。

覇気を纏ったゼファアの腕が黒いのに対し。

ラブヒーローが覇気を纏った右拳は、まるで太陽のように白く光り輝いていた。

「数多存在する悪魔の実の能力者……」

だがそんな能力者達の中でも、覇気そのものを強化しようと考えたのはお前だけだろう」

ラブヒーローの左拳も白い武装色で覆われる。

武装色の覇気を扱う者にとって、白はいわばありえない色。異端の色なのだ。

奇しくもその異端な色は、世界中からのラブヒーローへの評価と一致していた。

「超人系・ギチギチの実を食べた、全身圧縮人間……」

「私が食べた実を知っている者は、もう少ないがな」

そして、両者が激突する。

……十数分が経った頃、その場所には。

グチャグチャに引き裂かれたゼファアのバトルスマツシャーだけが転がっていた。

ラブヒーローは次こそ約束を守ることを誓う

ゼファアーとの戦闘を終えたラブヒーロー。

白タイツスーツの所々に汚れはついているものの、大きな負傷をしていない。

さすが元海軍大将、老いたとはいえど相当な強さだった。下手な中将よりよっぽど強いだろう。

そのせいで、思ったより倒すのに時間がかかってしまったのだ。
……まさか70超えの老兵に十数分も粘られるとは……

そうして、急いで麦わらの一味を追いかけた頃には、全てが終わってしまっていた。

「！ラブヒーロー……ゼファアー先生は負けたんだねエ〜」

「嘘だろ……おじきの師匠が……」

追いかけた先にいたのは、黄猿と赤い前掛けの男。

そして、それと向かい合うように立っていた冥王レイリーと、現七武海の暴君バーソロミュー・くま。

ちやうどラブヒーローがその4人を高い位置から見下ろすように立っていた。

「おーい！ラブヒーローの小僧！久しぶりじゃないかー!!」

レイリーはこちらに手を振ってくる。

正直、ラブヒーローはレイリーのことが好きでも嫌いでもない。良い人物であるのは確かだが、いかんせん、幼少期の頃に何度もボコボコにされたことが脳の奥に根付いてしまっていた。

「レイリー!! これは一体どういう状況だ!!」

「ふむ……ルフィ君たちは何処かへ飛んで行った！それ以外はこの男しか分からん!!」

そう言つて、レイリーはバーソロミューくまの方を向いた。

確かあの男は、七武海でもあり、革命軍でもあったはずだ。

本当の本当に昔、一度だけ接触してきた記憶がある。革命軍に入っ

て欲しいとかなんとか言っていたが……。

——ラブヒーローの異名は天竜人殺し。

世界政府打倒を目指す革命軍にとって、迂闊に手が出せない天竜人を殺したというラブヒーローのネームバリューは絶大だ。

よって、彼は革命軍からほぼ一方的に信頼を寄せられている。革命軍に入って欲しいと打診したのも、天竜人を殺した経験のあるラブヒーローの名を借りて勢力を拡大しようとしたためだ。

もちろん、愛に関する事以外さほど興味がないラブヒーローにとって、そんな事は知りもしないのだが。

話を戻す。

ラブヒーローは、革命軍だとかなんだとかは知ったことではなかった。ただ、自分が助けると誓った者を殺された復讐をするだけだ。

右の手のひらをバーソロミューくまに向ける。

「メガティック^大クロー^なー」

そこまで唱えたところで、くまの横にいるレイリーが首を横に振っているのに気づいた。

同時に、口が小さく動いているのも見える。

見聞色の覇気で彼の口元に意識を集中させる。

読唇術の要領で読み取った彼の言葉は、このようなものだった。

『い・ま・は・や・め・ろ』

意味が分からなかった。

分からなかった……が、取り敢えず、場の状況がよく分かっている私が今どうこう手を出すべきじゃないのはわかった。

事情が分かったら殺そう。

そう思つて手を下げる。

「冥王に、天竜人殺し……こりやあ、わつし1人じゃかなり厳しいかもしれないねエ〜」

「おじき、引くんですかい」

「引くしかないでしょうよオ〜。せめて大将がもう1人いれば話は別

「だけどねエ〜」

黄猿は正義のローブを翻し、踵を返して去っていった。赤い前掛けの男もそれに続く。

そして数歩進んだ所で、黄猿が肩越しに振り返り。

「くまア〜。お前さん、今回の件、よくく覚悟しておくんだねエ〜」

それだけ言って去っていった。

……あの黄猿という男、すぐには帰らないだろう。憂さ晴らしにこの島の海賊を何百人か捕らえるつもりだ。

まあ私には関係がないが。

レイリーとくまと同じ高さの地面へ降りる。

ラブヒーローは腕を組み、レイリーに問いかけた。

「一体どういう状況だ。モンキー・D・ルフィは死んだのか？」

「厳密には分からん。私も今から、彼に聞くとところだ」

そうして、2人でくまの方を向く。

懸賞金が余裕で十億を超える2人からの圧がかかっていると言うのに、くまは堂々としていた。

「……バーソロミューくまからの話を聞き終わった。」

……つまり。

麦わらの一味は全員、くまの能力で、それぞれが自分を鍛えるのに適した場所に吹っ飛ばされただけであり。

命に別状はないどころか、危険なこの状況から逃したのだという。

……殺すのはやめておくか。

ついでに、バーソロミューくまは自分が革命軍だとも言っていた。

レイリーは疑っていたが、ラブヒーローが以前勧誘を受けたと言うと、すんなり信じた。

「なるほど……話は大体わかった。ならば、私がこれ以上心配しても仕方がないな」

レイリーはそう言った。

続けて、こうも言う。

「君はどうするんだ？ 海軍大将の前で裏切り行為をしてしまったわけだが」

「碌な事にはならないだろう。だが、なるべく麦わらの一味に有利な方向へ事が運ぶようにするつもりだ」

「そうか。まあ、私は隠居した身だ。頑張りたまえ」

変な所で非情で、冷徹。

人の良さそうな爺に見えて、レイリーもまた根っからの海賊なのだ。

「それより……ラブヒーロー！ 久しぶりじゃあないか！」

そして身内や知り合いにはとことん甘い。

「これまた海賊の習性だ。」

「お前の噂が2年ほど途絶えていたが…… 一体何処で何をしていたんだ？」

「浜辺で立っていた」

「ブワツハツハツハ！ 相変わらず行動が意味不明だな！」

レイリーが豪快に笑う。

「この後一緒に酒でもどうだ？ 久しぶりに飲みながら話そうじゃないか」

「…… 悪いが、断らせてもらおう」

「ん？ そうか……」

少し悲しそうな顔をするレイリー。

確かに昔は酒も飲んだ。だが、今はもう飲まない。

「…… ラブヒーロー。お前は悪い奴じゃあないが、少し思い詰めすぎるところがある」

「何だ、急に……」

「発散したくなったらいつでも来るといい。このままだといつかパンクしてしまうぞ」

「知った風な口を聞くな…… 私はもう行くぞ」

ぶつきらぼうにそう言い放つラブヒーロー。

レイリーはその物言いに怒るでもなく、不快な顔をするでもなく、

僅かながらの笑みを浮かべた。

ズンズンと大股で歩き、レイリーとくまの姿が全く見えなくなった所で、ラブヒーローは空を見上げた。

天に昇る太陽を見つめ、右の手のひらで握る。だが、当然、掴めはしない。

「前はくだらない喧嘩、今回は結果的に死ななかったものの、私が助けることは出来なかった」

「だから、次だ……。もう一度だけ、助けてやる。」

その時は…… 私の太陽を使って、絶対に助けてやる。

ラブヒーローの威信にかけてもな……」

ーそう呟いた後、ラブヒーローは姿を消した。

ルフィと再び出会う時は、そう遠くない。

???はゴミの掃き溜めで生きるしかなかった

気がついた時、小船に乗っていた。

次に感じたのは、鼻が曲がりそうなほどの悪臭。

ボロボロの手で床を突き、ふらふらと立ち上がる。

船が乗り上げていたのはゴミの陸岸。

生ゴミや粗大ゴミの上に新たなゴミが重なっている。

今はなき、行く場所がない者たちの島。

誰が呼んだか、見た目通りの名前。

その島は、『世界のゴミ捨て場』という名前であった。

小船の中にいたのは、実に汚らしい、8歳くらいの子供。

目の下には涙を大量に流した跡があり、黒髪は長い間海を彷徨っていたのか潮風でパサパサ。衣服は黒い汚れまみれ。

「……」

記憶がなかった。

船に乗る前……どころか、自分が生まれてからこれまでどうやって生きてきたかすら覚えていない。

当然自分の名前も覚えていなかった。

ただ2つ、覚えていたというか、自分の中に残っていた物があった。

1つ目は。

近くにあつた、鋭い刃物が折れた物が重なっている危険なゴミ。それに触れた瞬間、一瞬でゴミがコイン程の大きさまで小さくなる。

自分には『触れた物を圧縮させることのできる能力（生物は不可）』があること。

2つ目は。

「愛を……誰かの、世界の、愛を守らないと……」

狂気とも言えるほどの、誰かの幸せな愛を守らなければという強い強い感情であった。

その日から、島の中には不思議な子供が歩くようになった。

世界のゴミ捨て場とも言われる通り、島に住む人間には悪臭を放つゴミのような人間、いや寧ろゴミの方がマシかも知れないような悪どい者もいる。

そういった者が、慎ましくも幸せに暮らしている人間に手を出そうとした瞬間、突然現れた子供がそのゴミをぶちのめして去っていくのだ。

暫くすると、その子供は島の中で一部にはやつかみを持たれ、一部には感謝されるという、何とも不思議な存在になったのだった。

—————

「死ね！クソガキ!!」

身長が2mにも及ぶ大男が巨大なサーベルを振り下ろしてきた。

彼私の身長差は1mに近い。とんでもないリーチ差だ。

体を逸らし回避するも、避けきれない。顔に大きく切り傷が入り、鮮血が舞う。

大男が勝ちを確信しニヤリとした瞬間。

子供が自身の顔から溢れ出た血液に触れ、圧縮。それを大男の顔に飛ばし、圧縮を解除した。

パンツ！と血が爆発する。男の目に血が入った。

「ッ!? 血の目潰し——」

「ラバー・ショット非殺傷弾！」

「ぐぐッ!?」

男の顎が真上に跳ね上がった。脳みそが揺れる。

足に力を入れて踏ん張ることもできず、意識が落ちていくのを止めることもできず、大男は背中から地面に倒れた。

手に持ったゴム毬をポンポンと跳ねさせ、握り込む子供。

圧縮で小さくなったゴム毬を敵の顎の下で解除し、相手の意識を落

とす。彼が能力を用いた攻撃の中で、唯一の非殺傷攻撃であった。助けた親子の方を振り返る子供。

貧相な格好をした母親と娘だ。この島の住人であることは間違いないが、顔に『慣れ』という物を感じない。

島に来たばかりなのだろうか？

じっと見つめていると、母親の腕の中にいる娘が、震えた声で言った。

「こ、怖いよ……ママ……！」

彼女の視線は、己の顔に向けられていた。

手で顔に触れると、ドクドクと血が流れているのに気づく。まあ確かに、これでは怖いのも仕方ない。

上半身の服をビリビリに裂き、顔が見えぬようにグルグルと巻き付ける。

「ヒッ……！」

今度は母親の方も怖がり始める。

意味がわからなかった。

……間抜けな子供は、自分では気づかないが。

突然現れ、大男を一撃で倒した血まみれの子供。

そんな奴が突然服を裂き、頭にグルグルと巻き付け始めたら、相手はどう思うだろうか。

まるでこれから殺人を行うため、自分の正体がバレないように顔を隠しているかのように見えてしまうのだ。シリアルキラーとやっている事が大差ないのである。

そんな事は梅雨知らず。

腰を抜かして逃げていく親子を首を傾げて眺めていると、先程倒した大男が目を覚ました。

立てるほど回復はしていないのか、頭だけを起こす。

「お、お前……終わりだぜ……俺に手エ出してどうなるか分かってんのか？」

「……」

「俺の仲間がお前を殺しに来る……100人はいるぜ。精々苦しんで死ねや……」

100人。

この島に来てもう一年近く経つが、そんなに大きなグループがいたのだろうか。精々30人が限度だった筈だ。

「一応言っておくが、この島のチンケなチンピラの話じゃねえぞ。『海賊』だ……!」

「海賊……」

なるほど。

それなら、分からないでもない。

ずっと前にこの島に流れ着いてから、名前も記憶もまま生きてきた。何もない人生だが、それでも、海に出ようとは思わなかった。

海に出るための小船は半分以上壊れていたため乗れないし、この島では新しい船も手に入らない。

何より、今はこの島での生活にある程度満足している。無理に外へ出る必要はないのだ。

「ラバー・ショット非殺傷弾」

「ぐはっ」

顎を打ち抜き意識を奪う。

海賊が来るならやってやろう。100人は少し多いが、倒せないこともない。

男の体が道の通行の邪魔なので、近くのゴミ山まで蹴り飛ばした。結構遠くまで、山なりの軌道で飛んでいく。いい調子だ。

……さて、帰るとしよう。

この狭いゴミの島にも一応のルールはある。

人を無闇に殺さないとか、放火をしないとか……まあ、著しく島の治安に影響を及ぼすような事は大抵NGだ。

なので道を歩いていても、屈強な男が殴り合いの喧嘩しているのを何度か見るだけである。ちなみにああいうのには介入しない、どっち

も酒に酔ってやっている遊びのような物だ。勝手にやっている。

暫く歩いて、帰路の途中、アホ面をした犬が絡んでくる。

へっへつと舌を垂らし、尻尾を振りながら俺の足の隙間を8の字にグルグルグルグル回る。

邪魔なことこの上ないが、少しだけ我慢する。いつもの事だからだ。

数分じつと立っていると、向こうからバタバタと女性が走ってきた。赤い髪の女だ。

「ごめーん!! 大丈夫だった? ……え、本当に大丈夫? 頭に布巻いて、上半身裸で……なんか布に血も染みてるし」

「これぐらいの怪我は偶にする。今まで死んだ事はない」

「今回は死ぬかもしれないでしょ。ちゃんと手当てなさい」

女が頭に巻いた布を外す。

彼女の名は『コア』。確か年齢は22歳とか言っていた。

今も足元にいる犬の飼い主で、この島の医者の存在で、昔助けたことのある人物だ。

割と清潔な布で顔の傷を拭かれる。

何故か顔の傷を拭いた後、上半身にまで手を伸ばそうとするので、彼女の手を払い除ける。

「コア。もう……もういいー!」

「え、いいじゃないの。もうちょっと、もうちょっと……!」

彼女は元々どこかの島の病院で医者をやっていたらしいが、入院していた子供に少しやらかしてしまったそうだ。本人曰く首を舐めただけだとか。

で、それが問題になって、医者をクビになり。

流れに流れ着いて、この島に来たらしい。

……まだ上半身に手を伸ばしてくるこの女を、俺は一回叩きのめしてやる必要があるのかもしれない。

コアに頭へ包帯をグルグルと巻かれ、先ほどとあまり大差ない状態

になる。

「あんまり変わってないぞ、コレ」

「それが一番適切な処置ってこと。それとも糸で縫われない？ 麻酔はないわよ？」

「……いい」

痛いのは好きじゃない。

アホ面の犬とコアと名前のない俺の3人で、帰路への道を歩く。

何も無いし、誰かの愛を守ることばかり考えてる俺だが。

こうやって3人で歩くのだけは、まあ。

あまり悪くない気分、だと思った。

――

「世界のゴミ捨て場に派遣した奴が、ガキにやられたってエ!？」

とある海賊船の中で、赤いローブを被った男が机を叩いた。

背後には黒い文字で『毒』と書かれている。

明らかに部下と思わしき腰の低さの男が、震えた声で報告する。

「は、はい。なんでも、悪魔の実の能力者って話で……」

「新世界に入ってる海賊が、能力者だとかなんとかでガキに負けていい道理はねえんだよ!!」

「す、すみませんジョッキー船長! だから、ガスだけは……げぼツ」
船長と呼ばれた男の体からシューツ……と、何かのガスが漏れ出る音がした。

部下の男は途端に喉を押さえ、苦しんだ表情で泡を吹き、その場に倒れる。その顔に既に生氣は感じられない。

彼は部屋の扉を勢いよく蹴り開けた。

眼下の甲板には、この海賊船に乗る荒くれどもが勢揃いしている。だが、その全員が、船長に怯えた目を向けていた。

そんな彼らに向け、ジョッキー船長は吠える。

「お前らア！ 俺らは今から『世界のゴミ捨て場』に向けて出港する！
海賊を舐め腐るとどうなるか見せてやんぞ!!」

「お、おとおおとおお!!!!」

部下の海賊たちは明らかに怯えた様子でそう叫ぶ。

それを満足げに眺める船長の後ろの壁には、彼の顔が映った手配書
が貼られていた。

『ジョッキアーノ・プレガディオ』

懸賞金 3億8000万ベリー』

轟く異名は『毒息独王どくいきどくおうのジョッキー』。

ロキア自然系ガスガスの実を食べた、全身ガス人間である。

???はみつともなく生きてきた

……大男をぶちのめした日から数日経過した。
海賊が来るとすればもうすぐだとは思うが……。

コアが俺の寝ぐらの近くでバタバタ動いているのを横目に、頭に巻いた包帯を外す。血は完全に止まっていた。

「おっ！ 相変わらず回復早いね。普通そういう傷って一晩で治らないんだけどなあ」

「いつものことだ……ところで、さつきから俺の寝ぐらの近くで何してる？」

「いやー、うちの犬が粗相しちゃって……」
「……」

へっへつと舌を垂らしながら近寄ってくる犬の額を、軽くデコピンで弾いた。キャイン！と鳴いてから辺りをバタバタ走り回り、俺の寝ぐらを更に荒らす。

この犬……。
「あつ！ あーあー、もー。プー太は弱虫なんだからそんな事しちゃダメだよ」

「前々から思っていたが、そのプー太とかいう名前は何とかならないのか」

「よくない？ プー太」
犬の名前にしては少しダサイ気もする。

まあ、いいか。アホ面犬にはそれぐらいがちょうど……俺の顔を舐めるな！

時を同じくして、ゴミの陸岸。

一隻の大きな海賊船が泊まり、ゾロゾロと海賊達が島へと上陸し始めていた。

「くっせえ……ここで生活してる奴らの鼻はどうなってるんだ？」

「臭さを感じる程の脳もねえんだろ。何せここは、何もかも終わった奴が行き着く場所だからな」

「大量殺人に国家転覆を狙ったテロリスト、その他諸々……はっ、自由にやっってる海賊よりよっぽどタチが悪い」

「違えねえ。殺しても何にも心が痛まねえって訳だ」

彼らは下っ端といえど、新世界を生きる海賊。

一般人が敵うような者ではない。

「つたく、臭くてかなわねえな……」

一番最後に降りてきた赤ローブの男。

この船の船長であるジョッキード。

鼻を手で掴み、顔を大きく歪めている。

「お前ら、例のガキを探してここに連れて来い！ 一時間以内に捕まえられなかったら……この島に死王毒デス・キングを撃つ」

「え……!?!」

ざわざわと部下の海賊達がざわめく。

その中の1人が、汗をダラダラと流し焦った様子で進言した。

「船長、あんなの撃つたらこの島もろとも俺達も死んじまいます！」

「……ふーむ？ 確かにそうかもな？」

ジョッキードはわざとらしく首を傾げ……一瞬で、進言した部下の顔を掴み上げた。腕をガスにして伸ばしたのである。

部下の体を近くに引き寄せ、怒り狂った様子で、口から唾を飛ばすほど大きく声を荒げた。

「なんで俺がお前らの命にまで気をかけなきゃいけないんだ!!」

……もういいや、お前。死んどけ？」

「ム……!!」

ジョッキードの手から、部下の口の中に怪しげな色をしたガスが入り

込んでいく。

10秒ほどで部下の全身に赤いイボのような物が大量に発生し、そこから赤黒い色の液体がドロドロと流れ始めた。

やがてイボは周囲の肉と共に溶け始め、部下の体は胴の辺りから、腐ったゴムの様にブチブチと千切れ落ちた。誰がどう見ても即死である。

「アレが死デス・キング王毒……オエツ」

「あんな死に方したくねえよ……」

周囲のゴミに負けず劣らずの血の匂い。

ジョッキーは死んだ部下の亡骸を放り捨て、自身のポケットに入っていたハンカチで手を拭う。

「お前らもうこうなりたくなかったら……分かってるよな？」

「は、はい!! ジョッキー船長!!」

部下の海賊達は駆けていく。

一時間以内に例のガキを船に連れて行かなければ、死ぬのは自分達だ。恐ろしいジョッキー船長は絶対に躊躇わない。

総勢100名を超える海賊達が、世界のゴミ捨て場を駆けずり始めた。

—————

「! ……来たか」

コアと共にいた子供は、島が妙な雰囲気で覆われ始めたのに気が付いた。きつと海賊達が来たのだろう。

「何が来たの？」

「海賊だ。100人はいららしいが……とにかく、事が終わるまで隠れている」

子供が立ち上がり、辺りを見回してから、一番近い海賊の元へ向かおうとした。

そんな彼の手を、コアが掴む。

「待ってよ」

「……離せ」

手を振り払う。

が、すぐに掴み直される。

「待ちなさい！」

「断る」

「……こ、この辺りの海賊って言ったら、高額の賞金首だってこともありえるの！ そんなのが100人もいるなんて、し、死んじゃうよ……！」

震えた声でそう言ったコア。

彼女の言葉を聞き終わってから、一度目を閉じ、もう片方の手で彼女の手を優しく解いた。

それから、両手でギュッと彼女の手を握る。

「俺は死なない。この島の愛を守る為なら……何があっても立ち上がってやる」

「あ……」

彼女とは反対の方向に踵を返し、ズンズンと進んでいく。

「ダメだって……死んじゃったら、何にもないんだよ……」

そんな彼の様子を、コアはへたり込んで、ただ後ろから見ている。

—————

「！ おいアレ……！」

「ああ、間違いねえ！ いたぞ!! 例のガキだ!!」

海賊達が一斉に、小高いゴミの山の上へと視線を向けた。

その上に立つは、この街の愛を守る名前のない子供。

「この場にいるだけで、65人……後で集まってくるか」

まあいい。

山から飛び降り、海賊達の前に降り立った。

「俺は、お前らのような愛を乱して止まない存在を消す者だ」

「何を抜かしてんだ糞ガキーっ!？」

飛び込んできた海賊の一撃を避け、顎に非殺傷弾ラバーショットを叩き込む。

予期せぬ一撃に顎を跳ねられ、脳を揺らした海賊は、後ろにのけぞりながらそのまま倒れていった。

「こいつ、やっぱり悪魔の实の能力者だ……！」

海賊たちに動揺が広がる。

悪魔の实の能力者、というのはよく分からないが、彼らが俺に向けている警戒のレベルが一段階引き上がったのは確かだ。

——戦いが始まる。

手当たり次第に海賊を倒していく。

途中何度か攻撃を貰いはしたものの、命に全く別状がない程度だ。

追加でやってきた海賊。

確かにこの島のチンピラよりも強いが、毛が生えた程度だ。

サーベルの攻撃を避け、腹に拳を入れる。蹲った男の顎を横に蹴り飛ばし、そのまま昏倒させた。

「これで112人目……。流石にもう打ち止めか？」

「うっ……。うう……。」

「ん」

全身の所々から血を流す子供。

倒した海賊の1人が意識を取り戻したのに気が付き、ズンズンと近

づいていった。

動けそうにない海賊の胸倉を掴み、そのまま持ち上げる。

「どいつもこいつも似たり寄ったりな強さ…… 船長は何処だ？」
今まで倒した海賊全てが凡庸な強さ。

この中にキャプテンが含まれているのなら、これほど楽な話はないが…… そう言った希望的観測は持つべきではないだろう。

「う…… 早く、船に連れて行かないと…… 死王毒デス・キングが……！」

「!? 死王毒とは何だ?! おい…… クソ！」

意識を失う海賊。その辺に体を放り投げる。

死王毒…… 明らかにヤバそうな名前だ。一体何の名前だ？ 少

なくともロクな物ではないだろう。

「船、とにかく船だ……！」

何か分からないが、とてもヤバい予感がする。

それもとびつきりに悪い方の予感だ。

岸の方へ向けて、全速力で走り始めた。

海の方へ行くと、見慣れない海賊船を直ぐに見つけることができ
た。

その船の上で、鼻栓とアイマスクをして大きなハンモックの上に
寝っ転がる赤いローブの男。

先程の海賊達とは態度の大きさも感じる圧も桁違いだ。あれが船
長で間違い無いだろう。

一撃必殺。全力で行く。

懐から黒い塊を取り出し、両手の親指と人差し指の間に挟む。

ゴミの影から一気に飛び出し、黒い塊を力強く弾いた。

「…… 圧縮弾!!」
ラムル・シヨット

「ん……？」

船長らしき男に当たる直前、巨大化する黒い球。

あの球の正体は、鋭い瓦礫をいくつか纏めて圧縮した物だ。直撃す
れば無事では済まない。

そんな物が直撃した、筈なのに。

「ガクスススス……中々面白い攻撃をするじゃねえか。悪魔の実際の能力者か。ま、俺の敵じゃねえけどよオ」

「馬鹿な……!!」

膨張した瓦礫群は、白いガスの様な物に覆われ、受け止められていた。

ガスの発生源はあの船長らしき男。右手が白いガスとなり、瓦礫を空中に持ち上げている。

「しかし、チツ。あの馬鹿共、こんなガキにやられちゃまったのか？ 使えねー部下を持つと苦労するもんだ……なツ!!」

「!!」
奴が右腕を振りかぶり、瓦礫をこちらに投げ付けてくる。俺が弾くより速い!!

ooooooooooooツ!!

辛うじて瓦礫を避けた。飛び散った石が皮膚を裂き、血が流れ出る。

「ーしゃーねエ。使えそうなら、お前を小間使いとして連れていくか」

「ツ!!」

いつのまにか右隣にいた船長。

そして頬に走る衝撃。今までに体験したことがない様な強さで殴られ、首からミシツと嫌な音がする。

歯を食いしばって耐え、足で奴の体を蹴る。が、まるで空を切る様に、奴の体を足がすり抜けていった。

「ロギアに物理攻撃が効くわけねえだろ！」

腹に強烈な蹴りが打ち込まれる。

体が後方に吹っ飛ぶ。が、白いガスが胴に巻き付き、ガクン！と体が滅茶苦茶な方向に引っ張られ始めた。

ゴミの山、崩れた建物、積み重なった瓦礫。
その全てに様々な方向から何度も何度も叩きつけられ、白いガスが
体から離れた時には、全身が血まみれになっていた。

「ゴプツ……！」

口から血が溢れる。

強すぎる。

とてもではないが勝てそうな相手ではない。

ゆつたりとした足音が近づいてくる。

「そういや、俺の名前をまだ言っただけじゃなかったな？ 毒息独王のジヨツ

キーって名で通ってる者だ。よろしく、なッ！」

顔が踏みつけられる。

鼻血まで出てきた。息が満足に出来ない。

「おいおい靴裏に血の糸が引いてるじゃねえか。汚ねえな。

……こんな強さの奴を連れて行っても、あの馬鹿共の二の舞に
なるか。ま、大人しく死ねよ」

動けない。

ジヨツキーと名乗る男が、足を上げる。

まずい。あれを食らったら死ぬ。

……まあいいか。

もう、向^あこう^世に行こう。覚えてないが……誰かが待ってる気が
するんだ。

もう……

「……バウバウバウツ!!」

何処からか犬の吠える声が聞こえた。

あのアホ面の犬、プー太の姿が見える。ものすごい勢いでこちらの
走ってきて、ジャツキーの足に噛みつく。

「あッ」

ロギアに物理攻撃は通じない。

それは犬の噛みつきでも例外ではない。ガチガチガチ！と歯の重なる音を響かせながら、何度も何度も足を噛み続ける。

「何だこの犬……」

「プー太!!」

聞き覚えのある声。

視界の端に入ったのは、赤い髪を振り乱しながら走ってくるコアだった。

「……な”、な”んで来たん”だ……!」

俺でも敵わないのに、コアが勝てるわけが無い。

ジョッキーが足に噛みつく犬の首にガスを巻きつけ、地面に押さえつける。

「へえ〜? こりゃあ珍しい人間だ。『諦めの医師』様とこんな所で会えるとはなあ」

「!? どうしてその名前を……!」

「有名な通り名だけ? まあガキ、聞きたいか? この女の悪行をよ?」

「……やめて、その子だけには……!」

もう声も出ない。

必死に体の回復に努めている以上、耳を防ぐこともできない。

「この女はな、伝染病の子供の点滴に毒を仕込んで、100人以上もぶっ殺しちゃったんだ!」

子供の完治を待つ家族もいたつてのになあ、可哀想になあ! 医者が医療を諦めるなんて笑い話にもなりやしねえ!!」

「……!」

子供を殺した、家族が待つ子供を…… コアが……?

俺の身近にいる人間が、誰かの愛を壊した人間だったのか……?

「違うの、違う……!」

「何が違うってんだ? クズ医者だよ!!」

「ぐツ!!」

ジョッキーが腕をガスにし、コアの首を掴む。

そうして、奴は、悪どくにやけた顔を俺に向けた。

「なあガキ。この女を殺せば、お前を助けてやる。」

この世からどうしようもないクズ医者を消して、命も助かる。悪い話じゃねえだろ?」

「コアを、殺す……………」

赤髪の、医者のコア。

チンピラに虐められていた野良の子犬を抱え、代わりに殴られていた女。

助けた時からずっとくっついて来て、一緒にいるのがいつしか楽しくなっていた彼女。

けど、コアは愛を壊したんだ。

壊した……………許せない。許せない……………!

ゆらりと、立ち上がる。

懐から黒い弾を取り出し、コアの腹に押し当てる。

圧縮を解除すれば、彼女の体では絶対に耐えられない。即死だ。

即死、即死、即死。

苦しまず死ぬ。やるんだ、やる、今……………!

「……………いいよ」

コアが言う。

許可も出た。殺したら俺に得ばかりじゃないか。

彼女の命を犠牲にすれば、これからも誰かの愛を守り続けられる……………。

「……………」

「どうした? やれよ」

「……………できない。できま、せん……………!」

「はあ? あーあ、お前」

ジョッキーに蹴り飛ばされる。

後方に吹っ飛び、2 mほど離れた所で地面に倒れた。

「俺には、誰かを犠牲にして誰かの愛を守るなんてできない……！」

コアがそんなことする訳ないんだ、きつと別の理由がー」

「そういう話をしてんじゃねえんだ」

冷たい声。

コアが苦しそうな顔をする。

「やめろ、やめてくれ！ もう手は出さない！ 絶対にだ！ だから、

コアとプー太を」

みつともなく懇願する。

情けないことこの上ない。だが、俺ではこの男に勝てない。

だから、こうやって自分の無様を晒しながら許しを乞うことしかで

きない。

すると、ジョッキキーが。

「お前さア。良い奴と悪い奴の共通点って知ってるか？」

「え……？」

ニヤツと笑って。

『人の嫌がる事を進んでやる』、だ。面白いだろ？

「……死デス・キング王毒」

……死の毒ガスが、島を覆い始めた。

???は覚醒する

「デス・キング
死王毒」

島を覆い尽くすほどの毒ガスが、ジョッキーの身体から溢れ出す。毒ガスの色は、名状しがたい色。黒と紫を混ぜ合わせ、ずつと行ったり来たりしているような色だ。

「あ……」

奴の体から出ている毒ガスは、当然、奴の体に触れているコアとプー太にも影響を及ぼす。

彼らは死王毒を吸い込み、全身の肌に赤黒い泡のようなものが発生し……やがて、体の中央から、ぼろりと崩れてしまった。

肉片が地面に転がる。

黒い血がスーツと広がるのを見て……コアとプー太が、死んだことを理解してしまった。

「……………」

立ち上がる気力がない。

五指で地面を擦るぐらいしかできない。心が折れそうだ。

そんな俺を見て、ジョッキーは心底楽しそうな笑みを浮かべる。

「死王毒はこの島一帯を覆い尽くす。だが、この辺りはわざと晴らしてやってんだ。なんで分かるか？」

「……………」

口が動かない。

「お前みたいな生意気なガキの、絶望する様を近くで拝んでやりたいからだよ。ん？ ほら、今なら実体化をしているから殴れるぞ？」

「…………つ、くそ野郎!!」

「遅いなあ」

これ見よがしに頬を人差し指で叩くジョッキー。

咄嗟に立ち上がって殴り掛かるが、鈍い拳は簡単に避けられ、腹に膝蹴りを叩き込まれる。

倒れ込みそうになるが、髪を掴まれ、頭を無理やり引き上げられた。「最後にも一つ、良いこと教えてやるよ。」

あの『諦めの医師』コア……伝染病の子供に毒を仕込んで殺したって言ったよな？ その伝染病の症状は、体に赤黒い発疹が出来て、どんどん壊死していくつーモンだ。

……なあ、何かに似てると思わないか？」

赤黒い発疹。その後、体が壊死していく。

なんだそれ。まるで……さっきこいつが出した……。

「俺の死王毒の影響なんだ、その伝染病は。」

威力を上げるために実験してたら、偶然、痛みと苦しみだけが長く続く毒ガスが出来ちまってな。それが誤って、無垢な子供達に広まっちゃったってわけだ。

可哀そうに、毎晩痛い痛いつて泣き声が聞こえてたよ……プツ」
ジョッキーの告白。

全ての元凶は、この島に俺が呼び寄せてしまった、この海賊だった。「……どいつもこいつも、馬鹿で哀れな頭をしてるよな？」

不用心に毒ガスを吸っちゃった子供も、その苦しみから助けるために殺しちゃった医者も、その医者を迫害した人間共も。

……強くもねえのに、海賊を舐め腐って、この島を終わらせちゃったお前もな」

……。

俺がこの島を、終わらせたんだ。

コアも、プー太も、俺が今まで助けて来た人達も。

贖罪なんてできる訳がない。俺の罪はそれほどまでに大きい。

でも……せめて、ほんの少しだけでも、償いができるとしたら――

「さ、死王毒も大体回った頃だ。お前もそろそろ死ぬか」

ジョツキーが掴んでいた髪を離し、地面に這いつくばるガキに右手を向ける。

子供は悔しそうに地面の砂を固く握り、ダン！と地を叩いた。

「海賊というのが、お前のような奴ばかりなら」

「あ？」

「俺はきつと……海賊つてのを、一生憎み続ける」

「……何言つてんだ、お前」

不可解そうな顔をしたジョツキーが、右手を毒ガスに変化させた瞬間。

子供がバツ！とジョツキーに右手を向けた。

その時――。

バンツ!!

「!? な……なんだ、今のは?!」

何かの炸裂音と共に、ジョツキーの体が大きく後方に吹っ飛ばされた。

ロギアの悪魔の実を食べた物には、物理攻撃は効かない。覇気という例外もあるが、それはこのガキには使えないはずだ。使えたらとつくに使つてる。

右手を地面に突き、ゆつくりと立ち上がる子供。

まさか、このガキ……。

「覚悟しろよクソ野郎。」

愛を乱してしようがない、お前みたいなゴミクズは……俺が、この世から消してやる」

ジョツキーの顔が真っ赤に染まる。

「舐めるなア!! この小汚いガキが!!」

デス・キング
「死王毒ツ!!!」

両手から吹き出す、人を殺して余りある殺人兵器。

それは、子供の眼前まで一秒と掛からず飛来し――余すことなく、飲み込んだ。

「……ガ、ガススス……。馬鹿が、俺に立てつくからだ。」

俺は懸賞金3億8000万ベリーの大海賊、毒息独王の——」
生きれるわけがない。絶対に死んだ。
なのに。

「一体どこに向かって名乗ってる?」

「あ?!」

ジョツキーは上を見上げた。

空高く、天高く、地上から20mは離れたところで——さっきのガキが仁王立ちしていた。

「お前、まさか……!」

悪魔の実の能力には、更に一段階、上のステージが存在する。

どうやって上のステージに上がるか、詳しくは分からない。

だが基本的には、長い長い能力の習熟の果てに辿り着くものだ。

そうした、上のステージに登ることを……強者たちは『覚醒』と呼ぶ。

「覚醒だと……?! 俺だって出来てねえものを、お前みたいなガキが出来る訳ねえだろうが!!」

「……覚醒……?」

俺は、自分の両手を見つめた。

なんだか、頭の中が広がったような感覚がする。

今までは、体に触れた物だけを圧縮させることができた。

だが今は……体に触れていない物や、見ることでできない物すら、圧縮できそうだ。

「デス・キング サイコヒュージ死王毒・狂王!!」

ジョツキーが体を膨らまし、巨大化する。

全長が約15m近くの大きさになり、体を構成する毒ガスは殺人兵

器の死王毒。

「ガススス……！　だがな、ガキが覚醒した程度で俺に勝てると思うなよ!!」

「やってみればわかる……」

空に毒ガスが蔓延する。

周囲を飛ぶ鳥は体を崩壊させ、海岸の近くに住む水生生物が命を落としてぶかぶかと水面に浮き上がり始めた。

「ガスタネット!!」

ジョッキーが指を鳴らす。

瞬間、周囲に爆発性のガスが蔓延し、起爆。常人なら骨も残らない。

「^{エアウオール}空気の壁——」

しかし、子供は避けていた。

周囲の空気を人が乗れるほどにまで圧縮。そして圧縮を一気に解除する。

すると、その上に乗っている人間程度なら、簡単に吹っ飛ばされるのだ。それも物凄い速度で。

自分の行く先に空気の壁を作り、圧縮を解除。そして吹っ飛ばされる。

それを何度も何度も繰り返すことで、ジョッキーの周囲を目にも止まらぬ速度で移動していく。

「ぐッ……！　舐めるな!!」

「^{カラクニ}無空世界!!」

ガス操作の要領で、周囲から酸素を奪う。

覚醒してまだ間もない奴は、能力の使用にかなりの負担を強いられるはずだ。

ずっとその速度で移動してみる、すぐにバテて酸欠で死ぬ。

が、子供は止まる気配がない。

「な、何故——がッフ!!」

一瞬のスキを突かれ、背後から攻撃を貰う。

ロギアの彼が攻撃を喰らうなど、本来ありえないことだが……。それは、子供の攻撃の方法に理由があった。

彼は周囲の空気を圧縮し、その圧縮を解除、空気を一気に膨張させることで、相手に衝撃を与える。

ジョッキーの体もガス、いわば空気。空気ごと伝わる強い衝撃はもろに受けてしまうのだ。ガスガスの実の唯一の弱点である。

「そ、それにしても、なぜ息が切れな——はッ!!」

子供の口元から、鋭く息が漏れるような音が聞こえた。

そう、あらかじめ酸素が奪われることを見越して——酸素をいくつも圧縮し、その塊たちを口の中に含んでいたのだ。

塊を息が苦しくなるたびに解除すれば、酸欠を起こすこともない。

「こんつ……のクソガキ、俺のことを舐め腐りやがってエ〜!!」

激昂するジョッキー。

それを冷静に見つめる子供。

一見ジョッキーのことを翻弄している彼だが、一つ、どうしても埋まらない差があった。

(決め手がない……)

空気でダメージを与えられはするものの、奴を倒すほどの威力はない。

せいぜい勢いよく吹っ飛ばすだけだ。これは、覚醒したばかりで実の技量が十分でないためである。

だが、奴も俺と同じく悪魔の実を食べている。

そして、コアに昔、こんな話を聞いたことがあった。

『いい? 絶対に海に入っちゃダメだからね!! 悪魔の実を食べた者は海に嫌われて、永遠に泳げなくなっちゃうって話なんだから!!』

『……どれくらい泳げないんだ?』

『……誰かの助けを借りないと本当に危険なぐらい、なのかな?』

『……とにかく、一人ではそもそも海に近づかない事!!』

『わかった』

……これしかない。

あの男、ジョッキーを海に叩き落す。それしか勝ち筋はない。だが奴も海には最大限の警戒を払っているはず。ならばこちらにも、覚悟を決めなければならぬ。奴が冷静さを失うほどの覚悟を、見せないといけぬ。

飛び回っていた体を止め、空中に立つ。

そして、わざとらしくジョッキーの方に振り向き、左手の中指と人差し指をくいくいと動かした。

「動きが遅すぎて話にならないな。止まっついてやるから、全力で当ててみる」

分かりやすすぎる挑発。

だが。

「――ふざけるなア!!! グズグズの肉片になってから後悔するなよオ
~~~~!!」

単純な男。ジョッキーはすぐに挑発に乗っかった。

奴は地面から細かな石を浮かび上がらせ、両腕を前に突き出す。

両腕の周りをどす黒いガスが回り始める。一秒経過するごとにその回転は速度を増していく。

そしてその回転が最高点に達した瞬間、浮かび上がらせていた石をそのガスの中に混ぜ込んだ。

「デス・キング ドレオテイトキャノン死毒王・不生廻転殺!!」

どす黒い毒ガスに、高速回転する石が混じった、一直線の攻撃。

石が相手の皮膚を切り裂き、傷口から毒ガスが侵入し、相手の体を崩壊させる非常に強力で残忍な技。

そんな技を相手に。

「エア・ウォール空気の壁、全方位展開!!」

足元の空気を膨張させ、真正面から毒ガスの砲撃に突っ込む。

口の中に酸素は入っている。呼吸で毒を吸う心配はない。

「——ッ！」

まだ覚醒したばかりで、技量の足りていない空気の壁。

時折石によって空気が切り裂かれ、皮膚を傷つける。そこから毒ガスが侵入し、体にボコボコと赤黒い発疹が発生する。転げ回りたくなるほど痛い。

だが、止まらない。止まれない。

この男だけは、絶対にここで始末する。始末しないとイケないんだ。

「うおおおおあああああああああ!!!」

初めて、心の底から闘志を振り絞るために雄たけびを上げる。

周囲の空気の壁が完全に崩壊する直前、ついにジョッキーの懐へと入り込むことが出来た。

驚愕の表情をするジョッキー。

「馬鹿な!! 俺の最強の技を——」

空気の壁じゃあ駄目だ。奴の巨体を吹き飛ばすには力が足りない。だが今の俺ではこれ以上威力を上げることもしかない。

だったら、数で押すしかないだろ!!

手のひらに圧縮した空気を何層にも重ね、ジョッキーの顔面に押し当てた。

「エア・ブレイク  
「大気崩壊!!」

「ぐがッ!」

ジョッキーの顔が歪む。今俺が出せる最高出力の一撃だ。

奴は物凄い勢いで後方に吹っ飛ばされていき、俺も少しだけ背後に吹っ飛ばされる。途轍もない衝撃だ。

しかし、すぐに足元に空気の壁を作り、ジョッキーを追いかけた。

吹っ飛ばされてるうちに、周囲に纏っていた死王毒がはがれていき、通常のサイズに戻っていくジョツキー。

「——こいつ、海に俺を落とす気か!! させるかよ、そんなこと!!」  
吹っ飛ばされている途中で、ジョツキーが何とか体勢を立て直す。だが体勢を立て直したのは海面スレスレ。危なかった。追いついて来たガキが見える。

両手を広げ、ぶわっと白い煙を発生させた。そして大声で叫ぶ。

「はッ、馬鹿が! ここから俺を倒せると思ってるのか!?!」  
発生させた白い煙の正体は、水蒸気。

海面から蒸発する水蒸気を巻き上げ、操作し、周囲の温度を強制的に上昇させる。

さつき攻撃を当てられたのは、渾身の一撃を破られた油断から来るものだ。次は喰らわねえ!

周囲の温度はぐんぐん上昇していく。もう100度に近い。  
近づける物なら近づいてみる、一瞬で重症の火傷を負うのが落ちだ。そこから死王毒を入れて今度こそ殺してやる。

近づいてこないなら来ないで、ここら一带全てを汚染するほどの量の死王毒を放つ準備ができる。そうすりゃいくら何でも耐えられねえだろう。

どつちに転んだってお前の負けだ、クソガキ!!

「……愛の表現には、しばしば光、というものが用いられる」

ガキの言葉が聞こえる。意味の分からない妄言だ。

無視しようとして——瞬間。ジョツキーは異変に気付く。せつかく上げた周囲の温度が急激に下がり始めていた。

「光の中で完全な一番、象徴とも言える物は——太陽」

「な、何だ!?! 何が起きてる?!」

ジョツキーが温度を上げようとするよりも早く、温度は下がっていき、

やがて水蒸気が晴れ、ジョツキーが目にしたものは。

光り輝く太陽を右手に浮かばせ、空中に立つガキの姿であった。

「超圧縮した熱の塊——。俺はこの技を、『太陽』と名付ける」

「な、あ……!？」

あんなものを喰らったら、いくらロギアでも死んじゃう。

すぐにその場から逃げようとしたが、ガキが左手をこちらに向けた瞬間、体が動かなくなる。

「周囲の空気を圧縮して壁を作った。お前ならすぐに壊せるだろうが……一秒も止まれば十分だ」

「や、やめろ……! す、すまなかつた! もうお前に手は出さない! だから許して——」

——右手に浮かばせた太陽を、大きく振りかぶり。

「死ね、クソ野郎!!」

思いきり、ジョツキーに投げつけた。

「う、ぐ、ぐわああああああ!!」

太陽と称されるほどの熱の塊は、ロギアの体でも透過できなかつた。

情けない叫び声と共に、ジョツキーは海の底へと沈んでいく。

海水で力が抜ける上、熱の塊である太陽に触れ続けるのだ。絶対に生き残れはしない。

……この時世界の何処かに生まれたガスガスの実を、またロクでもない奴が口にするのだが、それはまた別の話である。

「……………ふ……………」



口から息が漏れた。

足元の空気の壁にへたり込むように座り、ゆつくりと空に視線を向ける。

そこには、自身が作った太陽とは比べ物にならないほど高く、強大で……世界中の愛を作る、本物の太陽が浮かんでいた。

それを見て、少しだけ目を細めた悲しそうな表情を浮かべる。

「……勝てたぞ、コア。

………俺、誰かの愛を守れたかな………」

その独り言は、誰にも聞こえることはなかった。

ラブヒーローは約束を果たしに戦火の中へと訪れる

モンキー・D・ルフィは、バーソロミューくまによって吹き飛ばされた後、カムルト 風の海にある女ヶ島へと着陸した。

その島で七武海であるボア・ハンコックと親交を持ち、新聞で同じ海賊で義兄であるエースが海軍に捕まった事と、彼の公開処刑が行われる事を知る。

エースを助けるために海軍の海中監獄『インペルダウン』に入ったものの、彼は処刑のため既に海軍本部へと連行されていた。

インペルダウンにいた囚人達と共に海軍本部『マリンフォード』へと乗り込み、エースの在籍する海賊団であり世界最強の男『エドワード・ニューゲート』が船長の『白ひげ海賊団』と共に、彼の救出を開始する。

そして遂に、海楼石の手錠を嵌められていたエースを処刑台から救出し、ルフィ達は全力で逃走を開始したのだが、大将に追いつかれてしまひー。

—————

「この時代の名は、白ひげだア!!」

ルフィの義兄エースと、海軍大将赤犬の拳がぶつかり合う。

衝突の末、打ち勝ったのは赤犬の方だった。エースは背後に吹っ飛び、熱で燃える手を抑える。

「ロギアじゃ言うて油断しちよりやありやせんか？ お前の火と、火すらも焼き尽くすワシのマグマは完全な上下関係にある！」

赤犬が右腕からボトボトとマグマを垂らす。

彼は自然系マグマの実を食べた全身マグマ人間。対してエースは、

自然系メラメラの実を食べた全身炎人間。赤犬の言葉通りに行くと、この2つの実は完全な上下関係にあるらしい。

エースが足を止めてまで赤犬と勝負したのは、赤犬がエースの大恩人である『白ひげ』の事を敗北者と罵ったからだだった。

我慢ならなかった彼は、果敢に挑んだものの……意志を貫き通せるほどの実力が不足していたらしい。

「海賊王の息子と革命家ドラゴンの息子が義兄弟とは恐れ入ったわい……！ 貴様ら2人の血筋はすでに大罪、誰を取り逃そうが貴様ら兄弟だけは絶対に逃がさん!!」

赤犬が、吹き飛ばされたエースの方ではなく、疲労困憊で動けないルフィの方に近づく。

ボコボコと沸騰するマグマは、人間の体など簡単に溶かし命を奪うだろう。そのマグマが拳の形を作り、ルフィの体に迫った。

「よう見ちよれ……」

「ルールファイ!!」

まずい。このままではルフィが死ぬ。

エースが彼を守ろうと走り出し、赤犬の前に身を翻した。

背後に近づく赤犬の拳。何もかも焼け焦げるような熱気が皮膚を焦がす。

感覚がスローになり、もう1秒も経たぬ間に、自身の体をマグマが貫通するだろうと言ったところで……。

……バンツ!!!

何かを受け止めるような音が響いた。

「マリルフォードで戦争……念の為此の辺りに来ていたが、どうやら正解だったようだ。救援信号が来て、すぐに駆けつけられた」

エースが背後を振り返る。

そこにいたのは。

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭の前から靴先まで覆い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

その不審者の名は天竜人殺しのラブヒーロー。

彼が、赤犬の拳を右手で受け止めていた。

「天竜人殺し……！ 独りよがりの正義を振り回す悪が、何をしに来よった!!」

「モンキー・D・ルフィとの約束を果たしに来ただけだ」

ブウン……！と、ラブヒーローの右手が白い武装色の覇気で覆われた。

左足を前に踏み出し、力任せに赤犬の体をぶん投げる。そして、赤犬が少し宙に浮いたところで。

「エアウォール空気の壁」

空気を膨張させ、マリルフォードの奥へと吹っ飛ばした。

ダメージは殆ど与えられていないだろう。すぐに戻ってくるだろうが、時間稼ぎはできる。

「あ、あんたは……」

エースは、ラブヒーローの顔を見上げた。

彼は、エースの顔を見て、静かに言う。

「…… 海賊王の息子か。あの、ロジャーの……」

「!! 俺の親父は白ひげだ!」

「それならそれでいい。私が言ったのはあくまで血筋の話だ。親子の関係の話ではない」

彼はエースの傍を歩く。

そして、疲労で倒れるルフィの前にしゃがみ込んだ。

「あ、ありがとう白いおっさん。助かった……」

「約束だからな。それより、モンキー・D・ルフィ。一つ聞きたいことがあるんだが。」

「…… まさかだが、インペルダウンから囚人を逃したりしたか?」

「? あ、ああ」

「そうか」

瞬間。

ラブヒーローは覇気を纏った右手で、ルフィのこめかみを掴んで持ち上げた。

いわゆるアイアンクロードだ。

「ギャアアアアア！　いてエ、何すんだよ!!」

彼の問いに、静かな声で返す。

「何をするか、だど？　お前、インペルダウンから囚人を逃がすことが、どれだけ世界の愛を乱すか分かってるのか。

しかもLEVEL6に収監されるような海賊まで何人かいるな……」

「か、監獄から逃げるには仕方なかったんだ!!」

「仕方なかったかどうかではない。逃がしたという事実こそが問題なんだ」

傍目から見ても、相当怒っていることが分かるラブヒーロー。

懸賞金30億ベリリー以上の化け物が怒っている。そんな状況で動ける者は少ないだろう。エースですらも、初めて見る不審者とそこから溢れるとんでもない圧のギャップに動けずにいる。

そんな中、ラブヒーローの腕を、青い手が掴んだ。

「お初にお目にかかる、天竜人殺しのラブヒーロー。ワシは海峡のジンベエという者じゃ」

「海峡のジンベエ……七武海か」

「知っていてもらえて光栄じゃ……エースさんとルフィ君を助けてくれたこと、心から感謝する。

そして、恩人に対して無礼極まりないことは承知の上で言う……その手を離してくれんか。ルフィ君とエースさんは一刻も早くこの場所から逃げ出させてやらねばならん」

「……断る」

両者が睨み合う。

まともにぶつかれば、勝敗がどうなるかは火を見るよりも明らか。2人。ジンベエも、彼我の実力は重々承知している。

「…… ワシもインペルダウンから逃げてきた囚人じや。ルフィ君を離してくれる代わりに……」

ジンベエが、ラブヒーローの腕を掴む手とは反対の手で、和服の襟を緩めた。

そして自分の心臓付近の皮膚を空気に晒す。

「ワシの命を好きに持っていけ。エースさんとルフィ君が助かるなら、この命、惜しくも何ともない」

「……」

ジンベエの目をじつと見る。

強い決意の籠った瞳。言っていることはハツタリでなく、全て本当だろう。

数秒考えた後、ラブヒーローはルフィの体を地面に落とした。

「今は離す。だが後で少しキツめの仕置きを受けてもらおう」

「いって……」

「それに来る途中で、少しだけこの状況を見ていたからな。他に首謀者がいたのも分かっている。

……赤鼻のバギー。あのアホ鼻が……」

戦場の何処かにいるバギーが、のちのち大変なことになるのが確定した瞬間であった。

さて。

赤犬が鬼のような形相で遠くから迫って来ているのが見える。

「ふむ……」

ルフィ達は既に私の背後へ逃げていった。

マリントフォード頂上戦争は殆ど終盤。

ラブヒーローが手を加えても、大きく展開が変わることはない。さつき大事な男の運命を変えたような気もするが、それは置いておこう。

執拗にルフィを追う赤犬を叩きのめすだけでもいいが……。

「ラブヒーロー！ そこを退かんかア!!」

…… 取り敢えず、叩きのめしてから考えるか。

混沌を極めまくった現場の状況に、ラブヒーローも脳筋的な考え方を  
する他なかった。

右の手のひらを迫る赤犬に向け、周囲の熱を圧縮し始めた瞬間。

「アイスBALL」

ボール状に固まった冷気がラブヒーローに飛来し、直撃。

3mを超える白タイツ不審者の氷漬け像が完成した。

数秒で内部から破壊するも、赤犬はラブヒーローの上空を飛び越え  
てルフィ達の方へ行ってしまう。

すぐに追いかけてしようとするが、足元に氷の矛が突き刺さった。

振り返って、この場に現れた海軍大将の1人の名を鬱陶しげに呼  
ぶ。

「…………青雉」

「厄介な男が来ちまったもんだな…………ガープさんとゼファー先生  
からお前の事はよく聞いてるぜ」

そう言うと、青雉は周囲に冷気を展開した。

そして、低い声で言葉を続ける。

「天竜人を殺した時から、お前はおかしくなっちまったってな。

…………『ラノア』さんよ」

————ビキキツ!!

ラブヒーローの首筋に、太い血管が浮かび上がった。

「私が天竜人を殺してからおかしくなっただど？ 次、ふざけた事を

言おうと殺すぞ」

明らかに怒りのこもった声。

その声に怯む様子は見せず、青雉はさらに言葉をつづけた。

「口々に言ってたぜ？ 天竜人を殺すだけってんならともかく、マリージョアを30回以上襲撃するのはどう考えてもおかしいってな。それにその妙ちくりんな白タイツスーツも、マリージョアを襲撃してる時から始めたそうじゃねえか」

青雉の目的は、誘導。

ラブヒーローに冷静さを失わせ、自身に標的を固定。天竜人殺しなんて厄介な犯罪者に行動を許し、海軍側の邪魔をさせないためだった。

ただ、少し挑発が上手く行きすぎたのか。

相手の心に踏み込んで良いラインを間違えてしまったのか。

青雉の言葉に対する返答は、覇気でガチガチに固めた拳による殴打であった。

「私が間違っているなどと言う戯言を聞く価値はないな。その首を千切り取って今すぐ黙らせてやる」

覇気で固めた拳をモロに喰らってしまった青雉。

地面に両手を突き、頬が切れて出た血を地面に吐いた。その血の中には、白い歯も一本混じっている。おそらく今の一撃で折れたのだろう。

「おととつと、こりやまずいな……。程度を見誤っちまったかーッッ！」

ラブヒーローの容赦ない蹴りの追撃。

それを空中に向かって剃、飛び上がって回避した青雉。

「アイス塊・パルチザン!!」

空中で姿勢を整え、ラブヒーローに氷の矛を発射した。

氷の矛が自身に迫ってくるのに対し、回避することもなく、右の手のひらを向ける。

「ミニッツ・コア小さな太陽」

手の平の前に生み出される、直径3mの圧縮された熱の塊。ラブヒーローの身長とほぼ同じだ。



そんな太陽が、ノーモーションで一直線状に放たれた。速度は銃弾のそれなど圧倒的に超えている。

「!!」

氷の矛を一瞬で溶かし、青雫に迫る太陽。

月歩で空を駆け、なんとか回避する。が、太陽の周囲に薄つすらと漂う熱気で右足首から先が溶かされてしまった。

「こりゃ熱いじゃすみそーにねーな……懸賞金30億越えは伊達じゃねエか」

すぐに足先を再生する。

ラブヒーローはそんな青雫の様子を静観する義務もなく、右の手のひらを彼に向けた。

「メガティツク・コア<sup>太陽</sup>」

生み出されたのは、先程よりも倍以上大きな熱の塊。

直径は10m以上あり、地面に太陽がめり込んでいる。しかし威力を損なうどころか、地面のコンクリートを一瞬で焼き消していた。

「おいおいおい！ そりゃまずー」

「死ね」

放たれた太陽。

太陽は一直線状に地面を削りながら進んでいき、最終的に、海軍本部の建物に直径10mの大穴を空けた。

そこから先、太陽が何処まで飛んで行くかは分からない。が、いずれは熱を消費して消えるだろう。

「……」

太陽の軌道上。

そこに青雫の姿はなかった。

だが彼は死んでいない。

見聞色の覇気で探るまでもなく、視界の中に、彼の姿があったからだ。

ゴツイ機械の指に胴を掴まれ、太陽の軌道上から瞬時に離脱したらしい。

そして、そのゴツい機械の指、機械の腕を操るのは。

「ラブヒーロー……」

元海軍大将。

シャボンディ諸島で破壊したはずのバトルスマツシヤーを右腕に装着した、『ゼファー』であった。

ラブヒーローは本気で戦う

「――最近、よく苛立つ」

ラブヒーローが手で顔を覆った。

「思い返すと、その大体の原因は……私の過去を探り回る貴様らだ。

……私の過去を漁って何になる？ 果てしなく無意味だ。言っておいてやるが、私の身内はもういない。本当に価値がないんだ」

ビキツと、顔を覆う手に血管が浮かぶ。

低い、低い、怒気の籠った声。

「特に貴様だ、ゼファー。」

私はシャボンディ諸島で海軍を引退しろと言い、その御大層な機械バトルスマッシュヤーの腕まで壊したよな？ それは何をどう転んだら、もう一度腕を付けて挑んでくることになるんだ？」

「……………」

「それに、どうして青雩が私の『本名』を知っている。調べたのか？」  
何も答えないゼファー。

青雩もゆつくりと立ち上がり、元海軍大将と現海軍大将がラブヒーローの方を向く。

背後から、白ひげのグラグラの実が発動する音が響いて来た。

恐らくエースを追った赤犬と交戦しているのだろう。モンキー・D・ルフィ達の救援に行く必要はない。

つまり、ラブヒーローが彼らを助けに行くということではなく。

この戦場でトップ10に食い込む強者たちが衝突するのはもはや避けられなかった。

ゼファーが、バトルスマッシュヤーを構えながら言う。

「ラブヒーロー、悪いことは言わん。……もう大人しくしろ」

「……悪いこと？ 大人しくしろ？」

私に向かつてもう関わるなど言っただははずだ、この時代遅れの老兵がッ!! いちいち口を挟むなッッ!!」

怒りが頂点に達したのは、顔から手を外して声を荒げるラブヒーロー。

濃い赤のバイザーで表情は見えないが、きつと怒りに満ちた恐ろしい形相をしていることだろう。

ギチギチ……!と、周囲の空気から異音が鳴り始める。

「——貴様らの手足を消し飛ばそう。一生車椅子と仲良しこよしにしてやる。そうすればもう私の前に姿を現すこともない」

向かい合う青雉が、恩師であるゼファアの前に手を出す。

「ゼファアさん、下がっててくれませんか。ここは俺が……」

「馬鹿野郎。クザン、お前ひとりで抑えられる相手か」

ゼファアは青雉の腕をどかした。

懸賞金32億2000万というのは運で付けられるような金額ではない。天竜人を殺したという大犯罪を加味しても、そんな金額が付くことはそうそうない。つまり、大犯罪という土台の上に圧倒的かつ純粋な強さが乗っかっているのだ。

大将でさえ鎮圧できるかは分からないレベルである。相性差では負けるなんてことも十分にありえる。

それゆえに、青雉は困った様子で頬を指でかいた。

「そりゃア……まあ……」

「安心しろ、足手纏いにはならん」

「そういう話じゃ……まあ、しゃーねエか」

青雉は諦めた。

ゼファアが一度決めたことを曲げるなんてことはないからだ。ましてラブヒーロー関連に関しては絶対に折れない。

白い愛の化け物を捉えるため、2人は構えた。

「小さな太陽  
ミニッツ・コア」

一瞬で右の手のひらを向け、直径3mの熱の塊を生み出す。それをゼファーと青雉の2人に向かって撃ち放った。

「舐めた太陽を撃ってんじゃねエ!!」

ゼファーがバトルスマッシャーを振りかぶり、迫る太陽に勢いよくぶつけた。

頭が割れるほどに大きな衝突音と、肌を焦がす熱気。

だが太陽を完全に受け止め、バトルスマッシャーを最大出力で爆発させた。

完全に消え去る太陽。

ラブヒーローの放つコアは、余りに大きな衝撃を与えられると熱が霧散してしまうのだ。これは圧縮した空気にも共通する弱点である。

「アイス塊・パルチザン!」

空に飛び上がった青雉。

10本ほど生み出された氷の矛は、1本だけでも簡単に人に致命傷を与えられる。

「小賢しい」

しかし、その矛は一本残らず、白い武装色で覆われた右腕で薙ぎ払われた。

「まあ防ぐわな。アイスソード!!」

何処からともなく、何かの金属片を取り出す青雉。恐らく割れたサーベルの破片だろう。

それを軸に長さ2mほどの頑丈な氷の剣を作り出し、ラブヒーローに斬りかかった。

青雉は剣の軌道が遅い。扱いに慣れていないからだ。

見聞色で楽に軌道を見切ると、覇気を纏った手で剣の刃をガシツ!と受け止めた。

「そのまま止めてろクザン!!」

剣で素早く近づくゼファー。

バトルスマッシャーで殴り掛かるも、白い武装色を纏った左手で受け止められる。

「——鬱陶しい!!」

ラブヒーローが2人を勢いよく弾き飛ばした。背後に飛び下がる青雉とゼファー。だが2人とも着地した瞬間に剃を使い、ラブヒーローに連続攻撃を仕掛ける。

——ガアン!! ギイン!!

——ドゴツ!! バキツ!!

青雉が荒々しく斬りかかり、ラブヒーローが防いだ隙にゼファーが殴り掛かる。

両者からの攻撃を見聞色の覇氣を使いながら、後退しつつ防ぐラブヒーロー。

しかしこうも近づかれると、高威力の太陽を放つことができない。アレは高威力の代わりに手のひらで熱を圧縮しなければならぬという弱点がある。それ以外にも、弱点はあるが。

「チツ——エアウオール空気の壁!!」

ラブヒーローはノーモーションで放てる空気の壁を選択した。

青雉の攻撃を防ぎ、彼を吹き飛ばす。

だが青雉は吹き飛びざまに、手に持っていたアイスソードをラブヒーローに向かって放り投げた。

当然、覇氣の籠った手で弾く。

——だが、その瞬間。

「!!」

ゼファーの黒腕が、ラブヒーローの右手を掴んだ。

左手もバトルスマッシュシャーに拘束されてしまう。海楼石で出来たバトルスマッシュシャーは悪魔の実の能力を封じる。

「見聞色の覇氣を一方方向に向けすぎだア!!」

怒号と共に眼前に迫るゼファーの額。

武装色を纏ったゼファーの頭突きが炸裂し、ラブヒーローの頭が真

後ろに弾かれた。

「クザン！ 俺ごとやれ!!」

「恨まんでくださいよ、ゼファーさん!! アイスタイム!!」

戻ってきた青雉は両手を突き出し、ラブヒーローの体に当てた。

瞬間、彼の手から放たれる圧倒的な冷気。

それは人2人を凍らせるには十分すぎる物だった。

「……………」

「……………」

ゼファーとラブヒーローが凍っていく。

お互いに睨み合ったまま氷の彫像と化していく2人。

完全に氷に包まれた2人。

それでも油断しない青雉。手を向け、ラブヒーローがもう動けないよう、周囲を更に氷で覆っていく。

ひとしきり周囲を凍らせた所で、青雉は手を下げた。

「割るのはやべエな、ゼファーさんも丸ごと割れちまう。

……インペルダウンでゆっくり溶かすとしますかね……」

結果だけ見れば、無傷で勝てた勝負だ。

だが一歩転べばどうなっていたかは分からない。お互い強力な攻撃手段を持つ強者同士の場合、死ぬか無傷かのどちらかで終わることは稀にある。

とりあえず、氷が割れないようどこか別の場所へ移動させようと近づいたところで。

——ピシッ

氷に亀裂が入った。

「……………は？ おいおい、まだ動くのかよ!!」

青雉が瞬時に追加の氷を被せるも、少し遅かった。

内部にいるラブヒーローは、ゼファーのバトルスマッシャーから左手を外す。

海楼石から解放され、能力が使えるようになった彼は、小さくこう

唱えた。

「ラフル・シヨット  
圧縮弾」

すさまじい衝撃音。

一瞬で、氷の山が瓦礫の山へと変貌する。

周囲にキラキラと輝く氷が降り注ぎ、なんとも幻想的な光景が広がった。しかし状況は全く幻想的ではない。

「なるほど。私は少し冷静さを失いすぎていたらしい。まさか頭突きを喰らい、凍らされてしまうとは」

同じく氷から解放されたゼファー。

咄嗟に殴り掛かるも、ラブヒーローがそれよりも早く、みぞおちを打ち抜いた。

武装色でガードするが、彼の白い武装色はそれを貫通する。ゼファーは顔を苦し気に歪め、背後に後ずさった。

「だが今の氷で私の頭も冷えた。次は冷静にやろう」  
首筋に血管の筋がいくつも浮かんでいる。

どうみたって冷静ではない、完璧に頭に来ている。

「エアウオール  
空気の壁」

空中に飛び上がるラブヒーロー。

そのスピードは剃や月歩よりも圧倒的に早い。

数十メートルは上昇したところで、動きを止める。

圧縮した空気の上で仁王立ちし、右の手のひらを空に掲げた。

「——マキシマム・コア」

周囲の気温が下がる。

彼の手の上に生み出されたのは、直径30mの熱の塊。

先ほどゼファーが防いだ直径3mの太陽とは比べ物にならないほど大きい。



それだけの大きさの太陽だ。戦場中にいる誰もがその明るさに目を細め、その下にいる男に目を向ける。

「!? 白いおっさん?! 何やってんだアレ!」

逃げる途中のルフィも、その光景を目撃していた。

遠く離れている彼にさえ届くような熱気。

ルフィの横にいるエースも背後を振り返り、驚愕の目でそれを見ていた。

「な、なんだアレ……!? 俺の大炎戒・炎帝とそっくりだが……中身はまるで別物だ……!」

そんな言葉を、ラブヒーローが聞いているわけもなく。

眼下にいる青雉とゼファーを怒りの形相で睨みつけていた。

「全力で避けるか、全力で防ぐか。好きな方をお勧めする」

そう言っつて、勢いよく太陽を撃った。

物凄いスピードで地上に迫る太陽。さながらその様子は、神話のワンスーンでも切り取ったかのようなだった。

狙われた2人は、流星に回避を選択する——ことはなかった。

「クザン、逃げてろ」

ゼファーがバトルスマツシャーを振りかぶる。

「!? 流星にそれは——」

「逃げろツ!! 大将のお前がここで消えてどうする……!! ……それに奴との因縁は、俺が引っ張ってきちまったもんだ」

「——死なんでくださいよツ」

青雉は離脱した。

太陽の下には、ゼファーだけが残る。

「……ラブヒーロー、お前には本当に感謝してる。まさか、俺が孫息子を拜める日が来るなんて思わなかった。

——だからこそ、俺は、恩人のお前がこれ以上苦しむのは見てられん!! 正義の名に掛けて、ここでお前を救ってやる!!」

ゼファアの脳裏に浮かぶのは、あの日の記憶。

ラブヒーローが天竜人・ゴルモンド聖を殺した日。

脳裏にべつとりとこびり付いて離れない、絶望と狂気が混じった表情をした彼の姿。

『私の名前は……ラブヒーロー。世界の愛を守る存在だ。なあ、そうだろう……?』

血走った目を限界まで見開いた顔が忘れられない。

今、お前の濃い赤のバイザーの下の表情がどうなっているかは分からない。

だがきつと、あの日のままなんだろう。

「——おおオオオオオオ”オ”!!!」

迫る太陽を、バトルスマツシャーで受け止めた。

とんでもない熱気と質量。ミシミシと全身の筋肉と骨が軋む。

受け止めたバトルスマツシャーの機能を滅茶苦茶に発動させる。

爆発。

爆発。

ビーム。

ガトリング。

ビーム。

爆発。

爆発。

「ツッグツ——!」

滅茶苦茶にやったおかげで、太陽の勢いは少し弱まる。

それでも圧倒的な威力を持つていることは変わらない。

ゼファアは武装色の覇気・硬化を纏った左腕を太陽に押し当てた。

ジュツと皮膚の焼ける音が鳴る。

バトルスマツシャーは熱に耐えきれなくなったのか、先の方から少

しずつ溶け始めている。

「——ラブヒイイイイイロオオオオオオオオオオ”オ”オ”オ”!!!」

心から雄たけびを上げ、彼は全身に力を込めた。

元海軍大将とはいえ、ゼファアは既に70歳を超えている。  
老いには勝てない。

これはどんな大海賊、海兵にも通じる法則だ。

そう。

老いてしまったゼファアと、ラブヒーローでは。  
もう、実力に圧倒的な差があった。

「……………」

直径30mのクレーターを作る地面。  
その中心に寝転ぶゼファア。

太陽を受け止めたバトルスマツシャーは根本まで溶け、左腕には酷い重傷を負っている。

だが胸が僅かに上下していることから、まだ命があることだけは分かった。

「私にはもう構うな。それがお互いにとって、一番の幸せなんだ」  
空中から彼を見るラブヒーローは、静かに呟く。

雌雄は、決した。

## ラブヒーローは反省する

地面に降り立ち、意識のないゼファアの左腕を掴む。

空中にポイと放り投げ、空気の壁で海軍本部の方に弾き飛ばした。こうすれば気絶しているところを海賊に仕留められるなんてこともないだろう。海軍の医務室送りになるはずだ。

見聞色の覇気で辺りを探る。

モンキー・D・ルフィとエースは……もう海の近くまで行っているようだ。まず問題なく逃げられるだろう。

白ひげは頭の半分が消し飛ぶという何故生きているか分からない傷を負っているが、交戦していた赤犬を倒したようだ。だが……あの傷ではもう助かるまい。

「……………」

どうしたものか。

もうモンキー・D・ルフィを助けるといふ目的は果たした。

正直この戦争において私の役目は少ない。

そう腕を組んで悩んでいると、何処からか白い正義のローブを纏った白髪の男が飛んできた。

海軍の英雄『ガープ』だ。

「ガープ……。最近海兵のビッグネームがよく私の所に来るな。光栄なことだ」

「自分の懸賞金額を考えてから言うんじゃない」

構えはするものの、覇気を使わないガープの姿から、戦闘の意思がないことを悟る。

組んだ腕はそのまま、顔を逸らしながら言うラブヒーロー。

「——ゼファアのごことは悪かったな。つい……怒りのままに全力で撃ってしまった」

「どういう意味の謝罪じゃ、それは」

「守るべき愛のある人間に撃つ太陽の大きさではなかったということだ」

「……はあく。ゼファーが聞いたら怒るぞ、その言葉は」  
それは、つまり。

ゼファーではラブヒーローの全力を当てるには値しないと言っているようなものだ。完璧な挑発である。

「もう、ワシとお前が出会って何年だ？」

「……ガープとは私が14の時に出会ったから、29年だな」

「そうか……。29年も経てば、ワシもゼファーも老いるわな！ ブハハハハ！」

「おかしな話はもういい、一体何の話をしに来た。たわいない思い出を語らう時ではないだろう」

そう言うと、ガープは拳に覇気を纏った。

——ガアン!!

ラブヒーローとガープの拳が錯綜する。

黒と白の武装色が入り乱れ、縦横無尽に拳の雨をぶつけ合った。

ガープが押している時もあれば、ラブヒーローが押している時もある。平均を取って概ね互角……と言ったところだ。

「エア・ブレイク大気崩壊——小さなた陽ミニッツ・コア」

ガープを吹き飛ばし、太陽を放つ。

空中で身動きの取れないまま迫る太陽を、両手でがっしりと受け止めるガープ。

そのまま背後にバツクドロップの要領で放り投げた。

空気を足元で膨張させ、一瞬でガープに近寄るラブヒーロー。

白と黒の武装色を纏う拳がぶつかり合った。余りの衝撃に周囲の地面にヒビが入る。

両者共に飛び下がり、覇気を纏った拳を構えたまま、睨み合った。数秒経ったところで——ガープが覇気を解いて拳を下げる。

「やめじややめじや！ お前とはもう一対一では勝負がつかんわい!!」

「……やめるなら何故私に挑んだ……」

「センゴクがやって来いと言うからじゃ。まあもう充分じゃろ」  
多分充分ではない。

遠くの方からガハガハと笑うガープを睨みつける海軍元帥の姿があったが、2人ともわざと気にしないようにした。

「……ワシの立場でこういう事は中々言えんから、一度しか言わんぞ。良いな！ 耳の穴をかつぽじって聞くんじゃぞ！」

「なんだ、一体……」

ラブヒーローが腕を組み、呆れたようにそっぽを向いた。  
すると、ガープが突然頭を下げる。

「——ルフィとエースの命を救ってくれて、感謝する……！」  
「っ……」

少し驚いた。

まさかあの海軍の英雄が、過去に私の事を何度も殴り飛ばしたあのガープが、頭を下げて感謝までするとは。

「火拳のエースの方は結果的に救っただけだ。モンキー・D・ルフィとは……約束だからな、助けたに過ぎない」

「それでもじゃ」

「知らんぞガープ……。センゴクはバッチリこつちを見ているからな」

「それ以外は多分見ておらんから大丈夫じゃ」

……確かに、先ほどの戦闘で、周囲にはかなりの砂煙が巻き上がっている。

目視では私たちの動きを認識できないだろう。

見聞色の覇気でも使わない限りは無理だ。

問題は、この海軍本部には見聞色の覇気を扱えるものがまあまあいるという点だが。

「そういうえば……私の本名を調べたのは、お前か？」

「そうじゃ」

ラブヒーローは溜め息を吐く。

「ハア。……もういい、私の過去を探りたいなら好きにしたらどうだ？ 誰にでも、自由に話せばいい。許すまでもなく広まっているだろうが」

吐き捨てるようにそう言うと、彼はガープに背を向けた。

「帰るのか」

「この戦場にも、老兵にももう用はない。私の目的は果たした」

ラブヒーローは空を見上げる。

太陽は変わらずそこに浮かんでいた。

このマリnfオード頂上戦争の後、きつと時代は大きく変わる。

ゴールド・ロジャヤーが処刑された時と同じほどの、何か大きな物のうねりを感じるからだ。

……といつても、ラブヒーローには余り関係がない。

大海賊時代以前から彼のやっていたことはずっと同じ。誰かの愛を守るだけだ。

それ故に、彼の中の世界はどこかへ置き去りにされてしまったのだ。

天竜人殺しのラブヒーロー。

懸賞金32億2000万。

世界中の誰も、彼の思考を心の底から理解することはできなかつた。

その後。

白ひげが黒ひげ『マーシャル・D・ティーチ』によって殺害され、グラグラの実際の能力が奪われるという大判狂わせな展開が始まる。



だが、戦場に駆け付けた赤髪のシャンクスによって、黒ひげの攻撃と戦争は終結した。

戦場が終わった後の空気は、以前までの世界とは比べ物にならないほど濃くなっている。

——世はまさに大海賊時代。

海のうちから新進気鋭の海賊が産声を上げた時代。

その本番が、これより始まるのだった。

???は『ラブヒーロー』と命名される

新世界のどこかの海域で。

——ドンツ!!

「——おっ」

未来の海賊王『ゴール・D・ロジャー』が船長のオーロジャクソン号が大きく揺れた。

時折、彼らの船は大きな音と共に揺れる。

そしてこの揺れの原因は、いつも同じだ。

「おい！ 愛の坊主が来たぞ！」

「ハッハッハ！ バギー、シャンクス、雪辱戦だ!!」

甲板に船員全員が出ると、そこに立っているのは、頭に布を巻いて顔を隠した子供。

彼と初めて会った時からもう2年は経った。

それから度々、多いときは週に1、2回のペースでオーロジャクソン号を襲いに来ている。

「ヒエエエ！ か、勝てる訳ないツすよオ!!」

「この間来たのは2週間ちよい前か……！ ちょうどいい、サーベルを新調したんだ!!」

ビビるバギーと、好戦的な笑みでサーベルを抜くシャンクス。

「お前ら愛を乱す海賊を潰しに……いや、口上はもういい」

一番年齢の近い二人と子供がぶつかり合う。

だが結果はいつも同じだ。

「ひでぶッ!!」

まずバギーが一撃で叩きのめされ。

「ぐッ——」

シャンクスが3回ほど攻撃を受け止めるも、ガードを弾き飛ばさ

れ、船の端まで吹っ飛ばされる。

これがお決まりのパターン。

そして、他の船員に襲い掛かろうとしたところで、副船長のレイリーか船長のロジャーが飛び出してくるのもお決まりだ。

今日は――。

「はっはー!! よく来たな坊主!」

ドタドタと走ってきた立派な口ひげをこさえる壮年の男が、子供の顔面にグーパンチを決めた。

メリリツ……!と嫌な音が響き、子供が吹っ飛ばされる。

が、自身の手より遠くに吹っ飛ぶ前に、足を掴んで甲板に叩きつけた。

即座に馬乗りになり、子供の顔面に向けて拳を振り下ろし続ける。

「おらどうした! もうちよつと抵抗して見せんか!」

端から見れば普通に虐待だ。

だが彼らは海賊、一般常識を気にする訳がない。

それに子供は一応襲撃者だ。容赦をする必要はない。

「――エア・ブレイク 大気崩壊!!」

子供は、落ちてくる拳を首を捻ることで避け、ロジャーの胸元に手を押し当てた。

瞬間、彼の身体が物凄い勢いで空に跳ね飛ばされる。

「おいおい、前より威力が上がってるじゃねエか」

「――だアらッ!」

空気の壁で飛び上がってロジャーの懐に入り、思いきり殴り掛かる。

……が、簡単に避けられてしまった。

「よッ!!」

ロジャーが体を捻り、空中で後ろ回し蹴りを放つ。

彼のかかとは見事に子供の頬へ命中し、空気の壁で防ぐ暇もなく吹っ飛ばされた。

意識を失ったのか、白目を剥いて吹っ飛んでいった先は――

——ぼちやッ

海だった。

「お、やべ」

「船長オ——ッ!？」

海に沈んでいく子供。

悪魔の実際の能力者は海では泳げない。

「だッはッはッ! すまん!!」

「大丈夫かー!!」

豪快に笑いながら着地するロジャーと、上着を脱いで海に飛び込むシヤンクス。

これが、オーロジャクソン号で偶に起きる襲撃イベントの全容であった。

海から上がったばかりで、ビショビショのまま縄で縛られている子供。

今日は日差しが非常によく、服も髪もすぐに乾くだろう。

ロジャー海賊団は、なぜか宴を始めていた。

まあ海賊というのは何かと理由を付けて宴をする生き物だ。大方、自分が訪れるのを時報代わりに宴でもやっているのだろう。

と、そこで。

海に彼を叩き落した張本人であるゴールド・ロジャー船長が現れた。

「いやー、すまんすまん。つい海の方に弾き飛ばしちまった」  
「……………」

「ほれ、この肉やるから許してくれ」

「……………縄、外してくれ」

静かな声で子供がそう言うと、ロジャーは苦笑しながら縄を外し

た。

自由になった手足を伸ばしてパキパキと鳴らし、子供は顔に巻いている布を取る。

子供の顔は、左目の下から首にかけて赤黒く痛々しい傷の跡が残っていた。

数年前、『死王毒』<sup>デス・キング</sup>という毒によつて出来た傷がずっと治っていないのだという。

ぐるぐる……と、腹を鳴らす子供。

目を逸らした後、唇を噛みながら肉を受け取り、静かに噛みついた。

ロジャーは肉に噛みつく彼の背をパン！と叩いて、宴で騒ぐ仲間たちの方へ誘う。

「そんなんじや足りねエだろ」

「……………」

——ぐるぐるるる。

腹の虫は口よりも正直だった。

ロジャーにバシバシと背中をしばかれつつ、渋々子供は宴に向かった。

「そういえば……初めて会ってからもう2年も経つのに、名前すら知らねエな」

宴の最中、シャンクスが唐突に言い始めた。

それに便乗し、バギーも口を出す。

「年齢すらも知らねエ。おめー、今一体何歳なんだ？」

子供は肉を啜えながら、2人の方を向いた。

バギーとシャンクスは年相応と言った具合に身長が伸びている。だが、子供は一向に身長が変化しない。

問われた彼は、目を細めて答えた。

「年は……今は15だ。名前は覚えてない」

「15オ!? 年上かよ!」

「名前は覚えてない……へー、記憶喪失か」

驚いた様子のバギーとシャンクス。

年齢の方はどうだっていい。年齢相応に身長が伸びていない者もいるし、それ以上に伸びている者もいる。ただの個人差だ。

ただ、記憶喪失で名前を覚えていない。

こんな面白い話題を、ロジャー海賊団の他の船員が聞き逃すはずがなかった。

「名前を覚えてないだって? 中々面白そうな話をしてるじゃないか」

いの一番に乗ってきたのは、意外ではあるが、副船長のシルバース・レイリーだった。

それを皮切りに、他の船員たちが酒を片手に騒ぎ始めた。

「名前がねエってのは呼び辛いなア!」

「今ここで名前を決めちまおうぜ!!」

「よし、酒を一番飲めた奴が名前を決めんぞ!!」

とんとん拍子で謎の話が進んでいく。

その様子に子供は困惑した表情で辺りを見回していた。

「は? 何勝手に決めて……」

ドン!!

宴会場の中心にどでかいワインの樽が置かれた。

この船の全員の胃袋ぐらい余裕で満たすであろう大きさだ。

バギーがいの一番にジョッキを持ってワインを注ぎに行く。

彼の口にはあくどい笑みが浮かんでいた。

「ククク、いつも俺の事を吹き飛ばしやがって……。ここで勝って、名前を『バギー様の下僕』にしてやるぜ……」

「おい、待てよバギー！」

シャンクスもバギーに続き、ジョッキを持つ。

他の船員もガヤガヤと騒ぎながら、ワインをジョッキに注いだ。

「名前がないから、『ナナシ』でどうだ？」

「馬鹿、安直すぎんだろ。ここはいくら殴られても懲りねえ所から、『サンドバッグ』って名前をだな……」

「お前のは安直っていうか、ただの蔑称じゃねエか」

そんなこんなで飲み比べ勝負を始める海賊達<sup>バカ</sup>を冷めた目で見つめる、当の子供。

そもそも人と深い関わりを持つことがないから、名前も必要ない。というか、海賊に決められた名前を普通使うか？

下らない名前が来たら『却下』の一言で断ればいいだけだ。

そう考え、水を口に含みながら彼らを眺めていた。

「30杯目……ぐ、くそ……」

副船長のレイリーが顔を真っ赤にし、椅子の上にへたり込んだ。

甲板の上はぐでぐでに酔い潰れた者達で溢れ返っている。

シャンクスも赤い顔で呻きながら寝転がっていた。バギーは2杯目で海に吐いた。

さて、このバカな飲み比べ勝負に勝ったのは。

「俺の勝ちだア~~~~!! ……ヒック」

気持ちよさげに大声で叫ぶ、顔を真っ赤にしたロジャーだった。

流石は船長と言ったところか、顔色を七色に変化させながらもレイリー相手に勝ち切った。

「さくて、俺が名前を決めていいんだったな……ヒック。実は、もうとびつきりの名前を考えてるんだぜ」

「そうか」

酒の匂いをぶんぷんと漂わせながら、千鳥足で近づいてくるロジャー。

正直、良い名前だったら使わなくもない。名前がなくて困ったことは特にないが、あつて困る物ではないからだ。

ロジャーが子供の額を指さして、威厳のある声で言い放った。

「おめエの名前は……愛を守るためなら誰にでも喧嘩を売る面白エ性格から……愛のヒーロー、『ラブヒーロー』だ。」

——しん……と、周囲の空気が静まり返る。

静寂が数秒続いた後に、栓を切ったように、酔っぱらって寝っ転がっていた全員がギャハギャハと笑い始めた。

「そりゃいい！ 今日からお前の名前はラブヒーローだ！」

「おうラブヒーロー！ 似合ってるぜ!!」

「ハハハハハ！ 流石船長、これ以上ねえぐらいピッタリな名前だ！」

全員が大笑いする中、子供は一人、しかめっ面をしていた。

「……ヒーローって……。俺は、いつでも何でも間違わない正義のヒーロー様じゃないぞ……」

場の雰囲気が悪ノリで進んでいるのをヒシヒシと感じる。

……まあ、流石にこんな名前、俺が訂正しなくても誰も呼ばないだろう……。

もしかしたら、全員酔いまくって、この事なんか忘れてるかもしれないしな。

そう、油断したのが運の尽きだった。



次にオーロジヤクソン号を訪れた時。

「ラブヒーロー。良い酒が手に入ったんだ、飲んでみるか？」

「なあラブヒーロー。お前、肉をめちやくちや美味く焼けるって噂を聞いたんだがホントか？ ……船長に内緒で良い肉が手に入ってな

……」

「そうだ、ラブヒーロー。今時間はあるか？ ……覇気という物を教えてやろう」

船員、船員、果てには副船長のレイリーまで。

全員が俺の事を『ラブヒーロー』と呼んでいた。

……どうしてだよ……。

???は海賊王と語らい時代の変革を見届ける

『ラブヒーロー』という名を半ば強制的に受け取ってから、数年。子供から青年へ、恐ろしいほどの成長を遂げた彼。身長は2m20cmまで伸びたが、成長痛は収まらないので、きつとまだまだ伸びるだろう。

この数年の間、様々な事があった。

ロジャーが不治の病にかかるも、最後の航海を続けると宣言し。オーロジャクソン号に訪れた時、偶に襲撃してくるガープという化け物のような男や、ゼファーという昔家族を助けたことのある男と交戦したこともあった。

特にガープは、もう意味が分からなかった。

武装色の覇気と見聞色の覇気を使っても全く防ぐことができない。頭を守ったら腹に拳が、腹を守ったら頭に拳が、拳を受け止めたと思ったら地面に叩き込まれていた。何が何だか分からない。

そう考えると、ゼファーの方はまだ優しかったように思う。

海軍大将という海軍最高戦力の肩書を背負うだけあって、全く敵わないが、殴る拳にどこか優しさがあった。

結局、ボコボコにされることはガープと大差ないが。

……そんな2人を相手にできるロジャーとレイリーはおかしい。絶対。

とにかく、そんな化け物相手にスパルタな戦闘を続けていたら、いつの間にか覇気も完全に身についていた。

見聞色の覇気、武装色の覇気は扱えるが……残念ながら、俺は覇気色の覇気を持っていなかった。

こればかりは生まれつきの才能なので仕方ないのだと言う。

まあ、それから。

覇気を習得してからメキメキ強くなるシヤンクスと手合わせをしたり、うっかり斬られたバギーがバラバラの実の能力を開眼させたり、交戦した際に面白がったガープに顔の布を剥がれてボコボコにされたり……………。

色々あった。

けど、ロジャーの不治の病が治らない以上……………終わりは訪れるものだ。

オーロジャクソン号にて、相変わらずロジャーにボコボコにされ。

甲板にある樽の上に座り込み、頭に布を巻き直していると、ロジャーがすたすたと近づいて来た。

「……………おう、ラブヒーロー」

「ラブヒーロー……………。その名前もいつの間にか定着してしまったな……………。この海賊団の皆が皆そう呼ぶから、いつの間にか海兵にもラブヒーローで通るようになってしまった」

「ハツハツハ！ まあいいじゃねエか」

そう笑うと、なぜか突然、ふっと静かになるロジャー。

珍しい。いつもはここで俺に酒か食い物かを渡してくるのに。

こんな神妙な雰囲気を纏わせているロジャーを見るのは初めてだ。

「俺達は、もうすぐグランドラインの最後の島に着く」

「最後の島……………ロードポーンエグリフが4つ集まると行ける島だったか？ 誰も到達したことのない、真正銘前人未到の島……………」

「そうだ。そして、そこに辿り着くと、俺達は名実ともにグランドラインを制覇したと言える」

ロジャーは顔を上げた。

そして、俺の顔を見つめる。

「ラブヒーロー。最後の島……………俺達と一緒に来ねえか？」

「！」

目を見開き、驚く青年。

「お前とはもう長い付き合いだ。海賊と襲撃者なんて珍妙な関係だが

……面白れエ関係だった。

だから……最後の旅だけ、仲間として俺に付き合ってくれやしねえか」

話は終わった。

青年は目を閉じる。

せつかく顔に巻いた布を外し、ふうと息を一つ吐いてから、空を見上げた。

どこまでも透き通るような青い空だ、雲一つない。

そんな空を数秒見つめ……青年は口を開いた。

「断る」

「！ おう……そうか」

「別に嫌と言う訳じゃない。だが……最後の島への旅というのは、今まで苦楽を共にしてきた仲間だけで行くものだろう？ けど俺は仲間じゃない。どこまで行っても、ただの」

どこまで言うと、口から歯を覗かせ。

「――愛を乱す海賊みたいな奴らが嫌いでしょうがない、愛のヒーロー……『ラブヒーロー』だからな」

どこまで行っても、青年とロジャー海賊団の関係は襲撃者と被襲撃者。

どちらも我が強く相容れないからこそ、互いに関わり合ってきたともいえる。個性と個性が凹凸のようにぴったりハマり合ったとも言うべき関係だったのだ。

だから、今ここで仲間になってしまうと、俺達はお互いに個性が擦り消えた仲良しこよしの関係で終わってしまう。

そういう物じゃないんだ。

生易しい関係じゃなく、いつまでも殴り合っているような、そんな関係が一番合っているんだ。

俺の言葉を聞いたロジャーは、同じく口角を上げ。

「——ぶっ、ワッハッハッ！ 確かに、それもそうだ！ 悪かったな、変なこと言つて」

彼が立ち上がる。

俺は樽に座ったまま、ロジャーが背を向けて歩いていくのを見ていた。

「じゃあなラブヒーロー。また機会があれば、喧嘩しあおうぜ」

不治の病に侵されているとは思えないほど、しつかりとした足取り。

後ろ姿だけでも常人なら屈服してしまうような威圧を発するゴールド・ロジャー。

——もう、彼と喧嘩をする機会は二度と訪れなかった。

最後の島に『ラフテル』と名付けたゴールド・ロジャー。

グランドラインを制した男として、彼は『海賊王ゴールド・ロジャー』と呼ばれるようになる。

だが、その後すぐにロジャー海賊団が解散。

一年間、どこかで過ごしていた後……海軍が彼を捕らえたらしい。だが病を負っているとはいえ海軍がロジャーを捕まえられるとは思えない……多分、自首でもしたんだろう。

そして、東の海にあるローグタウンで、海賊王の公開処刑が行われることになった。

「……………」

その日は、酷く雨が降っていた。

ロジャーが処刑台の上に繋がれ、左右には処刑用の長い刀を持った男が2人立っている。

「ぜんちよう」……ロジャーぜん「ち」よう「……！」

「ぐっ……う」……！」

腕を組みながら処刑の様子を眺める、顔に布を巻いた青年。

その近くには、バギーとシャンクスがいた。バギーは雨の中でも分かるぐらい顔をぐしやぐしやにし、シャンクスは麦わら帽子で顔を隠しながら声を殺して泣いている。

突然、バギーが青年の足元に縫り付いてきた。

「な」、なあラブヒーロー……！ お前なら、処刑台から船長を助けられるだろ?! 助けてくれよ!!」

「……………」

「頼む」……！」

「——断る」

青年はきつぱり言い切った。

納得のいかない様子のバギーに、言葉を紡ぎ続ける。

「ロジャーの体は、もう不治の病でボロボロのはずだ。そんな男を今助けたとして何になる？ 苦しむ時間が増えるだけだ」

「——そんなの、何とかする方法があるはずだ！ 病気ぐらいロジャー船長なら……」

「もうやめろ、バギー……！」

シャンクスがバギーの体を羽交い締めし、青年の体から離す。

どちらも酷く泣いていた。

2人から視線を外す。

「おい!! 海賊王!!」

処刑台の前の広場。

その何処かから、そんな大声が上がった。

知っている声ではない。きっと、処刑を見に来ている誰かが叫んでいるんだろう。

「集めた宝は何処に隠したんだ!! グランドラインの中か!!」

あなたは手に入れたんだろ、あの伝説の大秘宝………ひとつなぎの大秘宝、『ワンピース』をよ……!!」

ざわわつと広場中がどよめく。

その声に反応したように、ロジャーが低く静かに笑い始める。

——そして、世界を渦巻く大きな力が、音を立ててうねりはじめた。

「俺の財宝か？欲しけりゃくれてやる」

「——探せ！」

「この世の全てをそこに置いて来た!!」

ロジャーの体を、処刑用の刀が貫く。

覇気で防いでもない、明らかな致命傷だ。

偉大な海賊王の死。

一瞬、広場がしんと静まり返り。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!!」

一秒も経たずに場の空気が一変、広場の人間が大きく雄たけびを上げ始めた。

異様な熱気だ。

時代の歯車が、決して戻れないところまで進んでしまったのを感じる。

ここからは、海賊王の宝を求めて海に出る海賊が一気に増えることだろう。

「……やってくれたな……」

海賊が増えると言うことは、すなわち、愛を乱す輩が増えると言うこと。

とんでもない置き土産を残して行ってくれたものだ。

海賊王の死体に踵を返し、広場の外へ歩き始める。

もう彼の姿を見ることはないだろう。

だが何も憂う気持ちはない。

「ラブヒーロー……」

彼から貰った名前を呟く。

「……やっぱ、この名前だせえよ……」

誰にも聞こえないボヤキを最後に、青年は姿を消した。



???は忘れていた過去を思い出す

海賊王ゴールド・ロジャーが死に、予想通り、海には海賊が跋扈し始めた。

海の治安が過去最悪とも言えるほどに悪くなり、必然、ラブヒーローも多くの愛を乱す海賊を倒すことになる。

ただ、大海賊時代の異様な熱気からか、海軍内にも悪事を働く輩が増えたように思う。

勿論そういった悪事をする奴もボコボコにし、海軍本部の前に縛り上げて放置したりした。

しかし、海兵をボコボコするなんて事を続けていれば、当然海軍からは睨まれるようになる。

そうしていつしか、ラブヒーローの首には懸賞金がかけられるようになった。

古ぼけた酒場の端に貼られる手配書には、頭を布で隠した3mの大男の写真がでかかと載っている。

『WANTED

LOVE・HERO

DEAD OR ALIVE

\$220,000,000』

年月が経つのは早いものだ。

世界中を駆け回って愛を乱す輩を捕まえ、海軍基地や本部に放置するなんて生活を送っていたら、いつの間にかロジャーが死んでから9年が経過していた。

掴んでいた海賊の胸倉を離し、近くの椅子に座り込む。

今は、とある島で略奪を行おうとしていた海賊を殴り倒していたところだ。

正直に言うと、最近の海賊は人数が多いだけで強さが全く伴ってい

ない。雑魚だ。

俺が強くなったのか、それとも大海賊時代で一気に海賊が増えたことにより、海賊の質が落ちたのか……恐らくどっちもだろう。

「……はあ」

椅子の軋む音が小さく響く。

身長が伸びるに比例するように、筋肉量も段々と増えていく。

今では身長3mの長身に、650キロほどの筋肉をこさえた化け物みたいな体格になってしまった。

それも逆三角形に整った美しいスタイルではなく、寸胴鍋みたいなボン・ボン・ボンの全身筋肉膨張スタイルだ。まあ、威圧感だけはあるが。

ミシツ、ビキバキツ！

椅子の足が嫌な音を立て、勢いよく壊れた。

ラブヒーローは板座に尻を乗せたまま、腰を地面に打ち付ける。

体重が増えた弊害か。最近そのあたりの椅子に気軽に腰を下ろすことが出来なくなった。

650キロの人間が座るのに耐えられる椅子でなければ、いつもこんな風に壊れる。今回は目測を見誤った。

「……………」

空を見上げる。

気づけば俺ももう、28歳とか29歳とか、大体そんな年齢だ。

別に今までの生き方を後悔しているという訳ではないが、せめて、自分が腰を据えて落ち着ける場所ぐらいは持つてもいい年齢じゃないだろうか。

「腰を据えて落ち着く……。家族、とか……か？」

静かに呟くが、その後すぐに「ないな……」と続けた。

『俺みたいな変人が家族を作れるはずないだろう』とか、そんな後ろ向きな話ではない。いや多分作れない気はするけども。

——なんだか、こう。

何とも言えない感覚だが……家族を持つとか、そう言った気分にはなれないのだ。

近くで、ザッパンと魚の跳ねる音がする。

その音を合図に、ラブヒーローはある事を疑問に思った。

「……そういえば、ずっと気にした事なかったが……。」

俺は何がきっかけで、『愛』を大切に思うようになったんだ？」

自身の根本とも言えるべき物。それが愛だ。

だが、それを何故大切にしようと思ったのかがいまい思い出せない。

例えば、お気に入りの服だとか、ペンだとか。

普通ならそれらをどこで買ったとか、どこが気に入ったのかとか、色々な理由があつて総合的に『大切にしよう』と思うはずだ。

だが俺は、そんな理由を全てすっ飛ばして『愛は大切な物』と認識していた。

一体いつからだ？

あの、ゴミの島に流れ着いた時か？

……いや。

あの島に流れ着き、船で目覚めた時点で、俺は愛は大切な物と認識していたはず。

「となると……。」

俺は記憶喪失でゴミ島に流れ着く以前の記憶がない。

すると必然的に、愛を大切なものと認識したのは、記憶がないゴミ島に辿り着く前、ということになる。

うんうんと唸るものの、ゴミ島に流れ着いた以前の記憶は思い出せない。

3分ほどそうしていたところで、ラブヒーローは諦めたように立ち上がった。

「……まあ、思い出せないのなら仕方がないか」

そう。

結局、愛が俺にとって大切な物という事に変わりはない。

というか、もう記憶を失った状態で十数年は生きているのだ。

今更記憶が戻らなくなつて大した問題はない。

そうして、海賊たちを縛り上げて海軍基地に叩き込む準備を始めた所で。

——クー！

「ん……」

鳴き声がした方向に目を向ける。

そこには、一匹のニユース・クーが船の手すりの上で新聞を羽に挟んで持っていた。

ニユース・クーとは、世界中に新聞を配達するカモメのことだ。

金を払うなら無法者の海賊相手にだって新聞を配達する勇敢なカモメ。

グランドライン内にもよく飛んでいて、見つけた船に留まり、新聞を売りつけるというアコギな商売をしている。

カモメが持っている新聞は……世界経済新聞。

この世界で最も買われているオーソドックスな新聞だ。

人目につきやすい分、よく世界政府によって情報操作されるのであまり当てにはならないが。

船も住処も持たない俺にはカモメが留まらないため、余り購読することはしないのだが……。

「まあ、せっかくだ。買ってみるか」

そこら辺に倒れている海賊の懐をまさぐって数枚の金貨を取り出し、カモメに渡す。

カモメは新聞を船の手すりにのせ、金貨を器用に首からさげたポーチに入れてから、飛び去って行った。

大海原に体を向けながら、手元の新聞を顔の近くに寄せる。

『聖地マリージョア襲撃』

見出しには、大きくそう書かれていた。  
瞬間、鋭い頭痛が走る。

「——ッ」

耐えられないほどではない。

脳の奥が膨らむような痛さだ。押さえつけていた何かが、今まさに  
暴れだそうとしているみたいに。

——新聞をめくる。

『犯人は魚人族！ 天竜人の奴隷が全て脱走』

「天竜人……」

聖地マリージョアに住む世界貴族のことだ。

この世で最高の権力を持っているらしい。

知識としては知っている。いけすかない奴らだということも知っ  
ている。

だが、実際に見たことはない。

頭痛が強まる。

……俺は、天竜人が奴隷を買っているのも知っていたはずだ。

なのに今まで助けようと考えたことがなかった。奴らの奴隷の扱  
いの酷さは有名で、それもよく知っていたはずなのに……。

「ハァー……ハァー……」

いつのまにか、自分の息が荒くなっていた。

続きを読み進めるべきか、否か。

そんなことを判断する前に、俺の目は新聞の文字をつらつらとなぞ  
るように進んでいた。

『襲撃犯は冒険家フィッシュヤー・タイガー。レッドラインの壁を素手  
で登り、マリージョアを——』

文章を途中まで読み進めた所で、その隣に掲載されている一枚の写真に目が移った。

襲撃後のマリージョアを撮影したものだ。

建物はあちこちが崩れ、焼け焦げている。フィッツシャー・タイガーという人物がどれだけ派手にやったのかが一目でうかがい知れた。

——その写真の左隅。

親指の腹で隠せてしまうほど小さく写っている、一人の男。

海兵に対して怒鳴っているのか、眉を吊り上げ、口を大きく開けている。

金と灰色の混じった髪の毛を後ろで垂直に纏め上げるといふ、おかしなヘアースタイル。

腹部が膨れた白い服に、華美な装飾を付けた、いかにも権力者と言った風な男。

天竜人だ。

——瞬間、失ったはずの記憶があふれ出した。

『——ラノア！ いい加減そんなしみつたれた顔をするのはやめなさい！』

女性の声だ。

一瞬であふれ出した記憶は、バケツの水をひっくり返したみたいに頭の中を駆け抜けていく。

『お前の父親は……賢明な男だよ。私みたいな女を捨てたんだから』

『私の仕事を手伝いたい？ 馬鹿なこと言うのはやめなさい!!』

短い黒髪をした妙齡の女性。

手が傷だらけで、よくたばこを啜えて遠いところを見ていて。俺は怒られてばかりでいた。

パツと、記憶の風景が切り替わる。

震える小さな手に握られているのは、その手にはあまりあるほど大きなナイフ。

ガチリと、こめかみに鉄の何かを押当てられる。

『——お前、その女を刺すえ』

……次の瞬間、真っ赤に染まる視界。

またもパツと場面が移り変わる。

今度は何か、木製のテーブルの前に立っていた。

テーブルの上にあるのは、水に濡れてぐしゃぐしゃのノート。

そしてその横にある、不思議な模様をした果実。ひとつの茎に二つ

の実が垂れ下がる巨大なさくらんぼだ。ただ、左側の実は小さく、右側の実はとても大きいという、とてもちぐはぐな形をしている。

小さな手が、果実を掴む。

『——……お母さん…………』

鼻の詰まった声で、誰かがそう呟いた。

——ドンツツ!!!

新聞ごと、拳を船の手すりに叩きつけた。

木製の手すりは当然壊れ、周囲には木片がパラパラと散らばる。

だがその程度では、今彼の中に渦巻く膨大な怒りは解消できなかったようだ。

「ツツ………!!」

歯ぎしりをするラブヒーロー。

こめかみには今にもはちきれそうなほどに血管が浮かんでいる。  
噛みしめた歯の隙間から、唸るように声をひねり出す。

「……『ゴルモンド聖』………!!」

今しがた思い出した、憎き天竜人の名前を口にする。

ラブヒーローは、せつかく倒した海賊たちを海軍基地に連行するこ  
とすら忘れてしまい。

空気の壁で、空の彼方へ飛んで行った。

——その日からちょうど、一か月後。

『天竜人が殺害された』というニュースが、世界中に響き渡った。



ラブヒーローは仕置きのためにルスカイナ島を訪れる

——マリンフォード頂上戦争後。

海軍本部に、麦わらのルフィと火拳のエース、冥王レイリーに海峡のジンベエが姿を現した。

本部の復旧作業でてんでこ舞いな海軍に、唐突に現れた彼らを止める力はなく、あっけなく4人の進行を許してしまう。

エースとルフィは、白ひげが死んでしまった場所まで行き、花を捧げ黙祷。

そして2人でマリンフォードにある鐘を16回鳴らした。

16点鐘と呼ばれるその行為は、年の終わりが来ることに感謝し、新しい年が来ることに感謝をする、いわゆる祈願のようなもの。

その一見海軍への挑発にも見える行為は、実はカモフラージュ。

本命は、ルフィの腕に書いた3Dにバツをし、2Yという文字を新たに書き足したタトウを新聞に載せることで、世界中に散らばった仲間たちに『2年後にシャボンディ諸島で会おう』というメツセージを送るためだった。

そのメツセージは無事に麦わらの一味全員へ伝わり、彼らは各自、新世界でも通じる実力を身につけるための修行を始めるのだった。

『俺は白ひげ海賊団に合流する。親父が死んだのは悔しいが……墓も建てて弔いもした。これ以上くよくよはしてられねエ』

エースは橙色の帽子を被り直す。

右手には、酒の入ったおちよこが握られている。

『これからは、親父を殺した黒ひげの奴らをぶっ潰し、白ひげの名を世界に轟かせ続けるために行動する……要は、俺たちも大秘宝ワンピースを取りに行くってこつた』

ルフィは目を見開いた。

彼の右手にもまた、酒が入ったおちよこが握られている。

『ワンピースを手に入れるのは俺だ！』

『ああ、お前ならそう言うと思ったよ……だから、ここから先の海では、俺たちは敵同士だ』

『……』

『そう悲しそうな顔するなって。その為に今からこれをするんだろっが』

エースとルフィは互いにおちよこを構えた。

そしておちよこの縁をぶつけ、カチン！と甲高い音を鳴らす。

『俺は海賊王になる為に!!』

『白ひげの名を世界に轟かせ続け、墓前にワンピースを捧げる為に!!』

2人が自身の夢を叫ぶ。

そして、互いの目を見やってから、ニヤリと笑い。

『そしてこの先何があっても、俺たちは……兄弟だ!!!』

一気に、おちよこの中の酒を飲んだ。

「ハッ」

よだれを垂らしながら寝ていたルファイが目を覚ました。辺りは白み始めている。

今の光景は、修行を始める前のこと……つまり、1年は前のことだ。

ルファイは2年の間に新世界で通用する実力を身につける為、レイリーと共にルスカイナ島へ訪れていた。

ルスカイナ島はジャングルのような環境をしていて、グランドライオン前半を生き抜いた彼でも敵わない程の巨大な動物が住んでいる場所だ。

そんな動物たちを倒す為には、新世界の海賊たちが当たり前のように使う……『覇気』という力を習得する必要があった。

その覇気を習得するためにルファイは必死こいて修行を続けている。

「ん……レイリー？」

焚き火の近くで、2人の人間の気配を感じる。

1人は今の自分の師であるレイリーだろう。だがもう1人は誰だ？

目を擦りながら立ち上がり、焚き火の方に近づく。

近づく度に漂う肉のいい匂いに腹の虫がぎゅるると鳴り響く。

その爆音の虫の音で、2人はルファイが起きたことに気づいたようだった。

「……久しぶりだな。モンキー・D・ルファイ」

レイリーの向かい側に座り、よく焼き上がったとろけそうなほど柔らかい肉を持つ男。

身長3m、全身にピチピチの白タイツスーツを纏った筋肉モリモリの不審者。

ラブヒーローだ。

「白いおっさん！」

同じくよく焼けた肉を口に持っていき、頬張るレイリー。

もぐもぐと口の中で咀嚼し、飲み込んでからルフィに言う。

「おはようルフィ君。まあ腹も空いているだろう、君も座って食べる  
といい。ラブヒーローの肉料理は絶品だからな」

「ホントか!？」

ルフィが大喜びで焚き火の前に座り込む。

この島で食べるものと言えば焼肉、焼魚の2つだ。しかも、どちら  
も殆ど焼くだけ。

別に飽きて嫌いになるという事はないが、今より美味しく食べられる  
ならそれに越した事はない。

ラブヒーローがじとつとレイリーを睨む。肉料理を作るのは彼で  
あって、レイリーが『食べるといい』だの何だの言うのは少しお門違  
いだからだ。

だが、数秒もすると、諦めたように息を吐いて立ち上がった。

「……まあいい。すぐに作る」

ラブヒーローかレイリーか、どちらかが仕留めてきたであろう獣の  
肉。

それを30cm程の大ききで切り取り、三本の切り込みを入れる。

指先に空気の壁を作り、それで肉全体を細かく強く叩きながら、も  
う片方の手を火に突っ込む。

火から取り出したのは、極小の熱の塊。

それを自身がブレンドした特製の香辛料と共に切り込みの隙間へ  
揉み込むように入れる。

パチン!と指を鳴らした瞬間、ジュツ!という音と共に肉が一瞬で  
焼き上がった。

その焼き上がった肉の表面に香ばしい匂いをしたラメ色の液体、恐  
らく何かのタレを均一に塗りたくる。

そしてもう一度指を鳴らし、ラメ色のタレが程よく焦げるぐらい焼  
けた時、ラブヒーローは肉を皿に乗せた。

皿をルフィに渡す。

「うまそー！ー！ー！！」

持ち上げただけで肉が傾き、肉汁とタレがとろりと垂れる。

キラキラと目を輝かせながら肉を口に運ぶルフィを横目に、ラブヒーローは話し始めた。

「それで、今日は2つ用があつてここに……………」

「おかわり!!」

「早すぎるわッ!!」

30cmの肉塊を使った料理となると常人には相当な量ではあるが、ルフィの胃袋を満たすには至らなかつたらしい。

ラブヒーローはため息を吐き、自身の前にあつた皿を渡した。

「まだ口をつけていない、これを食べ……………今度はゆつくりだぞ」

その言通り、ルフィはゆつくりと食べ始めた。

「……………それで、今日は2つ用があつてここに来た。1つは、モンキー・D・ルフィ、お前に渡した宝石を回収する事だ」

「ん、これのことか？」

「ああ。随分と前にした、助けるといふ約束は果たしただろう？ 赤犬相手に殺されそうだったところをな。もうそれを渡している必要はない」

ルフィがすぐに取り出した緑の宝石、それを受け取るラブヒーロー。

一度二度、指先でそれをこねくり回し、宝石を懐に入れる。

パチパチと焚き火の音が静かに響く中、太陽の光が徐々に辺りに差し始める。

その温かい日光には似つかわしくもない声で、ラブヒーローは言った。

「2つ目は……………モンキー・D・ルフィ。インペルダウンから囚人を脱獄させたお前に、仕置きをしに来た」

「ほう？」

立ち上がるラブヒーローに、顎髭をさすりながら面白そうな声を上げるレイリー。

「ちようどいい機会だ。ルフィ君、新世界で生きる者の覇気がどれだ

「けのものか体感してみるといい」  
「えッーッーッー」

ルファイが何か言うのを待つ前に、ラブヒーローが頭を掴み、遙か遠くまで放り投げた。

吹っ飛んでいく彼に余裕で追いつき、地面に叩き落とす。

地が割れ、クレーターができ、周辺の木々が根元から折れた。そのクレーターの中心にいるルファイが体を持ち上げる。

「いてて……クソ、武装色・硬化！」

「ふむ。武装色の覇気は使える、か」

「ゴムゴムの銃!!」

ルファイの右腕が黒く染まり、ラブヒーローに向かって思い切り拳を飛ばした。

覇気を習得し、島で1年間鍛えた拳は、グランドライン前半にいた頃よりも格段に強くなっている。

そんな拳を、ラブヒーローは。

白い武装色を纏った右手で、たやすく殴り返した。

「ッーッーッぎゃああああアアアアアア!!!」

ルファイの右拳が赤く腫れ上がり、そこを押しえながら絶叫する。

武装色の覇気の練度、つまり硬さに著しく差があつた時、弱い方の覇気は押し負ける。その結果、今のルファイの拳のように真っ赤に腫れ上がるのだ。

痛がる相手に情けをかけるほど慈悲深い男ではない。

ラブヒーローはルファイの顔面を蹴り飛ばし、背後の木に激突させる。しかし一本の木ではその勢いは止まらず、何本もの木をへし折りながら吹っ飛んでいった。

「さて……何分耐えるかな」

足元に空気の壁を作り、ラブヒーローはルファイを追いかけた。

遠方から激しくぶつかりあう音が何度も響く。

暫く経った後、一際大きな音が鳴り響いた瞬間、レイリーは顔を上げた。

「今のは決まったな」

彼の予想は正しかったらしい。

傷だらけで気絶したルフィの顔面を掴んでいるラブヒーローが空を飛び、レイリーの前に降り立つ。その体には一切の傷も汚れもない。

「……………なるほど、傷も付けられなかったか」

「いや、拳がかすりそうな場面は幾つもあった。ただアレは覇気の練度というより……………技の問題だな」

ルフィの体を落とし、空を見上げる。

そんなラブヒーローの様子を見て、レイリーは言う。

「何だ、もう行くのか？」

「……………レイリー。今の、この世の中の状況をどう思う？」

「何……………？」

突然おかしい事を言い出すラブヒーロー。

またいつもの突飛で意味不明な言動かと思っただが、どうも様子が違う。纏う雰囲気、覚悟が、いつものラブヒーローとは桁違いに重い。

レイリーは目を細め、厳な声を放つ。

「どういふことだ」

「…… ロジャーの死が作った大海賊時代。この時代は、愛を乱すものが多すぎる。そう思わないかと聞いている」  
「……」

「私はラブヒーロー、愛のヒーロー。だが……」  
そこで、言葉を切るラブヒーロー。

何を言いかけたのかは分からないが、少し辛そうに顔を背けた。  
「私も、実行に移す気はなかった。だが…… ただの気まぐれが、最後のピースを揃える要因になった」

「最後のピース……？」

レイリーの声に、ラブヒーローは顔を向けず堪える。

「…… エンドポイント、ダイナ岩…… そして、ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロス。」

「エンド、ポイント……!？」

エンドポイント。

それは半ば伝説と化している話である。

エンドポイントと呼ばれる3つの活火山を刺激することで、大量のマグマが噴き出し、新世界は滅ぶという、迷信めいた話だ。

「新世界の海を破壊する膨大なエンドポイントのエネルギー……しかし、それでは駄目だ。別の形で、もつと広範囲、この世界の海中に広げる必要がある」

「お前、一体何をやる気だ…… ラブヒーロー！」

レイリーがラブヒーローの手首を掴むが、それは呆気なく払われる。

「安心しろ、まだ時間はある。だがいずれ、海は人間の活動できる場所ではなくなる。」

それまでに終生の地を決めておくことだな、レイリー」

そう言つて、ラブヒーローは飛び去った。

彼のスピードには、老いたレイリーでは追いつけず、ただそれを見送る。

「…… 私には、もう止められない…… か。あの男は……」



ラブヒーローの思惑は、今は誰にも分からない。

ラブヒーローのいないところで

ラブヒーローはルファイが修行していた一年間、世界中に散らばったインペルダウンLEVEL6の囚人を捕まえ続けていた。

捕まえた囚人は50人以上、総額の懸賞金は数十億。

海軍本部の前に放置された囚人達は全て、全身が余すところなく殴られ全治数か月の傷を負っていたり、後遺症が残るほど酷い火傷を負っていたりと、惨憺たるものだった。

今までは『天竜人殺し』という仰々しい異名を持っていた不審者。

だが今は、LEVEL6の囚人が街を襲っていたところに現れ、圧倒的な実力で倒してしまふ白いタイツスーツの大男。

「あれは誰だ？」と誰かが口にする。「あの男はラブヒーロー」と答える。

人から人へラブヒーローの特徴的な姿と名は伝わっていき、彼の名は世界中へと轟いていく。

中には『天竜人殺し』という異名を聞き、ラブヒーローにお礼を言う者もいた。

曰く、「天竜人にいたずらに家族を殺された。仇を果たしてくれてありがとう」とのこと。

そのお礼を聞いたラブヒーローは。

どこことなく、苦しそうな息遣いをしていた。

「……—ツ！ 武装色・硬化！ ……あり？」

ルフィは目を覚ました瞬間飛び上がり、両腕を武装色で覆った。戦闘態勢で辺りを伺うも、先ほどまで戦っていたラブヒーローの姿がどこにも見当たらない。

それどころか、さつきまでは日が昇っていたはずなのに、今は完全に落ちてしまっている。

「おや、目覚めたか。……何してる？」  
鍋を持ったレイリーが近づいてくる。

ルフィは彼の方を向き、不思議そうな声で言った。

「白におっさんはどこだ？ 俺、戦ってたはずだけど」  
「何を言って……ああ、なるほど。ルフィ君、君は負けたのだよ。気絶させられ、今まで寝ていたのだ」

そう言われたルフィは、最後の記憶を額に手を当てて思い出す。

白く輝く右拳が眼前に迫り、その後は——駄目だ、思い出せそうにない。恐らくあの一撃で意識が刈り取られたのだ。

「まあ、とにかく飯だ。今日の修行はなしにしよう」

レイリーは座り込み、鍋に入っていた肉入りの煮汁を皿によそい、ルフィに渡す。

2人は火を挟んで向かい合うように座っている。

ルフィががつがつと煮汁にがつつくのと対照的に、レイリーは食があまり進んでいないようだった。

煮汁の中に入れたスプーンを口に近づけては、そのままスプーンを

口の中に入れず皿の中に戻す。

そんなことを何度も何度も繰り返すものだから、ルフィは気になつて問いかけた。

「レイリー、食べないのか？」

「ん？ ああいや……少し気になることがあつてね」

彼が考えていることは、ラブヒーローが言い残していった3つの単語だ。

『エンドポイント』、『ダイナ岩』、『ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロス』。

エンドポイントとは、あの伝説通り。

3つ破壊すれば新世界の海が崩壊するという地点のこと。一般には迷信だと言われているが、海軍の上層部や海賊の強者、耳聡い者ならそのエンドスポットが実在するものだと知っている。

ダイナ岩。

古代兵器に匹敵すると言われる、超爆発性の鉱物。確か海軍が一括して管理しているはずだ。どこにあるのかはレイリーも知らない。

ただこれの使い道は楽に予想できる。

恐らく、エンドポイントの活火山を刺激するために使用するのだろう。

しかし、最後の一つ。

『ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロス』とは何だ？ 一体何に使う？

エンドポイントとダイナ岩のどちらにも関連しない、唯一の不明点。

だがラブヒーローは『海は人間の活動できる場所ではなくなる』とも言っていた。

エンドポイントを破壊しても、せいぜい影響が及ぶのは新世界のみ。

それをわざわざ『海』という範囲の広い物に言い直した。

つまり、奴は……世界中の海を変える、恐ろしい何かをしようとしている。

一体その詳細がどのような物なのかは分からないが……。

「レイリー?」

「……ああ。すまない」

二度目の呼びかけ。

どっぷりと思考の海に浸かっていたようだ。

手に持った煮汁もすっかり冷めてしまっている。

冷えて味の落ちた煮汁を口に運ぶ最中、ふと。

「……ルフィ君。ラブヒーローの事を、どう思う?」

突然の問いかけ。

ルフィは腕を組み、少し悩んでから答えた。

「白のおっさんの事か? んー……変な奴だな。けど、良い奴だ」

「……フフツ」

そうだ。

確かに、あの男は変な奴だが……悪い奴じゃない。

それが少し、色々な事があって、おかしい方向に歪んでしまっただけだ。

「ルフィ君。ラブヒーローの宝石を持っていたが、一体どんな経緯で貰ったんだ?」

「あく、あの宝石は……俺もよくわかんねえんだけど……」

ルフィは語る。

フーシャ村を出たばかりの島の浜辺に、ラブヒーローが立っていたこと。

『人魚姫』なる愛の伝説を見るためそこに立っていたが、その伝説は島に住む村人たちの嘘だったこと。

嘘を本当にするため伝説を再現する最中、偶々襲ってきた海王類のおかげで、本当に好きだった奴同士が結ばれたこと。

その伝説を再現するという案を提案したことに対するお礼として宝石を貰ったこと。

「ぶっ、ブワツハツハツハ！」

ひとしきり聞き終わった後で、レイリーが思い切り笑い出した。

「ふふ……よくラブヒーローはキレイなかつたな。奴ならその演技が嘘だと……いや、そもそもその伝説が嘘だったことぐらい気づいただろうに」

「いや、元々伝説が嘘だったのに気付いてたかはわかんねえけど、演技の方はバツチリバレてた。それでキレイそうになった所に、海王類が襲ってきたんだ」

「なるほどな……」

本当におかしな奴だ。

ただ、ルフィは海賊と名乗ったのに、ラブヒーローは宝石を渡していた。

ラブヒーローは昔語っていた。

海賊と海軍のどちらも愛を乱す奴が多いので嫌いだが、そんな中にも愛を乱すどころか本気で守る奴が混じっているのも知っている……と。

つまり、ルフィはラブヒーローに『愛を守る奴』として認定されたのだ。

海賊王と同じことを言い、ラブヒーローに気に入られる男、か。

まるで……ロジャーの生き写しのようだな。

「ルフィ君」

「ん？」

「私から、君に頼み事がある」

レイリーが少し、頭を下げる。

一瞬困惑するルフィだが、レイリーが頭を下げるほどの用件だと、すぐに気と顔を引き締めた。

「ラブヒーローはこの先、何か途轍もないことをしでかそうとしている。一体それが何かは分からないが……私ではダメなんだ」

実力が足りず、ラブヒーローを止められないという事ではない。

古い世代で、認められていない私では……ラブヒーローを倒すことはできても、奴を『救う』ことはできない。

だが、今を生きる海賊で、且つ認められているルファイ君なら。  
天竜人を殺した日からおかしくなったラブヒーローを……救うこ  
とができるかもしれない。

ルファイが険しい顔つきで言葉を返す。

「……白いおっさんがやろうとしていることを、止めてほしいってこ  
とか?」

「いや、違う」

そこでレイリーは、ニヤリと笑い。

「この先の海で、ラブヒーローと戦うことがあったなら……」

——奴が敗北を認めるぐらい、完膚なきまでにぶっ飛ばして  
やってくれ」

予想とは少し違う頼み事。

だが、ルファイは好戦的な顔で。

「——ああ!」

と、力強く答えた。

満月の夜。

ボロボロに壊れた海軍本部に差す月光。

明かりのついていない海軍本部の部屋、その壁に大きく開いた穴。

そのすぐ傍にテーブルと椅子を置き、満月を眺めながらボリボリとせんべいを食う白髪の男。

男の名はモンキー・D・ガープ。海軍の英雄だ。

ガープはせんべいを食べながら静かに時を過ごしていたが、コツコツと廊下を歩いてくる音が聞こえた。

部屋の中に入り、ガープの向かい側に座る男。

「月を見ながら黄昏るような性格か、ガープ」

「ゼファア……お前もしぶといのう。アレだけの怪我を負ってもう動けるようになるとは」

ゼファアもガープの食べるせんべいに手を伸ばし、カリツと一口かじる。

塩気の効いたせんべいだ。暖かいお茶でもあれば申し分ないが、ここにはない。

二人が何枚かせんべいを食べた所で、ガープが口を開いた。

「もう、ラブヒーローに固執するのはやめたらどうじゃ。悪いが……もうお前の勝てるような相手ではない」

「……そうだな、俺も随分老いた。今の俺では百戦やつても勝てないだろう。だが……」

ゼファアは月を見る。

「家族を助けてくれた恩人が苦しんでいるんだ。それすら助けられなくて、海兵など名乗ってたまるか」

今の今まで、一度たりとも、ゼファアはラブヒーローへの恩を忘れたことはなかった。

何度も戦いを挑むのも、おかしくなったラブヒーローを何とか助け



ようとしていたからだった。

そんな彼の覚悟を見て、ガープはそれ以上この話題を続けるのをやめた。

代わりに、別の話題を話し始める。

「ラブヒーロー……いや、ラノア。全く素性の分からなかった男が、天竜人を殺すことで本名と過去が判明するとは……皮肉なもんじゃな」  
ラノア。

それは、ラブヒーローの本名だ。

とある小さな国で、女泥棒の子に生まれた少年。

当時ゴルモンド聖の護衛として仕えていた者が偶々覚えていて、そこからラブヒーローの過去が発覚した。

だが、判明してしまったその過去は……。

ゼファーが呟く。

「珍しい生い立ちだが……ないわけではない。天竜人という存在を世界が認める以上、起こりえることだ。だからこそ……口惜しくて仕方がない」

丸い月。

綺麗な満月の夜だ。

こんな綺麗な月が見えるのだ、翌日の空は快晴だろう。

悲劇が起こる時は曇りだったり、雨が降ったりなんて言うのは。

どうにも、醜く生きるガキには当てはまらないらしい。

ラノアの人生が大きく変わってしまったあの日も。

腹が立つくらいに、青く澄み渡る空が広がっていた。

ラノアはどこにでもいそうな平凡な子供だった

10人に1人くらいしか名前を知らないような、小さな国。

そんな国で、ちんけな女泥棒の子に生まれた少年。

名は『ラノア』。

満身に物も食べられず、常に体は痩せこけている。

「ラノア」

頭に優しく、母の手の平が乗る。

肩に当たらない程度に切られた黒髪に、少しくしゃくしゃのタバコ。それを挟む傷だらけの手。

「お前の父親は……賢明な男だよ。私みたいな女を捨てたんだから」

父の事は何も知らない。

ラノアが産まれる前に、母親の前から姿を消していた。

ではなぜ、今父親の話題を出したのかと言うと。

何かへまをしてしまったのだろう、銃で頭を撃ち抜かれた父親の死体が目の前に落ちていた。

その父親と抱き合う女性。こちらも頭を撃たれて死んでいる。

死してなお離れないと言わんばかりに力強く抱き合う2人を見て、母が少し悲しそうな顔をしていたのが、印象に残っていた。

俺がちょうど、7歳になって数日の事。

むかつ腹が立つぐらいに晴れていた日だった。

そんなに大した事でもない、本当に些細な事がきつかけだんだ。

母は病気で、しかもその時は、以前に比べ急速に悪化していた。

よく口元を押さえて咳き込むし、酷い時には血だつて吐く。

だから俺は、母の泥棒家業を少しでも手伝うと言ったんだ。

すると。

「私の仕事を手伝いたい？ 馬鹿なこと言うのはやめなさい!!」

母に頬をぶたれる。

後ろによろめき、頑丈な宝箱の上に倒れ込んだ。

その箱は、母が持っている中でも『特に大切な物』を入れておくための箱らしい。『らしい』というのは、実際には中身を見たことがないからだ。

重厚な南京錠が付いていて、その錠の鍵は常に母が持っている。

稀に開けているところを見るが、中身を見ようとするとバタンと閉じられる。そのため、中に何が入っているのかは全く検討がつかない。

「……ッ！ ふざけんな！」

宝箱をドン！と拳で叩き、勢いよく立ち上がる。

怒りのままに、母に向かって声を荒げてしまった。

「こつちは心配して言ってるんだぞ！ この宝箱の中身を見せないのだから、何でもかんでも俺に駄目だとかやめろとか言いやがって!!」

「それは……ッ……泥棒は自分の宝を他人に見せない。自分の宝が盗まれた時、何も文句は言えないから。泥棒を手伝わせないのだから同じ、成果を横取りされたら敵わないもの」

「……それ、本気で言ってるのかよ。俺が母さんの宝を盗むって……そんな事するわけないだろ!!」

本当に些細な喧嘩だ。

母は落ち着いていたものの、俺の方が今までの鬱憤が飛び出し始め、収まりがつかなくなり。

遂には家を飛び出してしまった。

「待ちなさいラノアー」

後ろから呼び止める母の声を無視し、必死に走る。

些細な喧嘩からの家出。7歳にしては少し早い、まあ、誰にでもあり得る事だ。

そのまま行く宛もないまま街の中を放浪する。

母は泥棒、だが病気のせいで動きは鈍り、元々貧乏だったのに最近  
は拍車を掛けて金がない。

食べる物も満足になくガリガリな体、虚げな瞳にあまり清潔でない  
格好をした少年に近づこうとする者などいない。

段々と、足取りが重くなっていく。

別に街の住民からの視線でプレッシャーを感じている訳じゃない。  
あれだけ頭に上っていた血も、数時間も経てば次第に冷めていく。

母にも悪いところはある！とは思うものの、自分の接し方にも悪い  
ところがあったのではないかと考え始めたのだ。

無我夢中で街を走り、ふらふら放浪している間に、街のあまり治安  
が良くない所に入ってきてしまう。

ヒューマンショップなんかがある地域だ。碌な地域じゃない。

母もこの辺りには余り踏み込まないと言う。

すぐに踵を返そうとした瞬間――。

――ガン！

「ッ!？」

背後から突然、硬い物で頭を思いきり殴られた。

たまらず地面に倒れ込み、鮮血がパパッと辺りに飛び散る。

「なんだお前。邪魔だえ」

頭だけを動かし、殴ってきた男の方を見る。

どこもかしこも傷だらけで四つん這いになっている男の上に座る、白い服を着た男。

鉄製の黒い棒を右手に持ち、その先には血が滴っている。

ラノアは目を見開き、かすれた声を出した。

「……て、天竜人……！」

天竜人。別名『世界貴族』。

この世界で一番の権力を持った者達の事だ。

天竜人は何をしても許されるし、俺達みたいな平民は何をされても文句は言えない。

まさに別次元の存在だ。

けど、そんなに数もないはずの天竜人が、なんでこんなところに……。

「ゴルモンド様……ヒューマンショップはもう少し先です。このような小汚いガキにかまけている時間が勿体ないかと……」

「んく……それもそうだえ」

『ゴルモンド』と呼ばれた天竜人の側に立つ、黒いスーツ服の男がそう言った。

天竜人の周りには、海兵の服を着た男が数人。恐らく護衛だろう。

中には勲章をいくつか付けた、位の高そうな者もいる。

それにしても、ヒューマンショップ……。

どうやら、あの悪趣味な奴隷販売店に用があるらしい。納得だ。

天竜人が海兵と黒服を連れて、倒れているラノアの横を歩いていく。

このまま地面に伏せていよう。

天竜人の存在は災害のような物、過ぎ去るのを待つのが一番だ。

ベタベタと、四つん這いの男が地面を這う音が段々遠ざかっていく。

傷口を手で押さえ、静かにその場を離れようとした瞬間。

「ん？ なんだえ、服に付いたこの血……汚い、汚いえく!! さっきのガキの血だえ!!」

悪魔みたいな天竜人の声が響いた。

「お前ら！ あのガキを捕まえるえ!!」

「くっ!!」

すぐに立ち上がって逃げようとするも、傍に仕えていた海兵に一瞬で取り押さえられた。

腕を後ろで固められ、無理やり天竜人の前に連れて行かされる。

「お前、下々民の分際でわちしの服に血を付けるなんて生意気だえ」

生意気と血は関係ないだろ……。

内心でそう悪態を吐きながら、嵐が過ぎ去るのを心の中で祈る。

奴隷から降りたゴルモンドが、先ほどの黒い棒を取り出した。

鉄製の非常に硬そうな棒だ。棘が付いてないだけまだマシ……とも言える。

それを思いきり振りかぶり、ラノアの頭を右から左へ思いきり打ち抜いた。

凄まじい衝撃が走り、頭から流れる血の量が更に増える。

ただ、今意識を失うと、たとえ天竜人に見逃されても失血で確実に死ぬ。

歯を噛みしめ、消えそうな意識を必死に手繰り寄せた。

「……生意気な下々民だえ!!」

渾身の一撃で意識を失わず、耐えようとするラノアに腹を立てたのか。

再び振りかぶられた鉄の棒が、腹にぶち当たる。

次は頭。腹。腕。

全身がくまなく殴打されていく。

10分も経つ頃には、全身が赤く腫れあがり、無数の傷だらけになっっていた。

傷の量に比例し、血も多く流れ出る。

ただ、足元に紅い水溜まりを作りながらも、ラノアは必死に意識を手放さないとしていた。

「ふく……スッキリしたえ。さて……」

ゴルモンドが血まみれの鉄棒を黒スーツの男に投げる。  
そして懐から一丁の拳銃を抜き出し、ラノアの頭に押し当てた。

「……………」  
抵抗しようにも、体が動かない。

背後で固められた腕は微塵も動かないし、そもそも全身傷だらけで体が動かせない。

せめて最後は痛みを感じないようにと、目を閉じた瞬間。

「——ラノア!!」

体が勢いよく揺れ、その数瞬後に響き渡る銃声。

目を開けると、目の前には汗だらけの母の顔。

困惑した様子の海兵の顔も微かに見える。

まさか、海兵の手から俺の体をかすめ取ったのか？ 泥棒の技？

「……………なんだえ？ その下々民の母親かえ？」

「恐らくは……………そうだと思います」

天竜人と黒スーツの会話が聞こえる。

そんな会話をよそに、母はラノアの体を強く抱きしめた。

その時ベトリと、手に生暖かい液体が触れた。手を見ると、紅い血液。

「か、母さん……………足に銃弾が……………!」

「大丈夫、大丈夫だから……………」

母の体を抱きしめる力が強まる。

「そうだ、いいこと思いついたえ〜! おい下々民のガキの方!」

ゴルモンドがポンと手を叩き、懐から取り出した何かを投げつけて来た。

それはすぐ横の地面にゆっくりと落ちる。

刀身がむき出しのナイフだった。

一流の職人によって磨き上げられているのか、赤く腫れ上がっているラノアの顔が反射して映っている。

ゴルモンドは殺意が湧くほどに憎たらしい笑顔で。

「——お前、その女を刺すえ」  
そう言った。

……は？

『その女』って……まさか、母さんの事か？

「お前がその女を刺せば、命は助けてやるえ。だけど、刺さなければ……」

ゴルモンドがラノアに近づき、銃を頭に押し当てる。撃鉄も起こした。本気で撃つ気だ。

つまり……俺が母を刺せば見逃すし、俺が刺さなければ俺を殺す……そういうことだ。

「……ラノア」

母が俺の体を離す。

そばに落ちたナイフを握り、切っ先を母の方に向けて、両手で持つ。

「……………」

死にたくない。生きたい。

助かるための、希望の一筋も見えた。

けど……母さんを刺すなんて。そんなことできるわけないだろ。

ただでさえ病気で、病院にかかる金もないんだ。ナイフで刺せば確実に死ぬ。

息が乱れる。

手も震える。

多分、涙も流れてる。情けないことこの上ない姿だ。

ゴルモンドが銃のトリガーに指をかけ、力を入れようとする。

それを見た母が、ゆったりとした声色で話し始めた。

「……ラノア。私は泥棒だから。今朝言ったこと覚えてる？」

「え？」

「今まで、ごめんね」

病人で足を怪我しているとは思えないほど素早い動きで。

母は俺に抱き着いた。



ナイフが腹に刺さることも厭わず。

本当に、むかつ腹が立つぐらいに晴れていた日だった。

こういう出来事が起きる時っていうのは、大抵。

曇りだとか雨だとか、暗い天気になると相場が決まっているのだが。

こんなにも空が晴れているなんて。

世界中からお前たちの事なんかどうでもいいって、そんな風に言われている気分だった。

「……………え？」

空が青く澄み渡っている中、対象的に、目の前は紅く染まっていた。母の体が背後に倒れていく。

彼女の腹部には深く、根元まで刺さったナイフが一本。

素人でも一目で致命傷と分かるほどに、深く刺さっていた。

カンカンに照り注ぐ太陽の光は、まるで目の前の男の気持ちを表しているようだ。

「面白いえ、面白いえ〜！」

パンパンと手を叩き楽しそうに笑うゴルモンド。

黒スーツの男が、恭しい言葉遣いで天竜人に言った。

「ゴルモンド様、そろそろお時間が……………」

「ん？ ああ、もうそんな時間かえ」

ひとしきり笑った後、くるりと踵を返す、ゴルモンド。

俺を掴んでいた海兵たちも彼について行こうとする中、血まみれの手で、海兵のズボンを掴む。

「ちよ、ちよつと待ってくれよ。このままだと母さんが……………母さんが死んじゃう。あんた海兵なんだから……………た、助けてくれよ！」

「……………」

「おね……………お願いします。助けて……………助けて下さい！お願いします、

「お願いします……!!」

額を地面に擦り付ける。

ただ、海兵は何も言わずに足を払い、そのまま歩き去って行った。

「あ……」

何かも奪い去っていった男達が、段々遠くなっていく。

米粒のように小さくなって、全く見えなくなる。

「そんな、嘘だろ。海兵って……こういう時、助けてくれるんじゃないのかよ」

地面に倒れた母の体は熱を持っている。

ただ、目の前で手を振ってみても反応がない。

……もう、死んでいた。

「……死んでない。死んでないよ。母さんがそんな簡単にくたばるもんか……」

母の体をおぶり、家に向かって歩き始める。

7歳の体には余りに重すぎる彼女の体。

傷だらけの体を引きずりながらも、母の体を、家まで運ぶ。

家の、母が元々寝ていたベッドに彼女を寝かした。

「!」

ふと、母の懐で何か光っているのに気づいた。

それは、母の宝物を入れている宝箱の鍵。

鍵を手に取り、宝箱を開ける。

重厚な見た目をした宝箱の中には。

写真が数枚、紙束を雑に纏めた作ったノート、そしてスイカぐらいの大きさの箱。

その3つが入っていた。

「この写真は……」

写真を手取る。

写っていたのは、昔見た父、今より少し若い母、その母の手に抱かれている赤ん坊。

他の写真も似たような物ばかり。三人で写っている写真だらけだ。「母さんの隠してた宝物って……」

紙束のノートと箱を取り出し、テーブルの上に乗せる。

箱を開けると、中には妙な模様をした巨大さくらんぼが入っていた。片方の実は小さく、片方の実は大きいと、形も少し妙である。

次にノートを開く。

どうやら……母の書いた日記の様だ。

ペラペラとページをめくっていく。

『○月×日

最近、病気の悪化が酷い。

あと5年。いや、3年も生きられるか怪しいぐらいだ。』

『○月△日

ラノアの体が細い。

明らかに食事が足りていないんだ。育ち盛りなのに』

『×月○日

とんでもない物が手に入った。

ギチギチの実という名前の悪魔の実……。酒場にいた海賊の懐から盗んだ箱に、まさかこんなお宝が入っているなんて。

食べれば不思議な能力が入るといふ噂もあるが、もっと重要なのは、一億ベリールはくだらない価値があるということだ。

これだけのお宝、下手に取引しようとするとなんか殺されて奪われるなんて可能性もある。

慎重に、売れそうな場所を探さないと。』

そこから、しばらく日付が飛んで。

最後のページに、昨日の日記がぼつんと書かれていた。

『△月○日

ついに悪魔の実を売れそうな場所が見つかった！

一億ベリール……物凄い大金だ。

これだけあれば、ラノアはこの先、そう困らずに生きていけるはず。

父親が別の女と添い遂げるような、不甲斐ない泥棒の母の元で過ごさせてごめんなさい。

いつも細かい事で、怒ってばかりでごめんなさい。

満足にご飯も食べさせてあげられなくて、ごめんなさい。

きつと、ラノアは私の事が嫌いだと思う。

でもそれでいい。

ラノアは賢いから、私が病気で死んだ後にこの宝箱を開けるだろう。

その時、悪魔の実を売った金が入った宝箱を見て「ほらやっぱり。ケチな母はこんなにお金を貯め込んでいた」と、根こそぎ回収して、上手く使うだろう。

……ラノアは優しいから。

嫌いな相手の金でもないと、きつと、盗らないでしよう？

泥棒には心底向いていないぐらい優しいから……。

この日記もそろそろ処分する。

万が一ラノアに見られたらいけないから。

私ももう、いつ死ぬか分からないし。

……処分する日記だし、最後に少し、書いておこうかな。

ラノア。

お母さんは、心の底からあなたの事を愛しているから。

ずっと、元気で暮らしてね。』

「……………」

紙がぐしゃぐしゃに濡れている。

目頭が焼けるように熱い。頬を暖かい液体が伝っている。

「……俺が優しいって、そんな……。最後に、喧嘩別れした俺が、優しい訳ないだろ……」

この日記を書いた本人はもう、ベッドの上で、二度と動かない骸に

なっている。

悪魔の実を売った大金なんていらぬ。

ただ、母さんにもう一度、立ち上がって喋ってほしい。

謝らせてほしい。泣きわめいて、縋り付いて謝るから。

俺も何か金を稼ぐ方法を見つけるから、2人で金を貯めて、母さんの病気を治そう。

そしたら……美味しい物を食べたり、色んな所に旅行に行こう。

「…………お母さん……………」

鼻の詰まった声で、そう呟いた。

箱の中に入った、悪魔の実を掴む。

日記の中に『食べれば不思議な能力が手に入る』と書いていた。

もしかしたら、母さんが生き返る能力が手に入るかもしれない。

何のためらいもなく、口の中に入れ、咀嚼する。

死ぬほどまずい。

それでも咀嚼を続け、ゴクンと飲み込んだ。

「…………あ」

飲み込んでみて、分かった。

詳細なことは分からないが……心の何処かで感じた。確信してしまった。

『今手に入れた能力は、人を生き返らせられる能力ではない』

顔を両手で覆う。

「馬鹿だな……俺。大金に換えられる実を食べて、その上、母さんも助けられないなんて……」

呆れるほどに馬鹿だ。

どうしようもない。

こんな馬鹿に、この先生きる価値があるのか？

自分を責める言葉ばかり浮かんでいく。

「母さん。俺の事、本当に愛してくれていたの？」

ベッドの上に横たわる母の骸に近づき、そっと持ち上げる。

家の外に出て、すぐそばにある、山の中へと入っていく。

しばらく歩き、このクソみたいな街を一望できる見晴らしのいい丘に着く。

ここは他に人が訪れない、いわゆる秘密基地のような場所だ。

母の体を傍に降ろし、地面に手を当てる。

「圧縮」

まるでスプーンで綺麗に削り取ったように、一瞬で深さ1mほどのクレーターが出来上がった。

「馬鹿な俺を愛してくれるのなんて、きつと、母さんだけだよ。この先もずっと……」

クレーターの中に母を降ろし、圧縮した土を解放。

優しく、母の上に土をかけていく。

土を完全にかけて終わったところで、その場にあぐらをかいて座り込んだ。

「俺もそっちにすぐ行くから。いっぱい……謝らせてよ。話も……」

手に持つのは、母を刺し殺したナイフ。

両手でしっかりと持ち、首筋に当てる。

——瞬間。突風が吹いた。

傷つき力のあまり入らない体が後ろに倒れ込むほどの勢いだった。

砂が目に入り、刃物から手を離し、両目をこする。

目を開いた時、一目散に視界に飛び込んできたのは。

青く澄み渡った空と、白く輝く太陽だった。

「……………」

世界のどこに行ったって、この空は続いている。

太陽はいつもこちらを見下ろしている。

さっきの突風は。もしかして、母が止めてくれたんだろうか。

……いや、ただの偶然だろう。

ただ……もう一度、ナイフを握る気は、なくなっていた。

太陽を見上げながら、ゆっくりと立ち上がる。

「死のうとしてごめん、母さん。」

誰も俺を愛してくれないなら……俺は、誰かの愛を守るよ。

もう二度と、俺みたいに、愛してくれる人がいなくなるような世界を作らないために……。

優しいって言ってくれた母さんを、失望させないために。

誰にとっても優しい……愛を守るラノアとして生きていくよ。

だから、このどこまでも続く空を通して見ていてほしい」

空も母の墓も、何も答えない。

けど、それでよかった。

宣言して……この先も生きていこうとすることが大事なのだ。

そうして、いつか向こうに行った時。

母に、立派に生き抜いたと誇れるようなラノアになっていよう。

「じゃあ……母さん。バイバイ」

踵を返し、山を下る。

天竜人を乗せて来たであろう船が泊まる港。

その目につきにくいところにある、ずっと誰も使っていない木製の

小舟に乗り込んだ。

この島にもう滞在する気はない。

世界の何処かで困っている誰かを助けに行く。

……本音は、この島に居続けるのが辛いからだ。

船に乗り、沖に漕ぎ出してから、壁にもたれ込むように座る。

そして、声を殺して静かに泣き始めた。

いくら気丈に振るまっっているといえど……まだ世の中のことを何も知らず、十分な成長もできていない7歳児に過ぎない。

——強い精神的ショックにより、ラノアは自身の名前と記憶を失ってしまう。

そのまま船で海の上を漂い、いつしか彼は嵐に見舞われる。

今、どの海のどの辺りにいるのかもわからず、数日が経った頃――。  
殆どの記憶を失い、『愛を守る』という強い思いだけが頭に残った少年が、『世界のゴミ捨て場』と呼ばれるゴミだらけの島に漂着したのであった。

忌まわしい記憶。

それと同時に、大切な記憶だ。

己の不甲斐なさを恥じると共に、母を殺した男……天竜人の顔が脳裏に浮かんでくる。

「ゴルモンド……」

ラブヒーローはそう呟き、上を見上げる。

彼の前には赤い土の大陸の、頂上が雲に隠れて見えないほどに高い崖があった。

この崖の上に、天竜人が住む場所。

マリージョアがある。

ラブヒーロー……ラノアはぐぐつと拳を握り締め、マリージョアに向かつて飛んで行った。



ラノアはマリージョアに訪れ憎き男の場所に向かう

ゴルモンド聖。

天竜人の中でも特にヒューマンショップ巡りを好み、シャボンディ諸島のみならず、世界中の奴隷販売店を回っているのだという。

そのため、他の天竜人達よりもマリージョアにいる期間は少ない。

例のフィツシャー・タイガーの襲撃による奴隷解放により、彼の奴隷も根こそぎ逃げ出してしまった。

彼は再び奴隷を集めるため、世界中のヒューマンショップを巡る。

そして、マリージョアに帰ってきたのが、フィツシャー・タイガー襲撃から一か月と数日が経った時の事であった。

---

レッドラインの頂上、聖地マリージョア。

フィツシャー・タイガーが暴れ回ったことによつて、かなりの損害を受けたはずだが……。

流石世界最高の権力を持つ者達が住む地ということか、わずか一カ

月程度でマリージュアは元の美しい景観を完璧に取り戻していた。マリージュアを警備する、全身を覆う鎧に長物の槍を持った兵士。それらが4人集まり、ピッタリと歩幅を揃えて歩いている。

——ドン！

「？」

何処かから、何かが勢いよく破裂するような音が響いた。

先のフィツシャータイガー襲撃の件からか、兵士たちは一瞬で臨戦態勢を取り、辺りに警戒を向ける。

——ドン！

再び響く破裂音。

やがてその音が聞こえる間隔は3秒、2秒、1秒と短くなっていき――。

ズドン！と、兵士たちの前に巨大な何かが勢いよく着地した。

着地した何かは、ゆっくりと体を起こし、周囲に巻き上がった砂埃を腕の一振りですくう。

顔を隠すように頭に布を巻いた、身長3mの巨大な男。

ラブヒーローだ。

「……………ここが、マリージュア」

焦る兵士達をよそに、ラブヒーローは辺りの景色を眺める。

まさに絶景。

自然あふれる木々と厳かな雰囲気のある建造物は、太陽の光に反射して神秘的な印象を抱かせる。

天国という物はきつとこういう場所なんだろう。そう思ってしまったうほどだ。

「——っ、襲撃だア〜ッ!!」

兵士の一人が、懐から取り出した小型の電伝虫にそう吠えた。

マリージョア内は一気に騒々しくなり始め、木々に留まっていた小鳥たちは一斉に飛び立ち、揺れる木々は葉っぱを散らす。

だがラブヒーローは一步も動こうとせず、飛び立つ小鳥たちを目と共に顔を動かしなら眺めていた。

「こんな天国のような場所に住んでいて……どうして、あんな風になるのだろうか」

「何を意味不明なッ!」

兵士の一人が槍を構え、ラブヒーローの心臓めがけて突き出した。

ただの警備兵とはいえども、マリージョアを守る一人だ。実力は決して低くはない。

しかし、マリージョアをひたすら歩き続けるだけの兵士と、世界中を巡り強者も弱者も関係なく殴り続ける男では、実力差がありすぎた。

「ッ!」

覇気の籠っていない指一本で槍を受け止められる兵士。

槍の柄を掴まれ、そのまま空高くに放り投げられた。

高さ10m辺りから、鎧の重量ごと重力に従って落下し地面に衝突する。

びくびくと痙攣している姿から、行動不能のダメージを負ったのが一目でわかった。

「こういう時、霸王色の覇気を使えるのが羨ましいな。……相手を余計に傷つけなくて済む」

ラブヒーローは自身の右手を見ながら、そう呟いた。

『相手を余計に傷つけなくて済む』。この言葉は相手の怪我を心配する余裕があるほど弱いと煽っているようなものだ。

兵士たちは激昂してラブヒーローに襲い掛かるが……3秒後に、同じように痙攣する者が増えただけだった。

マリージョア内を歩く。

ここは、頭がくらくらしそうなほどに日差しが強い。

わらわらと蟻のようにあふれ出してくる雑兵達を片手で蹴散らしながら、兵から無理やり聞き出したゴルモンドの住む邸宅へと向かう。

5分は歩いただろうか。

ゴルモンドの邸宅に到着したが、その邸宅前の広場に妙な格好をした2人組が立っていた。

不思議な模様と形をした仮面。

裾が膝下まである長く白いローブ。

天竜人直属の諜報機関・C P 0だ。サイファーホール イージスゼロ

別名『世界最強の諜報機関』とも呼ばれる、C P 最上級の組織。

恐らく、ラブヒーローの進む方角から、目的がゴルモンド聖の家であると推測して待ち構えていたのだろう。

C P 0の片方の男が、低い声で話し始めた。

「懸賞金額2億2000万ベリ……深き愛のラブヒーローだな」

「……深き愛？ いつの間にそんな異名が」

「そんなことはどうでもいい。問題は……ここは、懸賞金額が2億程度の犯罪者が来ていい場所ではないということだ！」

言い終わった瞬間、男が剃でラブヒーローに詰め寄った。

常人なら一切視界に映らぬほどの剃。

しかしラブヒーローは余裕を持ってそれを避け、カウンターの一撃を放った。

覇気を纏った拳がC P 0の腹に深々と突き刺さる。

嗚咽を漏らしうずくまりかけた男の顔面を、ラブヒーローは覇気の纏った足で蹴り飛ばした。

立ったままだったもう一人のC P 0が困惑の声を上げる。

「!! まさか、2億程度の賞金首に攻撃を喰らうなど……!!」

蹴り飛ばされたC P 0もすぐに立ち上がる。流星は世界最強の諜報機関の一員だ。

ラブヒーローは前方にいるそんな2人を見つめつつ、右手をグツと

握る。

彼固有の白い武装色の覇気が右手を覆っていた。

左手も同じ風に白い覇気で覆われていく。

「あまり時間をかけても面倒だからな。CPO……最初から本気で行かせてもらう」

「ッ……」

CPOの2人も黒い武装色で体を覆う。

極限まで体を鍛えた者が習得できる技・六式を更に限界まで鍛え上げた2人。

いくら初撃を貰ったとは言えど、まさかこんな、大して有名でもない賞金首に負けるはずがない。

お互い目にも止まらぬ剃で、ラブヒーローに連携攻撃を仕掛け始めた。

——3分も経つ頃には。

1人は全身丸焦げで、ヒューヒューと苦しそうな息を鳴らし。

もう1人は、見るも無残なほどに全身を殴られ、瓦礫の山の中に生き埋めになっていた。

ラブヒーローはそんな2人に目をやることもなく。

憎き仇……ゴルモンド聖の住む邸宅の玄関扉を開いた。

心臓が爆弾でも爆発してるみたいにいるさい。

白を基調とした美しいバロック調の建物の中を、ゆっくりと歩く。

紅いカーペットの上を足音もなく進んでいると……扉がある。

その扉を開くと、大きな長机と無数の椅子が置かれた部屋に出た。

きっと大人数の食事で使うような部屋だろう。

純白のテーブルクロスが敷かれた美しい机の先に……醜く慌てふためく男が一人、他の部屋に続く扉の前でへたり込んでいた。

「——っ」

忘れもしない、あの顔。

母の命を奪う原因になったあの顔。

「誰か、誰か来るんだえー！ あの下々民をさっさと殺すんだえー！！」

天竜人・ゴルモンド聖が、そこに居た。

愛こそが最高の宝と信じるラブヒーローはどこか壊れてる

天竜人の館。

CP0含む護衛はみな気絶している。

レッドラインの下にある海軍本部から全速力で海兵が向かってきたとしても、あと10分はかかるだろう。

今ここには、天竜人と、天竜人に母親を殺された男ラブヒーローしかいない。

「お前、私を覚えているか」

顔の布を外し、ゴルモンドに素顔を見せるラブヒーロー……もとい、ラノア。

左目の下から首に掛けて赤黒い傷跡が残った、厳つい顔つきの男。過酷な人生を生きて来たからか、眉間の間と目の下にしわが出来ている。

ただ、幼少期の優し気な顔つきはほのかに残っていた。

彼の過去の顔を知っているならば、ラブヒーローがラノアであると記憶で結びつけることができるだろう。

「お前の事なんか知る訳ないえ!!」

ゴルモンドが銃を抜き、ラノアに発砲した。

空気の壁で弾を防ぐ。拳銃如きでは貫けない。

銃を握る右手ごと蹴り飛ばし、ゴルモンドの首を掴む。

「そうか……。……。そうか……。！」

首を握る手に力が籠る。

ついつい首の骨をへし折りそうになるのを必死に我慢するため、ゴルモンドの首を離した。

「私の母を殺しておいて覚えていない、か。」

いや……。天竜人というのはそういうものだったな!」

「ぐぼっ!!、こ、このわちきに……。げぼえっ!!」

「ゴルモンドの顔を蹴り飛ばした。」

そして再度、何か言おうとした顔を蹴り飛ばす。

ろくに体を鍛えることもせず、歩くことすら怠ける天竜人の顔は酷くもろい。

口内は切れ、歯は折れ、たぱぱつと彼の口から血が噴き出す。

「殺しはしないや……」

ラノアは静かにそう言った。

『殺さない』

これは、ずいぶん昔にガス人間のジョツキーを殺した時から密かに決めていたことだ。

どれだけ反吐の出るような屑であろうと。

愛を守る正義を名目に殺し続けていけば、自分もいずれ取り返しがつかない何かになるのが薄々分かっていた。

故に不殺。

その自分ルールは、殺しても殺したりないほどに憎い親の仇相手でも同様であった。

しかし、殺しこそしないが、復讐を果たす方法はいくらでもある。

「だがな。両腕か両足、どちらかが消し飛ぶくらいは覚悟してもらおう」

「や、やめろえ……!!」

足に白い武装色の覇気を纏い、ゴルモンドの腕に狙いを付けた瞬間。

先ほど彼が縋りついていた部屋の奥の扉が、ドン！と大きな音を立てて開いた。

「父上え~~~~~!!」

ドタドタとのろい動きで走り寄り、ゴルモンドに縋りつく金髪の子



供。

「お前、父上に何をしてるんだえ!!」

その子供は銃を抜き、性懲りもなくラノアに発砲した。

ゴルモンドの持つ銃より小ぶりなそれは空気の壁を貫くことができな。ラノアの体に当たる前に何処かへ弾かれる。

「子供……?」

先ほど開いた扉の方を見る。

そこには、妙齢の天竜人の恰好をした茶髪の女性が立っていた。

焦った顔で銃を抜きつつ、こちらに発砲することはせず、同じくゴルモンドに縋りつく。

彼女は銃をこちらに向けたまま、大声で叫んだ。

「誰か、誰かおらぬのかえ! 奴隷でも誰でもよい!!」

誰も来るわけがない。

奴隷はとうの昔に逃げていることだろう。この騒ぎに乗じて首輪の鍵を手に入れるぐらいはするはずだ。

言うまでもなく、護衛もとうの前に全員沈めた。

今、この空間には俺達しかない。

ラノアはじつと、目の前の三人を見ていた。

「家族……」

歪んだ天竜人の『家族』。

……それは、ラブヒーローが守るべき『愛』に他ならなかった。

——しかし。

いくら愛を持った家族といえど……そこにいる、ゴルモンドだけは許せない。

そいつは他人の愛を乱してしようがない存在だ。

その上、愛を乱すことに何の躊躇いも持たない。

そんな下層に何もせず帰るでは、誰かの愛を守る存在など必要ない。

足に覇気を纏ったまま、子供と母らしき女性をどかそうとした瞬間

のっそりとした動きでゴルモンドが体を起こした。  
女性と、子供を抱きかかえた後、背後に移動させる。  
そして両手をバツと広げ、ラノアに大声で言い放った。

「わ、わちきの家族に手は……出させんえく!!」

「……は？」

恐ろしい怒気の籠った声が漏れる。

今、こいつが言い放った言葉の意味が上手く理解できなかつた。

天竜人はどうしようもない屑で、世界中から嫌われる存在というのが共通認識。

俺の認識もそうだ。

血筋が続いている以上、家族というのが存在するのも理解できる。  
ただ。

人を人と思わず『愛』を壊せるような輩が、自分の家族を守る『愛』  
を見せつけて来た事を、ラノアの脳が理解することを拒んだのだっ  
た。

「——ふざけるな!!」

両手を広げるゴルモンドの首を力強く掴みあげ、背後にある机の上  
に叩きつけた。

ラノアの腕力は机を粉碎し、床にクレーターを作る。

無論その手の中にいるゴルモンドは、意識を失うほどの衝撃と共に  
床に叩き込まれた。

両手でゴルモンドの胸倉をつかみ、高く持ち上げるラノア。

顔を近づけ、こめかみにはち切れんほどに血管を浮かばせつつ吠え  
る。

「お前……お前がその言葉を言うのだけは、絶対に許さない!!」

家族を守る愛をお前が持つのだけは……持つのだけは  
……ツツ!!」

いつそのこと、ジョッキーぐらいに振り切った悪ならよかった。それなら俺も、何のためらいもなく行動できただろう。なのに。

「……………どうして……………」

「どうしてッ、自分の家族を思う愛を……………誰かに向けてやれないんだ……………!!」

「そこまで愛を理解できていて、俺に啖呵を切るぐらい行動できるのに、どうしてッ!! 答える、ゴルモンド!!!」

ラノアとして、ラブヒーローとして。

心の底からあふれ出した、彼の純粋な本音であった。

ただ、そんな本音をぶつけてどうにかなるようなら、世界中の誰も苦勞しない。

天竜人のゴルモンドは、口の端から血を垂らしながら答える。

「下々民とわちきでは、身分が違う……………!! お前ら下々民はわちきらの奴隷、そこに愛など向ける訳がないえ!

『汚らしい女泥棒のガキ』ごときが、わちきに触れ続けること自体が既に死罪! 海軍の総力を挙げてお前を殺してやるえ!!」

「汚らわしい女泥棒のガキ……………?」

ラノアは胸倉をつかんだまま、そう言う。

彼の息遣いは次第に荒くなり、目には怒気を超える……………どす黒い殺意が灯り始めていた。

天竜人はにやりと欠けた歯を覗かせるように笑う。

「今思い出した……………お前、昔ヒューマンショップを巡りをした時にわちきの服へ血を付けたガキだえ?」

あの時の催しは面白かったえく! あれから何度も何度も同じことを繰り返したが、全員面白い反応をしてくれたえ」

あの時の『催し』。

それは恐らく……『ラノアが母を刺せば助かる、刺さなければラノアが死ぬ』という悪趣味な選択の事だろう。

「分かったらとつととその手を放すえ!! 今なら海軍大将に頼んで、楽に殺してやらんこともないえ?」

「あんな事を、他の、誰かにも……?」

背中に何らかの衝撃。

振り向くと、母親らしき女性がラノアの背中に向かって斧を振り下ろしていた。

だが、彼女の力ではラノアの体に傷をつけることはできない。

子供も銃を撃つ。

空気の壁に弾かれるも、撃ち続ける。

どちらも、ドス黒い悪を纏った醜悪な笑みを浮かべていた。

隙だらけの背中からなら、ラノアを殺してやれると言わんばかりに。

「……ッ」

殺しては駄目だ。

こいつらは、守るべき愛を持った家族……。

俺が殺すわけにはいかない。

殺しては駄目なんだ。

全員気絶させて、多少殴るぐらいで済ませないといけない。

我慢しないと。

我慢。

我慢……。

ふと、胸倉をつかむゴルモンドの顔を見る。

彼は、笑っていた。

自分は今から助かって当然と言った風に。

目の前のラノアが命乞いをするのが当然と言った風に。

今までの行いは全て正しいと言った風に、悪びれず、堂々とした様

子で。

ジョツキーのように、何もかもが振り切った悪と言う訳でもない人間臭く。

自分に都合のいい風に考えることもある。

それでいて取り返しのつかないほど、極限まで欲にまみれた『邪悪』だ。

救えない。

殺意が、湧いて止まらない。

「お前の母親も、奴隷にしてやればよかつたえ」  
ゴルモンドの吐き捨てるような言葉。

その瞬間。

照明がパツと消えるように、視界が暗くなった――。

「あ」

視界が元に戻る。

空気の中に血の匂いが濃く混じっている。

手のひらどころか、全身が真っ赤に染まっている。

足元には、原形が残っていない肉の塊。血と臓物がそこらに飛び散っていた。

壁には、もたれかかるように項垂れる、意識のない女性と子供。どちらも血まみれだ。致命傷と思しき傷もある。

「俺が、やったのか」  
記憶がない。

だが今この場で、人間を肉塊に出来るような腕力を持った者など、1人しかいない。

「あ、ああああああ……」

その場に膝から崩れ落ちる。

守るべき愛を持った家族を……俺が壊した？

殺さないと誓った決まりを破って、この一家を殺した？

嘘だ……。

そんなの、母が求めた、優しいラノアのする事じゃない。

俺じゃない。

これは……こんな事するのは、ラブヒーローだ。

ラノアが悪いわけじゃない。

俺が悪いわけじゃないんだ。

ギチギチと、崩れかけていた心の破片がいびつな形に集まっていく音が聞こえる。

「こちら海軍!!　こちら海軍!!　そこにいるのは分かっているんだ、出てこい!!」

邸宅の外から、そんな大声が聞こえた。

「ハハハ……。海軍か、随分と遅かったな」

地面に手を突き、ゆっくりと立ち上がる。

机の上に会った純白、と言っても所々血で染まっているため完全な白色ではないテーブルクロスを身に纏う。

元々会食用の長机に敷いていたテーブルクロスだ、身長3mの巨体

である彼の身体も覆う事が出来た。

「白は正義の色。ああ、愛を守るヒーローにこれほど相応しい色もないな」

全身を白い布で覆いながら、邸宅の玄関扉を開ける。

広場には大量の海兵がいた。

中には見知った顔もいる。

元海軍大将で訓練教官の『ゼファア』。

海軍大将に就任したばかりの『青雩』。

海軍中將にして海軍の英雄と呼ばれる『モンキー・D・ガープ』。

その3人が一番前に立つようにして、100人は楽に超える数の海兵が並んでいた。

「ッ……い」

海兵たちの間に震撼が走る。

前回のマリージョア襲撃から一カ月で再び襲撃、そして襲撃者が天竜人の邸宅に入ったというのだ。

そして襲撃者が今、天竜人の邸宅から妙な姿で現れた。

3mの巨体に、全身を覆う白い布。

そして布の上からでも分かるほどに隆起した筋肉。

顔面には肉片と赤黒い血がべつとりと、表情が分からないほど大量に付着している。

大半の海兵は襲撃者の顔に大量の血が付着しているからか、正体が分からなかった。

ただそれでも、その巨体と盛り上がる筋肉から、前列にいる古参にして強者の3人は襲撃者が誰か分かったようだ。

真っ先に声を上げたのはゼファアだ。

「ラブヒーロー!! お前……天竜人を殺したのか!!」

誰が見ても分かるほどに、致死量の血を彼はおつかぶっているのだ。

ましてあのラブヒーロー。今まで二億の懸賞金で収まっていたのが不思議なほどに強い男だ。

CPOの2人を含む護衛を制圧するくらいで血を流しはしないだろう。

つまり、あの血は全て誰かの血ということになる。

駆けつける道中で倒れていた護衛は多少吐血はしていても、全て気絶程度で済まされていた。

ということは、あの大量の血を流した主は。

天竜人以外ありえない、そういう結論に行きついたという訳だ。

「ああ。殺した」

あっけからんと答える。

そんな様子に、海兵たちは困惑の声を上げた。

「天竜人を殺す……!? 死刑なんてもんじゃ済まない……!」

「バスターコール、いやもつと上……想像がつかないくらいの罪になる」

ゼファーは続けて叫ぶ。

「一体何故殺したんだ！ お前はどんな奴でも、生きたまま海軍に渡していただろう！ どうしてそんな……」

「ふむ。じゃあ聞くが、天竜人を殺すのは悪い事か？」

「何……？」

普段とずいぶん様子が違う。

その違和感から、彼と交戦経験のある3人は悪寒のようなものを感じた。

彼は、バツと両手を広げ、芝居がかった様子で話し始める。

「悪いことであるはずがない。世界中から嫌われている天竜人を殺した。しかし、一体それを咎める権利が誰にある？」



『私』は間違っていない。ヒーローは何も間違えない。  
愛はこの世の宝。世界最高の宝。それを守る私が間違えるはずがない」

血走った目。

荒い息遣い。

血に染まった顔は、背筋が凍り付くような狂気に染まっていた。

「私の名前は……『ラブヒーロー』。世界の愛を守る存在だ。なあ、そうだろう……？」

ラブヒーローは、自分の事をラブヒーローと名乗った。

ただそれだけの事なのに。

彼の雰囲気は、以前よりもまがまがしい物を放っていた。

ガープが武装色の覇気を拳に纏う。

そして、横にいる二人に言った。

「クザン、ゼファー。気を抜くんじやないぞ」

「分かっていますよ、ガープさん」

「ラブヒーロー、なぜ……。いや、何でもない。大丈夫だガープ」

そうして、完全なるラブヒーローと成った男と、海軍の衝突が始まった。

——かくして始まった、ラブヒーローによる襲撃事件。

第1回目の襲撃は、海軍の主戦力3人を中心とした海兵達とラブヒーローの衝突。

ある程度暴れた所でラブヒーローは逃走。

その逃走速度に、誰も追跡を行うことはできず、みすみす彼を逃が

してしまおう。

主戦力3人は天竜人を殺した犯人を取り逃がした罰で死罪になりかけるが、元帥と五老星が全力で動いたことで何とか取り止めになる。

ラブヒーローの懸賞金は20億にまで跳ね上がった。

しかし。

それからも、ラブヒーローの襲撃は続く。

凡そ月に一度のペースでマリージョアに訪れ、ひとしきり暴れた後、誰も追いつけないスピードで逃走する。

唯一黄猿だけが彼に追いつけたものの、黄猿1人ではラブヒーローを捕らえることは出来なかった。

そんな事をずっと繰り返し続ければ、当然世界政府と海軍が自身たちの幾度にも及ぶ敗北を隠そうとしても噂は広まる。

だがラブヒーローは奴隷解放の為にマリージョアを襲っているわけではない。

「私は間違っていない」

そのような言葉を言いながら、まるで駄々をこねる子供のように暴れ回るだけだ。

あるいは自分に言い聞かせていたのかもしれない。

奴隷解放の為にマリージョアを襲っていないため、毎回奴隷が逃げられるわけでもない。

運よく檻と首輪の鍵が手に入った者が逃げているだけだ。

なので、かのフィツシャー・タイガーのように奴隷を全て解放した崇高な人物として語られることはなかった。

そして、初めての襲撃から3年後。

フィツシャー・タイガーが死亡したとのニュースが世界を回った。

そのニュースが回った翌日、ラブヒーローはマリージョアを襲撃する。

ただ、彼の恰好は今までの顔に布を纏った者とは全く違うものだった。

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭の前から靴先まで覆い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

新しい衣装を披露するように、マリージョアを今までより念入りに破壊する。

そして。

それを最後に、ラブヒーローの襲撃はピタリと止まったのだった。

『WANTED

LOVE・HERO

DEAD OR ALIVE

\$3,220,000,000』

ラブヒーローはダイナ岩を手に入れる

マリンフォード頂上戦争から、2年と少し。

モンキー・D・ルフィ率いる『麦わら海賊団』はシャボンディ諸島へと集結し、新世界への航海を開始した。

世界中に名を轟かせる麦わらの一味と海賊たちは、元ロジャー海賊団であり鬼の跡目と呼ばれた『ダグラス・バレット』を撃破する。

バレットを撃破し無事に海軍から逃げ切った祝いとして、宴をしている麦わらの一味。

ふと、ワインを片手に船の手すりに近づいたロビンが、海に何かが漂っているのに気づいた。

「ねえ、アレ」

「ん？ ……おいおい、ありや人じゃねえか！」

ウソップがそう叫ぶ。

麦わらの一味が一斉に船の手すりに近づき、海に漂う何者かの姿を見た。

それは、樽か何かの木片に上半身を乗せ、ぐったりとしながら漂っている蒼色の髪の少女だった。

「襲撃、襲撃だア~~~~!!」

1人の海兵がそう叫んだ瞬間、真っ白な拳に顔面を殴られ気を失った。

ここは古代兵器に匹敵すると言われる爆発を起こすダイナ岩が保管されていて、かつ、エンドポイントの一つであるファウス島だ。

ダイナ岩の保管庫。

その場所に歩いていくその大男は、道中現れる海軍を紙屑のように殴り飛ばしていた。

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭の前から靴先まで覆い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

ラブヒーローだ。

海兵たちは腰が引けながらもラブヒーローに襲い掛かり、殴り飛ばされる。

ここの警備隊で一番強い海軍中将は四肢の骨を叩き折られるという特に無残な仕打ちを受けていた。

「……」

保管庫の分厚い扉の前に迫り着くラブヒーロー。

タッチパネルと大きな鍵穴がある扉。電子パスワードと鍵の二重ロックを解除して開ける仕組みのようだ。

だがラブヒーローはどちらも持つていないし在処も知らない。

故に、扉の中心を手で掴み、壁から無理やり引っ張り剥がした。

楽にトンは超えそうな扉をそのあたりに捨て、蜂の巣状に保管されているダイナ岩を一つ引っ張り出す。

紫色の液体にぶかぶか浮かんでいる大きな卵のような石。

ダイナ岩だ。

全てのダイナ岩を指先サイズまで圧縮し、保管施設の外に出ると、そこには海兵が列挙していた。遠くの方に海軍の船も見えることから、増援でここに来たのだろうことがわかる。

そして列挙する海兵の先頭にいるのは大将黄猿。

ラブヒーローは高台から彼らを傲岸不遜に見下ろしていた。

「ん〜……わからないねエ〜。あのラブヒーローが、どうしてダイナ岩なんかに興味を示すのかねエ〜？」

黄猿がそう静かに呟く。

ダイナ岩は超威力の爆発を起こす危険物。地下でダイナマイト代わりに使えば、地面どころかその島が丸ごと吹っ飛ぶ代物だ。

ただただ危険な岩。

決して愛だとか平和だとかの為に使える物ではないのだ。

ラブヒーローは懐にしまっていたダイナ岩を一つ取り出し、圧縮を解除する。

それをわざとらしく海兵たちに見せつけながら、この場に居る全員に聞こえるような声量で言った。

「これより、私の『計画』を邪魔をする者に対し、私は一切命の保証をしない。目の前でちよろちよろしていると本当に殺す。

……手始めに、エンドポイントであるこのファウス島を吹っ飛ばそう。逃げたければ逃げるがいい」

海兵たちに衝撃が走る。

エンドポイント。

それは三つの火山がある島を破壊すれば新世界の海が減ぶという、伝説に近い話。

無論海兵たちもそんな与太話を信じていない。  
だが。

ラブヒーローのような、懸賞金30億の大犯罪者が真面目な声で言っているのなら、もしかしたらあの伝説は本当……と考えてしまったのだ。

海兵たちに混乱が広がっていく。

エンドポイントの話はともかく、ダイナ岩の威力は本物だ。

その爆破に巻き込まれたら常人など骨すら残らない。

海兵の1人が先頭に立つ黄猿に慌てた様子で問うた。

「き、黄猿大将！ 我々はどうするべきですか!？」

「んく……まア、ラブヒーロー相手に戦えると思う者だけ残って、それ以外は船に戻っていいかもねエく。あの男相手に頭数揃えても、犠牲者が増えるだけ……」

黄猿はちらりと横を見た。

そこには、四肢を叩き折られ悶え苦しんでいる海軍中将が一人。

それを見た一般海兵達は震え上がり、中将を担架に乗せ、急いで軍艦へと引き返していった。

ファウス島に残ったのは、黄猿とラブヒーローの2人のみ。

口元を尖らせつつ、面倒くさそうに話し始める黄猿。

「相変わらず、やってる事が悪なのか正義なのか分からん男だねエく。殺すと宣言した割には、相手が逃げるまで待つ……そのままダイナ岩もハツタリで、大人しく置いて帰ってくれるとこっちもありがたいんだけどねエく？」

「悪いが、ダイナ岩でこの島を吹っ飛ばすのは本当だ。そして邪魔する者を殺す……それも本当だ!!」

黄猿とラブヒーローの姿が消えた瞬間。

互いに50〜60mはあった距離を一瞬で詰め、己の覇気を込めた脚と拳を衝突させた。

「おおく、相変わらず馬鹿みたいに硬い覇気……ビリビリくるねエく」

「海軍最高戦力の大將にそう言っつて貰えるとは光栄だな」

「あんたも懸賞金30億越えの大犯罪者でしょう、がッ！」

ラブヒーローの拳を払った瞬間、放たれる黄猿のレーザー。

だがラブヒーローは必殺のレーザーいとも簡単に弾き飛ばし、黄猿の首を掴んで手刀を腹に突き刺そうとする。

腹に手刀が当たる直前、黄猿は瞬時に体を光化しラブヒーローの手から逃れた。

そして右拳を左の手のひらに当て、ズズズ……と光り輝く剣を取り出す。

「天叢雲劍……むうん!!」

再び、剣と拳をぶつけ合う両者。

ギチギチと鏢迫り合う最中、黄猿が問いかける。

「エンドポイントを三つ破壊すれば火山が噴火、新世界の海は滅ぶ。そんな事をすれば、民間人に多大な被害が出るのはあんたならわかってる筈だけどねエ」

黄猿はそこが上手く納得出来なかった。

ラブヒーローという男の行動は意味不明で素っ頓狂な物が多いが、その行動理念は理解できなくもない。

『愛を守る』。

そんな事を公言し実行している男が、火山が噴火した際に民間人に及ぶ危険性を分かっていない筈がないのだ。

その問いに、ラブヒーローは規格外の腕力で黄猿の剣を押し返しながら、静かに答えた。

「エンドポイントを三つ破壊すること。これは計画に含まれている。

だが……私の計画では、民間人に危害は殆ど及ばない。海に出航さえしなればな……」

「何……？」

ラブヒーローの意味深な言葉に一瞬気を緩めた黄猿。

その隙を懸賞金30億越えの強者が見逃すはずもない。

瞬時に光の剣を右手で握りつぶし、左手で黄猿の腕をガツシリと掴んだ。

「——さて、無事に脱出できるか賭けをしよう」

ラブヒーローの右手に現れた2つのダイナ岩。

その2つを、己と黄猿の間で一気に握りつぶした。

「おお〜!!」

体を光の粒子に変え離脱しようとする黄猿。

しかしラブヒーローは、その粒子を覇気を纏った手でつかみ、自分の体に引き寄せた。

「まだ逃げるんじゃない。ギリギリのギリギリまで待とうじゃないか」



「!——」  
逃げ場をなくした光の粒子は、冷や汗を流して焦る黄猿へ変貌する。

その瞬間——。

——古代兵器に匹敵する威力のダイナ岩が、新世界中には見えるほど巨大な火柱を上げた。

「……ふうく……困ったねエく……」

ピカピカと光る粒子。

それが小高い岩の上に集まり、1人の男の体を形作った。

その男は黄猿。

ダイナ岩の爆発から何とか脱出し、火柱と自身の乗って来た軍艦が見える位置へと着地したのだった。

「まさかあそこまでぶっ飛んだ真似をされるなんて、こりやあ想定外だったねエく」

黄猿は己の右腕を見た。

黄色いストライプのスーツは焼け焦げ、皮膚はブスブスと音を立てるほど真っ黒に燃え、鮮血がぽたぽたと滴っている。

誰が見ても分かるほど、重度の火傷を負っていた。

ここまでの怪我を負わされるのはかなり久しぶりだ。

だが、ラブヒーローも自分と同じく、爆発の直前までダイナ岩のすぐそばにいたはず。

奴もかなりの怪我、もしかすると死んでいるかもしれない……。  
そこまで考えた所で、黄猿は首を横に振った。

「いや、あの男は異常にタフだからねエー。怪我をしていればいい方、死ぬなんてもつての他……。おー、いちち」

右腕を痛そうに抑える黄猿。

とりあえず一旦帰還し、怪我の治療を優先するでしょう。

『エンドポイントを3つ破壊する』。

この情報さえあれば、奴の行先は明白だ。

『民間人に危害は殆ど及ばない』。

『海に航海さえしなれば』。

……。という2つの言葉についてはよく分からないが。  
まあよしとしよう。

黄猿は体を光の粒子へと変化させ、軍艦へと戻ったのだった。

ラブヒーローはサニー号に現れる

「チョッパ、どうだ？」

「……うん。衰弱はしてるけど、命に別状はない。このまま点滴打つてれば大丈夫だ」

サウザンドサニー号、医療室。

部屋の中にはルフィとチョッパがいた。

その2人が見つめているのは、ベッドの上に横たわる蒼い髪の少女。

年は16か17か、恐らくその辺りくらいだろう。素朴だが、整った顔立ちをしている。

元々着ていた服は海水でずぶ濡れだったため、今はナミの服を着用している。

尤も、胸の大きさが合わないせいで少しダボついていた。

「一体何者なんだろうーな、こいつ」

「分からない。けど、多分……悪魔の実の能力者なんじゃないかと思う。海水に濡れた服を着ていた時と今とじゃ、軽く叩いた時の筋肉の反応具合が全然違うんだ」

「ふくん……能力者かア」

ルフィは名も知らない、蒼い髪の少女をじっと見つめる。

すると、彼女が突然ピクツと頭を動かし、口元を小さく動かしながら何かを呟き始めた。

「……う……ら、らぶ……ひーろー……」

少女のうめき声に、ルフィは首を傾げた。

『ラブヒーロー？ なんだ、白いおっさんの知り合いか？』

その言葉に、チョッパは顎の辺りに手を当てながら、眉間にしわを寄せる。

薬やそれを調合するための薬草を置いている棚から何かの薬を取り出しつつ、静かに言った。

「うーん。こんな状態で眩くなんて、相当強い……トラウマに近い記憶があるみたいだな。とりあえず、あとは俺が様子を見とくよ。目が覚めたら伝える」

「ん、わかった。頼んだぞチョッパ」

そう言つてルフィは席を立ち、医療室の扉を開けた。

皆で食事をするダイニングを抜けて、サニー号の草が生い茂る甲板に出る。

「ルフィ〜！ あのかわい子ちゃんの様子はどうだった？」

「命に別状はねえつてチョッパが言つてた。サンジ、飯！」

「はいよ、いつもの肉な。じゃあ俺は、あの子が目覚めた時のために消化しやすい栄養満点のご飯を作らなくっちゃだからな！」

サンジはルフィに大きな骨付き肉を手渡し、厨房のある部屋に入つていった。

よだれを垂らしながら肉にかぶりついていると、マストの根元に座っているナミが少し浮かない顔をしていたのに気付いた。

「なあナミ、なんでそんな浮かねエ顔してんだ？」

「なんでつて……。……このニュース、ちよつと見てくれる？」

ナミがニュース・クーから受け取った新聞を広げる。

そこには、新世界のとある島が爆発により丸ごと吹っ飛んだと書かれていた。

爆発が起きる前の島の写真。

その下に、赤いバイザーを顔にはめ込んだ、全身白タイツスーツの巨漢の写真が載っていた。

「し……白いおっさん!?!」

ルフィが驚きの声を上げる。

その写真の男は、間違いなく彼の知っているラブヒーローであった。

「……まあそつちも大事なんだけど、問題はこつち！」

「ん？」

ナミがラブヒーローが起こした爆発事件のさらに下を指さす。

そこには、爆発事件より小さい文量と写真ではあるが、『街の住民が

1人残らず、奇妙な方法で死亡し滅んだ』と書かれていた。

その奇妙な方法とは、あまり口にもしたくないぐらい残酷な物だった。

全身がカラカラになって干からびている者もいれば、まるでそこから動けなくなつたみたいに餓死した者。

拳句の果てには体の7割が吹っ飛んで死亡している者もいた。

「これ！ この滅んだ街のある島って、ここからすぐ近くの所なのよ！」

「ふーん……。でもそれ、俺達に何か関係あんのか？」

「……この奇妙な方法って言うのが引つかかってね。さつき拾った女の子、もしかするとあの子が犯人……って考えちゃったり」

それを聞くと、ルフィは骨付き肉をかみちぎり、もぐもぐと咀嚼する。

しばらく咀嚼しながら物思いにふけり、十数秒経った後に口の中の物を飲み込んだ。

「考えすぎじゃねエか。腹減ってんのか？」

「滅つとらんわ!! ……この間の海賊万博がダグラス・バレットの組んだ偽イベントだったでしょ？ あれのせいで変に過敏になっちゃってるのかもね……悪かったわ」

海賊万博。

それはつい10日ほど前に、ルフィ達が参加した大イベントの事だ。

大雑把に言うくと、海賊王の遺した宝を参加した海賊全員で奪い合うという大変物騒なイベントだ。

しかしそれは、ダグラス・バレットとその仲間ブエナ・フェスタの仕組んだ罠だった。

実際は海賊たちを一か所に誘き寄せ、バレットが自らが最強の男と証明するため集まった海賊全員をなぎ倒す計画……だったのだが。

協力したルフィ含む海賊達により、バレットは無事に打ち倒された。

しかし、最強を自ら名乗るだけあってバレットの強さは相当なもの

だった。

下手をすれば四皇の首にすら刃が届きかねないほどに。実際に戦ったルフィは、『強かったなく』ぐらゐの感覚で済んでゐる。

しかし、ナミのような戦闘が苦手な者にとっては、しばらくトラウマになるほどのショックを与えたようだ。

「そういうえば、能力者かもしれないってチョップパーが言つてたな」

「能力者……。はー、何か嫌な予感するわ……」

ナミがそうぼやいた瞬間。

——白い光が、船の中心に降り立つた。

吹き荒れる風。

船の帆が破れそうなくらいに暴れ回り、甲板に生える芝生は一斉に横に倒れる。

サニー号が大きく揺れ、船の上立つていた全員が体勢をふらつかせながらも、船に降り立つた光の方を見た。

それを見て、ルフィが叫ぶ。

「……白いおっさん!?!」

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭先から靴先まで覆い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

異様な雰囲気纏うラブヒーローが、そこに立っていた。

医療室の中にも、先ほどの揺れが伝わる。

チョップパーが患者の少女がベッドから落ちないように抑える。

「ん……いーんぐ……うう……」

少女が揺れに反応したのか、はたまたチョップパーが突然覆いかぶ



姿を現したその青い龍は、自らの尾を飲み込んでいた。

頭と尾を繋げた龍の姿はまるで輪のようである。

始まり 終わり  
頭と尾を繋げた姿から、ウロボロスは永遠や不老不死、『生と死』の象徴として扱われる。

「!? チョツパー! ゴムゴムの銃<sup>ピストル</sup>!!」

巨大化したウロボロスに弾かれたのであろう、チョツパーが海に向かって吹っ飛ばされていく。

ルフィがすぐさまに腕を伸ばし、彼の身体を掴んで船上に引き寄せた。

そんな2人を無視するように、ウロボロスは不思議な揚力で空に浮き上がっていく。

サニー号の真上で停止したウロボロスは、ぐるぐるとその体を回し始めた。

「白いおっさん! アレは何なんだ!」

「元LEVEL6の囚人『アピール』。ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロスを食っている。

……その能力は大雑把に言えば、『生と死のエネルギーの変換・増幅器』だ。生のエネルギーを死のエネルギーに、死のエネルギーを生エネルギーへ増幅させながら変換する」

ポツ、ポツとサニー号のあちこちから光のオーブが出現し始めた。

甲板の芝生、ナミのミカンの木、そして麦わらの一味の体から。

無論ラブヒーローの体からも出ているが、本人はそれを気にする様子はない。

「……何かよくわからねエが、とりあえず……斬る!」

光のオーブが体から出て、力が次第に抜け始めているのに気付くゾロ。

このままだと不味いと刀を峰の向きに変え、ウロボロスに向けて素早く飛び上がった。

「三刀流! 鬼斬——」

「——ギャアオオオオオオオオオ!!!」



ゾロが刀を振り切るよりも早く、ウロボロスが吠える。その瞬間、突如出現した黒い光がゾロの体を貫いた。むき出しの内臓をそのまま殴られたような衝撃。

空中から甲板に勢いよく叩き落され、ゾロが思わず口から刀を離れた。

「……がッ……い！」

「ゾロ!! 大丈夫か!!」

ウロボロスが大きく吠え、先ほどの黒い光を辺りへ大量に放出し始めた。

海の中の生物は体が半分抉られた状態で海に浮かび上がり、サニ号のマストが中ほどから叩き折られる。

麦わらの一味はその光をあたふたと慌てながらも回避していた。

そんな中、一筋の黒い光がラブヒーローの頭上へと降り注いだ。

右手を上に向け、光を受け止める。

——バン!

勢いよく、腕ごと後方に弾かれる右手。

その手のひらには血がポタポタと滴っていた。

「相変わらず、強力な能力だ。だが強力すぎる故に制御が出来ていない。だから人を殺しすぎてLEVEL6なんかに入るんだ、お前は」

空気の壁が彼の足元に展開される。

先ほどゾロが飛び上がったよりも数倍早く空中に飛び上がり、ウロボロスの頭の上に姿を現した。

右の手のひらを龍の頭に向ける。

「エア・ブレイク  
「大気崩壊」

それは空気の壁の上位互換のような技。

空気の壁を手の上で限界まで薄く重ね、一気に相手にぶつける。その威力は空気の壁が解放された時のおよそ十数倍だろう。

「——ギャウツ!!？」

すさまじい轟音と共に龍が叩き落される。

余りの一撃に意識を失ったのか、シュルシュルと体を絞めていき、甲板の上に着地する頃には元の少女の姿へと戻っていた。

「おっさん!!」

ラブヒーローも甲板に着地し、ルフィが彼に駆け寄る。

「モンキー・D・ルフィ。この女は貰っていくぞ」

「あ、ああ……。……いや、色々と聞きてエことがあんだ!! さっきの龍の事とか、新聞に載ってた島の爆破事件とか……」

そんな言葉を見無視するように、ラブヒーローは少女・アピールの体を肩に乗せる。

彼女は全く目を覚ます様子がない。それどころか、先ほどの衝撃で顔に酷いあざが出来てしまっている。

「……?」

ラブヒーローは歩き出そうとして、ふと、足元に何かの重みを感じた。

ゆっくりと顔を動かし、自身の足元を見下げる。

彼の右足を掴んでいたのは、チョッパだった。

「ま、待ってくれ……。俺は医者なんだ、一度見た患者は最後まで面倒を見る責務がある……!」

「必要ない。放っていれればすぐに治る、動物系の能力者だからな」

「能力者だとかそんなのは関係ねエ! 無事に立って歩く所まで見ないと、俺が納得できないんだ!!」

それは、チョッパの医者としての誇り。

医者であるDr.くれはが『患者が目の前から消えるのは、治るか死ぬか、そのどちらかだ』と言っていた事もあるのだろう。

患者が万全な状態でないのに目の前から消えるのは我慢できない。

そんなプライドが、圧倒的強者であるラブヒーローに噛みつくだけの勇気をチョッパに与えた。

ラブヒーローは静かに、重い声で話す。

「どうしても、私を止めるのか？」

「……ああ……!!」

「そうか」

チョツパーの掴んでいる右足を、真上に振り上げるラブヒーロー。突然の動きに手を放してしまい、ポーンと上空に放り投げられたチョツパー。

くるくると回りながら彼の前に落ちていく。

そんなチョツパーに向けて、ラブヒーローは右足を自身の胴に引き寄せた。

「——エア・ブレイク 大気崩壊」

足裏に圧縮された無数の空気。

蹴りの威力と空気の威力が乗算された一撃が、チョツパーの顔面に突き刺さった。

——ドオオオオン!!!

声を上げる暇すらなく、船内の壁を突き破りながら吹っ飛んでいくチョツパー。

何とか海に飛び出る前に止まったようだが、木片の中でピクリとも動かなくなってしまった。

「……——ッ！ 何やってんだ、おっさん!!」

ルフィはラブヒーローの事を、善人かどうかは分からないが、少なくとも悪人ではないと思っていた。

だがたつた今、大切な仲間であるチョツパーが攻撃された。

以前にもこんな事があったが、あの時の彼はすぐに謝罪をしきた。そして勘違いだったとも言っていた。

しかし今のラブヒーローには謝罪どころか悪びれる様子すらない。

「何をやっている、だと？ お前の仲間を一人蹴り飛ばしたんだ、モン

キー・D・ルフィ。それ以外の何物でもない」  
「——ふざけんじゃねエ!! ゴムゴムの銃<sup>ピストル</sup>!!!」  
ダグラス・バレットを打ち倒した男の攻撃。

そこら辺に居る普通の海賊にとっては耐えられるはずもない攻撃だ。

しかし、ラブヒーローは仮にも30億越えの賞金首。  
腹に打ち込まれたその拳を、防御もせず、覇気すら纏わずに受け止めた。

拳に伝わる、まるで地面でも殴ったかのような硬さ。

ルフィが思わず困惑した瞬間、眼前にあったのは、白い拳だった。

「ぐあッ!!」

ラブヒーローの、白い覇気を纏った拳で顔面を撃ち抜かれる。

恐ろしい硬さの覇気だ。規格外の腕力も相まって、ただの殴打ですら必殺の一撃になりうる。

吹っ飛ばされたルフィを、背後に居たフランキーが受け止める。

口端から血を垂らす彼や他の麦わらの一味に向かって、ラブヒーローは挑発するように言った。

「仲間を害されて、気に食わない者がいるなら掛かってこい。私と戦う覚悟があるならな」

その言葉に、他の一味たちは一斉に武器を構えた。

チョップパーを傷つけられた上、そこまで煽られて黙っていられる者はこの船に乗っていない。怖がりのナミですらそうだ。

そうして、サニー号の甲板上で、ラブヒーローと麦わらの一味の衝突が始まった。

## ラブヒーローは圧倒する

「三刀流・煉獄鬼斬り!!」

一番に動いたのは、ゾロ。

三本の名刀を構え、肩に少女を乗せたままのラブヒーローに素早く斬りかかった。

「バレットを倒した一味なだけはある。かなり速い攻撃だ……」

ラブヒーローは見聞色の覇気を用いる。

自身の限界まで鍛えた覇気は、カタクリのようなどびつきりの才能を持つ者には敵わないが、僅か1秒先の未来を見ることを可能にしていた。

左足と右手を白い武装色で固め、ゾロの刀を受け止める。

「ッ！ なんだこの硬さ——ぐッ!!」

尋常ではない硬さの覇気に気圧された瞬間、頭を掴まれ甲板に叩きつけられるゾロ。

即座に足で踏みつけ、ゾロの両肩の骨を外すラブヒーロー。その後、ブルツクとウソップが襲い掛かった。

「必殺緑星、インパクトウルフ衝撃狼草!!」

「夜明歌・クロー・ドロア!!」

ウソップが放った弾が緑色の狼に変貌し、ラブヒーローに突進する。

ブルツクの素早い突きが弾となり、ラブヒーローの首を狙う。

そんな2つの攻撃に対し、ラブヒーローは振り返りもしなかった。

「エア・ウオール空気の壁」

足元に作った空気の壁。

それを解放させ、目に留まらぬ速さで何処かへと消える。

2つの攻撃は見事に空を切り、焦るウソップとブルツク。

「どこだろ!? 一体どこへ——ぐえッ!!」

上空から降ってきて、2人を思いきり甲板に踏みつけるラブヒー

ロー。

650キロの巨体が思いきり踏みつけて来たのだから、たまったものではない。

ウソツプとブルツクの首を再度踏み、意識を確実に奪う。

「百花繚乱・クラツチ!!」  
シエンフルール

「むっ……」

ラブヒーローの全身から無数の手が生え、体を拘束する。

その全ての手が彼の背骨を叩き折らんと全力で力を込めていた。ミチミチと、彼の筋肉と骨の軋む音が鳴る。

そしてロビンによりラブヒーローの動きが止まった所で、ルフイとサンジとフランキーの三人が彼の無防備な腹に向けて攻撃を叩き込んだ。

「ゴムゴムの火拳銃!!」  
レッドホーク

「悪魔風脚・首肉ストライク!!」  
ディアブルジャン

「フランキーラディカルビーム!!」

三人の攻撃力が完全に合わさった一撃。

例え億を超える海賊でも、これを喰らって立っていられる者は少ないだろう。

だがしかし。

ラブヒーローは腹に白い覇気を纏い、その全ての攻撃を完全に耐えきっていた。

「私の覇気を貫くのは、お前たちでは無理だ」

背筋に力を入れて上体を起こすことで、全身に纏わりつく手を無理やり引きちぎった。

ハナハナの実で顕現した手にダメージが加わった場合、本体であるロビンにもダメージが入るといふ弱点がある。

ロビンの両腕に無数の切り傷が発生し、ブシツと勢いよく血が噴き出す。

それを見たサンジが啞えていたタバコを一瞬で噛み切り、こめかみに青筋を浮かばせた。

「!! てめエ、ロビンちゃんによくも!!!」

「ナミ!! 雷を攻撃に合わせてくれ!!」

「OK! 出番よゼウス!!」

ナミがクルクルと天候棒を振り回し、中から雷雲の卵を生み出す。それを食べるために出てきたのは、ビッグマムの魂を分けた強力なホーミーズ、雷雲のゼウス。

ルフィとサンジの攻撃に合わせるようにゼウスが雷を溜め、ラブヒーローに一直線に放った。

「ビッグマムのホーミーズ……。少しまずいな」

肩に乗せた少女を遠くに放り投げ、両手で構える。

バイザーの奥の目を赤く光らせ、見聞色の覇気で1秒先の未来を見た。

「悪魔風脚・粗碎!!」

サンジの赤く発光した脚による踵落とし。

それを右手で掴み、技を放とうとするルフィに投げつけた。

一直線上に向かってくるゼウスの雷に左手を向ける。

どちらかの手が空いていてかつ完璧に受け止める必要があるが、相手の遠隔攻撃をカウンターで返すことが出来るのだ。

「圧縮」

ゼウスの雷を圧縮し、吹っ飛んでいくサンジとルフィに投げつけて解放する。

恐ろしい威力の雷が発生し、5mほど離れているラブヒーローにすら少し電気が流れてきた。その中心にいる2人へどれだけの威力の電気が流れているかは想像もしたくない。

「がはッ……い!」

ゴムの体であるルフィは無傷。だがサンジは耐えきれなかったようだ。

全身黒焦げまみれになりながら、その場に膝を突いた。

放り投げた少女をキャッチし、再び肩に乗せるラブヒーロー。

あと動けそうな麦わらの一味は、船長のルフィと、航海士のナミと、船大工のフランキーのみ。

「1分かそこらだ。それだけで、殆どのメンバーが倒れた。まだやるか?」

「……当たり前だ……!!」

「まあ、そうだろうな……。ここで引き下がるような男じゃないのは知っている」

じつと睨み合う両者。

ただナミの腰は引け、フランキーは眉をひそめながら冷や汗を垂らしている。

こんな状況では、勝ち目はないのが分かっているのだろう。無論ルフィも理解している。

10秒ほど睨み合った所で、ラブヒーローが軽いため息を吐いた。

「もういい。これ以上時間を浪費する気はない」

手を軽く振りながら、戦闘態勢を解くラブヒーロー。

だがルフィ達は一向に覇気を緩める気配はない。

それを見つつ、ラブヒーローは、地面に倒れている者達にも聞こえるよう少し大きな声で話し始めた。

「私は、これからエンドポイントを破壊する。モンキー・D・ルフィが爆破事件の事を聞きたいと言っていたが……あの島は1つ目のエンドポイントだったのだ」

ロビンとナミが驚いたような表情をする。

エンドポイント。

それは考古学者と航海士なら知ってて当たり前前の伝説の話だからだ。

ラブヒーローは、続けて言う。

「そして、もうすぐ私が大海賊時代を終わらせる。人が海に出れる時間には終わるのだ。」

——悪いことは言わない、今すぐ大切な者のいる場所に帰れ。間に合わなくなる前にな」

「!?!」

『大海賊時代を終わらせる。』



海賊王ゴールド・ロジャーが始めた伝説の時代を、終わらせると言うのだ。

そんな大それたこと、普通の者には言えない。言っても冗談だと思われるだけだ。

だがもしかしたら、この男。ラブヒーローなら、本当に終わらせるかもしれない。そう信じさせるだけの威圧があった。

ルフィは両腕に武装色を纏う。

「ふざけんじゃねエ!! そんなことさせる訳ねエだろ!!」

「……私は『もういい』と言ったな。アレは、もう戦わないという意味ではなく……もう終わらせるという意味だ」

ルフィが殴り掛かるよりも早く、ラブヒーローは上空へと飛び上がる。

そのまま空中で空気の壁の上に直立し、右手を空に向けて掲げた。

周囲の気温が下がり、ラブヒーローの上に直径30mの熱の塊が出来る。  
来上がる。

「マキシマム・コア。……近くに島がある、そこまで泳ぐことだな」

その太陽を、眼下にあるサニー号に向けて、躊躇なく撃ち放った。

銃弾よりもよっほど早く進むその太陽は、一瞬でサニー号との距離を詰めていく。

「——ッ、ゴムゴムの象銃乱打!!」

ルフィは甲板から、落下してくる太陽に向けて乱打し始めた。

武装色の覇気を纏っているのに、皮膚が焼け焦げるような熱量。じゅわじゅわと体が焼けていくのも厭わず、サニー号を守るために太陽を殴り続ける。

太陽の勢いは弱まるものの、その威力が衰えることは決してない。

徐々に押し込まれていく最中、いつの間にか操舵輪を握っていたフランキーがこの海域中に轟くような大声で叫んだ。

「全員、どっかに掴まってるよオ!! 全力全開・風来バーストオオ!!」

船尾に強大なエネルギーが充填され、発射。

サニー号を丸ごと吹っ飛ばすほどの空気砲だ。全力全開で放たれた風来<sup>クイード</sup>バーストによつて、サニー号は一瞬でラブヒーローの視界の外へと消えていった。

追おうかと考えたが、頭を振り、肩に乗せる少女の方を見る。

「再び私の前に現れたならその時はその時だ、追う必要もない。今は計画が先だ」

ラブヒーローは少しだけ顔を俯け、その後には太陽を見上げた。

雲一つない空の上にはいつも通り太陽が浮かんでいる。

「変わらないな、いつ見たって。私は……」

その独り言は誰にも聞こえず、潮風と共に何処かへ流れて消えた。

## ラブヒーローの目的を明かそうとする

「見た目はひでエが、船を動かす機械はそこまで壊れてねえ。折れたマストは偶々船に引つかかっていたから、元通りに繋げりやすぐに直る」

「けどよ……あくあ。厨房の冷蔵庫やコンロなんかは総潰れだ。いくら動力部が無事でも、これじゃあな……」

「動力部ってより、そういう船の暮らしに欠かせねえ物を直すのに時間がかかりそうだな。他にもまだ——」

ここは、ラブヒーローから逃げた先に偶々あつた島。誰もいない砂浜を超えた島の中央には、小規模ではあるが街が見える。

その島の砂浜で、フランキーとウソツプが壊れたサニー号のあちこちを点検しながら、カンカンとトンカチを振るっていた。

船から少し離れたところで、キャンプ用の柔らかなシートが地面に敷かれている。

その上で、先ほどの戦闘で負傷した者たちの治療が行われていた。両手に氷嚢を包帯で巻き付けられたルフィが、同じく顔面を包帯でぐるぐる巻きにしているチョッパーに話しかける。

「チョッパー、大丈夫か？」

「……みんなごめん。俺が変な意地張ったから、こんな事に……」

「何言ってるんだ、あそこで意地張るからチョッパーなんだろう？ 気にすんなって」

「る、ルフィ……！」

傷の程度は各々で差がある。

まず一番酷いのは、ゼウスの雷をまともに食らったサンジだろう。全身からブスブスと焦げる音が鳴っている。

その次に、顔面へ蹴りをモロに食らったチョッパー。

そして650キロの踏み付けを食らったブルックとウソツプ、両手に無数の切り傷があるロビン。

最後に、肩を外されたゾロと両手を火傷したルフィだ。  
サンジを除けば、どれも大した傷ではない。

しかし少し間違っていれば、命に関わる大怪我になっていた事は全員がよくわかっていた。

そしてその少しの間違いとは。

『ラブヒーローが明らかに手を抜いていた』事だろう。

「肩に人間一人担ぐハンデありで俺たちを倒しやがったんだ。本気ならもつと強いだろうな。……それにしても、なんだあの白い武装色の覇気は？ あんなの見たことがねえ」

ゾロが自身の刀を整備しながらそう言った。

奴の白い武装色、見たことのない色であったのもそうだが、特に異常だったのはその硬さだ。

己の覇気とはまさに格の違う硬さ。ともすれば、あの鷹の目よりも硬いかも思えないと思う程に。

「ああ……あの白い武装色か。レイリーは『世界で一番硬い』って言ってたな」

「世界で、一番硬い……!?!」

ゾロの驚く声に、ルフィはぼわぼわと過去を思い出しながら話し始めた。

それはルファイがルスカイナ島での修行を、殆どやり終えた頃だった。

2人は雪の降る夜の中、火を囲んで食事を取っている。その時にふと、ルファイが何かを思い出したように話し始めた。

「レイリー。これでオレは、覇気を習得できたんだよな？」

「うむ。見聞色も武装色も基礎はバツチリだ。霸王色に関しては、君の成長次第だが……」

ルファイが肉を頬張りながら、レイリーに問いかける。

「じゃあ……白いおっさんがやつてた『白い武装色』、アレって何なんだ？」

「……そうか、気になるか。まあ、アレは例外中の例外のような技だがな……」

レイリーが食器をその場に置き、右腕を出す。

その腕に武装色の覇気を込め、一気に黒く硬化させた。

「まず、君が思い浮かべる強者とは誰だ？」

「強者？……レイリーとか白ひげとか、あとは海軍大将とか……ムカつくけど」

思いつく限りで、自身の会ったことのある強者の名前を出している。

今名前を上げた人物の全てに、今のルファイでは敵わないだろう。

レイリーはゆっくりと右腕を動かしながら、静かに話し始める。

「まあその辺りだろうな。そして、その上でハッキリ言う。

ラブヒーローの白い武装色は、その全員の武装色よりも遥かに硬い。武装色の硬さで言うなら、奴は世界一だ」

「せ……世界一!? レイリーよりも硬エのか!？」

「全盛期の私でも奴の武装色は貫けんよ。それはロジャー……海賊王でも同じだった」

懐かしむように空を見るレイリー。

だがルファイが興味津々に食いついてきているのを見て、すぐに意識を話の続きへと戻した。

「見聞色の覇気を鍛え上げれば、次の段階に至ることは前に話したな

「？」

「ああ。確か未来が見えるとかどうとか……」

「武装色の覇気も同じだ。鍛えれば内部破壊という次の段階が……いや、今はいい。」

とにかくラブヒーローは、次の段階に至るまで武装色を鍛え上げている。その上で、誰も真似できない……奴だけの方法を選んだのだ」「白いおっさんだけの方法？」

レイリーがコクリと頷く。

「……全身に流れる武装色の覇気を、悪魔の実の能力で限界まで『圧縮』したのだよ。」

白く発光するまで覇気を圧縮した時、内部破壊は使えなくなったが、代わりに超然的な硬さを手に入れたと言っていた」

異常な発光を放つ白い武装色。

その正体は、3mの巨体に流れる大量の覇気を、硬さだけを求めて一点に圧縮させた物だった。

体の外に流れる覇気すらも体内へと凝縮させたのだ。体外に覇気を纏う流桜とは真つ向から反するような技。

ギチギチの実を食い、覚醒していかつ覇気を鍛え上げている状態でしか使えない。

まさにラブヒーローだけが選択できる方法と言えるだろう。

「……ところで、なんで覇気を圧縮したら白く光るんだ？」

「知らん。ラブヒーローもよく分からんと言っていた……。まあ、熱を圧縮すると太陽みたいに光るのだし、そういう物なんじゃないかね？」

「そっか」

真相は謎である。

「なんだよその中途半端な話」

ゾロの小さな突っ込みが入る。

誰にも分からないのだから、どれだけ考えても仕方ない問題ではある。

それより今は、ラブヒーローが言っていた不可解なことについて話し合うべきだ。

ロビンが包帯を巻いた腕をさすりながら、ゆったりとした口調で話し始める。

まず前提として話されたのは、エンドポイントについてだった。

航海士のナミと考古学者のロビン、それ以外はエンドポイントの事を殆ど知らなかったらしい。

・エンドポイントとは、破壊すれば新世界が滅ぶという、3つの活火山のこと。

・眉唾みみたいな話で、信じてる者は殆どいないということ。

大雑把に纏めてこの2点。

話を聞いていた全員が理解したように頷いたので、ロビンは話を続ける。

「……確かにこの話では『新世界が滅ぶ』と言われているわ。でも、『人が海に出れなくなる』ほどではないの」

——確かに、エンドポイントを破壊すれば新世界に眠る溶岩があちこちに噴き出し、とても人が生きられる環境ではなくなるだろう。

ただ、世界は広い。

いくら新世界に行けなくなったとしても。

グランドライン前半だったり、東西南北の海だったり、いくらでも

活動できる場所はある。

だと言うのに、『人が海に出れなくなる』とまで言い切ったラブヒーロー。

ロビンはそこに強い引つかかりを覚えたらしい。

「これが、ただ大げさに言っているだけなのだとしたら——」

「——いや」

彼女の言葉を遮るように、ルフィが目力を強め、低い声で言う。

「おっさんは大げさに物を言うような奴じゃねえ」

一瞬、空気が固まるほどの気迫。

近くの砂浜の中に居た生き物たちが大急ぎで彼の下から離れていく。

だがそんな気迫に物怖じする様子なく、黒焦げのサンジがタバコの火を吹かしながら疑問を口にした。

「……でも、ラブヒーローは愛を守るとか何とかで有名だ。実際、俺達も何度も助けられてる。

新世界の海を滅ぼしたりなんかしたら、大変なことになるんじゃないのか？ 愛を『守る』どころか『ぶっ壊す』羽目になるだろう」

もつともな疑問だ。

活火山が新世界のあちこちで噴火などすれば、そこに住んでいる住民はどうなる？

近くの海水温度が上昇するだけならばまだマシだ。

最悪、島に溶岩が降り注ぐなんてこともある。甚大な被害は免れないだろう。

狂人とも言えるほど愛に固執している彼のことだ。

だからこそ、その行動の真意が理解できない。

一味全員が首を傾げ黙りこくる中、ブルックがポンと手を叩いた。「……そのための、ウロボロス……悪魔の実の能力、なのではないんでしょうか」

「？ どういうこと？」

「私、脳みその回転が遅い物で……いや元々脳みそないんですけどね



!! ヨホホホ!!

「冗談言つとる場合かツ!! はよ話さんかい!!」

ナミのチョップに「ヨホホ」と意に介さない様子のブルック。

いや意に介さないどころか、パンツがチラリしないかと様子を伺っていた。抜け目がない。

軽く咳ばらいをし、ブルックが自論を話し始める。

「確か、ウロボロスの能力は『生のエネルギーを死のエネルギーに、死のエネルギーを生エネルギーに変換する』……とかなんとかか。

実はあの時、みなさんの体から光のオーブが出てましたが、私の体だけなんともなかったんですね。と言うことは、あの光のオーブが生エネルギーなのでは? と思ひまして」

そう。

あの時、空に浮かぶウロボロスに注目し、誰も気にしていなかったが。ブルックだけは光のオーブが体から抜け出していかなかったのだ。

ロビンが顎に手を当てながら、呟く。

「生のエネルギーは……生き物からしか取れないって事ね。じゃあ

……『死のエネルギー』は?」

「それは分かりませんが……私の体からは何も出ていませんですよ。少なくとも黄泉に繋がる物ではないみたいです。何か別の物ではないでしょうか?」

「……………」

一味の中で特別頭のキレルロビンですら、これ以上は分からないようだった。

つまるところ、考察の材料が足りないのだ。どうしようもない。

話についていけなかったルフィとゾロが頭から煙を出す中、サンジがパン!と手を叩いた。

「とりあえず今日は休息するしかねえんだ。……フランキー!! 船はどれくらいで直る!!」

彼の大声に、サニー号のあちこちを点検していたフランキーが両腕を合わせ、大声で返した。

「俺様のスーパー！な修復技術にかかりや、1日もすれば充分動かせるようになるぜ!!」

「よし。なら今から俺が買い出し行ってきて、とびきり美味しい飯でも作ってやる」

全身黒ごげのサンジが立ち上がりとしたのを、ナミが抱き着いて止める。

その際、彼女の豊満な胸にサンジの顔がジャストフィットした。

「一番休まなきやいけないのはゼウスの雷を受けたサンジ君でしょ!!  
買い出しは私が行ってくるから!!」

「——お……おば……絶景……」

「おいナミ、サンジが更に死にかけてるぞ……」

白目を剥いて意識を失うサンジに、チョッパーが突っ込みを入れる。

傷の浅い他の者達も立ち上がり、島の中央にある街への買い出しを手伝うことを決めたようだ。

「牛乳が欲しいですね〜」などというブルックを先頭に、街へ向かう一行。

その最後尾で、ルフィが右手をじっと見つめ、眉間にしわを寄せている。

同じく後ろに居たゾロが足を止め、彼に話しかけた。

「負けたのが、悔しいのか」

「……ああ。まさかあそこまで、手も足も出ないなんて思わなかった。俺もバレットを倒せるぐらい、強くなつたはずなのに……」

「確かに、仲間に手を出されてすぐ逃げて帰るなんてのは……船長のやる事じゃねエ」

心に刺さる一言を放つゾロ。

ルフィは何も言い返さず、背後の、サニー号がたたずむ赤い海の方こう側を見る。

「だから……次は絶対に勝つぞ」

「! —— ああ!!」

2人は再び足を進め、先を進む一行を小走りで追いかけた。

——翌日。  
ラブヒーローが、新海軍本部を襲撃した。

ラブヒーローは海軍本部を襲撃し世界へ宣言する

——ドン!!

マリンフォード頂上戦争後、新設された海軍本部の壁が突如として爆ぜた。

廊下を歩いていた者は咳き込みながらも、爆発した壁の方を見る。

「……」

砂煙を切るように、彼らの前に現れたのは。

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭先从前まで靴先まで覆い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

ラブヒーローだった。

……その横には、少しおびえた様子の蒼い髪の少女も立っている。

流石、本部に所属する海兵と言うべきか。

彼らは即座に銃を構え、ラブヒーローと少女に銃口を向ける。

「一体、海軍本部へ何をしに来た!!」

先頭にいる、恐らく彼らの中で一番偉いと思われる人物がそう叫んだ。

少女はその大声にビクツと震える。ラブヒーローは彼女の方を一

瞥した後、海兵に向かって平然と言いつつ放った。

「暴れに来た。——小さな太陽ミニッツ・コア」

「!! 全員退避——」

先頭の子兵がそう叫んだ瞬間、ラブヒーローの手に直径3mの熱の塊が発生した。それを躊躇いもなく海兵に打ち放つ。

殺さない程度に威力が抑えられていたのか、太陽が通過した後は、火傷を負って気絶した海兵が倒れていた。

何の感慨もなさそうに彼らを見下ろすラブヒーロー。

それを見て、彼の後ろに控えていた少女……アピールが唇を震わせ

ながら言った。

「ラブ、ヒーロー。私は、こんな事に加担する気は……」

「必要な事だ。殺しはしない」

「そういう問題じゃありません。私はこれ以上人を傷つけないから貴方を手伝うんです」

「……人を傷つけない、と言うのは無理だ。だが殺さないは約束できる。それで我慢してほしい」

「……………」

ラブヒーローは振り返らない。それは自分の意見を曲げない、曲げることは出来ないという意思表示の表れだ。

彼女は彼のそんな様子を見て、目を閉じ、数秒経った後に。

「分かりました」

と、小さな声で答えた。

ラブヒーローは少女を肩に乗せ、暴れ回った。

海軍将校すら出てきたが、一撃で吹き飛ばした。

面倒な巨人族の海兵相手には太陽を撃ち、海軍本部に大穴を開けた。

そうして、十数分ほど暴れていたところで。

海の方から放たれた、恐ろしい、背筋に氷柱が刺さるような悪寒が走った。

ラブヒーローが海の方を見ると、一隻の船が全速力でこちらに向かってきているのが見える。

その船首から一つの影が飛び上がり、空中を蹴って矢のように鋭く飛んできた。

「誰だ？ 大将か、もしくは——」

その人物の正体は、3秒もしないうちに分かった。

右拳を黒い武装色で覆った、白髪の髭と髪をこしらえる老兵。

海軍の英雄、モンキー・D・ガープだった。

「——何やつとるんじやアアああああ!!!」

「一番面倒なのが来たな……!」

ガープの右拳を、白い武装色で覆った両手で受け止める。

それでも受け止めきれず、数歩ほど背後に押し込まれてしまった。ラブヒーローも相当な腕力を持っているが、ガープはそれ以上である。

「相変わらず、怪物みたいな爺だ……!」

「お前……海軍本部に来て暴れ回るなど、覚悟はできとるんじやろうなア!!」

ガープの左拳も黒く染まり、ラブヒーローに恐ろしい速度の乱打を仕掛ける。

見聞色の覇気で未来を見ながら防ぐが、それでも時折体に拳が掠めるほどの威力とスピードだ。

ガープの両腕を下から上へ弾き、無防備な腹へ膝蹴りを入れる。

だが向こうも膝蹴りを入れようとしていたようで、互いの足が轟轟しい衝突音を響かせるだけに終わった。

互いの脚力で後方に3mほど弾かれ、着地したのち、戦闘態勢のまま睨み合う。

「ただ海軍本部で暴れる……お前はそんな事をするタマではないじやろう……!」

「当たり前だ。何の用もなく、こんな危険な所で暴れる訳がない」

「じゃあ何をしに来た……!!」

その質問に、ラブヒーローは辺りを見回す。

戦闘に巻き込まれないよう少し遠くに居たアピールを近くに寄せ、大きく響く声で言い放った。

「もうすぐ、世界会議<sup>レヴェリ</sup>が行われるだろう。そんな中、海軍本部でもう20分近く暴れているんだ。目ざとい記者なら絶対に見逃さない。……モルガンズ、見ているんだろう?」

モルガンズとは、世界経済新聞社の社長であり一流のジャーナリストだ。

ラブヒーローは見聞色を使わない。

だが、ヒシヒシと何処かからの強い視線を感じる。この舐め回すような、相手の情報をしゃぶりつくすような視線。普通のジャーナリストではない。

絶対に奴はいる。そう確信していた。

そして、その予感は見事に当たっていた。

ラブヒーローから物理的に見えない角度の高台の上で、双眼鏡とペンと紙を持ったモルガンズが面白そうに笑う。

「おいおい、マジかよアイツ！ 俺の存在に気づきやがった!!」

……だがよ、わざわざこの俺を呼ぶためにここまで暴れたんだ。とんでもない大スクープを持ってきてくれるんだろうな？ 天竜人殺しのラブヒーローよ」

モルガンズは耳を澄まし、ラブヒーローの一挙一動に意識を集中させる。

これは彼のジャーナリストの勘としての予感だ。精度はいい。

奴はきつと、とんでもない大スクープを、今から言う。

それに応えるように。

ラブヒーローは息を大きく吸い込み、大きな声で言い放った。

「今から10日以内に、この海を航海する人間は全て、自身の故郷か大切な者のいる場所へ帰れ!!」

私は残り2つのエンドポイントを破壊し、この海を人間が生きられない場所へと変える!!

それはすなわち——『大海賊時代の終わり』を示す!!

そしてもし……私を止めたければ、エンドポイントに來い!!

残り2つのエンドポイントの場所は、『セカン島』と『ピリオ島』だ

!!

その島の住民には申し訳ないが……戦場を生きられる実力が無い

ならば、逃げることをお勧めする!!」

そう、宣言した。

それを言い終わった後のラブヒーローは、少しだけ空を見上げ、すぐにガープへ視線を戻す。

「言ってしまったな。モルガンズは絶対にこれを世界に広める。そういう男だ」

バサバサと、今しがた手に入れたスクープを何処かに持ち帰る男の羽ばたく音が聞こえて来た。

だがそちらに意識を裂く必要はない。ガープを見つめ続ける。

「お前……エンドポイントの場所を世界中に広めるなど、何を考えている」

「これはいわゆる、私からの挑戦状だ。海を人間の領域から外すなど、私が独断で行っても駄目だろうか？ 止めたければ止めに来い」

「……本当に心の底からイカれたのか、この馬鹿モンが!!」

ガープが一瞬でラブヒーローに殴り掛かる。

しかし彼は横に居たアピールを掴み、空へ飛び上がって回避した。

空中に直立し、ガープを見下ろす。

「じゃあな、ガープ。もし止めに来ないというのなら……自分が落ちて着いて暮らせる場所を探し、そこに住み着くことだ。それが一番幸せだからな……」

それだけ言い残し、彼はアピールと共に何処かへ飛んでいった。

その逃走速度は、黄猿でもなければ決して追いつけないだろう。だが黄猿はここにはいない。

ボロボロになった海軍本部と倒れる海兵たちの中、ガープは空を見上げながら、静かに呟いた。

「本当に、何を考えとるんじや。ロジャーと居た時はそんな奴ではなかったじやろう、ラブヒーロー……」



## ラブヒーローの居場所を探す

世界へ向けて、大それた事を宣言したラブヒーロー。

その言葉は一言一句漏らさず、モルガンズの世界経済新聞に掲載され、世界中に広められた。

さて、そんなラブヒーローの宣言に対し、大衆の反応は。

『何を言ってるんだ。そんな事ありえない』

だった。

仕方のない話である。ある日突然、重要な交通手段である海に出れなくなる、だから故郷に帰れなどと言われ即座に信じれる訳がないだろう。

ただ、嫌な予感を感じ取った勘の鋭い人々は故郷に帰ったり、大切な人のいる場所へ向かったりしている。

ラブヒーローの行いを止めに行こうとする者は、更に少なかった。彼の愛への狂気を理解しつつ、その宣言が本当であると確信した上で、自分達にラブヒーローを止められるだけの实力があると思う者。

麦わらの一味は、この厳しい条件に当てはまっていた。

船上で戦った時も、新聞でも『大海賊時代を終わらせる』と宣言しているラブヒーロー。海賊王を目指す彼らにとってそれは絶対に許せない行為である。

その上仲間を傷つけられて、サニー号を滅茶苦茶に破壊されたという恨みもある。全員の意向が一致し、ラブヒーローを追跡することが決定した。

全速力で海を航海し、彼らが向かったのは『セカン島』。

海列車と温泉が有名な島だ。

「ついでぞ、セカン島!!」

真っ先に船首から飛び降り、地面に着地したルフイはそう叫ぶ。

ここまで来るのに、クードバーストを時折挟みながらも5日掛かった。

新聞でラブヒーローが上げた、エンドポイントの一つ。

まだセカン島とピリオ島のどちらも破壊されていない。だがもう期限の10日、その半分が過ぎている。いつ破壊されてもおかしくない状況だ。

「まずは情報収集。この島にエンドポイントがあるのは分かっているけど、島の何処がそのエンドポイントと呼ばれる火山か分からないもの」

ナミがコツコツと足音を鳴らして歩きながら、そう言った。

肝心のラブヒーローがどこにいるのか分からなければ、止めようもないという事だ。

「情報収集は私たちがやっておくから……主力組はしっかり体を休めておいて」

「私はどうしましょう？ 皮を被るのは得意ですよ。あ、私、もう皮がありませんでした！ ヨホホホ!!」

「骸骨に情報収集を任せる訳ないでしょ!!」

「そもそもブルックは、皮を被って演技するのも苦手だろ……」

「あ、バレました？ さすがチョツパーさん、その慧眼を見習いたい！

あ、私、もう目もありませんでした!!」

「アンタはもう黙ってるッ!!」

ナミの拳がブルックの顎を捉え、「ヨホホホ」と上下に揺れながら不気味に笑う。

とりあえず、ラブヒーローとの戦闘の主力であるルフィ、ゾロ、サンジ、フランキー、ブルックは休息。

情報収集はナミ、ウソップ、ロビン、チョツパーの組み分けとなった。

情報収集組はそれぞれ変装し、人の集まる場所へ向かう。

休息を取る主力組は、この島の名物である温泉へと向かった。

「……新聞でここにエンドポイントがあるって書いてたのに、随分と活気があるな」

サンジがタバコを啜えつつ、辺りを見回してそう言った。

確かにラブヒーローが逃げろと警告していた割には、この島にはかなりの人が残っている。

他の島からの旅行者までちらほら見かける始末だ。

「そう簡単には信じられねえってことだ、あんな大それたニュースなんざよ。……だがもし、残り2つのエンドポイントのどちらかが破壊されるなんて事があれば、一齐に世界がパニックになるだろうな」  
フランキーの言う通りだ。

大衆はまだ、目を逸らしている状態である。

世界を変えかねない大事件から、自分は関係ないと目を逸らしている。今まではそれで大丈夫だったかもしれないが、今回ばかりはそうはいかない。

エンドポイントが実際に破壊され、ラブヒーローの言っている事が本当だと人々が理解できてしまったなら……どれほどの混乱が起きるかは想像に難くない。

一行は島で一番大きな温泉宿に入る。

偶々他の客が殆どおらず、骸骨姿のブルックでも特に問題なく入浴することができた。

上流から流れて来た湯が、斜面に設置されたいくつもの丸い風呂桶に流れているという少しユニークなデザイン。

丸い風呂桶は水がパンパンに溜まり、古い水は自動で下へ下へと流れていくように設計されている。

まあ水の循環率や利便性はどうかあれ、見た目に美しい温泉であることは間違いなかった。

「ほへ〜……」

「良い湯ですね〜……」

能力者であるルフィとブルックが風呂の湯につかり、脱力する。悪

魔の実を食べ海に嫌われた彼らは、風呂釜に溜まった水程度でも力が抜けてしまうのだ。

「この湯はスーパー体に良い成分が含まれてやがるな！ 肌がもちもちプリンみたいになりやがるぜ!!」

フランキーが手の中央からスポイトのような吸引機械を出し、温泉の湯を少量吸い上げながらそう言った。湯に浸かるよりもまず成分を調べていたらしい。

両手で湯を掬いながら、サンジは感心したように言葉を漏らした。「へエ〜。俺達が来るよりも、ナミさん達が来た方がよかつたんじやねエか」

「それに、体中に力が漲って来やがる。これも湯の成分か、フランキー？」

「いや、そんな成分は含まれてねエな」

「頭の雑なマリモはお得だな、色々な効果を勝手に感じられてよ」

「んだとぐる眉コック!!」

ザババツと湯の中から立ち上がったサンジとゾロが睨み合い、がなり合う。

そんな風に騒ぐ彼らを、上流に近い風呂釜に浸かり、見下ろす人物が2人。

その1人、大柄で紫髪の男が、もう1人の男に話しかけた。

「……騒がしい奴らが来たな」

「ああ、ありやあガープさんの孫の一味ですよ。ほら、噂の麦わら海賊団……」

「なるほど。アイツの孫か……なら騒がしいのも納得できる」

「ただ……ちいっとばかり騒ぎすぎですね。——おい、お前ら!!」

ルフィ達を呼ぶ、聞き覚えのある男の声。

喧嘩しあっていたサンジとゾロですら一旦動きを止め、声の方に振り返った。

そこに居た、声の主は。

「久しぶりだな。元気してたか？」

「あつ……青雉イ!？」

ルフィが慌てるあまり、風呂釜の縁に引つ掛けていた足を滑らし、ぶくぶくと湯の中に沈む。

声の主の正体は、元海軍大将青雉。

そしてその横に居たのは、元海軍大将にして海兵訓練教官のゼファーであった。

サンジとゾロが真つ先に構え、フランキーは手首からマシンガンの銃口を覗かせる。

それを見たゼファーは目を細め、武装色の覇気を纏おうとしたところで、青雉が右手を軽く振って両者を制止した。

「おいおい、俺は別にお前らを取っ捕まえる気はねえよ。俺はもう海軍辞めてんだ」

「……じゃあ、そつちの男は誰だよ!!」

「こつちは……俺が新兵の時に鍛えてもらった人だ。この人はまだ海兵だから、下手なことはすんなよ」

青雉がゼファーの事をそう軽く紹介する。

だがルフィ達は一向に警戒を解かない。それどころか、海兵と紹介してしまつたせいで、余計に警戒を強めてしまつたようだ。

「あらら〜」と、どんな風にも言葉を選ぶか悩む青雉。この場で戦闘など始めれば面倒な事この上ない。

青雉が悩んでいるのを見て、ゼファーは風呂桶の縁を掴み、一気に立ち上がった。

「海賊とじゃれるつもりはない。俺はもう出て行く」

「あく、そうですか。気をつけてくださいね」

「気を付けるのはお前だ、クザン。用がないならさっさとこの島から出て行け」

ゼファーはルフィ達の横を素通りし、温泉宿から出ていく。

その後ろ姿を見て、風呂桶の縁に肘を寄せ、頬杖を突く青雉。

「全く、ラブヒーローを追いかける時はいつも頑固なんだから」

「!? 青雉、お面白いおっさんの居場所知ってんのか!」

ルフィが、『ラブヒーロー』の名前に強く反応する。

風呂の湯が流れる音だけが静かに響く。

そんな緊張感のある空気の中、数秒ほど経って、青雫は口を開いた。「白いおっさん？ 何、そんなファンシーな名前でアイツの事呼んでんの？ ウケる」

「いやそこじゃねエよ!!」

鋭い突っ込みを入れるサンジ。

本人も場の空気を茶化した自覚があつたのだろう。「悪い悪い」と風呂の縁を掴み、立ち上がった。

「そういう話は外でやろうか。少し、のぼせちまつた」

青雫は、失った左足を氷で作り、歩き出す。

なぜ左足を失ったかは、彼が海兵をやめるきっかけになった赤犬との戦いのせいなのだが……その辺りは今は関係ないだろう。青雫本人も詳しく話す気はない。

麦わらの一味と共に温泉宿の外に出て、海岸線を歩く青雫とルフィ達。

水平線に太陽が沈み始め、紅い灯が太陽から彼らへ一直線に伸び、ゆらゆらと揺れている。空は赤と黒が混じり合った紫色に染まっていた。

静かに吐く息が白く染まる。

「俺がこの島に来たのは……馬鹿な事をやらかそうとしてる男を止めるため、だったんだがな。」

ラブヒーローの愛への執着は半端じゃねエ。姿や言動はどうあれ、海軍とはまた違う悪への抑止力、正義だったのは確かだ。そんな奴が世界を巻き込んで何かやらかすってんだ。きつと悪いようにはならねエ。

……俺は、傍観することにした。海兵でも何でもねえ俺が、手を下せるラインはとつくに超えたのさ」

青雫は海岸線をしばらく歩いたところで足を止め、辺りに人がいないことを確認してから、背後のルフィ達に振り返った。

「お前さん方、ラブヒーローを止めに来たんだろ？」

当然と言わんばかりに、全員が青雉の目を見つめる。

先頭にいたルフィがもつたいぶる青雉に腹を立てたのか、ラブヒーローへの怒りが抑えきれなくなったのか、少し声を荒げた。

「ああ。おっさんは俺の仲間を傷つけたんだ、一発殴らないと気がすまねエ!!」

「おいおい、大それたことを言うもんだな。分かってるか？」

ラブヒーローの懸賞金額は32億2000万ベリー。四皇の末席に加わってもおかしくねえ金額だぞ。それでも殴りに行くっていうのか？」

「——当たり前だ!!」

彼の言葉に、青雉は目を閉じ、顔を俯かせる。

そして実に残念そうに、口を開いた。

「気迫は認める。だが……」

——その考え方やあ、ラブヒーローには勝てねえよ。お前」

「——!!」

ルフィの驚愕した顔に目を向けることもなく、彼らに背中を向ける青雉。

足を止めたままのルフィ達にひらひらと手を振る。そして3mほど離れた所で、振っていた手を人差し指のみを立てた矢印の形に変え、島の裏側を指さした。

「ラブヒーローがいるエンドポイントは島の裏側だ。ま……俺の言葉が信じられないなら、一度全力で戦ってみな。」

去っていく青雉。

彼の言い残した『その考え方ではラブヒーローには勝てない』という言葉。

一体、どういう意味を孕んだ言葉なのか。

ルフィ達には推し量ることもできない。

「ルフィ〜！」

遠くから、情報収集をしていたナミたちが走ってくるのが見えた。その様子から察するに、エンドポイントの場所でも分かったのだろう。こちらも今しがた分かった所だが。

険しい顔をしたままのルフィを筆頭に、麦わらの一味はラブヒーローが待ち受けているであろう、エンドポイントの中心へと向かった。



ラブヒーローはエンドポイントで待ち構えている

セカン島のエンドポイント付近には海軍が大量に並び、警護している。

そこに突如降り立つ、一筋の白い光。

砂煙を腕で切り、現れたのは。

身長3m。筋肉モリモリ。

白タイツスーツで頭の前から靴先まで覆い、顔には表情が見えないほど濃い赤のバイザーをはめ込んでいる不審者。

ラブヒーローだ。

彼の側には、ウロボロスの持ち主であるアピールもいる。

その2人を見た海兵たちは覚悟を決めた表情で隊列を組み、銃を構えた。

「敵影確認！ 全員射撃用意！！ —— 発射！！」

放たれた無数の銃弾は、吹き荒れる嵐の様相に似ている。

ラブヒーローは前方に空気の壁を展開し、銃弾を全て防いだ。海兵たちの銃弾があらかた切れた所で、空気の壁を解除する。

その瞬間、海兵たちの後方から一人の人間が飛び上がった。

海軍将校だ。六式も使えるであろう彼は、空気を蹴り、目にも止まらぬ速さでラブヒーローに迫る。

ただ、海軍将校の使える剃や月歩程度ではあまりに遅すぎる。

ラブヒーローは彼の頭を掴み、四肢の関節を外した後、頭から地面へ叩きつけた。

一撃で気絶してしまったのだろう。白目を剥いたまま体をピクピクと動かすも、関節が外れているせいでマトモに体が動いていない。まるで芋虫のようだ。

哀れな海兵にそれ以上気をやることもなく、ラブヒーローは手の骨をポキポキと鳴らす。

こういう雑兵を相手にする時だけは、霸王色の覇気を持つ者が羨ましくなる。いちいち体を動かさず、覇気を流すだけで済むからだ。まあ、アレは生まれ持った素質が関係するのだからいくらごねても仕方ない問題である。

「アピール、少し離れている。3分もあれば終わる」  
「……」

蒼い髪の少女は特に逆らうこともなく、彼の言葉通りに5歩ほど後ろへ下がった。

そして、ラブヒーローの言った通り。

3分後には、大量に並んでいた海兵全員が、地面へ倒れ伏しているのだった。

麦わらの一味がエンドポイントへ到達する。

真つ先に目に飛び込んできたのは、倒れ伏した大量の海兵。

そして、海兵を倒し終わりエンドポイントの中心へ向かうラブヒーローとアピールの後ろ姿だった。

「——ッ！ 待てよ、おっさん!!」

ルフィの大声が聞こえたのか、肩越しに振り返るラブヒーロー。

だが、何も言わず、それ以上振り返ることもせず、再び中心へ向けて足を進め始めた。

「このッ……!!」

眉間にしわを寄せたルフィが彼を追いかけようと、足に力を込めた時。

紫髪の大男が、恐ろしい速度でルフィに迫っていった。

「海賊風情が、出張ってきたるんじゃねエぞおおお!!」

ゼファーが右腕に着けたバトルスマツシャーを振りかぶり、ルフィに殴り掛かった。

意識をラブヒーローに向けていたルフィには避けられない。顔に武装色の覇気を込めて耐えようとした瞬間。

その雄々しい機械の腕を、受け止める2人の男。

「こいつは、俺とコックが食い止める!」

「早くラブヒーローを追いかけろ、ルファイ!!」

バトルスマツシヤーを受け止めたのは、ゾロとサンジだった。

他の麦わらの一味も、何処からともなく現れた海兵の相手を始めている。中には海軍中将の姿も見えた。

「悪い! 頼んだ!!」

麦わら帽子を片手で抑えながら、エンドポイントの中心へ向かう。

ルファイから意識を外し、ゼファーに最大の警戒を払う2人。

紫髪とその巨軀から、温泉宿で青雉と共に風呂に入っていた人物だと言うのはすぐに分かった。

そして、並々ならぬ実力を持っていることも。

「大将でもねえのにこの圧力……海兵つてのはとんでもない化け物が混じってやがるな!」

「舐めんじゃねえ、俺は元大将だ!!」

ゼファーがバトルスマツシヤーを爆発させ、2人を吹き飛ばす。

着地ざまの隙を見逃さず殴り掛かるゼファー。だがゾロとサンジがお互いの隙を上手くカバーするせいで、中々攻めきれない。

正に拮抗状態。

お互いに別の方向へ気を散らせば、すぐに決着がつくだろう。

「なぜ俺を止める、ラブヒーローを倒さなければこの海の全てが終わるんだぞ!!」

「お前が海兵だからだろう、がッ! 首肉コリエシユート!!」

「うちの船長ごと殴り飛ばすつもりだろうが、元大将——羅生門!!」

ルファイを除く麦わらの一味は、島の海岸線で海兵たちを食い止め続ける。

場所は変わり、エンドポイントの中心。

恐らく海岸線ではなく、中心辺りにも警備を敷いていたのだろう。だが全員が顔か腹への一撃で気絶し、その場に倒れてしまっている。ルフィは中心に近づくにつれ、肌に刺さるような緊張感が張り詰めているのに気付いた。

それでも足は止めず、ラブヒーローを追いかけ続ける。

そして、エンドポイント……火山の火口に辿り着いた。

人が乗れるぐらい固まった溶岩の上に立つ白い男と、蒼い髪の少女。

ラブヒーローと、アピールだ。

「——おっさん!!!」

その場で飛び上がり、ラブヒーローに殴り掛かる。

覇気も纏っていない右手で簡単に受け止められ、10mほど離れた岩へ投げ飛ばされた。

岩を叩き割るほどの威力で投げ飛ばされたが、ゴムの体ゆえ物理的なダメージは受けない。すぐに立ち上がり、攻撃の姿勢を取る。

「私を止めに来たか、モンキー・D・ルフィ」

「止めに来たんじゃないやねえ、殴りに来たんだ!!」

「……まあ、それでもいいが」

両者は睨み合う。

アピールはいつもの如く、2人から少し離れた所へ移動した。

腕に武装色を纏いながら、ルフィは問いかける。

「何で、世界中にあんな宣言をしたんだ?」

ラブヒーローは何のつまりもなく、平然と答えた。

「……私は愛を何よりも尊重する。これからすることは、世界の為にはなるが……誰かの愛を潰す結果になることもある。だから、気に食わない者に私を止める権利を世界中に渡したのだ」

「そんなの滅茶苦茶だろ。そんな風に考えるなら、最初からやらなければいいじゃねえか」

「元々、やるつもりはなかったさ。だが、この計画を始めた根本の原因は……お前だ」

つらつらと、記憶をなぞるように話し始める。

「私の計画には、ウロボロスの持ち主であるアピールが欠かせなかった。だがアピールがインペルダウンのLEVEL6にいる以上、私も手を出す気はなかった。

そんな時、インペルダウンから囚人脱獄のきっかけを作ったのが……お前だ、モンキー・D・ルフィ」

そこで、彼は一度顔を伏せる。

数秒そうした後、ルフィに優しく語り掛けるような、不気味な口調で話し始めた。

「大海賊時代が始まった時から、この世界は少し——愛を乱す輩が増えすぎた。海賊だけではない、不法な利益を得る海兵や治安悪化で暴行を働く一般市民。

だが私の計画を行えば、全てが丸く収まるんだ。手間はかかるが、世界をやり直すチャンスなんだ。

大海賊時代は終わる。だが、人々が、愛をこれ以上失わずに済む。私はな、モンキー・D・ルフィ。初めて出会ったあの砂浜で、本当の愛を見せてくれたお前に……この計画を、ぜひ手伝えてほしい。

そのためなら、仲間を害したことはいくらでも謝罪しよう。私を殴りたいのならいくらでも殴らせてやる」

それは本心なのだろう。

ラブヒーローの口調や仕草は、嘘偽りで出来るようなものではない。全てが真に迫った動きだった。

だからこそ。

ルフィには、許容できない。

「手伝える訳ねえだろ！……『ラブヒーロー!!』」

白いおっさんからラブヒーローへ呼称を変えたのは、完全な敵対関係の表れだ。

海賊王になる夢がある。

シャンクスに麦わら帽子を届けねばならない義務がある。

ラブヒーローの手伝いをすると言うことは、これらを捨てると言うことに等しい。

そんなことは、モンキー・D・ルフィには出来るはずがなかった。

「——そうか。残念だ」

悲しそうな声色。ラブヒーローが両手を白い武装色で覆う。

それを見たルフィが、右手首に口を当て、勢いよく息を吹き込んだ。風船のように全身が膨張し、バインバインとゴムまりのように体が跳ね始める。

「ギア4！<sup>フォース</sup> バウンドマン!!」

「……なんだその珍妙な姿は……」

バウンドマンと呼ばれる、ルフィの新しい形態。

それはルスカイナ島で修行をしていた時、そこに住む巨大な原生生物へ対抗するために編み出した形態だ。攻撃力に特化するため膨らんだ胴と腕、そのままの大きさの足と上下でちぐはぐなバランスをしている。ただ身長は相当に大きくなっており、3mあるラブヒーローよりも少々高い、4mほどにまで成っていた。

「この前みたいにはいかねえぞ!! ゴムゴムのオ、<sup>コングガン</sup>猿王銃!!」

「!!」

ルフィの黒く巨大な腕が伸び、ラブヒーローに迫る。

彼はそれを避けるでもなく、少し腰を落として、覇気で固めた右手で受け止めた。

地面の方が耐えきれず少しひび割れるも、ラブヒーローは全く身を動かさなかった。完璧に受け止められたのだ。

「クソっ！ なんて硬エ覇気なんだ!!」

殴られるよりも殴った方が痛くなるような、圧倒的な覇気の硬さの差。

ラブヒーローは足元に空気の壁を展開し、痛みに気を逸らすルフィとの距離を一瞬で詰めた。みぞおちを右拳で深くえぐり、左拳で顎を下から上へ穿つ。

常人の感覚で言えば、ダイアモンドの棒で腹と顎をぶん殴られたような感覚だ。人外の如き腕力もあいまり、ルフィはえづきながら後方へ吹っ飛ばされた。

再び大岩に叩き込まれる。地面にひびが入るほどの衝撃だったが、ダメージは余りない。

バインバインと体を跳ねさせながら、顎と腹をさする。生半可な攻撃ばかりしていたら、カウンターを喰らいまくってこちらが自滅してしまう。出す技を考えながら戦わなくてはいけない。

(力も速さも覇気の硬さもオレよりずっと上だ！ 勝つためには、レイリーの言ってた……『弱点』を突くしかねエ!!)

ルフィは、ルスカイナ島でレイリーが白い覇気の次に話していた、ラブヒーローのとある弱点について思い出していた。

「ルフィ君。ラブヒーローは『圧縮』の能力で、世界最高の硬さを手に入れたわけだが……。だからと言って、無敗だったわけではないのだよ。現に私やロジャーは奴をよくボコボコにしていた、覇気の硬さで劣っているにも関わらずにね」

「??? 何でだ？ 覇気が世界一硬エなら、誰の攻撃も効かねえんじやねえのか？」

こてんと首をかしげるルフィ。

それを見てニヤリと笑うレイリーは、足元の、水を多く含んだ泥を手ですくった。

「この泥を覇気に例えたとする。今この、軽くすくっただけの泥は、私達が使う武装色の覇気だ。泥の量を増やせば、面積が増えたり、泥の層が厚くなって硬さを増す」

「? よくわかんねーけど……」

「ここからが本題なのだよ。この、覇気に見立てた泥を……思いきり握る!!」

全身全霊の力で、手に乗せた泥を握り込むレイリー。

数秒そうした後、開いた手の中には小さくなった土の塊があった。圧力で水分が抜け切り、先ほどのべちゃべちゃの泥よりも圧倒的に固まっているのが分かる。

「先ほどの、すくっただけの泥と今のこれ。どう変化したかね?」

「……どうって。小さくなって、硬くなった?」

「そう。……『小さくなった』のだよ、ルフィ君」

レイリーは土の塊をその辺に捨て、パンパンと手の泥を払った。

「奴のギチギチの実の『圧縮』という能力は、物を小さく縮めて硬くする能力だ。これはラブヒーローの白い武装色も例外ではない。」

アイツの白い武装色は、『小さな面積』で『2箇所しか』覆えない。両腕なら前腕の中央まで、両足なら脛の中央より少し下。……つまり、私たちがどうやってラブヒーローをボコボコにしていたか、分かるかね?」

そう問われたルフィは少し悩み、口を開いた。

「……体のどこか2箇所を覆った瞬間に、それ以外の所を殴る。2箇所しか覆えねえから……それ以外なら普通にダメージを与えられる」ルフィの言葉に、レイリーは嬉しそうにニコリと笑った。

「——正解だ、ルフィ君。それがラブヒーローの世界一硬い武装色の、大きな大きな欠点だ。」

奴の『弱点』は覇気で覆える箇所が少ないこと。

逃げられないほど広範囲で、威力が高く、防ぎきれないほど素早い連打攻撃はモロに食らってしまうのだ。……今まで格上の強敵と何度も戦ってきた君なら、それに似た技をもう使えるのではないかね?」



「広範囲で、威力が高くて、素早い連打攻撃……?」

今までの強敵たちとの戦いを脳裏に思い浮かべるルフィ。

何度も何度も命懸けで戦ってきた。その中に、30億のラブヒーローの弱点へ刺さる技があるかもしれないと言う。今はまだ、思い出せないが。

「……まあ、そう悩まなくてもいい。今の君では、目の前に立った瞬間殴り飛ばされるのがオチだからな! ブワツハツハツ!!」

豪快に笑うレイリーに、ルフィが少し腹を立てる。

飯を食っていた途中であるため黙っていたようと思っていたことを、ルフィは口にした。

「レイリー、さっき握ってた泥だけだな。アレ、そこら辺の猛獣が小便引っ掛けてた土だぞ」

「何ッ!? そつ、それを早く言わんかッ!!」

……ルスカイナ島の夜は更けていく――。

「――ゴムゴムの猿王群鴉砲!!」

ルフィの気迫からなのか、そのスピードからなのか、彼の腕がまるで左右に3つずつに並んで増えたような乱打が降り注ぐ。

落ちてくる拳たちを全て捌きながら、ラブヒーローは右の手のひらに熱を圧縮し、ルフィに発射した。

「ミニ小ツツ太・コア」

「ツ！ ゴムゴムのオ、獅子バズーカ!!」

直径3mの太陽に、腕の中に入れ込むようにして力を溜め、勢いよく両腕の掌底をぶつける。一瞬熱さを感じたものの、すぐに太陽が攻撃の威力に耐えられず霧散した。

もはや太陽系の技で一番小さく弱いミニッツ・コアでは、ルフィを止めることは出来ない。

ラブヒーローが体勢を整え切る前に、ルフィは両腕に力を溜め、更なる乱打攻撃を撃ち放った。

「喰らえエ、ラブヒーロー!! ゴムゴムの猿王銃乱打!!」

先ほどのコングオルガンよりも更に威力の高い連撃だ。

地面を抉り取って余りある威力の攻撃。ラブヒーローは未来視を行いながらそれら全てを受け止めつつ、後方に飛び下がる。

そうして、先ほどから連打攻撃ばかりしてくるルフィに対して、静かに言い放った。

「お前、私の武装色の弱点をレイリーから聞いたな。……レイリーめ、余計な事を」

ラブヒーローが足元に空気の壁を展開、姿を消す。

視界から消えたと思ったのもつかの間だった。すぐにルフィの前に姿を現し、みぞおちに鋭い突きを入れる。

苦しそうに上半身を前のめりにするルフィ。自分から突き出してきた顎を横に弾いて脳を揺らし、動きが完全に止まったところを、白い両拳で滅茶苦茶に殴りまくった。

秒間十数発は下らないスピードの連打。

腕力と覇気の硬さも相まってルフィの体は一瞬で真っ赤に腫れ上がり、上空に吹っ飛ばされた。

生まれた隙をみすみす見逃すはずもない。素早く右の手のひらを向けるラブヒーロー。

「メガテイツク・コア」

生み出されたのは直径10mの熱の塊。未だ吹っ飛び続けるルフィの全身に直撃し、彼を空の彼方まで連れて行ってしまった。

「終わったか……」

空に輝く白い点。太陽はあの様子では太陽は暫く消えることはないだろう。まあ、海に到達する直前ぐらいには消えるはずだ。

そう思っていたのも、束の間。

「ゴムゴムのオ!! キングコングガン 大猿王銃」 ツ!!

突如、太陽とほぼ同等の大きさの黒い拳が現れ、勢いよく太陽をぶち殴った。

数秒威力が拮抗していたものの、やがて太陽の方が押し負け始め、遂には貫いてしまう。圧縮の解除された熱気が周囲に大きく広がる中、空中を蹴ってラブヒーローの元まで戻ってくるルフィ。

「あの大きさの太陽を壊すか……」

「クソツ、バウンドマンじゃいくらやっても当てられねエ、反撃を喰らうだけだ……!!」

だったら、と。

ルフィは一度ギア4を解き、再び右手首に口を当て、勢いよく空気を膨らませた。

10秒も経たないうちに変化した新しい姿は、先程の姿とは様相が大きく異なる。

バウンドマンが体と腕が巨大化したチグハグな姿だったのに対し、今の姿は、元のルフィをそのまま3m近くにまで大きくしたような感じだ。両腕に覇気を集中させた細身の体からは、身軽そうな印象が伝わってくる。

鋭い視線をラブヒーローに向けるルフィは、両腕を前に構えながら叫んだ。

「……ギア フォー 4! スネイクマン!!」

今度はさつきみみたいに反撃できねエぞ! ゴムゴムの、JET カルヴァリン 大蛇砲!!」

「!」

黒い腕が、先程までの攻撃とは比較にならない速度で空中を駆ける。

それは十数m離れていたラブヒーローの眼前に一瞬で迫り、その体

に衝突した。しかし覇気を纏った両手で防がれてしまっている。

拳を振り払ったラブヒーローは足元に空気の壁を展開し、空に飛び上がった。

「まだだ!! 追え、大蛇!!」

「!? 高速の追尾攻撃か、厄介な……!」

何度も何度も直角に曲がり、ラブヒーローを追いかけて伸びて行くルフィの拳。もう片方の拳も飛ばし、両拳でラブヒーローを追い詰めて行く。

そして遂に、ラブヒーローの覇気を覆っていない頭を打ち抜いた。出血こそしないものの、白いタイツに汚れが付き、ガクンと大きく彼の頭が揺れる。

「当たった!!」

バランスを崩したように、地面へ落下するラブヒーロー。

それをチャンスと見逃さず、伸ばしていた拳を高速で縮め、再び打ち出す。しかし先ほどの何処までも追いかける拳とは異なり、上空から雨霰のように降り注がせるように攻撃した。

「ゴムゴムの、黒い蛇群!!」

圧倒的な速さで襲い掛かる拳の雨。

それはラブヒーローを持ってしても捌き切れる速さではなく、両腕を頭の上で交差させて防ぐほかなかった。

「……」

大きくグラつくラブヒーローの体。

レイリーの言っていた通り、覇気で覆っていない箇所が生まれる事は大きな弱点だったらしい。速度重視のスネイクマンで攻撃し、当てられるようになってから、直ぐにラブヒーローへダメージが入るようになった。

…… 不自然なまでに。

自身の思い通りに事が進んでいる高揚感からか、ルフィはその違和感に気づかない。

両腕を引っ込め、直ぐに止めの一撃へと移る。それはゴムゴムのバズーカをスネイクマンの技へと昇華させた物。

「喰らえラブヒーロー!! ゴムゴムの……王蛇キングコブラツツ!!」

両腕を一点に集中させ、ラブヒーローを穿たと放たれた一撃。

それはかの三将星シャロット・カタクリに最後の止めとして使った技だ。生半可な威力でもスピードでもない。故にルフィは、勝ちを確信した笑みを浮かべる。

ラブヒーローの赤いバイザーの下にある目が、未来予知を行い。

ルフィの必殺の一撃を両手で完璧に捕まえた瞬間、ルフィの顔からは笑みが消えた。

「なッ!？」

「相手が怯んだ所に強力な一撃を入れるのはいいが…… 怯んだ演技を見破れるようになることだな」

拳を引こうとするも、ラブヒーローの手に掴まれていて、全く動かない。

彼はスネイクマンが素早く、自身に防ぎ切れる速度ではないと即座に悟り、いつか来る必殺の一点集中攻撃を待っていたのだ。

「頭を殴る。覇気で防いでいないと死ぬぞ」

ラブヒーローは、ルフィの手を強く掴んだまま高速回転を始める。

それは極小の竜巻のように周囲の風を巻き上げつつ、ルフィの腕を糸でも絡めとるみたいに伸ばして行った。

「クソ、離せよ!!」

ギア4の形態、特にスネイクマンとなったルフィの体は異様なまでに伸びる。

ただどれだけ伸びるとしても、彼の体は結局ゴムでしかない。いずれ伸びる長さに限界は来るし、その限界が来た時、より強い力で掴んでいた方に体ごと引っ張られてしまう。

その限界が来るのは、想定よりも少し早かった。

40秒ほど経った所で抗いようもない力に体が引っ張られるルフィ。そのままラブヒーローの間合いの中へ自分から突っ込んで行く。

そして。

「……意識を刈りとって余りある白い一撃が、ルフィの顔面に突き刺さった。」

「……ッッッ」

全身の骨という骨が丸ごと叩き折れてしまうような衝撃。

そのタイミングでパッと手を離すラブヒーロー。その衝撃に逆らえず、ルフィは白目を剥いて後方に銃弾の如く吹っ飛んでいった。

頭から血をドクドクと流すルフィ。

演技のために攻撃をいくらか貰ったとはいえ、血の一滴も流していないラブヒーロー。

「……勝敗は決した。」

ラブヒーローは計画の全貌を語る

「クソっ、なんつータフな爺さんだよ……!」

サンジがそう、悪態を漏らした。ゾロもそう考えているのか、息を荒く吐きながら、眉間にしわを寄せる。

彼らに相對するのはゼファー。だがゼファーも新世界を生きるバリバリの海賊を2人同時に相手するのは厳しいのか、時折酸素吸入器を口に当てていた。

両者が再び衝突しよう構えた、その時。

——ドオオオオオン!!!

エンドポイントが、巨大な火柱を上げて破壊された。

それと同時に、空から無数の人影が降り注ぎ、海岸線のあちこちに落下する。それはエンドポイントの中心を警備していて、ラブヒーローになぎ倒された者達だ。

「……ルフィが負けたのか……!?!」

ゾロが火柱の方を見上げながらそう呟く。

その呟きへの答えは、すぐに返って来た。

空からゆっくと、階段でも降りるみたいに、コツコツと少しずつ海岸線に降りてくる大男。

肩には蒼い髪の少女・アピールを乗せ、左手には血まみれのルフィを掴んでいる。

「ラブ、ヒーロー……!」

誰がそう悪態を吐いたのかは分からない。だが、この場の全員が同じことを思っていただろう。

ラブヒーローは海岸線の中央、ゼファアの近くに着地する。近くに居たゾロにルフィの体を投げつけ、肩の少女を下ろした。

「おい、ルフィ!! 大丈夫か!! チョップパー、こいつを頼む!!」

「ああ分かった! ルフィ、起きろ!」

遠くから鹿の姿で駆けよって来たチョップパー。そして体を小さな姿へ変え、ルフィの頬をぺしぺしと叩きながら傷の具合を急いで確認していく。

「……ゴホッ……」

「よかった、意識を取り戻した! 安心しろ、今から治療するからな!!」

ルフィが口の中に溜まった血を吐く。それを見てチョップパーは嬉しそうな表情を浮かべた。

チョップパーとルフィは、ロビンが生み出した無数の手によって優しく、ラブヒーローから離れた場所へ移動させられる。

この海岸線にいる麦わらの一味、海兵までもが、ラブヒーローへ全身全霊の警戒を向けていた。だがその無数の敵意を向けられても一切動じることなく、巨大な火柱の方を見上げるラブヒーロー。

「エンドポイントは残り一つ、ピリオ島のみ。……私が10日という期限を設けたのは、故郷や大切な人がいる場所が多少遠い者でも、何とか帰り着くことができるようにするためだ。

そしてその中には……お前も含まれていたんだがな、ゼファア。何故ここに居る?」

ラブヒーローはゆっくりと、目の前のゼファアへ視線を移した。

もう何度も、彼の機械の腕を破壊し、倒した。その度に自分から離れていけ、関わるなという風な事を言った。

ゼファアは口を開く。

「お前を止めるためだっただって何度も言ってるだろうが、ラブヒーロー」  
「余計なお世話だ、いい加減にしろ。貴様、自分の孫を二度と拝めなくなるんだぞ」

「その孫と出会えたのはお前がいたからだ」

「……………」



顔を背けるラブヒーロー。

数秒そうしていたのち、彼の方に再び顔を向けた。

「貴様、私の計画が成就した時……どうなるかは知っているな。『二度と海に出れなくなる』と、私は宣言したはずだ」

「そもそもだ。その、『海に出れなくなる』ってのがどういう事なのか分からねエ。エンドポイントを破壊しても影響が及ぶのは新世界の海だけだ。……お前、一体何を成し遂げようとしているんだ？」

「……愛をこれ以上失わない世界……と言っても貴様は納得しないだろうな。……話してやる」

ゼファアが余りにもしつこいからか。

己の計画を話すことで、ゼファアが自身の家族に大人しく帰る事を期待し、ラブヒーローは口を開いた。

「ウロボロスの能力はエネルギーの増幅と変換。生と死のエネルギーを増幅させながら、反対のエネルギーへ変換する。

……この『死のエネルギー』とは、もつと詳しく言い換えれば、『生物を死に至らしめる、破壊のエネルギー』の事だ。新世界を滅ぼすエンドポイントの強大なエネルギーは、正にそれに当てはまる」

全員が固唾を飲み、その話に耳を傾ける。

死のエネルギーがエンドポイントと関わっていることは分かった。

ただここで疑問に上がるのが、膨大な死のエネルギーを更に膨大な生のエネルギーに変換し、一体何をするのか？ という点だ。

海岸線にいる者に嫌な汗が流れる。

何か、とんでもない事を、ラブヒーローが言おうとしているのが分かってしまったからだ。

「死のエネルギーを生エネルギーに増幅・変換。この生のエネルギーは生物にだけ作用し、回復を促したり元気を与えたりする。

……だが。

その生のエネルギーを生物に過剰に与えすぎると、水を注ぎすぎたように、器から溢れ出してしまふ。ただこのエネルギーは悪い物ではなく、寧ろとても良い物だ。

よって生物はそのエネルギーを限界まで摂取しようと、自らの器を急速に拡大させる。

器とは肉体。

生のエネルギーを過剰摂取した生物は体が巨大化する。急速に、永続的にな。

私はこの現象を、世界中の海で行う。

この海に暮らす海洋生物を、全て。

——『カムベルトの海に住む海王類と同等の大きさへ巨大化させる』。  
それが……私の目的だ」

シン……と静まり返る海岸線。

海に暮らす生物など、到底数えきれない。100億か、1000億か……はたまたそれ以上か。

もしも本当に、その数の海王類が海に蔓延ったなら、どんな船だつて海を渡れなくなるだろう。一分も漕げば巨大な口に飲み込まれて終わりだ。

しかし、そんな数の生き物を巨大化させることができるのか？ いや、できないのなら、そもそもこんな大それたことはしないだろう。ラブヒーローは間違いなく出来ると確信している。

この場にいる誰もが、思った。

『この男はイカれている』

——ようやく、静寂を破るように口を開いたのは。

考古学者であるロビンだった。

「人間の歴史は、多くの人々が繋がり合つてやつと紡がれる物。島同士を繋ぐ大事な交通手段の海と船が使えなくなると、人類の歴史は止

まる。しかも、海王類を大量発生させるなんて……数百年は歴史が止まってしまおうよ」

それを聞いて、ラブヒーローが答えた。

「人の歴史が止まる？　大いに結構、寧ろそれが目的だ。

各々の島を断絶する。私が世界中を巡り、愛を乱す輩を1人ずつ潰していく。

地道だが、今までのように終わりが見えない訳ではない。1つの島から愛を乱す輩を全滅させれば、それ以上、その島で愛が失われることはない。何者も、その島に新しく訪れる者はいないのだから。

それを全ての島で行っていくと——最後には、世界中から愛を失う者はいなくなる。私のように……突然の不幸で家族を失う者はいなくなる！

大切な者を失わない世界が、もう、すぐそこにあるんだ!!」

首に血管を浮かべる、興奮した様子のラブヒーロー。

右手を振るい、この海岸線にいる者達に大きく呼びかける。

「だから……帰れ!!　今すぐ、自分の故郷や大切な者のいる場所に帰れ!!」

これ以上私を止めようとするな!!　自分の幸せを、愛を優先しろ!!」

きつと本心なのだろう。

紛れもない、ラブヒーローの心からの言葉。しかし、海軍の雑兵相手ならば胸に響いたかもしれないが、この場にいる海軍中将やゼファー、麦わらの一味は更に彼への警戒を強めた。

何事も、間違った方向に進む正義が厄介だと言う。正しいと思うからこそ、何の躊躇いもなく進み続ける事ができるから。

ラブヒーローは正に、人々からは理解されない、間違った正義そのものだった。

「……私は、私を止めに来る者を拒まない。だが、最後のエンドポイントには、誰も来ない事を願う」

そう言って。

ラブヒーローは横にいたアピールを肩に乗せ、空に飛び、夜の闇へ

消えて行った。

誰も追う事など出来ない速度。

ゼファアが数秒、彼の消えた先を眺めていた後、戦闘態勢を解く。そして海岸線にいる全海兵に大声で呼び掛けた。

「全員、戦闘は終わりだ!! 今すぐこの島の住民達を逃す手配をしろ!! 溶岩が街を飲み込む前にだ!!」

「ぜ……ゼファア教官! 麦わらの一味はどう致しますか!」

「放っておけ、今は住民の命が最優先だ」

状況が状況だ。

過激派の赤犬なら分からないが、今日の前で街が溶岩に吞まれてかかっているのに、海賊をいちいち相手にしている場合ではないのだ。

ドタドタと走り回って、住民を助ける手配を始めた海兵達。

海軍中將を指揮として動き始める彼らを見ながら、麦わらの一味もこの島から離脱する準備を始める。

そんな時。

ザツザツと大股で、ゼファアが麦わらの一味に向かってきた。構えるゾロとサンジを無視し、航海士であるナミに一枚の紙を握らせる。

「2日後、印の島に來い」

その紙は、この島の周辺の海図だった。

最後のエンドポイントであるピリオ島に向かう道、そこから少しだけ逸れた所にある島に赤い丸がされていた。

「ラブヒーローについて話してやる。別に來なくてもいいがな……」

それだけ言って、ゼファアは去っていった。

麦わらの一味はこれ以上ここにいる意味もなく、すぐにサニー号へと退避する。

セカン島の住民は全て救助されたものの、溢れ出す溶岩に建物は吞まれ、美しい温泉街は跡形もなくなった。

世界中に、2つ目のエンドポイント破壊のニュースが轟いた。その結果。

フランキーが言っていた通り、人々は例の宣言が真実ではないかと気づき、大混乱を始める。

海軍もこの事態を非常に重く見て、最後のエンドポイントであるピリオ島に戦力を集中……七武海を招集する事を決定した。

ただ、この大事件を見て、動くのは海軍だけではない。

新世界の海賊達も、大海賊時代を終わらせる事を許容できずラブヒーローを止めるためだったり、あるいは破滅的な願望を持ち、彼の野望を手伝おうと海軍に敵対するためだったり。

様々な思惑が交錯し、多くの強者達が、期限の最後である5日後にピリオ島へ集結しようとしていた。

## ラブヒーローと戦う者たち

2つ目のエンドポイントが破壊されてから、2日。海軍は全海洋生物の巨大化という、ラブヒーローの真なる目的を秘匿した。

しかし、それでは混乱は止まらない。真の目的を秘匿したとはいえ、ラブヒーローは宣言通りにエンドポイントを破壊してしまったのだから。一体何が起こるか分からないとはいえ、結果的に海が渡れなくなるという事は民衆は知っているのだ。

世界中が喧騒に包まれる中、麦わらの一味は、静かな草原が広がる島に上陸していた。

人が住んでいる様子はなく、爽やかな風が程よく伸びた草を揺らす。

だが、その草原の中に、明らかに人工的に草を刈り取られ踏み固められた道が一本伸びていた。

傷を癒したルフィを先頭に、その道を進む。

やがて島の中央付近に辿り着くと、草が綺麗に刈り取られた広場の中に、大きな石碑が置かれていた。

その石碑の前には紫髪の男が1人、花を片手に座っている。

「……来たか」

花を石碑の前に置き、麦わらの一味に向き直る男。

右腕に巨大な機械の腕、バトルスマツシャーを装着したゼファーがそこに居た。

「これは、何の石碑なんだ？」

「……この島で命を失った人々の墓だ。ここは元々、『世界のゴミ捨て場』と言われていた場所だな。その名の通り、ゴミが大量に集まり地面を形成するような場所だったが……今は見ての通りだ」

爽やかな風が彼らの頬を撫でる。

とても大量にゴミがあったとは思えないほど、ここの空気は澄んで

いた。草は青々と生え、水は透明度が高く、生き物は元氣溢れる姿で生きている。

ゼファアが言葉を紡ぎ続ける。

「ラブヒーローは、この島でしばらく生活していたことがある。そしてこの石碑を建てたのも奴だし、この島から根こそぎゴミを消したのも奴だ。……お前たちも、何度かそのゴミを見ているだろう?」

そう言つてゼファアは、親指と人差し指の間から何かを撃ちだすような仕草をした。

その動きは、忘れもしない、かつてパシフィスタを仕留める時に使った『圧縮弾』を撃つ動きだ。ラブヒーローの圧縮弾は全て、この島に大量にあった瓦礫やゴミを圧縮した物なのだった。

ルファイが眉間にしわを寄せる。

「……それで。ラブヒーローのことについて話すつて、何を話すんだよ」

「全てだ。奴がどんな風に生き、奴がなぜあんな風になったか、俺の知っている限りをな」

——そうして、ゼファアは語り始めた。

ラノアという少年がいたこと。天竜人によつて不当に、母の命を奪われた事。

それからこの島に辿り着き、何らかの理由でこの島を出て、ゼファアの家族を救つた事。ゴールド・ロジャーの海賊団と関係を持つた事。

……そして、天竜人を殺した時から、おかしくなつてしまつた事。

麦わらの一味の誰もが、その生い立ちに息を呑むことしか出来なかつた。

全てを語り終えたゼファアは、少し視線を下げる。それから再び、何かの覚悟が籠つた目で、麦わらの一味を見つめた。

「ラブヒーローの計画が本当に実現したとする。そうすると……少なくとも、この時代に生きる俺達が海に出れることは二度とない。最後

のピリオ島は火山があるだけの島、そこで生涯を終える事になる。それでもお前たちは、奴に……ラブヒーローに立ち向かうのか？ 敗北した時の現実に耐える覚悟があるのか？」

誰かが唾を飲む。今までに味わってきた危機とはまた毛色が違うのだ。

過去の冒険で何度も行った強者との戦闘は、敗北すればその場で死ぬだけ。ただ今回は、もし敗北すれば、何も無いその島で生涯を終えるまで生きなければならぬのだ。敗北したこと、戦ったことを後悔しながら、何年も、何十年も。

ともすれば、命懸けの戦いをするよりも重い覚悟が必要になる。

今逃げ帰れば確実に助かるという道も用意されてるだけあって、余計に、覚悟を決めるのが難しくなっていた。

数秒の静寂の後、ルフィが低い声で言い放つ。

「……そんな覚悟なんかいらねエよ」

「ほう……？」

「俺はラブヒーローのおっさんに、絶対に勝つ。だから負けた時の覚悟なんてする必要がねえ」

「大それたことを言うものだ、奴に傷もつけられず敗北した男が。今のラブヒーローは四皇、いやそれ以上に危険視されている男だ。世界政府から最優先で抹殺しろと連絡が来る程にな。」

「……それでも、絶対に勝つというのか？」

「——当たり前だ!! 俺は、『海賊王』になる男だ!!」

海賊王。

それはラブヒーローが生涯を通して、一度も勝つことが出来なかった男に付けられた肩書き。

「よりにもよって、海賊王か。フン、馬鹿な海賊だとは思っていたが——想像を超えるほど大馬鹿な海賊だったようだな」

「ラブヒーローが手助けしていた理由がわかった」という言葉を飲み込み、立ち上がるゼファー。



島の向こう側に海軍の軍艦が見える。彼は恐らくそれに乗ってきたのだろう。

「じゃあな。」

石碑の裏に隠れていた道を歩き、軍艦に向かっていくゼファー。そんな彼に背を向けるように、自分たちが辿って来た道を戻っていく麦わらの一味。

サニー号に乗り込み、芝生が生い茂る甲板の上に集まる。

緊張した顔つきの仲間たちに、ルフィは声を発した。

「ああは言ったけど……正直、ラブヒーローのおっさんに勝てる見込みはねえ。スピードもパワーも覇気の硬さも俺より上だ。戦闘経験だって向こうの方が豊富だ」

つらつらと、弱音ばかり連ねていく。

思い出すのはラブヒーローと戦った時の景色。一瞬で姿が消えたと思えば、己の懐に入っていて、鋭い一撃を入れられた。アレを突破する術は……全く思いつかない。

「もし、帰りたい場所があるなら……俺は止めねえ。小舟に乗ってでも、俺はピリオ島へ行く」

「おいルフィ、そんな言い方……」

一味の中で一番怖がっているだろうウソップが、そんな声を出した。

彼には帰る場所があるし、待っている人達もいる。残してきた物があるからこそ、恐怖が発生するのだ。

手を伸ばすウソップ。そんな彼の手を抑えたのは、横に立っていたゾロだ。

どうやらルフィはまだ言いたいことがあるらしい。今までの重苦しい空気を吹き飛ばすように、息を大きく吸って、声を轟かせた。

「でも、俺は……皆に助けてもらわねえと生きて行けねえ自信がある!! 今まで冒険できたのだって、みんなの力があつたからだ!!」

——だから……頼む!! ラブヒーローに勝つために……みんなの

人生、俺にくれ!!」

ルフィは、頭を仲間に向かって下げた。

以前、青雉に言われたことを思い出す。

『その考え方じゃあ、ラブヒーローには勝てねえ』と。

あれはきつと、ルフィの独断専行的な戦い方を見抜いていたのだろう。

マリンフォード頂上戦争の時だってそうだ。ルフィは1人で先へ進んでいき、強敵と戦い続けていた。今まではそれで何とかなっていた。

しかし、ラブヒーロー相手には1人では勝てない。

2箇所を覇気をかいくぐりダメージを与える方法が分からない。だが、仲間となら……絶対に突破できる。色々な方向から全員で同時に攻撃すれば、2箇所だけの覇気では防ぎきれない。実に分かりやすい話である。

分かりやすくはあるが、簡単ではない。

真に心が通った者同士の連携でないと、ラブヒーローは楽に反撃してくるだろう。故に、今まで冒険を共にしてきた仲間でないといけない。急増のチームワークでは絶対に突破できない。

頭を下げたままのルフィ。

その頭を、誰かが軽く小突く。

「馬鹿ね。小舟で行くつたつて、アンター人じゃ新世界の海は渡れっこないわよ」

小突いたのは、ナミ。

それに続くように、仲間たちがルフィの近くへ寄っていく。

今までの無茶な冒険を共にしてきた彼らは、とつくに、船長の夢に自分の人生を預けていた。

ビビっていたウソップですらルフィの肩をバンバンと叩き、「このウソップ様がいれば絶対に勝てる!!」などと嘯いている。

ふと、何処かからサンジが巨大な樽を持ってきて、甲板の上にドン

!!と置いた。

『助けてもらわねえと生きて行けねエ自信がある』……。懐かしい言葉聞いたからか、こっちも思い出しちまった」

その樽を見て懐かしそうに目を細めるゾロ、ナミ、ウソップ。

他のメンバーはその樽の事など知らない。首を傾げたブルックがサンジに問いかける。

「あの一、サンジさん。その樽は一体……？」

「ああ。俺達はグランドラインに入る時、こんな感じの樽に足を乗せて、自分の夢を宣言したんだ。ここらでもう一回、新メンバーを加えてやり直すつても悪くねエだろ」

それを聞いて納得した麦わらの一味。

前回やった時より仲間が増えたからか、全員が窮屈そうにしている。その間に挟まれるルフィも窮屈そうにしていたが、どこか嬉しそうに笑っていた。

「——俺は、海賊王になるために!!」

まず宣言したのは、船長であるルフィ。足を乗せる。

それに続くように、皆が自身の夢を大きく叫んでいった。

「俺ア、世界一の剣豪になるために！」とゾロ。

「勇敢なる海の戦士となるために!!」とウソップ。

「俺はオールブルーを見つけるために！」とサンジ。

「私は自分の目で見た世界地図を書くために！」とナミ。

以前やったことのある者達が宣言するのを見て。

それに倣うように、他の者達も宣言していく。

「なんでも治せる医者になるために!!」とチョッパー。

「フフ……。真の歴史の本文を解読して、空白の100年を知るために」とロビン。

「このサウザンド・サニー号が、海の果てに到達するのを見届けるために!!」とフランキー。

「もう一度、ラブーンに再会するために!!」とブルック。

「もう一度、ラブーンに再会するために!!」とブルック。

全員が夢を叫び終わった後、樽に乗せた足を少しだけ上げ。

一斉に踵を落として、樽を木っ端みじんに破壊した。心地よい木の碎ける音があたりに響く。

各々が笑みを浮かべる中、ルフィが腕を伸ばして船首に飛び乗り、両腕を高らかに上げた。

「行くぞ、最後のエンドポイント!!」

仲間たちは「おう!!」と力強く答える。

——そうして。

夢を叶えることを宣言した者達が、エンドポイント終わりの地への航海を始めた。

## ラブヒーローは戦う

アピールという少女は、ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロスを食べている。

彼女は元々、平和な村で暮らしていた。

だがある時村に訪れた海賊に誘拐、牢に幽閉されたが、命からがら脱走。じりじりと追い詰められる中、船の宝物庫にあったドーナツのような形をした悪魔の実を、「助かりたい」という一心で口にした。

その瞬間、彼女の意識は闇の彼方に消え。

気づいた時には、息絶えた海賊達と、粉々に砕け散った船の木片に掴まり、ぷかぷかと海の上に浮いていた。

木片に掴まり流されるまま、とある島に漂着。

故郷の村に戻る方法が分からず、そのまま島の街に住み着く。

三カ月もしたところ、街の人々から温和な性格も相まって認められるようになるアピール。

ただ、とある夜、彼女は眠気とはまた違う形で——意識を失った。

その瞬間、目の前にあったのは、滅びた街と死に絶えた人々。

アピールは目を疑った。信じられなかった。一体誰がこんなことを、と。

だが彼女も、聡明ではないが、何も理解できぬほど頭が悪いわけではなかった。

もう一度同じように滞在していた街が滅び、自分だけが生き残っていた時、悟った。これは自分が意識を失う度、無意識にやっているのだ。

ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロスはその特殊かつあまりに強大すぎる能力ゆえ、彼女には制御することができなかった。生のエネルギーが溜まる場所にいると、体が勝手に能力を行使し、周囲に死のエネルギーをばら撒くのだ。

アピールはその日から、山奥でひっそりと暮らすようになった。だが偶にどうしても必要な物が出来た時、人里に降りる。しかし人里に降りる度、何分の一の確率で能力が勝手に発動し、そこを粉々に破壊した。

いつしか、アピールには懸賞金が掛けられる。

彼女を捕らえに海兵が集まって来たこともあるが、気づいた時には皆死んでいた。

能力に振り回され、否が応でも懸賞金額が上がり続け、億を楽に超えるようになった時。

——彼女の前に、白い大男が現れた。

---

ラブヒーローが宣言した期限の最後、10日目。  
ピリオ島には様々な強者が集結していた。

海軍からは、海軍大将の藤虎と黄猿。訓練教官のゼファー。  
そして七武海のジユラキュール・ミホーク、ボア・ハンコック、バギー。

エドワード・ウィーブルは参加を拒否した。

新世界に生きる、億越えの海賊達も多く集結している。

その中でも際立って強いのは、ビッグママ海賊団の三将星、百獣海賊団の大看板。

他にも、最悪の世代の姿もちらほらと確認できる。

今ピリオ島は、世界のどこよりも危険な場所と化していた。

大看板のクイーンと三将星のカタクリが近づき、睨み合う。

「ようカタクリイ〜！ お前、麦わらのルフィってルーキーに負けたそうじゃねエか！ そんな体たらくでよくここに顔を出せたもんだなオイ!!」

「……クイーン。相変わらず膨れた体だ、もちでもたらふく食ったか」「俺はあえて痩せてねエだけだ!! ……それより、ビッグママはどうした？ 姿が見えねエが」

「ママは海だ。赤髪に足止めを喰らっている」  
カタクリが海の方を見る。

思い出すは数十分前。船でこちらに向かっていた時、赤髪海賊団が突如目の前に現れ、ビッグママ海賊団に刃を向けたのだ。

『ビッグママ。お前たちはあの島に行き、何をするつもりだ？』

『ああ？ 分かってねエな赤髪。世界を滅ぼすなんて大層な力……俺が欲しくねエ訳がないだろ？』

『やはりか……。そういう事なら、お前をあの島へ行かせる訳にはいかない』

シャンクスが刀を抜く。

それを見たビッグママが、「マ〜ママ」と笑い交じりに言った。

『おいおい、あのロジャーに付き回ってたおかしなガキの言うことだ。ありや、マジだぜ？ ここでお互い潰し合って、海が滅んだらお前も困るだろ』

『お前に力を持たせる方がよっぽど問題だ。それにラブヒーローは……俺達じゃ止められんさ』

『誰に何が止められねエって? ——プロメテウス!!』  
ビッグマムとシャンクスが激突する。

両者が戦闘する隙を見て、長男のペロスペローを代理の指揮官として、ビッグマム海賊団はこの島へ訪れたのだった。

クイーンがその話を聞いて、葉巻の煙をくゆらせる。

「ほくう……そりゃご苦労なこった。 ——俺達の方は、来てるぜ」  
「……………」

『来てる』の意味は、考えるまでもなかった。

カタクリとクイーンがお互いの武器を取り出し、衝突する。ラブヒーローという共通の敵がいるとはいえ、彼らが仲間であるという訳ではない。目の前に居れば戦うのが道理だ。

集結した海軍と海賊たちが島のあちこちで戦いを始めた。

「おわくくッ?!?!」

何処かから飛んできた大砲の弾を、命からがらと言った様子で回避する、千両道化のバギー。

べしやツと地面に転がり、すぐに立ち上がって戦場の目立たない場所へ逃げていく。

「く、クソ……なんで俺様がこんな場所に……部下共とははぐれちまうし……。あの馬ラブヒーロー鹿に俺が勝てる訳ねエだろうが、ロジャー船長やレイリーさんと30分以上真正面から殴り合える男なんだぞ……」

物陰に隠れながら悪態を吐くバギー。彼は嫌々ピリオ島に乗り込んだのも束の間、他の七武海鷹の戦闘の衝撃に巻き込まれ、元居た場所からかなり離れた場所まで吹っ飛んできてしまったのだった。

誰も見ていないことで勢いが乗ったのか、つらつらと口から罵詈雑言が流れ出ていく。

「そもそもあの馬鹿も何考えてやがんだ、昔からおかしな奴だとは思ってたがついに頭がぶつ壊れちまったか? 愛だか何だか知ら



ねエが、そんなくだらない物の為に生きるなんて俺様には到底理解できねエな」

「……何がくだらないって?」

「あア!? そんなもん——……………え?」

背後から響いた、聞き覚えのある声。バギーがゆつくりと背後に振り返る。

そこには、白いタイトスーツを纏った3mの大男が、バギーの顔を覗き込むように身をかがめて立っていた。

その傍にはちよこんと、少し哀れそうな目でバギーを見るアピールもいる。

「何がくだらないって? バギー」

「ら……ラブヒーローさんじゃないですかー。やだなーもう、僕がそんな事いう訳ないじゃないですかー」

「まあどちらにせよ絞めるがな。インペルダウン脱獄の主犯」

ラブヒーローがバギーのこめかみを掴み、アイアンクローを決めた。

「結局やるんじゃねエか!!」と内心キレつつ、頭に走る激痛に鼻水を垂らしながら暴れるバギー。

そんな風に2人で暴れていると、やがて、周囲に居た海兵に見つかってしまった。

彼らを指さし、大声で叫ぶ。

「ラブヒーローが現れたぞ!!」

周辺で戦っていた海兵たちが一斉に反応し、将校が軍艦に砲撃指示を出す。

そしてラブヒーローに掴まれているバギー諸共、彼らに無数の砲弾が撃ち込まれた。

自身の周りに空気の壁を展開し、砲弾を全て防御する。

近くに居たおかげで守られていたバギーはラブヒーローの手からは離れ、海兵たちに指を差しながらキレ散らかした。

「てめエらふざけんなア!! 俺は味方だぞ!!」

「味方……お前、本当に七武海になつてたのか。よく招待が来たな、弱いのに」

「弱いだア!? そりやお前みたいな化け物には分が悪いかも知れねエがなあ、俺には各地から集めた部下共が——」

「……その肝心の部下はどこにも見当たらないが」

ラブヒーローがわざとらしく辺りを見回す。

当然、辺りにバギーの部下は見当たらない。いるのはこちらに銃を向けた海兵だけだ。

だらだらと冷や汗を流し始めるバギー。

「いや……そのく、だな」

「まあ、別にどうでもいいが——ッ!!」

瞬間、周囲に迸る威圧。

辺りの海兵が一斉に倒れ始める。アピールも意識を失い、バギーも一瞬白目を剥いたものの、すぐに意識を取り戻した。

ラブヒーローはビリビリと揺れる空気の中、その威圧の発生源を見る。

「な、なんだア今のは? 海兵共も何で倒れてやがる」

「霸王色の覇気だ。………バギー、アピールを連れて少し離れてろ」

「なんで俺がそんな事を——」

「いいから離れてろ。アピールを連れていないと、私はお前を守らないからな」

天を泳ぐように現れたのは、一匹の青い龍。

ラブヒーロー達の真上で一度大きく旋回してから、巨大な人型に姿を変え、彼らの前に降り立った。

黒い金棒を持ち頭から角の生えた大男。

身長が3mもあるラブヒーローが見上げるほどの大きさだ。目算で7〜8mはあるだろう。筋骨隆々とした体からは只ならぬ圧を放っており、ラブヒーローが冷や汗を垂らす。

「——ウオロロロ。ロジャーに付いて回ってたガキ……いや、ラブ

ヒーロー。面白エことやってんじゃねえか」

その大男の名は、カイドウ。

四皇の一角。百獣海賊団の長であり、最強生物と呼ばれるほどの実力を持つ男。

懸賞金額は46億1100万ベリー。

今生きている生物の中で、確実に、ラブヒーローよりも強い者の1人である。

バギーが大急ぎでアピールを抱えて逃げていくのを横目に、両拳を白い覇気で固める。

ラブヒーローが低い声でカイドウに問いかけた。

「……私を止めに来たか」

「止める？ 馬鹿言うんじゃねエ、むしろ手伝いに来てやったんだ。聞いたぜ？ 世界中の海を超大型海王類で埋める……こんなに良い話はねえ。

S M I L Eで飛行可能な動物系の能力者を量産すれば、百獣海賊団だけが世界を行き来できるようになる。そうすりゃ海賊王なんて目じゃねエ、世界が俺の手の中に入る」

そこまで言った所で、カイドウが金棒の先を、ラブヒーローに向けた。

「お前も俺の軍門に下れ。大看板の1人くらいには加えてやるぜ？ ウオロロロ……」

結果的に、悪い話ではないのかもしれない。

今ここでカイドウの助力を得れば、ラブヒーローの計画は成功したも同然だ。軍門に下れとは言うが、後で約束を反故にして百獣海賊団に挑めばいいだけなのだから。今嘘を吐くだけで、この場は全て丸く収まる。

だが。

カイドウは悪名を轟かす生粋の海賊。そんな奴に一瞬でも靡くようでは、ラブヒーローがそもそもこの計画を始めようとした『愛をこれ以上失わせない』という思想の意味がなくなってしまう。

故に、彼は、逆にカイドウを脅すような低い声で言葉を返した。

「――断る。貴様の海賊団も著しく愛を乱すから、いずれ潰そうと思っていたんだ。良い機会だな」

その言葉を予期していたのか、カイドウが一瞬、口角を上げる。

だがすぐに口角を下げると共に眉間にしわを寄せ、覇気と共に棍棒を振りかぶった。

「てめエ……覚悟は出来てんだろうなア!! 雷鳴八卦!!」

「くッ!!」

見聞色の覇気を限界まで使い、ようやく避けられるほどの速度。空中に飛び上がったラブヒーローは、両手を左右に広げる。

「ダブル・メガティック・コア」

彼のそれぞれの手に一つずつ、直径10mの太陽が発生する。

今まであまり使う機会はなかったが……片手で熱を圧縮し太陽が作れるのだ。当然、両手で1つずつ作ることだって出来る。

2つの太陽を同時にカイドウにぶん投げた。

だが、カイドウは技を使うまでもなく、覇気を纏った棍棒を二回左右に振るだけで太陽を打ち消す。

勢いを保ったまま振り下ろしてくる棍棒を避けようとするが、余りの速度に回避しきれず、両腕を交差させて受け止める。

――ガアン!!

「ツぐオ……!!」

「霸王色の覇気も持ってねエ奴が、よくここまでやってきたもんだ!」

あまりの威力に一瞬怯んだ所を、横から思い切り蹴り飛ばされるラブヒーロー。体格差ゆえか、勢いよく吹っ飛ばされ、地面にヒビを入れた。

ガラガラと割れる地面から身を起こす。

顔に付けた赤いバイザーを一瞬外し、口の中に溜まった血をペツと吐いてから、再び付け直した。

(……確かに、霸王色の覇気を纏えない私では厳しいな。太陽も、カイ

ドウ相手では少し火力が足りない)

覇王色の覇気は周囲に拡散して相手を威圧させる他、武装色の上に重ねるように纏い、攻撃の効果を更に上げることができる。武装色だけでも強いが、四皇クラスの強者相手となると、火力不足になることが稀にある。

チャラツと、圧縮して懐に入れているダイナ岩の数を指で数える。残り8個だ。

最後のエンドポイントを破壊するのには、5個もあればギリギリ足りる。

ラブヒーローは立ち上がり、右手に太陽を作り出す。

それを見たカイドウはニイと笑い、肩に金棒を担ぎ、恐ろしい速度でラブヒーローに迫っていった。

総合的な戦闘力で負けているとはいえ、スピードならラブヒーローの方が上だ。

一瞬でカイドウの顔の前に移動し、太陽を押し当て、目を潰す。

いつそ眼球が焼き消えてくれれば良かったものの、最強生物の名は伊達ではない。目まで高い熱耐性を持っており、数秒目眩しをする程度に終わる。

だがそれで充分。

左手でダイナ岩を取り出し、カイドウに投げつけた。

数秒で爆発するようロックは解除してある。パパツと明滅し、起爆しそうになった瞬間。

「雷鳴八卦!!」

後方へ一歩下がりに、ダイナ岩ごとラブヒーローを金棒で殴りつけるカイドウ。

余りの攻撃ゆえか、空気が捻じ曲がり、超威力の爆発が全てラブヒーローの方向へ向いた。火柱がカイドウの前から海の向こうまで一直線に伸びる。

島が丸ごと揺れるような爆風に、地面を掴んで必死に耐えるバギーとアピール。

「な、なんつーバケモン同士の戦いだ！ 命がいくつあっても足りやしねエ!!」

雷鳴八卦に直撃した上、超威力の爆発をモロに食らったラブヒーローはタダでは済まない。

カイドウより十数メートル離れた所で、体から血を流しているものの、空中にて直立していた。

「ウオロロロロ……まだ生きてるか。やはり強えな、お前。どうだ、今からでも俺の所に来ねエか？」

「断る」

「だろうな」

ラブヒーローは右手に直径30mの太陽を作り出す。

「マキシマム・コア」

カイドウは金棒を構える。見聞色の覇気は使わない。

あの大きさの太陽はタダの横薙ぎでは壊せないが、雷鳴八卦で有れば充分壊せる威力だからだ。見るまでもない。

分かりやすいほど金棒を構えるカイドウに突っ込むラブヒーロー。

右手に持った自分の身を隠すように太陽を前に出し、撃ち放つ。太陽の眩しさに目がくらむカイドウ。

「雷鳴八卦!!」

目がくらんだとは言え、目の前に迫ってくる光源を見逃す訳はない。太陽を殴りつけ、予想通り、それをぶち壊す。

熱気が辺りに飛び散る中、カイドウは視線を辺りに巡らせた。ラブヒーローの姿が見当たらない。前後左右見渡してもいないと言うことは、つまり。

「上か!!」

「エア・ブレイク」

咄嗟のラブヒーローの攻撃に対応できなかったのか、無理な体勢で

防いだカイドウの棍棒が弾き飛ばされる。

重力に従うままカイドウの顔の上に落下し、白い武装色で足を覆っ

て、前歯を叩き折った。

「いい加減、大人しくしろ!!」

先程使ったダイナ岩は1つ。今ラブヒーローが手に持つダイナ岩は2つ。前歯の隙間から圧縮ダイナ岩を投げ込み、口を無理やり閉じた。

oooooooooooooカッ!!

超威力の爆発が2つ、カイドウの体内で爆発する。

口から吹き出した火柱をかううじて避ける。流石に堪えたのか、金棒を手から落とすカイドウ。

何故生きている、というか、何故肉の形を保っているかわからない。人知で超えるほどの丈夫さが、最強生物と呼ばれる所以なのだろうか。

爆発の威力で数瞬、動きを止めるカイドウ。

その数瞬を、ラブヒーローが見逃すわけもなかった。

落とした金棒を奪い取り、フルスイングで、彼を海の方へ殴り飛ばした。おまけにマキシマム・コアもぶつけ、彼は空の彼方へ吹っ飛んでいき、やがて海へ着水し沈んでいった。

ラブヒーローは金棒を海に放り投げ、体の血を手で拭う。

「か、カイドウを倒したのか……?!」

「海に落として死ぬくらいならどんなに楽か。島の近くの浅い海なら、海底を歩いてまたここに登ってくる」

それでも、30分近くは登って来れないだろう。

爆風で砂埃まみれになっているアピールの服を払って肩に乗せ、エンドポイントの中心は歩き始めるラブヒーロー。

そんなラブヒーローの背中に、バギーが指を指して叫ぶ。

「ちよっと待てやラブヒーロー!!」

「何だ」

「お前、ロジャー船長の処刑ん時は苛ついたが……今ならためエの言ってた意味もよくわかるぜ。あそこで助けちゃ、海賊として生き恥

を晒す羽目になっちまうってよ」

「何の話だ」

「つまり、あの時の事は許してやる。そこでどうだ、てめえ俺の下に付かねえか？ シャンクスの野郎とタメ張れるお前なら戦力として申し分ねえ！」

「付くわけないだろ。殴るぞ」

ラブヒーローは若干苛つきながら言った。いつもより口調が多少砕けているのは、傷の痛みにより少し意識が逸れている上、旧知の仲であるバギーだからかもしれない。

「よっぽどの事がないと貴様の下に付くなどありえん。貴様が私より強くなったら考えてやる」

「んなことできるわけねえだろこのアホンダラ!! いいか、人間何事も個より数の力がだなッほげぶア」

ラブヒーローはそろそろ鬱陶しくなったのでバギーを殴り飛ばした。一応温情で、覇気は纏っていない。

きりもみ回転しながら空中に吹っ飛び、地面に落下。バギーは一発で白目を剥き気絶した。

「いいの？」

肩に乗せたアピールがラブヒーローにそう問いかける。

「いいの？の意味がわからないな。別に、何も思っていないぞ」

「仲よかつたんじゃないの？」

「知り合いの雑魚。それだけだ」

ラブヒーローとアピールは、再び歩みを始めた。



## ラブヒーローは麦わらの一味と邂逅する

「よし……つと」

サニー号の船尾にて、ウソップが海に何かを括り付けた糸を浸し、ゴソゴソと作業をしていた。

その時、焦った様子のサンジがひょいっと顔を出して、彼に声を掛ける。

「ウソップ!! 何やってんだ!! もう上陸するぞ!!」

「おう、すぐ行く!!」

ウソップは船首の方へ走っていき、仲間たちと共にピリオ島を見た。

そして、息を呑む。

「な、なんじゃありや……!」

ピリオ島は、恐ろしい化け物達が集う戦場と化していた。

海兵と海賊たちが暴れ回り、時折巨大な斬撃やピカピカとした光のレーザーが飛び、拳句の果てに隕石まで落ちてきている。現世の地獄とは正にこの事だ。

ゾロが刀をカチツと鳴らし、大胆不敵な笑みを浮かべる。

「この世の終わりに集って来た奴らの戦場ってことか……面白え」

「な、何が面白いのよ……こんなの地獄じゃない!」

ナミが怯えながらそう言った。チョッパーも彼女と同じように怯えているが、こちらは声も出せないようだ。

集まった面々の強さはマリルフォード頂上戦争よりも上かもしれないが、何も麦わらの一味に狙いが向いている訳ではないため、危険度はトントンド。ルフィはパシン!と拳と手のひらを合わせ、口角を上げる。

「マリルフォードの時と違ってみんなが付いてるんだ。何も怖くねえ。」

……行くぞ!!」

サニー号が島に乗り上げ、錨を下ろす。

全員が一斉に船から飛び降り、武器を構えた。ピリオ島のあちこちからは血と火薬と舞い上がる土の匂いが漂っている。

天候棒からゼウスを呼び出してあたりに雷を降らせながら、ナミが叫んだ。

「ラブヒーローがいるとしたら島の中央、エンドポイントの中心よー!」  
「となると、まずはこの海兵と海賊が戦ってる海岸線を突破しなきゃいけないエツてか……スーパー厳しそうだぜ」

襲い掛かって来る海兵や賞金首狩りを倒しつつ、全員で固まって島の中央を目指す。

海岸線には四皇幹部の姿も見える。カタクリが恐竜化したクイーンと大激戦を繰り広げるのが見えたが、流星に関わるつもりはなかった。

といつても、カタクリの目は確かにルフィの事を捉えていたが。麦わらの一味が順調に前進し、海岸線の半分に到達した所で。

聞き覚えのある声が彼らの耳に入った。

「ルフィ!」

「ん……ハンコック! 何してんだこんな所で!!」

「この戦いには七武海も招集されておるのじゃ! それよりここは不味い、別の方角からエンドポイントへ向かうのじゃ!」

何故?と問いかけるよりも速く。

麦わらの一味に、巨大な斬撃波が襲い掛かった。

ゾロが咄嗟に刀を抜いて受け止めるが、余りの衝撃に体が後方へ弾かれる。

斬撃によつて地面に深い一筋の亀裂ができ、その亀裂を辿った先には、七武海である『鷹の目 ジュラキュール・ミホーク』が黒刀を振り上げた状態で立っていた。

「再び相まみえたか、麦わら。そして腕を上げたな、ロロノア」

「ここはわらわだけでなくあやつもおる範囲なのじゃ、他の場所から

行くがよい!!」

ハンコックがそう言うが、ルフィは地面に腕を突き、体から蒸気を出し始める。

「他の場所から行ってる時間はねエ、ここを突破する!!」——ギア

セカンド  
2!」

「それでこそ、うちの船長だ。おいブルック、お前も手伝え」

「いいでしょう! 肉を切らせて骨を立つ覚悟で……あ、私、もう切らせる肉がありませんでした!!」

ルフィが真っ先に突っ込み、ゾロとブルックが続く。

ギア2の素早い攻撃でさえミホークは見切ることが出来る。ルフィのJ E Tピストルを夜で受け止め、ゾロとブルックの方からも視線を外さない。

「三刀流!! 極虎刈り!!」

「鼻唄三丁……矢筈斬り!!」

口に噛んだ刀と振り下げる2本の刀で、まるで虎が噛んだような強力な一撃を放つゾロ。その隙を見て、目にも止まらぬ速さの居合技を放つブルック。

だがそのどちらも、ミホークには通じない。

辛うじて彼の服の一片を切り取ることに成功したものの、それ以外は完璧に防がれてしまっていた。

「鋭い……だが、まだ足りん!」

ミホークは腕力で刀を横に薙ぎ、3人を振り払った。

そのまま黒刀を肩に担ぐように構え、体ごと1回転するように空を斬り、斬撃の嵐を発生させる。

3人は嵐に服と体を切り裂かれながら、仲間たちの立つ場所まで吹っ飛ばされた。

「クソっ! 速くラブヒーローの所まで行かなきゃなんねえのに!!」

「この鷹の目から2度……運命よ、どうやって逃がす!!」

麦わらの一味が丸ごと潰されかねないほどに強く、隙のないミホーク。

彼らが固まっている場所に黒刀・夜を構え、突進していく。ハン

コックが麦わらの一味と共に構え、世界最強の剣士を止めようとした瞬間。

「火拳!!」

「かぎづめ 竜の鉤爪!!」

何もかも焼き尽くすような炎とけたたましい金属音と共に、ミホークの一撃が受け止められた。

世界最強の剣士に一步も引かないその2人は、ルフィの方に向き直り、同時に笑う。

「よう、ルフィ。元気してたか?」

「コロッセオ以来だな、ルフィ!」

その2人は。

白ひげ海賊団2番隊隊長にして、ルフィの兄。

革命軍No.2にして、ルフィの兄。

「え……エース!! サボ!!」

2人の兄が背中を合わせ、ミホークに向き合う。

エースが振り返らずに、後方にいるルフィに大声で言った。

「こつちで大体話は分かってる。あのラブヒーローって男をぶっ倒しに行くんだろ?」

「……………行ってこい、ルフィ!!」

「!! ああ、ありがとうエース!!」

麦わらの一味は睨み合う両者の横を駆け抜けていく。

ミホークはチラリと彼らの方を見たが、すぐに目の前の2人に視線を戻した。他に意識を裂いていて相手できるほど甘い2人ではないからだ。

後方へ飛び下がり黒刀を正面に構えつつ、見聞色の覇気を周囲に放

つ。そしてそのまま、エースとサボに話しかけた。

「なぜお前たちが、エンドポイントにいるあの男を倒しに行かない？」  
「へッ、俺がぶっ倒しに行くつもりだったけどな。ルフィが行きた  
いってんならしようがねえ。それに、誰かがここで止めてねえと、ラ  
ブヒーローと戦うのに戦況がグチャグチャに入り乱れてりや勝てる  
もんも勝てねえ」

「偶には弟の頼みを聞いてやるってのも、兄貴の務めだからな」  
ふと。

ミホーク達の横をすり抜けるように、億越えの海賊が走っていつた。恐らくは何かの悪魔の実の能力者なのだろう。

それを、空から飛来した青い炎の不死鳥が捕まえ、一発で仕留める。  
青い炎は空に溶けるように消えていき、やがて、1人の男を形作る。  
それは白ひげ海賊団1番隊長・マルコだった。足元の海賊を放り  
投げ、再び不死鳥に姿を変える。

マルコに呼応するように、次々と姿を現す白ひげ海賊団の隊長たち。またそれと同時に、革命軍の幹部もぞろぞろと姿を現し始めた。  
エースとサボが、言葉を合わせて言う。

「ここから先は、白ひげ海賊団と革命軍が一步も通さねえ。ルフィの勝負を邪魔しないでもらおうか」

その様子に、ミホークがニヤリと笑う。

ラブヒーローの世界最硬度の白い武装色というのにも興味があり、  
ある程度海賊を蹴散らして自分も向かおうと思っていたが……どう  
やら、彼らは意地でも通してくれなさそうだ。

「……いいだろう」

強者が集まり発する圧に釣られたか、海軍大将である黄猿と藤虎も  
やって来た。

クイーンとの勝負に打ち勝ったカタクリも『土竜』という三叉槍を  
振り回しつつ、ルフィを追いかけようとして、それを止めようとする  
マルコとの交戦を始める。

武者震いがするような場のピリピリとした雰囲気、ミホークは全力で刀を振るった。

---

エンドポイントである島の中央へと駆けていく麦わらの一味。

海岸線から離れるにつれ、先ほどもまでの戦闘音が嘘のように、辺りは静寂に包まれるようになる。異様な雰囲気を感じ取りながら走っていると、やがて彼らは、とんでもない光景を目にした。

ウソップが冷や汗を垂らしながら、言葉を漏らす。

「おい、こりゃ……何だよ？」

踏みしめることが出来るぐらいに固まった溶岩の地面。

そこに倒れる、無数の億越えの海賊やそれを倒すことのできる名のある海賊狩り。

新世界に住む強者たちが、数えきれないほどに倒されていた。全員顔か腹を殴られ、完全に気絶し、ピクリとも動かない。

サンジが倒れている人々の一人に手を触れる。それは特徴的なまでに、この場にそぐわないカッチリとした黒いスーツを纏った男だった。

「こいつア、サイファーポール……まさか全部、あの男がやったのか？」

「その服……CP9かしら。こつちには海軍中将も倒れているわ」

全員が息を呑む中、島の中央から地響きのような音が響いて来た。空から大量の何かと共に人間が飛来し、麦わらの一味のすぐ目の前に落下する。その人間は、ルフィとナミが非常に見覚えのある男だった。

「ちよつと、ルフィ！ こいつ……」

「ああ。三将星の……ビスケット男だ」

全身を殴られ、体のあちこちが焼けこげ、白目を剥き倒れているのは。

ビッグマム海賊団の三将星の一人であり、かつてルフィとナミが協力して倒したシャーロット・クラッカーだった。彼と共に飛んできた、粉々に砕けたビスケット兵も辺りに散らばっている。

クラッカーはビスケット兵という非常に硬く、強力な兵士を幾人も生み出すことができる。

当時のルフィはその兵士を破壊することが出来ず、水でふやかすとビスケットは柔らかくなるという弱点を突いて何とか破壊し、倒したのだが……。

地面に散らばるビスケット兵は明らかに水でふやけておらず、カチカチに乾燥したままだった。

つまり、ルフィですら破れなかった完全な状態の兵士を真正面から

砕き割り、クラッカーを撃破したのだ。

「ここに居る全員……やったのは、ラブヒーローのおっさんだ」

ルフィが静かにそう呟いた。

彼らは倒れる人々の地面を超え、ついにエンドポイントの中心である火山の火口に辿り着く。

そこには、体から少し血を流しつつ、大きな岩に腰掛ける白い大男と蒼い髪の少女がいた。

先頭にいるルフィが火口に真っ先に飛び降り、その男の名前を呼ぶ。

「……ラブヒーロー!!」

ゆつくりと顔を上げ、ルフィの方を見る男。

全身に白いタイツスーツを纏い、赤いバイザーを顔に嵌める男。

その風貌からは正義の色を感じるが、顔の赤いバイザーからは異様な血の匂いが漂う。その姿はまるで、自身の目的のためには手段を選ばないと主張しているようだ。

異様な圧を感じさせる筋骨隆々とした体はまさに強者の証。傷すらつかず、圧倒的な強さで、大いなる太陽を操る白い男の姿はまさにヒーロー。

愛のヒーロー。

——ラブヒーローが、そこに居た。

ルフィに続くように火口に降りてくる麦わらの一味を見て、ラブヒーローが低く呟く。

「なるほど、来てしまったか」

「……ラブヒーロー。なんでこんな事したんだ？」



険しい顔をしたルフィが、厳しい声色で問いかけた。

ラブヒーローは手のひらで顔を抑えつつ、以前言ったようなことを復唱する。

「私は世界の愛を失わせないためにこの計画を行うが……気に食わない者もいるだろう。だから、私の愛を止める権利を与えたのだ」

「……ホントの事を聞いてるんだ、ラノア」

「!!」

驚いたように顔を上げるが、すぐに顔を下げる。

誰に聞いたかなど、考えるまでもない。きつとあの紫髪の、お節介焼きな男だろう。

「……私の本名を知っていると……過去に何があったかも知っているな?」

「ああ」

「そうか。……私の過去を聞いて、どう思った?」

——私は記憶喪失だったが、子供の頃の記憶を思い出した時……天竜人に謂れもない怒りを感じたよ。

殺してやる、殺してやると恨み……実際、殺してしまった。私が守るべき愛、家族を持っていたものをな」

ラブヒーローの纏う雰囲気は暗く、重い。

「子供みたいに駄々をこね、何度もマリージョアを襲撃した。『私は間違っていない』とな。事実、天竜人は世界中から嫌われている。私の行った行為は大々的に賞賛はされなかったが、裏では何度も礼を言われたよ。『娘を殺したクソ野郎を殺してくれてありがとう』という風にな。

私は絶望したよ。愛を奪った、責められるべき私が礼を言われるなんて。怒りは薄れ、自らへの罪悪感だけが積もるが、罪悪感を薄めるための感謝の気持ちを求めまたマリージョアへの襲撃を行うという悪循環に陥った。

そんな時、フィッツシャー・タイガーが死亡したという報……英雄に死んだ男の報を聞いて、私の浅ましさを痛感したよ。

……この白い服と赤いバイザーは、私が罪悪感にまみれ、道を見失

いそうになっても……愛を守るヒーローとして生き続けるための楔だ。

「これがあれば私は道を見失わず、間違わず、ラブヒーローとして存在していられる」

ラブヒーローは霸王色の覇気を持っていない。

それは王になれる素質がないということだ。

己を鍛え、王に刃を向けられるほど強くなったものの、元はただの凡人。

王のように人を導く才もないし、集団を纏め上げる力もない。

「私にはもう何も無い。誰かの愛を守ることしか、もう残っていないんだ。誰かの愛を守りたいヒーローではなく……それしかないから、愛を守っている。

この計画は……私のような者を二度と作らないためにやるんだ。大切な者を失わなければ、私のような空虚な人間にはならない。だからやるんだ。

……酷く、滑稽だろ？ 私をもっと崇高な人間かと思っていたかもしれないが、所詮こんな人間だ。笑ってくれてもいい」

長く、辛く、茨の道を歩みすぎたラブヒーローには、最早『愛を守る』という事しか残っていない。

「笑わねエよ。それに、おっさんは何も無い人間なんかじゃねえ。

初めてあの砂浜で会ったとき、ただ漂流しただけの俺に飯をくれた優しさがあるじゃねエか。ちよつと変わってて面白い所もあるし、肉だって上手く焼ける。何もない事なんか絶対ねえ」

その言葉を聞いたラブヒーローは、フツツと笑い。

ゆつくりと腰を上げ、立ち上がった。

「……………本当はあの島で、生を終えてもいいかと考えていた。見え透いた嘘に乗っかって、愚かな私を縛り付けておこうとな。

だが、お前はあの嘘の伝説を再現し、本当の愛を見せた。守るべき愛を再確認し、生きる活力を与えてくれた。あの時にも言ったが……本当に感謝している、ありがとう。

そしてさよならだ、モンキー・D・ルフィ。お前がくれた生の活  
力で、私は世界中の人々がこれ以上愛を失わない世界を作ろう」

ラブヒーローの両拳が、白い武装色で覆われる。

麦わらの一味は、霸王色も持っていない彼からピリピリと肌が震え  
るような圧が発されているのに気づく。いや、圧が出ているのではな  
い、彼我の実力差に自然と体が震えているのだ。

「アピール。下がっている。……終わらせてくる」

「終わらせなんかしねえ！ お前をぶっ倒して、俺達はこの先の海に  
進む!! 覚悟しろよ、ラブヒーロー!!」

少女が離れていくのを見届け、ラブヒーローは麦わらの一味に振り  
返った。

油断はしない。ガープやゼファーに向けるような、本気の戦闘体勢  
だ。それは彼らの実力を認めているということでもある。

呼応するように武器を構え、戦闘体勢を取る一味。

ルフィが両拳を武装色で覆い、背後の仲間達に力強い声で叫んだ。

「行くぞ！ みんな!!」

「……来い。麦わらの一味!!」

世界の命運を決する戦いが、始まった。

## ラブヒーローは宇宙を生み出す

「……殺してください」

「何だど？」

捕まえに来た少女が、突然そういうものだから、ラブヒーローは驚いた。

元は艶のあったであろう髪はみすぼらしく汚れ、頬はこけている。目の下にはクマを作り、誰が見ても一目で衰弱しているのがわかるほどだった。

「私……意識を失って、目が覚めたら、周りでいっぱい人が死んでいるんです」

「……まさか、能力を制御しきれていないのか？　馬鹿な、自分の悪魔の実際の能力を使えないというのならともかく、暴走させるなど聞いたことがない」

ただ、嘘とも思えない声色だ。

ラブヒーローは少し悩み……それが本当なのだろうと思いつた。だが、彼のやることは変わらない。

「殺すことはしない。だが、人を殺すのが嫌だと言うのなら、牢屋の中で大人しくしている」

そう言うと、少女は少し顔を伏せ、軽く頷いた。

この様子なら気絶させる必要もないだろう。体を鎖で縛り、『LEVEL 6 特別収容 希望』と書いた紙を挟む。特別収容と言うのはつまり、海楼石の鎖で全身を雁字搦めにされ、個室で幽閉されるという物だ。

彼女の懸賞金額から見て、確実にLEVEL 6にぶち込まれる。

あそこは粗暴な者も多い……鎖で動けないとはいえ、個室で暮らす方がマシだろう。絶対に反映されるといってもないが、判断の材料にならない訳ではない。故に一筆したためた。

特に抵抗もしない彼女を海軍本部の前に置く。

そして、ふと気になったラブヒーローは、少女の能力を調べ始めた。

凶巻にも殆ど情報が載っていない、その悪魔の実。

しかし、昔から制御が非常に難しく、幾つもの国を破壊してきたという悪魔の実があることを、とある亡国の資料から知った。

空に円環の青龍が浮かぶ時、生物から生の気が抜け、地には死の気が降り注ぐ。

その悪魔の実は、『ウオウオの実幻獣種・モデルウロボロス』と言った。

……そして、彼女が収監された日からちょうど3年後。

モンキー・D・ルフィによる、インペルダウンの脱獄事件が発生したのだった。

---

麦わらの一味が猛攻を始めた。

黒い武装色と白い武装色の軌跡が交錯する。

攻撃を全て間一髪ので防ぎながら、時折カウンターも交えるラブヒーロー。いくら人数が増えて攻撃を当てられる可能性が増えたとはいえ、生半可な攻撃では駄目という事である。

「必殺緑星!! プラタナス手裏剣!!」

いつのまにか彼の背後に回っていたウソップが撃った弾から、手裏剣のように鋭く回転する草が発生した。

それを振り返りもせず左手で捌きつつ、ギア2状態のルフィの攻撃を右手で受け止める。

ルフィの体を遠くへ弾き飛ばし、ラブヒーローは周囲に小さな黒い球を大量に放り投げた。

それらは全て、雨あられのように周囲へ降り注ぐ。

「ラムル・ショット  
「圧縮弾」

「ツッ！ 全員避けろオ!!」

ルフィがそう呼びかけた瞬間。

10m以上は積み重なった鋭い瓦礫の山が、麦わらの一味を全滅させんと大量に発生する。しかし流石は新世界を生きる海賊、全員が傷もなく瓦礫を回避していた。

ただ、突然発生した瓦礫を無理に回避したため、どうしても不安定な姿勢にならざるを得ない。

ラブヒーローはその中で特に無茶な避け方をした者に目を付け、その者の目の前に降り立った。

「ひっ!! 私イ?!」

彼が降り立ったのは、ナミの目の前だった。

武装色を覆う格子を何のためらいもなく振りかぶり、頭を撃ち抜かんとする。

「ナミさんに何しようとしてやがんだア!!」

「ナミツ!! 柔力強化!!」

サンジと形態変化したチョッパーがすぐさまラブヒーローの前に立ち塞がる。

渾身の一撃を白い拳にぶつけるも、覇気の硬さと規格外の腕力には勝てず、ナミがサンジとチョッパーの体に巻き込まれる形で3人丸ごと吹き飛ばされた。

瓦礫の山に突き刺さる3人を横目に、ラブヒーローは見聞色の覇気で未来予知をする。

「死・獅子歌歌!!」

ゾロが瓦礫の山を居合で切り裂きながら突っ込んでくる。

それを右手で受け止め、空から落下しながら攻撃してくるルフィに

放り投げた。

「おわっ!?」

「マキシマム・コア」  
強 大 太 陽

直径30mの太陽を2人に撃ち、成す術もなく飛ばされていくのを横目に他の麦わらの一味に体を向ける。

それを見て、他の者達は更に警戒を強めた。

30億という懸賞金額を軽んじて見ていた訳ではない。

だが、ここまで強いとは思っていなかった。

絶対に貫けない武装色の覇気。

1秒という僅かな時間ではあるが、未来を見通すことが出来る見聞色の覇気。

瞬時に状況を判断できる戦闘センスとその判断をより正確な物にする豊富な戦闘経験。

更に悪魔の実の能力による、強力かつトリッキーな攻撃。

1つ1つは、そう脅威でもない。

だがこれらが全て揃った時、海の皇帝に並ぶほどの強さを発揮する。

「なるほど、今まで戦ってきた中じゃあ一番凶悪かもな……。しかも逃げることも出来ねえ」

フランキーがそう悪態を吐いた。

主力のルフィとゾロが太陽で吹き飛ばされた今、残された者達は固唾を飲む。

「メガテイク・コア」  
大 強 太 陽

周囲の熱気を圧縮し、直径10mの太陽を放つ。

サンジとフランキーとチョッパーが協力して攻撃し、何とか破壊することが出来た。

だがその影に身を隠すように接近したラブヒーロー。

「人数は揃っているが……連携が足りていない」

3人の鳩尾を打ち抜き、後方に吹っ飛ばす。

追撃をしようと足に力を込めるも、体から無数の手が生え、関節を極められる。

「連携が足りていない事などありません！ 革命舞曲ボンナバン!!」  
ラブヒーローの無防備な腹にブルックが剣を構え、突進する。

その突きの威力は鋼鉄ですら容易に貫くだろう。だが覇気を纏った腹部は貫けず、ガキン!!と金属音を鳴らして受け止められた。

「そのまま止めておいてブルック!! ゼウスブリーズIIテンポ!!」

「えっ嘘! そんな雷浴びたら私丸焦げに……あ、もう燃える肉ツーーー」

ナミが生み出したウェザーエッグを食べ巨大化した、ビッグマムのホーミーズであるゼウス。

彼は瞬時に空へ超巨大な雷雲として浮かび上がり、超密度の雷をラブヒーローに落とした。

辺り一体が光に包まれる。

技を撃ったナミにすら電撃がピリピリと伝わる威力だ。中心にいる2人はどれだけのダメージを食らったのか。

光で潰れた目が治り、視界が戻った彼らの目に飛び込んだのは。

「……」

体のあちこちを焼け焦がしているが、大した怪我は負っていないラブヒーロー。

元々アフロな髪型がさらに膨れ上がり、口から白い煙を吐くブルック。

「……あまり、効いてる風には見えないわね」

彼らと同じく、両腕に多少の火傷を負ったロビンがそう言う。

電撃が落ちる瞬間に必要な最小限の腕以外を引っ込め、ダメージの減少を図ったのだ。だがゼウスの雷撃は強力、腕に火傷を負うぐらいのダメージは来たようだった。

周囲に、雷撃によって発生した熱気が込み上げる。

ラブヒーローはブルックの顔面を殴り、麦わらの一味の方へ吹き飛ばした。

彼らがブルックを受け止め硬直した瞬間に太陽を撃つ。



麦わらの一味はそれを回避し、ナミが申し訳なさげなゼウスを横に悲鳴混じりに声をあげた。

「力押しでも隙を突いても駄目って、そんなの、どうすればいいの!?!」  
「クソ! 俺の用意した秘策さえ決まれば、あんな奴一捻りに……」  
「あんだでどうするってんのよ!!」

怪しげな弾を持ち出して唸るウソツプに、ナミがチョップを決めた。

麦わらの一味でトップクラスの攻撃力であるゼウスの一撃でも、殆どダメージが入っている様には見えない。

何もダメージが与えられていない状況からすれば一応前進している。

だがクマを裁縫針で刺せたとして、一体何回刺せば倒せるのか? という話だ。急所を突けば一発だがそこを攻撃させてくれるほど甘くない。

「フランキー將軍ならどうだ!? アレなら……」

「残念だがフランキー將軍にはなれねえ。クロサイFR-U4号とブラキオタンク5号がいねえからな」

「なんで連れてきてねえんだ!」

興奮するチョッパーをどうどうと宥めるフランキー。

クロサイFR-U4号は超大型オートバイ、スピードはある。問題は3人乗りの戦車であるブラキオタンク5号だ。

攻撃力に大きく比重を置くブラキオタンク5号は、今の状況では致命的な程に速度が遅い。

2つとも頑丈ではあるが、七武海や海軍大將が蔓延るこの場所では破壊される可能性もある。故に。

「この場所に来てそんな奴に予め持つてくるよう頼んでたんだ。物を守ることに関しちや右に出る奴はいねえ男にな」

「物を守る? ……まさか!」

麦わらの一味が1人の男の顔を思い浮かべた瞬間。

エンジンがブルルと駆動する音と共に、ラブヒーローと麦わらの一

味が戦う火口よりも少し高い場所に、彼らは現れた。

「フランキーせんぱあ~~~~い!!」

そこに現れたのは、バルトクラブ海賊団船長のバルトロメオ。バリバリの実という絶対に破れない透明な壁を張れる能力を持っている。

部下もちやつかり付いてきており、2つの車両に乗るのが誰かで喧嘩しているのが見えた。

「おいコラクソボケラブヒーロー!! いずれこの海を制する麦わらの一味の御方々に喧嘩売るなんていい度胸してるべおい!! てめエなんか先輩方にかかりやけちよんけちよんの首っただけに決まってんだべ!!」

両手の中指を立てながら叫ぶバルトロメオ。

周りにいた部下もそうだと声を張り上げている。

その様子に思わず、ラブヒーローは戦闘態勢を解き、麦わらの一味に問いかけた。

「誰だ?アレは」

「知り合いの馬鹿たちです……」

「……たしかに馬鹿……いや。……まあ、同情はする」

涙を流すナミにそう言ったラブヒーロー。

シールドを前方に張ってゲヒャゲヒャ笑うバルトロメオ達に手向け、空気の壁を展開し、下から上へ吹っ飛ばす。

そのまま空気の壁をもう一枚展開し、海岸線の方へと吹っ飛ばした。

ただバルトロメオが咄嗟にバリアを作り、持ってきた2つの車両だけはフランキーの目の前にしっかりと届けた。

「よくやったぜバルトロメオ! お前はただのバカじゃねえ、スーパーな品物を運んできた偉大なバカだってことを証明してやるぜ!!」  
「結局バカなんじゃねえか!!」

サンジのツツコミをよそに、フランキーは2つの車両と合体している。

明らかに物理法則を無視した大きさ、13 m程の大きさまで巨大化し、両腕を合わせて空に掲げる。

「鉄の海賊！ 『フランキー将軍』くくく!!!」

ウソップとチョッパーが目を輝かせ、フランキー将軍を見つめる。だがそれ以外のナミ、サンジ、ロビンは冷めた目でそれを見ていた。ブルックはなんとも言えない表情で辺りを見回している。

気の抜けた空気が漂う中、ラブヒーローが低く言った。

「……いちいち、集中を欠くような行為をするのはやめてほしいな」

「アレと私達を一緒に纏めてほしくないわ」

「そう褒めるこたアないぜロビン!! このスーパーパーなフランキー将軍のフラン剣なら、どんな敵だつて一刀両断よ!!」

フランキー将軍が背中から剣を抜き、ラブヒーローに切り掛かる。

一瞬で意識を戦闘に切り替え、その巨大な剣を受け止めた。13 mの機械の巨体から繰り出される上、そもそも剣の重量がトンに届くほど重い。

「——確かに、言うだけはあるー!」

だが、カイドウよりは十数倍軽い。

足腰の筋肉が一回り大きくなるほど力を込め、大剣を弾き返す。

後方に飛び下がり、フランキー将軍の腹部に手のひらを向け、太陽を撃ち放った。

何の防御もせず、太陽をそのまま受け止めるフランキー将軍。

はじけ飛んだ熱気が白い蒸気を生み出し、彼の姿を覆う。

「大丈夫か、フランキー将軍!!」

チョッパーがそう叫ぶ。

その声に呼応するように、巨大な機械の腕が蒸気を掻き分け、自らを誇示するように両腕を空に掲げる。

「シエネラルだいじょうぶ将軍大丈夫!!」

「……………ダブル・メガテイツク・コア」

2つの太陽をフランキー将軍に投げつける。

それは彼の腹部にモロに直撃し、盛大に後方へ吹っ飛んだ。

「將軍~~~~ッ!!」

「何やってんだこのアホども!!」

サンジがウソツップとチョツパーの頭部にキツメの踵落としを入れ  
た。

2人は悶絶し、頭に出来たこぶを抑えて地面にうずくまる。

ラムルンショット  
「圧縮弾!!」

ラブヒーローが麦わらの一味に黒い球を撃ち、瓦礫の山を発生させる。  
る。

それを間一髪で避け、ラブヒーローに向き直る。

「いい加減にしろ貴様ら!! いままで茶番を続けるつもりだ!!」

次に、右手に太陽を作り出し、彼らに投げつける。

それも順当に回避する麦わらの一味だが、その中で唯一、ブルツク  
が不可思議な事に気づいた。

着地した際、ブルツクが近くに居たサンジに静かな声で言う。

「サンジさん……私、あの『太陽』の弱点を発見したかもしれませんが、  
現実ではありませんけど」

「何!? どうなんだ!!」

「とにかく……一度、太陽を撃たせて見て下さい!」

「——ああ!!」

サンジが足を白熱させるほどの熱気を纏い、ラブヒーローに正面か  
ら走っていく。

彼はそれに負けず劣らず白い武装色を纏った拳を向けた。

「——悪魔風脚ディアブルジャンク 焼鉄鍋ポアル・ア・フリール スペクトルツ!!」

卓越した技術から放たれる、蹴りの連打。

ラブヒーローは全ての蹴りを両拳で弾くように防ぐ。疲労で一瞬  
気が緩んだ隙を突き、彼の体を掴んで強烈な頭突きを入れた。

「がッ……!」

額が裂け、鮮血が舞う。

意識を失いかけたサンジの首を掴み、一度地面に叩きつけてから、

上空に放り投げた。

「サンジ!! ランブルボール、怪物強化!!」  
モンスターポイント

「フラン剣——勝利のVフラッシュ!!」

「千紫万紅 巨大樹ビガンテスコ・マールスパンク!!」  
ミル・フルール

それを見たチョッパー、フランキー、ロビンの3人はラブヒーローへ大技を仕掛ける。

三方向から同時に放たれた攻撃。

ラブヒーローは状況を一瞬で把握し、周囲の熱気を手のひらに圧縮し始めた。

その瞬間。

「ダブル・マキシマム——」

「使いましたね………黄泉の冷氣!! 掠り唄 吹雪斬りツツ!!」

突然死者のように地中から姿を現し、ラブヒーローの両手首を切るブルック。

余りに想定外の攻撃に、ラブヒーローは回避することができない。剣が皮膚に当たったコンマ数秒後に反応が追い付き、ブルックの顔面を蹴り飛ばした。

「ぐほオツ!! ……ヨホホホ、やっぱり私の予想通りでしたね!!」  
「チツ——!」

ラブヒーローの手元に出来上がりかけていた太陽が消え去った。

仕方なく、三方向から放たれた大技を全て受け止める。だが覇気で纏っていない足でロビンの攻撃を受け止めたせいで、ほんの少し血を流した。

ブルックが発見した弱点とは、些細なきっかけから来る勘のような物だった。

彼の圧縮という能力は、何をするにも周囲の物頼りだ。それは熱気も似的り、周囲の熱を手のひらに集めているだけである。

周囲の気温が高い状態ならば、太陽は容易に作れる。

なら気温が低い状態なら作れないかと言うと、そうでもない。僅かな熱を集めて作り出すだけだ。絶対零度なら作れないが、そもそもそんな環境では誰も戦えない。

それならば、圧縮している最中ならばどうか？

熱を圧縮している際、周囲の気温が急激に下がった時——ラブヒーローは太陽が作れなくなる。

突然気温が下がった瞬間、熱と共に大量の冷気も一緒に圧縮してしまふのだ。

そうすれば超密度の熱という姿で顕現する太陽は、形を維持できなくなり、霧散してしまう。

「この弱点に気付いたのは青雫だけだ……まさかこの土壇場で見つけるとはな。だが、太陽がなくなるともこれくらいの攻撃を受け止めるなど造作も——」

「その為に俺がいるんだろうがッ!! ——ヘル・メモリーズ地獄の思い出!!」

3つの攻撃を受け止め、動けないラブヒーローの背後に迫るサンジ。

全身に業火を纏いながら高速回転し、覇気の纏っていないラブヒーローの背中に強烈な一撃をお見舞いした。

「——ぐうッ!」

背中から腹を貫くような蹴りと熱気。

完全に無防備な状態で当てられたラブヒーローは、前方に吹っ飛んでいく。

「……やってくれたな、貴様!!」

吹っ飛ぶ最中、空気の壁を展開して勢いを殺す。

地面に手を突きさして減速し、立ち止まった瞬間、サンジに向けて突進した。

覇気を纏った腕によるラリアット。

弾き飛ばされたサンジに飛んで追いつき、背骨に強烈な蹴りを決める。そのまま再び彼の体が吹っ飛ぶよりも早く頭を掴み、地面に思い

切り叩きつけた。

「サンジくん!!」

ラブヒーローに迫る、ロビンが生み出した巨大な腕。

それを両手で掴んで受け止め、背負い投げの要領で地面から引きはがして麦わらの一味に投げつける。

麦わらの一味はそれを回避する。

だがラブヒーローは空気の壁を展開し、彼らを一か所に集めるように吹き飛ばした。集めた場所は勿論、巨大な腕の落下する場所。

何百キロあるか分からない腕をフランキー將軍とチョッパーが受け止める。

ロビンは能力を解除してそれを消す。だが無理やり引きちぎって投げ飛ばされたからか、腕には多少の裂傷がフィードバックとして表れていた。

そんな彼らに、ラブヒーローは首の骨をコキコキと鳴らしつつ、足元のサンジを強く踏みつけて言う。

「すまない、少し舐めていた。いつも格下ばかり相手しているが故の悪癖だな。今からは殺す気でやるから安心してくれ」

放たれる圧。

今までの、敵意が籠った物ではない。明確な殺意が籠った物だった。

霸王色の覇気によるものでないのに、格下であれば恐怖で気絶しそうなほどの圧だ。それは頂上戦争の時、青雉とゼファーに放っていたものと同じ物である。

だが、これで一段階前進したとも言える。

ラブヒーローが殺意を放つという事はつまり、それだけの対応をしなければいけない強さを持つ相手ということだからだ。

カルヴァリン  
「大蛇砲!!」

1080ポンドほう

「千八十煩悩鳳!!」

後方から突如飛来する黒い拳と渦巻く斬撃。

足元のサンジをそのままに、横に飛んで回避するラブヒーロー。

黒い拳は地面のサンジを高速で回収し、麦わらの一味の前へと下ろす。

その拳と斬撃を放った主は、すぐに姿を現した。

「悪い、太陽を切るのに時間がかかっちゃまった」

「ツ——サンジ!! 大丈夫か!!」

ルフィとゾロだった。

太陽で吹き飛ばした2人を強く睨みつけるラブヒーロー。

彼らに当てたのはマキシマム・コア。太陽の中で上から2番目に強い技だ。頂上戦争ではゼファーですらこれを破壊できず、威力を弱めるだけだった。

「……本格的に、私の見間違いだったようだな。マキシマムを壊すとは」

「サンジに何した」

恐ろしく低い声と共にラブヒーローを睨みつけるルフィ。

そんなルフィの様子に、彼は腕を組んで答える。

「殺す一歩手前まで痛めつけただけだ。もう少し遅れていれば死んでいた。よかったな」

「——お前!!」

ルフィの攻撃が飛んでくるが、軽々と弾き返す。

「海賊のくせに、殺す殺されるで喚くな」

「ラブヒーロー……!」

「貴様の目指す海賊王というのは、そういう海賊達の頂点だぞ。それとも今更、私が人を殺すのに躊躇するとも思っていたか?」

チラリと、遠くに離れているアピールの方を見るラブヒーロー。

だがすぐに視線を麦わらの一味に向け直す。

「この島で一生を過ごすのは辛いだろう。私に傷を負わせた報酬として——今この場で殺してやる」

ラブヒーローが手を上空にかざす。

瞬間、周囲から一気に熱が消えていくのにルフィ達は気が付いた。



ブルックは先ほどと同じように冷気を放ってその技を妨害しようとしたが、ラブヒーローの周囲を冷やしても意味がない。

「——小宇宙<sup>コズモ</sup>」

辺りは一瞬にして暗闇に包まれる。

そして空、前後左右、地面にまで、小さく白い点が無数にキラキラと輝き始めた。

まるで小宇宙の中に放り込まれたかのようだ。

息を呑むほど美しい星空を再現したこの空間を作り出したのは他でもない、ラブヒーロー。

「光を当てられた物にできる影と暗闇を少し工夫して圧縮することで、熱を逃がさない空間を作らせてもらった」

「!? 熱ッ!!」

ウソップが突然、足を上げる。

地面に広がる白い点を踏んでいたようで、その点を踏んでいた箇所だけ、靴が溶けてしまっていた。

「その白い点は極小の熱の塊。美しさに見とれて触れば、骨すらも焦がす」

「熱を逃がさない空間。」

触れば肉が焼ける、煌めく無数の星。これに覆われているせいで人が通れそうな隙間がない。

まさにラブヒーローの独壇場だ。熱を逃がさないことで太陽を無尽蔵に作り出し、煌めく星で相手の動きを制限し回避させない。

更に熱を逃がさず気温が上がり続けることで、体力が減っていく。ラブヒーローは平気そうにしていることから、何かからくりがあるのだろうか。

「どうやって突破すればいいのかわからない。」

だが、これを突破してラブヒーローに勝たないと麦わらの一味に未来はない。

「ツ……ナミ、少しでも気温を下げてくれ!!」

「わかったわ!」

とにかくこちらに不利な要素を1つでも減らし、ラブヒーローを倒すほかない。

雨雲を大量に生み出すナミと傷で動けそうにないサンジ以外は、ラブヒーローに改めて構え直した。

「ここで勝たないと、どうせ俺達に未来はねえんだ!! 絶対に勝つてやる!!」

「勝つではなく、殺すぐらいの気概を出してみろ。最も、この技を出させて私に勝った者はいないがな」

疑似的に生み出された小宇宙空間で、最後の勝負の火ぶたが切られた。

## ラブヒーローのからくり

LEVEL6の囚人達とはある牢屋に少女が1人、頑丈に拘束されているのを知っていた。

彼らは少女が何らかの重要人物、または特異な悪魔の実の能力者なのではないかと思い、彼女を誘拐した。

アピールは強力な能力を除けば、ただの少女。

しかも数年、海楼石の鎖で体を縛り付けられて生活の殆どを暮らしていたのだ。衰えた筋力でLEVEL6に潜む囚人に敵うはずもない。

あえなくアピールはインペルダウンから連れ去られ。

彼女を連れれた囚人達とある街に到着した瞬間、ウロボロスが発現し、囚人達ごと街の住民を皆殺しにした。

「……なんで。もう……あそこから出るつもりはなかったのに……」

アピールは絶望した。

自分がいたインペルダウンに戻ろうとしても、捕らえに来た海軍を無意識の内に殺してしまう。再び山奥に潜んで暮らすも、時折人里に降りた際に能力が自動的に発動する。

そして彼女は、唯一自分を捕まえることのできたラブヒーローを求めようになった。

脱獄から2年と少し。幾数の街を滅ぼした彼女が、人型に戻った時に海に落ち、木片にしがみついて海を漂っていた時。

麦わらの一味によってサニー号へ引き上げられ、そこで、待ちわびていたラブヒーローと再会した。

ルフィ達を薙ぎ倒し、とある島に着地したラブヒーロー。

彼の肩の上には目を覚ましたアピールが乗せられていた。地面に降ろし、ラブヒーローは水平線の方を見て彼女に背中を向ける。

「久しぶりだな、アピール。……やはり、インペルダウンから出ていたか。どうやって脱獄した？」

「他の囚人に、誘拐されて」

「……そうか」

この島には、2人以外の人はいない。

波打ち際に海水が打ち上げる音が、静かに響くだけだ。潮風は心地よく2人の体を撫で、暖かい日差しが空から降り注ぐ。

十数秒そうして黙っていたところで。

静寂を破って話し始めたのは、ラブヒーローだった。

「随分と前に……『殺してほしい』と、言っていたな。今でも、そう思うか？」

「?」 一体どういうことですか」

「……少し、話そう。そのまま聞いてくれ」

ラブヒーローは、ポツリポツリと話し始めた。

少女が食べた悪魔の実の名前、そしてそれがどういった能力を持っているか。

そして、ラブヒーローの計画である……『海を超巨大化した海洋生物で埋め尽くす』という目標についても。

全てを語り終わったラブヒーロー。

彼は日光を背に浴びながら、ゆっくりとアピールの方に振り返る。

「この計画は既に始まっている、エンドポイントを既に一つ破壊したからな。だが今なら……まだ、ギリギリ引き返せる」

「——引き返せる?」

言葉を反芻するアピールに向かって静かにうなづく。

「オペオペの実という物を知っているか? アレは能力者の命と引き換えに、不老手術が出来るそうだ。」

ウロボロスも似たような物だ。全海洋生物を巨大化させるなんて

神に等しい御業には、相応のリスクが付き纏う。良くて全身不随、最悪死ぬだろうな」

「……それを承知の上で、私に、その計画を手伝って事ですか？」  
「……………」

ラブヒーローは何も言わず、アピールに背を向けた。

少しだけ顔を俯けたまま、言葉を続ける。

「私はラブヒーロー。愛のヒーローだ。……どうしても嫌と言うなら、強制はしない。この計画は今すぐ破棄——」

「——いいですよ」

確かに聞こえた、少女の声。

いや、ラブヒーローは彼女がそう答えると分かっていた上で、こんな話をしたのだろう。特段驚きもせず、手のひらで顔のバイザーを抑える。

「ただ一つ、条件があります」

「何だ」

「……もしその計画が成就して、私が生き延びていたら……ちやんと『殺してください』ね」

能力に振り回され、人を殺すことに絶望した少女。

愛の為に生き、愛に固執し、自身を見失ってしまった男。

ラブヒーローはバイザーを手で抑えたまま、肩越しに深く頷いた。

馬鹿な決断だ。

今まで愛の為に生きていたというのに、まさか、愛の為に人の命を奪うことを約束してしまうなど。

だが、この計画が成就すれば……多くの愛が守られる。天竜人を殺した時だってそうだ、多くの人が喜んでいた。ならこれは、賞賛されるべき行いであるはずだ。

「……………フツ。馬鹿だな……………」

多数の為に少数を犠牲にする。こんな理不尽がまかり通るから私の母は命を奪われたはずなのに。

自分で自分を嘲るくらい、嫌で嫌で仕方ない。何もかもに愚直で、愛を守るためだと素直に挑んでいた頃が懐かしい。

せつかくロジャーに貰った名前が……今ではボロボロだ。だが、ここまで来たらもう止まらない。

自分で自分を止めることなど、もうできない。私の中のラブヒーローが言っているのだ、愛を失わない世界を作れと。

誰か止めてくれるだろうか？

いや、きつと無理だろう。私に一对一で勝てる者など、四皇か海軍の英雄か……数えるほどしかない。例えそれらが相手でも、場所とタイミングさえ良ければ退けられるだろう。

誰にも止められないのなら、全てを蹴散らして進む他あるまい。

強者としての特権を享受し、自身の意のままに世界を変えよう。かつてのロジャーのように、時代を新たな場所まで進めてみよう。

世界中の誰もが愛を失わない世界を目指して。

愛の為に生き、世界の愛を守る。

そのために、誰も海に出ることができないような世界にしよう。愛を失わない世界を作ろう。

これが……私の答えだ。

——そうして、アピールとラブヒーローは海軍本部を襲撃し。

世界に向けて、宣言を行ったのだった。

「ラブヒイイイロオオオ〜!!」

ギア4・スネイクマンの状態であるルフィが、ラブヒーローに素早い連打を行う。

その連打の影に隠れつつ、攻撃を加えようと走る人影が2つ。ゾロとブルックだ。

「ダブル・メガティック・コア」

ラブヒーローは両手に太陽を作り出そうとするも、右手の太陽をブルックによって潰される。

左手の太陽をルフィに投げつけ、二方向から迫りくるゾロとブルックの剣を両拳で受け止めた。

「そこだ!! 必殺緑星、ドクロ爆発草!!」

がら空きになったラブヒーローの腹に向けてウソップが撃つ。

そう遠くもない距離。一瞬で着弾し、激しい爆発と共にどくろ型の煙を発生させた。

ゾロとブルックも巻き込んでしまったが、多少ダメージは与えられただろうと微笑を浮かべて煙の中心を見るウソップ。

……だが。

「威力が余り高くないな」

全くの無傷で、ラブヒーローはそこに立っていた。

ゾロとブルックを地面に叩き込み、ウソップに向けて素早く駆けだす。

「なッ!? 必殺緑星、インパクトカウルフ 衝撃狼草!!」

ウソップが早技で弾を撃つ。

緑色の弾は一瞬で大量の葉っぱを展開し、大きな狼の形へと変貌する。そして向かってくるラブヒーローに鼻を向けて突進した。

鼻がラブヒーローの右手に着弾した瞬間、強力な衝撃波が発生する。

だがその衝撃波を意にも介さず狼の頭をもぎ取り、圧縮した熱でそれを焼き消した。

驚愕の表情を浮かべるウソップを、言葉を発する隙も与えず横に蹴り飛ばす。

「シンゴ・マール五本樹 スパンク!!」

「!」

ウソップを蹴った瞬間、地面から生えた五本の腕に軸足が突き飛ばされた。

耐えきれず体勢を崩したその時、後方からは太陽を破壊したルフィの拳、前方からはフランキーとチョッパーの拳が迫る。

「カルヴァアリンゴムゴムの大蛇砲!!」

「ジェネラル・ライト將軍の右オオ!!」

「喰らえエええッ!!」

見聞色を用い、状況を一瞬で把握。

両手に武装色の覇気を込め、フランキーとチョッパーの拳を受け止める。その瞬間背中に突き刺さる、ルフィの黒い拳。

それに少し呻くような声を漏らしたものの、殆どダメージを喰らっている様子もなさそうだ。



フランキーとチョッパーの手を弾き飛ばし、開いた両手を前に着きだす。

「ッ——エア・ブレイク 大気崩壊!!」

巨人族より多少小さい程度の彼らは勢いよく吹き飛ばされた。無数に散らばる星にぶつかり、背中を焼き焦がされる。

すぐさま背後に振り返り、ルフィに迫るラブヒーロー。

みぞおちへ内臓を抉り取るような強烈な一撃を叩き込み、ルフィの鼻っ柱に頭突きを入れる。動きを止めた彼を背負い投げの要領で地面に叩きつけ、熱の星でじつくりと体を焼いた。

「——ギャアアアアアアアアアアアアッ!!!」

轟くルフィの悲鳴。無理もない。

「ぐ……クソ、ルフィ!!」

傷だらけのサンジがよろよろと立ち上がり、足を白熱させラブヒーローに飛び掛かる。

その瞬間、もう一方から恐ろしい速度で刀を構え駆けてくるゾロ。尋常ならざる闘気が彼の周りに2人の刀を構えた男の姿を浮かび上がらせる。その姿はさながら阿修羅。

「鬼気九刀流『阿修羅』〃 弍霧銀〃!!」

ディアブルジャンプ「悪魔風脚 コリエ 首肉ストライク!!」

麦わらの一味、その主力の2人による同時攻撃。

だが、ラブヒーローは両拳に覇気を纏い、その2つの攻撃を防ぎ切った。猛々しい衝突音と共に空間が揺れるような衝撃波が辺りに散る。

確実に、この主力の2人を潰そうと力を入れた瞬間。

「——ゴムゴムの鐘かねエ!!」

「ツグはア!?!」

ラブヒーローの顎を下から上へ跳ね上げる、ルフィの頭突き。彼の額は黒い覇気で覆われており、ギア4のスネイクマンであったからか、殆どノーモーションで首を伸ばし頭突きをする事ができた。

予想外の方向からの攻撃だった。モロに喰らってしまった。

ルフィは地面に押さえつけられ、熱を圧縮した星で今も背中を焼かれ続けている。その痛みは想像を絶するはずだ。皮膚どころではない、筋肉を溶かし骨を焼き焦がすほどの温度なのだから。

それなのに、ルフィは強靱な精神で痛みを抑え込み、ラブヒーローの間を突いた。

頭突きの勢いで体が吹っ飛ばされるラブヒーロー。

空中で一回転しながら、少し離れた地面へ着地する。彼の顎は皮膚が切れ、少し血がにじんでいた。

一気に飛び上がり、熱そうに背中をはたくルフィ。

そんな彼の前に立ち、ラブヒーローと相対するサンジとゾロ。サンジは振り返らず、肩越しに言葉を投げかける。

「やったな、ルフィ!!」

「ああ……」発は当てられた。でも、このままじゃ勝てねえ。スネイクマンじゃ当てられはするけど、力が足りてねえんだ」

自身の手を見た後、ギア4を解く。

スネイクマンはスピード重視。攻撃を当てることは出来るが、その代わりに殆どダメージが入らない。

少しずつダメージを蓄積させれば良い……という考え方もあるが、そんな鈍らな行動をしては、ラブヒーローの生み出したこの疑似宇宙空間で全員蒸し焼きにされるだけだ。今の温度は体感40度付近、これ以上は耐えるのも厳しい。

手首に空気を吹き込み、体を膨らませるルフィ。

筋肉を膨張させ、どんな大型生物にだってダメージを与えられるような形態に変化する。

足で地面を叩き、跳ねる。

その様はまるで金属製のゴムまりのようだ。

「——ギア」4」 バウンドマン!! ……この形態で攻撃を当てる  
しか、勝つ方法はねえ!!」

「了解だ、船長。 ……足手まといにはなるなよ、血だらけコック」

「誰がなるか、火傷マリモ」

お互いの、ボロボロの姿をなじり合った後に構えるゾロとサンジ。  
ルフィを筆頭に、ラブヒーローと殴り合いを始める3人。

そんな彼らを遠巻きに眺め、加勢のチャンスを伺う他の者達。

だが、下手に加勢しては主力組の邪魔になるだけ。気温を下げるた  
めに霧雨を発生させ続けるナミを筆頭に、彼らは話し合いを始めた。

「これ以上温度を食い止めるのは無理! 何とかしてこの空間から脱  
出しないと……!」

麦わらの一味を覆うは、小宇宙。

熱を逃がさない暗闇と熱を放ち続ける星々。最悪の組み合わせだ。  
温度は上がりっぱなし、もう40度付近まで上昇しているが、放つて  
おけば更に上がっていくだろう。

「つつても、どうするんだよ!? とてもじゃねえが、出れそうにはねえ  
ぞ!」

ウソップは骨の折れた鼻を包帯でグルグル巻きにしつつ、辺りを見  
回してそう言った。

この空間は、無数の熱を放つ星々で覆われている。触れれば一瞬で  
皮膚が焼き消えるような熱だ。

そんな星々にも隙間はあるが、とても人が通れるような隙間ではな  
い。小さくなつたチョッパーですら通れない。

つまりここからは出られない。四肢が焼き切れるのを覚悟すれば  
出れるかもしれないが……それは余りにも愚かな選択だ。

「……ブルックが見つけたように、何かからくりがあるんじゃないかしら」

ロビンがそう呟いた。

麦わらの一味はこてんと首をかしげる。それを見て、ロビンは垂れる汗を手で拭いつつ、話し始めた。

「この熱気に包まれているのは、ラブヒーロー……彼も一緒よ。なのに私達と違って、激しい戦闘でも全く熱がっている様子がないわ。

つまり……その『熱さを感じない秘密』さえどうにかできれば、彼は自分からこの空間を解くんじやないかしら？」

理解したように、ポン！と手を叩く他の者達。

確かに、ラブヒーローの能力には所々隙がある。その隙さえ突ければ、圧倒的に不利なこの状況を打開できるかもしれない。

「でも、その秘密ってなんだよ……？」

毛に包まれ体温を逃がせないからだろう、既にグロツキー状態のチョップパー。巨大化は既に解け、小さくなった状態でぜえぜえと舌を出して息を吐いている。

「とんでもない力でぶっ叩けば何とかなるんじゃないやねえか!? フラン

キー將軍なら……」

「残念だが、ウソップ。フランキー將軍はオーバーヒートで動かねえ。熱耐性をもう少し上げとくんだったな……」

そもそも先ほどから何度もぶっ叩いているのに、何もならないのだ。きつとこれではないのだろうか。

動かない金属の塊となったフランキー將軍を寂しそうに眺めるウソップとフランキー。

そんな2人を横目に、所々黒く焦げた骨をさすりながら話すブルック。

「……逆に熱を与えてみるとか、どうですか？」

「熱を与える？ さっきからサンジ君があ……悪魔なんちゃらで叩いてるけど、何にもならないし……」

「? ……!!」

そんな何気ないブルックとナミの言葉に、何か勘付いた様子の  
チョッパ。

ブルックは黄泉の冷気で、ラブヒーローの太陽を壊してた。ただ太陽の熱を冷やしてただけだと思ってたけど、黄泉の冷気じゃ流石にあんな温度は冷やせない。

考えられるなら……内側。熱と一緒に冷気を圧縮し……その結果、内側から温度を保てなくなって自壊したと考える方が筋が通る。

熱と一緒に、冷気も圧縮できる。もしそうなら……もしかしたら。

「事前に……冷気を圧縮して、服の中に仕込んでたんじゃねエか？」

血管の太い所を冷やし続けていれば、この温度の中でもある程度は動けるはずだ……」

「冷気を、圧縮ウ!? もはや氷だろ、それは！　すぐ溶けちまう!!」

「熱気を圧縮してあんな熱の塊になるんだ。冷気を小さく圧縮して、氷みたいにならずと冷やし続けるなんて芸当も……できねえ訳じゃない、はず……」

息絶え絶えのチョッパの言葉に、他の者達は納得がいったようにならず。

「とうか、これ以上の案が出ない。ならばこれを信じる他ないだろう。」

ナミが霧雨を降らしながら、チョッパに問いかける。

「体温が冷えやすい、血管の太い所ってどこ!?!」

「脇と……股の間と……『首』だ……」

一斉に、戦っているラブヒーローの方に顔を向ける。

ゾロの刀が首に迫った瞬間、他の攻撃を無視して真っ先にその刀を防いでいた。また先ほど傷つけられた顎をやけに気にしていて、何度もさすっている。まるでその傷の付近から、冷気が漏れるのを気にしているみたいだ。

「どうやら当たりみたいですね。流石チョッパさん、ヨホホ」

「でもどうすんだ？　あんなバケモンの首から冷気の塊を奪うなんて

……ロビンの手ならなんとか」

「無理よ。一瞬で引きちぎられるわ」

そう簡単な話ではない。

相手が一番気にしている急所を狙うというのだ、それも相手から冷気を奪うなどというとんでもない方法。

……奪う？

「奪う……盗む……」

「……何？　なんでみんな私の方見て……えっ。まさか……嘘でしょ？　いやいやいや」

——『泥棒』猫のナミ。

「私、宝物庫に忍び込んで盗むのが専門だったし！　スリは全然できないから！　いやホントに、ちよつと——」

「獅子歌歌!!」

ゾロの居合斬り。新世界にいる海賊ですら一部を除いて、防ぐどころか、見切れることもできないだろう。

だがラブヒーローはそれを防ぎ、彼の体を弾き飛ばした。

「ゴムゴムの大猿王銃!!」  
キングコングガン  
「悪魔風脚 一級挽き肉!!」  
ディアブルジャンプ ブルミエール・アツシ

サンジの足を掴み、ルフィの拳を避けて彼の頭を掴み、重力に乗って地面に叩きつける。

地面の星々で2人の体を焼き、勢いよく蹴り飛ばした。だがすぐさま空中で体制を立て直し、空気を蹴ってこちらに向かってくる。

「チツ……鬱陶しい!!」

何度熱の星で焼いても、殴り飛ばしても、こっちに向かってくる。

太陽を撃つても、3人で協力して破壊してくる。一番上の太陽を撃てば壊せはしないだろうが……アレは、出すのに少し時間がかかる。一体何が、ここまでお前たちを突き動かす？  
そこまでお前たちは、海賊王を求めるのか？ ロジャーと同じ称号を求めるのか？

私を一对一で倒せすらしらないお前たちが……！！

「――雷骨剣・〃革命ガボット舞曲ボンナバン〃！！」

怒りで見聞色が乱れた、その瞬間。

ゼウスの雷を纏い、剣を構え高速回転するブルツクがラブヒーローに突進した。

革命舞曲ボンナバンは、かのスリラーバークでオーズと戦う際に使った連携技。威力は申し分ないどころか、あの頃より格段に上がっている。

「ツ！！」

ラブヒーローは両手を使い、ブルツクの剣を受け止めた。

今まで全ての攻撃を片手で受け止めていた彼が、初めて両手を使った。それだけの威力という事だ。

すぐにブルツクを弾き飛ばす。

「百花繚乱シエンフルールクラツチ！！」

「フランキー・ラディカルビク〜〜ム！！」

体から無数の手が生えラブヒーローの関節を極めた瞬間、飛来するフランキーのレーザー。

見聞色でレーザーの当たる場所を予知し、その箇所を武装色で覆う。腹に打ち込まれたレーザーを覇気で受け止めるが、当然無傷。

「今だ！！ブルツク！！」

体に生えた腕を背筋で引きちぎったその時、ウソツプが何かの弾を放つ。

その弾はある程度ラブヒーローの前に近づいた所で、眩い光を放った。ラブヒーローは思わずその光を直視し何も見えなくなるが、問題

はない。

見聞色の覇気を使い、警戒を張り巡らせる。

先ほどあの長鼻の男は『ブルック』と言っていた。ブルックと言えばあの特徴的な骸骨の男、注意していれば攻撃を避けることは容易い。

ブルックを弾き飛ばした方に体を向け、拳を構える。

1秒待つが、一向に攻撃は来ない。何故だ、1秒もあればあの素早い骸骨なら攻撃できるはず。

——まさか、騙されて——!!

そう気づいた瞬間。

背後に何者かが抱き着き、ラブヒーローの首からタイトの隙間に手を突っ込み、冷気を放つ白い塊を取り出した。

その白い塊は、触れているナミの体温が一気に下がるほどの冷気を圧縮した物だった。どれだけの冷気を小さくしたのだろうか、想像もつかない。

「それに気づいたか、貴様——!!」

背中にいる人物に手を伸ばし、その体を掴もうとした時。

再び体に生える無数の腕。ラブヒーローの関節を瞬時に極め、それを鬱陶し気に引きちぎる。そして再び腕を伸ばした瞬間、腹部に感じる熱気。

「——ナミさんに手を出そうとしてんじやねエよ!!  
地獄の思い出ツツ!!」

炎を纏ったサンジの強烈な蹴りが、覇気を覆っていないラブヒーローの鳩尾に突き刺さった。

全身に感じる熱気と痛み。内臓がシェイクされたような衝撃。

その衝撃でナミの体はラブヒーローの体から弾き飛ばされ、地面に着地した瞬間、腰の抜けた間抜けな姿でひいひいと逃げ出す。



初めて体勢を崩すほどのダメージを負ったラブヒーローの体に襲い掛かる、45度近くの熱気。この疑似宇宙空間の温度だ。

先ほどサンジから炎を帯びた蹴りを貰ったせいで、体感温度はそれ以上である。

こんな環境で戦い続けることは……いくら彼でもできない。

「……………解除だ」

ラブヒーローがパチン！と指を鳴らした瞬間、暗闇と星々が晴れる。

曇天とした空が彼らの真上に広がり、火口の上ゆえ暑いことに変わりはないが、先程よりも格段に涼しい空気に麦わらの一味はほうと息を漏らした。

「小宇宙<sup>コズモ</sup>を解除させられたのは初めてだ。まさか、冷気秘密に気付くとはな。それに、あの一瞬で盗んだ技術……泥棒猫のナミか」

「ひいッ!! 違うんです、私じゃありません……」

怯えるナミを横目に、ラブヒーローはルフィを睨んだ。

「良い仲間だな」

「……………ああ。大切な仲間だ!」

「だが、分かっているか? 例え良い仲間がいても……船長のお前が弱ければどうしようもない。『海賊王は強かった』ぞ、モンキー・D・ルフィ」

ルフィは口をつぐむ。

それはラブヒーローからの、一種の脅し。海賊王を目指す者はもつと強くあらねばならないという脅しだ。

弱ければ何も守れない。大切な仲間を失い、絶望の淵に落ちるだけだ。仲間の命を守れないほど弱い船長など存在する価値はない。

「海賊王という称号は生半可な覚悟で目指す物じゃない。それでも、お前は目指すのか?」

「——当たり前だ。俺は……ワンピースを手に入れて、海賊王になる

！」

「……………」

良い覚悟だ。

だがその夢がかなうかどうかは……今、この時の勝負の行方次第だ。

傷を負ったラブヒーロー。

それ以上に傷を負いつつも、気迫で立ち上がる麦わらの一味。

両者は、お互いを認め合っている。

お互いを止める方法は、どちらかがどちらかを倒した時のみ。

ルフィの腕を膨らます。

素早く放たれたゴムゴムの大猿王銃を、ラブヒーローが殴り飛ばした。

——ガァン!!

けたたましい、金属同士が衝突したかのような音。この島中に響き渡るような音。

それが、お互いの雌雄を決める、最後のラウンドのゴングだった。

ラブヒーローはかくも愛のために生き続けた

「まさか、ラブヒーロー……！ そんなに、傷を付けられるなんて……！？」

少し離れた所で戦いを見ているアピールは、焦った風にそう呟いた。

個々の実力は隔絶と言ってもいいほどかけ離れている。だが麦わらの一味は全員で協力する事で、ラブヒーローにジリジリとダメージを与えていた。

「……おつ、まだやってたか」

「ッ!？」

「おーっと、そんなに警戒しなすんなくて。俺ア、この戦いの行方を見に来ただけだからよ」

アピールのすぐそばに現れたのは、元海軍大将の青雩。

深緑のコートの裾をパタパタとはためかせながら、ラブヒーロー達の方を見ていた。そして、顎をさすりつつ、感嘆の声を漏らす。

「何発か良いの貰っちゃってんじゃないの。誰かと協力する事を知ったか……それでもあそこ迄やれるんだから、流石麦わらの一味だ。こりやあもしろかつと、どんでん返しが起きるかもな」

「……ラブヒーローとは約束があります。だから……いくら傷つけられても、負けるなんて、そんな」

「へエ〜。何の約束？」

「……『殺してほしい』、と」

青雩はアピールの方に顔を向けない。

ラブヒーローの方に視線を固定したまま、少し低い声色で言葉を返した。

「殺してほしい、か。酷なことを頼むね嬢ちゃん。けどその約束は果

たされねエかもよ」

少しだけ目を逸らすアピール。

嫌なことを頼んでるのは彼女も分かっていた。しかしすぐに視線を彼に向け、言葉を発する。

「……本当に負けるかもってことですか？ ラブヒーローが」

「ま、そういう事。」

誰にも理解されない孤独な強者である男を、格下でも唯一倒せる方法……それが、絆の深い者同士で協力する事。愛を守る男の弱点が愛を持つ者なんて、皮肉なもんだ」

アピールを殺せるのは、きつとラブヒーローだけ。

世界を探せば彼以外に少女を殺せる者などいくらでもいるが……そんな奴らはきつと、少女の能力を利用するために無理やり生かすだろう。だからアピールは、自分を殺してくれると約束したラブヒーローに拘る。

「加勢は……」

「嬢ちゃんじゃあ無理だな。知ってるぜ、能力が暴走すんだろ？」

まーそれでもキツイだろうよ。

そうだ。『殺してくれ』だなんて言わず、『大好き』って言ってみたらどうだい？ 言葉ってのは、意外にバカにできねエもんだからな。ラブヒーローも頑張れるかもよ」

「……えっ。ちよ、ちよつと！ 私は別にラブヒーローが好きなのじゃ……!!」

「言葉のあやさ、嬢ちゃん。別にその通りに言えって訳じゃねえよ」

顔を赤らめたアピールは、ニヤニヤと笑う青雉を睨みつけた。

何を馬鹿な事を。あんな筋肉男の不審者に好意を抱くなんて馬鹿げてるにもほどがある。それに、この計画が成功したら少女は死ぬのだから。

これ以上人を殺さないために殺されることが、私の幸せだから。そう心に言い聞かせ、戦いへ目を向けた。

「……………」

ラブヒーローが麦わらの一味の主力、ルフィとゾロとサンジを同時に相手取る。

お互いかなり消耗している状態だ。ルフィ達の方は傷が多い。ラブヒーローは傷こそ彼らより少ないものの、能力の連続行使で体力が大きく削られている。

「フランキー・ラディカルビーム!!」

瞬時に頭を下げ、眩い光の粒子で形作られたビームを回避。

主力の3人が鬱陶しい上、他の面々も横やりを刺してくる。1人ずつ潰そうとしても、誰かが誰かのフォローをして中々上手くいかない。

(いい絆だ。本当に……)

感心さえ覚えるほどの連携。麦わらの一味の猛攻を回避しながらそう思う。

全員が相応の実力を持ち、かつ信頼し合っているからこそその行動。孤独に戦い続けてきたラブヒーローには到底辿り着けない境地。

ギギツと、全身の筋肉が軋む音を立てる。

それと同時に、体の芯から茹で上がるような熱が発生する。

……『チャージ完了』の合図だ。

本当に、麦わらの一味は素晴らしい。そんな素晴らしい絆を持った彼らだからこそ。

今からそれを潰してしまうのは……本当に、惜しい事だと思う。

「ゴムゴムの——!」

「遅い」

ギア4・バウンドマンのルフィの鳩尾を殴り抜く。

この形態のルフィの攻撃は威力はあり、ラブヒーローもモロに食らえばタダでは済まない。だが遅すぎて当たらないのだ。

「そろそろ私の体力も限界だ、決めさせてもらおう。……宇宙の藻屑になれ、モンキー・D・ルフィ」

「何——ぐあッ!？」

ラブヒーローが、ルフィの顎を蹴り上げた。

他の面々、特にゾロとサンジがラブヒーローの行動を止めようと駆けていく。

「エア・ウオール空気の壁、全方位展開」

ルフィの首を掴んだまま、自身の周囲へ球状に空気の壁を展開。

圧縮を解除し、辺りの土ごと近寄って来た2人を吹き飛ばした。

2、3秒しか稼げない小細工じみた技だが、今この状況での数秒は余りに大きすぎる。

「エア・ブレイク大気崩壊」

首を掴む腕を天に掲げ、手のひらに圧縮した空気で空へ吹き飛ばす。

ラブヒーローも足元に空気の壁を展開し、吹っ飛んだルフィを追いかけた。

「マリモ!! なんかやべエぞ!!」

「分かってる、俺を飛ばせコック!!」

サンジの右足にゾロが両足を乗せ、天に飛んでいくラブヒーローとルフィを追いかける。

何をするか分からないが、全身の細胞が危険信号を発しているのが分かった。刀を歯で噛み、両手に持った2本の刀を前方に突き出してグルグルと回し始める。

「九山八海 一世界 千集まって小千世界 三乗結んで 斬れぬ物なしッ!!」

サイファールポールが使う月歩の如く、空気を蹴って更に加速するゾロ。

だが……あとコンマ数秒、間に合わなかった。

「——時間がかりすぎる技だ」

「他の太陽とは違い、全身に少しずつ、熱を溜めていく必要がある。  
撃つ時には両手を使い、その上更に数秒かかる。弱点が多すぎる技だ」

「——だがその威力は、地を焼き、天を穿ち、宇宙まで飛んでいくほどに強力」

ラブヒーローは、空に両手を掲げた。

その手の先には未だに吹っ飛び続けているルフイの姿。  
周囲の気温が下がる。

今戦っているこの場所が火口の上だということを忘れてしまいそう  
なくらいに。

キラキラと空気が光り始める。

空気中の水分が凍り始め、結晶となりて、この戦場を彩っていた。

ラブヒーローの前に、超高温の熱の塊……太陽が発生する。

極微小に圧縮された熱がその太陽へ集約していき、質量が加速度的  
に上昇する。

数秒も経てばそれは、今までラブヒーローが放っていた太陽が兎戯

に見えるほど……強く、大きく、そして美しい太陽に成った。

「圧倒的な太陽  
ウルティマ・コア」

空気を焼き飛ばしながら進む、直径100mの太陽。

この島に居る誰もが肌が焦げ付くような熱気を感じ、太陽を仰ぎ見る。目を見張り、口を開け、彼我の実力差を感じた。

「――！」

声すら出せず、太陽に巻き込まれ、そのまま空高くへ飛んでいくルフィ。

その速度は銃弾よりもよっぽど早く、数分もすれば宇宙空間へ到達するだろう。

「一大・三千・大千・世界ツツ!!」

ラブヒーローの背中に向かって放たれた、ゾロの必殺の一撃。

3本の刀による高威力の斬撃。だがラブヒーローは振り返りもせず、2本の刀を武装色の覇気で防ぎ、1本は甘んじて受け入れた。彼の背中を斬り裂き、鮮血が舞う。皮膚一枚ではない、確かにしっかりと斬った。

しかし怯む様子はない。ゾロを地面へと叩き落とし、ラブヒーロー自身はゆっくりと、地面へ着地する。

「……麦わらの一味。私は、お前たちに敬意を払う。素晴らしい絆を見せてもらった……この先の世界で、人々が目指すべき絆だ」



胸に手を当て、腹が立つくらいに綺麗な動作でお辞儀するラブヒーロー。

それに真っ先に食いついたのは、サンジ。

「ふざけんな！ てめエ、全部終わったみたいなお話し方してんじやねエよ!!」

「何故お前たちが何度も立ち上がるのか当初は分からなかった……だが今は分かる。モンキー・D・ルフィは素晴らしい男だ。

故に、麦わらの一味の精神的支柱となっていた。何度も立ち上がる活力の源になっていた。

……だから、真っ先に潰したんだ。もう戻ってこれない」

そう言っつて、空を見上げるラブヒーロー。

宇宙に登り続ける太陽が、爛々と輝いているのが見えた。ラブヒーローが出せる、正真正銘最強の技。

麦わらの一味の顔が青ざめる。

いくらルフィが強いと言えど……流石に、あの技は今までの物と桁が違う威力なのは分かっていた。

そんな時、ナミがハツと顔を上げ、ウソップに何かを投げる。

「ッ！ ウソップ！ これ、ルフィに!!」

「な!?! ……ああ、分かった!!」

受け取った物を袋に包み、一瞬で空に撃つウソップ。

銃弾よりもよっぼど速く撃たれたそれは、もしかすると太陽の裏に居るルフィに届くかもしれないが、望みは薄い。

ラブヒーローは放たれた袋を見ていたが……顔を麦わらの一味の方に向けた。

あんな小包一つで、愛の象徴たる太陽が破壊できるわけがないと思っただからだ。故に撃ち落とすこともしなかった。

「……楽な死に方がしたいのなら、希望は聞こう。私に出来るお前たちへの手向けはそれくらいだ」

構えるラブヒーロー。

麦わらの一味も呼応するように構える。

「る、ルファイは……か、帰ってこれるよな!？」

「……………」

「かなり……厳しいですね」

チョッパの問いに、ロビンは答えられず、ブルックは「無理です」という言葉を飲み込んで答えを濁した。

おろおろと不安がる船医の頭を誰かがポンと叩く。

それは黒い手拭いを頭に巻き、血まみれで火傷だらけ、倒れないのがおかしいくらいにボロボロなゾロだった。

ゾロはチョッパーに対し、力強い声で言う。

「大丈夫だ。必ず帰って来る」

「ほ、本当だよな……?」

「当たり前だ。海賊王になる男が……こんな所で死ぬわけがねエだろ」

キッ!と強く睨むゾロ。視線の先に居るのは、首をコキコキと鳴らすラブヒーロー。

大丈夫だ。必ず帰って来る。

ここであつたばるような奴が船長なら、俺達はもつと前に死んでいった。

「早く戻ってこい、ルファイ」

強い信頼を感じさせる声でそう呟いたゾロ。

刀を口に咥え、ラブヒーローに素早く斬りかかった。

ここは空。

既に雲を超え、大気の明るさ宇宙の暗闇が混じり合う高さに到達していた。

そこに木霊する、1人の男の叫び声。

「——ツツづアアアああああああ  
!!!!!!」

ルフィは叫んでいた。

全身が焼けこげるところの話ではない。覇気を緩めれば、一瞬で体が蒸発しそうな熱だ。

痛みから来る悲鳴と、気合の雄たけびが混じった叫びをあげながら、太陽を殴り続けている。

直径30mのマキシマム・コアとは大きさも威力も硬さも比べ物にならないほど高い。

「俺は死なねエ!! 絶対に、海賊王にツ——ツギヤアアアアアアアアアア!!」

太陽を殴り続けるも、次第に押し戻され、再び全身を焼き焦がされ

る。

さつきからこんな事を何度も繰り返している。しかし一向に太陽を破壊できる気配はない。

(クソ!! 壊せねエ!! 俺じゃ……ラブヒーローには敵わねエのか!?)

そんな弱音が彼の中に浮かび始めた。

宇宙空間に到達すれば、いくら覇気で体を守っても、息が出来ずに死んでしまう。

辛い、痛い、熱い。

(助けてくれ……違う、こんな弱音は……弱音は……)

『その考え方じゃあ、ラブヒーローには勝てねえよ』

「ツ!!」

思い出したのは、いつかの青雉の言葉。

そんな考え方とは。ルフィは1人で突っ走り、強者と一対一で戦う癖がある。そして負けてしまうこともある。

だが違う。

どんな強者にだって勝てない訳はない。

大切な仲間と協力すれば……この先の海に、勝てない敵はいない!

(ハハ……馬鹿だな、俺。一度理解したつもりだったのに……まだちゃんとわかってなかったみてエだ)

スウト、大きく息を吸い込むルフィ。

再び拳に力を込め、太陽を殴り始めた。そして大声で叫ぶ。

「俺は、弱えんだ!!」

痛エのは嫌いだし、腹が減るのも嫌だし、寂しいのも嫌だ!!暑いのは苦手だし、寒いのも嫌だ!!

嫌いなものだらけで、苦手なものだらけで、1人じゃ生きていけねえ自信がある!!

——だから、みんなと協力してるだろうが!!

1人じゃ何にもできねえから……だから、仲間と冒険して、海賊王になるんじゃないか!!

——オレの、馬鹿野郎オ!!

この太陽だって、1人の力じゃ壊せない。

他のみんなも分かってるはずだ。だからきつと、絶対に、何かの援護をしてくれるはずだ。

そう確信したからこそ。

ルフィは見流さなかったのだろう。

太陽の光に紛れて、小さな袋が火を上げながら飛んできたのに気が付いた。

目を見開き、それに一瞬で手を伸ばす。掴んだ瞬間に袋は完全に燃え去り、中の物体が姿を現した。

「！・これは——ラブヒーローが使ってた冷氣!!」

小さく白く輝き、冷氣を放つ物体。

それは小宇宙の中でラブヒーローが体温を冷やすために使っていた物。

太陽のすぐ近くでありながらも、冷氣を十全に放ち続けている。

「これを盗ったのはナミで……この袋はウソップか! ——シシツ、ありがとうな!!」

その冷氣の塊を太陽に投げつけ、それごと太陽を殴りつける。

パキン!と、心地よい音が空に鳴り響いた。

「うおッ!」

瞬間、辺りに広がる圧倒的な冷氣。

ルフィの体の表面に一秒と経たず霜が発生し、カタカタと歯が音を立てる。

だがその冷氣によって、太陽は明らかに威力を落とす。全てを焼き焦がす熱気は少しだけ収まり、速度は著しく下がっている。大きさはそのままであるが。

「ここまで威力が弱まったなら……!!」

しかし、威力が弱まったとはいえ、曲がりなりにもラブヒーローの最強技だ。

ルフィの放てる技は複数ある。だがその技のどれも、太陽を破壊するには威力が足りない。

彼のすぐ背後には宇宙が広がっている。

時間的にも、放てる技は1つだけ。チャンスは一度だけだ。

「考えろ、考えろ!! 思いつくんのだ!! 何か、良い技は——」

刹那。あふれ出す、いつかの記憶。

『逃げられないほど広範囲で、威力が高く、防ぎきれないほど素早い連打攻撃はモロに食らってしまうのだ』

『……今まで格上の強敵と何度も戦ってきた君なら、それに似た技をもう使えるのではないかね?』

それはレイリーの言葉だった。

ラブヒーローの覇気の弱点を聞いた時に、言われた言葉だ。

その時には、何も思いつかなかったが……極限状態で頭がフル回転している今なら、もしかしたら。

「今まで使ってきた技の中で、広範囲で、威力が高くて、素早い連打攻撃——」

1秒で、グラウンドラインで戦ってきた強者達との記憶を全て呼び起こす。

そしてルフィは、とある1つの技を思い出した。いつしか使わなくなっていた、その技を。

——彼の後方の宇宙には、キラキラと、流星が嵐のように降っていた。

「言い残すことは？」

「……ッ!!」

這いつくばるゾロの前に、ラブヒーローは立っていた。

船長である精神的支柱であるルフィを失った麦わらの一味は、少しずつではあるが連携に綻びが生じ、その綻びをラブヒーローに突かれてしまう。

綻びを突かれ、乱れてしまった連携でラブヒーローに敵う訳もなく。  
麦わらの一味は全員、地面に倒れ伏し、瀕死の状態へと変わり果てていた。

「……太陽は宇宙に辿り着いた頃だろう。あの男もすぐに………ツ？」

そう言いながらラブヒーローは天を見上げ、首を傾げた。  
太陽が大きすぎるのだ。

物体は遠くへ行けば行くほど小さく見える。もう宇宙に入り豆粒くらいの大きさに見えてもいい頃なのに、太陽はいまだ雲を超えてすぐの所でその巨大さを主張していた。

不可思議そうにそれを見ていたラブヒーロー。  
瞬間、気づく。太陽がじりじりと、地面に向けて下降を始めていることに。

「——ッ!? まさか、そんな……馬鹿なッ!?!」

「ヘッ……どうやら予想が外れたみてエだな、ラブヒーローさんよ?  
うちの船長は——」

太陽が形を変え始める。

完全な球形から、まるで裏側から強い力で押されたゴム球のようにぐにゅっと潰れた。その状態が数秒続いた、その時。

「——モンキー・D・ルフィは、あれぐらいで死ぬ男じゃねエ!!」

ゾロの力強い、笑みの混じった声が響き。

直径100mの太陽は弾け飛ぶように破壊され、島全体を覆うほどの熱気が拡散された。

そしてその熱気によって発生した蒸気を掻き分けるように現れる、男が1人。





ギチギチッ！と巨大化させた両腕。拳をその腕の中に引っ込める。迫る2つの太陽に向けて、セツトした両腕を構えた。

そして、ルフィは叫ぶ。

昔使っていた技——『ゴムゴムの暴風雨』<sup>ストーム</sup>を、ギア4でも使えるようにアレンジした、新しい技の名前を。

「ゴムゴムの——<sup>キングコング</sup>大猿王!! <sup>メテオストーム</sup>流星嵐ツ!!!」

巨大な拳が2つ、嵐の雨のように太陽に降り注いだ。

いや、その拳の大きさから嵐の雨と呼ぶのはいささか似合わない。まさに、流星が降り注いでいる……そう言った方が適切だろう。

秒間十数発はくだらない速度で、太陽を殴り続けるルフィ。

そして、あれだけ壊すのに苦戦していたマキシマム・コアを——  
いとも簡単に、破壊した。

「——な」

太陽を破壊した流星の嵐が、ラブヒーローに降り注ぐ。

いくら覇気が硬くても、覆う面積が狭すぎる彼では、この拳の連打を受け止めることは出来ない。

回避しようにも、余りに拳が大きすぎて、もう避け切れない。

「私が、負ける——……」

そう呟き。ラブヒーローは何か諦めたように、目を閉じる。

誰にも理解されないほど、愛を求め続けた。

だが世界は辛辣で、余りに残酷で、愛を守ることが出来なかった。

ラブヒーロー……愛を守るヒーローとして相応しくなかった自分には、こんな惨めな最期がお似合いだろう。

糞みたいな人生で、何にも成し遂げられなかった……。

「——ラブヒーロー!!」

甲高い、少女の声が響き渡る。

ラブヒーローは閉じていた目を開き、その声のした方向に顔を向けた。

「負けないですよ!! 勝って!! 私との約束があるんでしょ!?

お願いだから——ラブヒーロー!!

勝って……私を幸せにしてよ!!」

少女。アピールは、涙混じりの声でそう叫んだ。

腕を組んで佇んでいた青雉は、その言葉を聞いて……汚い声を出した。

「えゝえゝッ!? ちよ、おまッ!!」

「何!?!」

『「幸せにして」って嬢ちゃん……そりゃ、プロポーズの常套句みたいなもんだけ!? 今告るかよフツー!?!」

「え……あつ。……いや、ちがッ、違うの!! 違うったら違うから!!」

青雉と何を話しているかは聞こえないが、顔を赤らめながら慌てふ



殴り返し続けることで。

なんと。

ルフィの体を……宇宙へ向けて、押し返し始めたのだった。

## ラブヒーローは終わりを迎える

「おいおいおいおい、冗談だろ!? どんっだけ、スーパー化け物な身体能力してやがんだ!!」

身を起こしたフランキーが、空を見てそう叫んだ。

ラブヒーローがルフイの拳を殴り返し、上空へ押し返し始めるという、到底人間とは思えない行為を始めたのだ。

流石の麦わらの一味も度肝を抜かれてしまった。だが、何も行動しない訳にはいかないのだ。

全員傷だらけで、あの高さまで飛び上がることは出来そうにない。ゾロが刀を杖代わりにフラフラと立ち上がり、ラブヒーローに向けて構えた。

「あそこに攻撃が撃てる奴で、攻めるしかねエ……!」

その言葉を聞いて立ち上がったのは、ナミとウソップ。そして元々立っているフランキー。全員遠距離攻撃の手段を持っている者達だ。それ以外は動けそうになく、役にも立てそうになく、そのまま倒れている。

「みんな……聞いてくれ……!」

ウソップが、パチンコを杖代わりに立っている。

足がガクガクと笑っていて、小突けばすぐにでも倒れ伏しそうだ。

それでも、その目に浮かぶ闘志は全く衰えていない。それどころか今から、一世一代の大博打でもしそうな、覚悟を決めた目をしている。「俺にはとっておきの秘策がある……! 失敗したらやべエけど……成功すりゃ、絶対に勝てる……!」

「どういう策だ……ウソップ」

「へへ……そいつは見てからのお楽しみだぜ。とにかく、俺の言うとおりに攻撃してほしいんだ……」

ニヤリと、笑みを浮かべるウソツプ。

彼以外のゾロ、ナミ、フランキーは顔を見合わせ、コクリと頷いた。

「——クソ!! 速く、速く決めなきやいけねエのに!!」

ルフィが全力で拳の嵐を降らせながら、そう叫んだ。

彼のギア4には制限時間がある。そしてその制限時間が訪れた時

……体から力が抜け、10分間覇気が使えなくなる。

10分も覇気が使えない。

それは1秒の隙が命取りになるラブヒーロー相手では、論外と言つてもいい時間だ。

制限時間が来た瞬間、ルフィの敗北は確定する。

「クソオツ! あともう少しなのにツ!」

ラブヒーローは全力で見聞色と武装色の覇気を使い、ルフィの拳を殴り続ける。

少しずつ、少しずつではあるが、ラブヒーローが押し勝ち始めていた。強者がなりふり構わずに絞り出す底力という奴は、たとえどんな物であっても恐ろしいのだ。

「千八十煩悩鳳!!」

ポンドほう

「フランキー・ラディカルビームツ!!」

「必殺緑星 衝撃狼草!!」

インパクトウルラ

地上にいる3人が、ルフィの拳を殴り続けるラブヒーローの背中に

向け、一撃を放った。

渦巻くゾロの斬撃がフランキーのビームとウソップの緑星を巻き込み、葉っぱとビームがらせん状に重なった斬撃がラブヒーローに飛んでいく。

その高威力の斬撃は、ラブヒーローの背中に向かって一直線に飛んでいき、直撃すると思われた瞬間。

ラブヒーローが左手を後ろに向け、太陽を放ちその斬撃を防いだ。

「クソ、アレでも駄目なのかよ……！」

フランキーがそう漏らす中、ウソップだけはニヤリと笑っている。

だが……。

「甘いッ！」

ラブヒーローが一瞬で上半身を捻り、自身の右側から飛来していた何かを掴み取った。

白い武装色で覆われた指に摘ままれたそれは……ウソップの緑星だった。

「……ッ！」

瞬間、ウソップの顔から笑みが消える。

ナミも顔を青ざめて口元を抑え、目を見張り、驚愕の表情を浮かべた。

「貴様のだまし討ちには一度やられたからな……絶対にやって来ると思っていたよ。気流の操作で全く別の方向から弾を飛ばす、中々いい案だったが……」

「フッフッフッ……どうやら、上手く行きすぎて驚いていたのを、見破られてショックを受けていると勘違いさせてしまったみたいだね」

「何だど？」

ウソップが帽子のつばを親指で上げ、ラブヒーローに好戦的な笑みを見せた。

「俺はめちゃんこ弱いけど、嘘だけは一味で最強なんだぜ！」

一度騙されたお前なら、用心して……一番信頼できる、世界最硬の覇気を纏った手で防ぐよな！ ラブヒーローさんよ!!」



「ッ!!」

冥王レイリーすら認める、世界最硬の武装色の覇気を纏うラブヒーロー。

そしてラブヒーローもまた、自身の武装色が世界最硬である事を自覚している。

強力な攻撃、見慣れない攻撃。だがそれがどうした？

ロジャーすら貫けなかった白い武装色を貫ける攻撃など存在しない。そう信じているからこそ、無意識に、ウソツプの弾を覇気を纏った手で掴んだ。

しかし。

ラブヒーローはその時、忘れていた事を思い出した。

いくら最硬の覇気を持つていようと、それ以前に。

自分は——母なる海に嫌われた『悪魔の実の能力者』なのだ。

「ちいッ!!」

ラブヒーローが騙されたのを確信し、一瞬でその弾を指から離す。

だが一度自分で掴み、体の近くまで持つていつてしまっているのだ。回避するには、もう遅すぎた。

「必殺緑星、サルガツソ！ 海水たっぷりバージョンッ!!」

弾から、海水を滴らせるほどに含んだ海藻が大量に飛び出した。

ウソツプはこの島に降り立つ前、サニー号の船尾にて、この弾を海の中に漬けていたのだ。

そうすると、海藻は海水をたっぷりと含むようになる。次第に乾燥していく故、長持ちはしないため、数時間以内が使用限度ではあるが……その分能力者相手への効果は抜群だ。

「クソッ——!!」

ラブヒーローは一瞬でその海藻を弾き飛ばすが、飛び散った海水が全身に降りかかる。

海棲石を当たられたかのような脱力感が全身に走り、足元に展開した空気の壁に膝を突く。

「ルフィ、ちよつとビリビリ来るかもだけど我慢してね！ ゼウスブリーズ・テンポツ！」

ナミがゼウスを呼び出し、雷雲を食べさせ巨大化させる。

そして空に浮かぶルフィごと、巨大な雷撃でラブヒーローを貫いた。

「——ッ！」

強大なダメージがラブヒーローの体を貫き通した。バリリツと、体の表面に雷が走る。

海水を浴びても能力は解除されない。ただ脱力感が全身に広がるだけだ。

だが今のこの状況で、体から力が抜けるというのは——それすなわち、『敗北』を意味する。

「行ッけエエええ!! ルフィ、そのまま決めちまエエ——ッ  
!!!」

興奮した様子で、パチンコを持ったウソツプがそう叫んだ。

その叫びに呼応したように、ルフィが拳の速度を、限界を超えた速さまで加速させる。

「ぐっ、ぐアッ……！」

ラブヒーローは覇気を纏い、ルフィの拳を殴り続けるが、海水のせいで力が出ない。

次第に腕は弾かれ、ガードすらままならず、全身を殴られ続けるようになった。

ノーガードで全身を殴られるせいで、体は傷だらけになり、至る所

から血が噴き出し始める。

「——落ちろオオおおおツツ!! ラブヒイイイロオオオオ!!」

ルフィが雄たけびを上げながら、重力に従って落下しながら、ラブヒーローを殴り続ける。

そして、黒く巨大な流星の嵐は地面へと衝突した。

地面を叩き割り、岩が空に飛び散り、細かな砂が周囲に散らばる。

パラパラと小石が転がる音だけが広がる中、ルフィが勢いよく空気を吐き始めた。ギア4のタイムリミットだ。

そしてバタリと、その場に倒れ込む。

「っ、へへ……勝ったぞ、ラブヒーロー……」

ギア4の代償で体が全く動かせないルフィのすぐ側には。

顔の赤いバイザーにひびが入り、全身傷だらけで血を流し、仰向けに倒れるラブヒーローが居た。

ルフィはもう動けないが、麦わらの一味はまだ動ける。

対して、ラブヒーローは全身傷だらけで、しばらくは動けそうにない。

——世界の命運を懸けた勝負は。

まさかの大番狂わせ。

……『麦わらの一味の勝利』に終わった。

ルフィの連撃により、地面には3mほどの深さのクレーターが出来ていた。

2人はそのクレーターの中心で、仰向けになって倒れている。

「……ゴフツ」

割れた赤いバイザーの隙間から、血を吐くラブヒーロー。

ここまでやられては……流石に認めざるを得ない。麦わらの一味は確かに、32億2000万の賞金首であるラブヒーローに勝利した。

倒れ伏し、体が動かせないラブヒーローとルフィ。

そんな状況下でありながら、なぜか、ルフィがニシシシと欠けた歯を覗かせて笑い始めた。

「何を……笑っている？」

「いや、なんかおかしくて笑っちゃまったんだ。フーシャ村を出てすぐに出会ったおっさんが、まさかこんなに強エなんて」

「……もつと以前にシャンクスに会っている癖に、よく言う」

命を懸けて戦ったというのに……なぜか、険悪な雰囲気は流れていなかった。

太陽でぶち抜いた雲の隙間から、綺麗な星々が見える。ルフィとラブヒーローはその星を眺めながら、静かに会話し始めた。

「ラブヒーロー……いや、白いおっさん」

ルフィは『ラブヒーロー』と言う呼び方から、わざと白いおっさんという愛称へ変える。それは、もう彼に対して敵意がないという事の表れ。

それに気づいたラブヒーローは、なんとも言えない表情で、顔を少し逸らした。

「おっさんは、覇気の練度がすげえんだろ？ 最後の連撃……白い武装色を使うのをやめて、全身を黒い武装色で覆えば、耐えれてたん

「じゃねエのか？」

もしかすると、手を抜かれたのかもしれないと思うルフィ。それに対し、ラブヒーローは、ゆっくりと答えた。

「黒は……悪の色だ。海賊旗も黒が多い。だが逆に……白は、正しいとか、正義の色だ。」

愛を守るラブヒーローが、悪の黒色で全身を染めるなんて……なんだかカッコ悪いだろう？ だから私は、白い武装色しか使わないんだ」

「……ブフツ。なんだよそれ、あつひやつひやつひや!!」

「……笑うな」

そこまで話し合った所で。

息絶え絶えの麦わらの一味と、焦った様子のアピールが、2人の倒れている場所まで到着した。

クリマ・タクトを杖代わりに歩くナミが、真っ先に声を上げる。

「ルフィ！ 大丈夫ツ——……そうね。まったく」

「ナミ！ サンジ！ オレ、腹減った！」

「馬鹿かお前！ 飯ねだってる場合かツ!! 船戻ったら作るから我慢しろッ!!」

「えーッ!!」

麦わらの一味のやり取りを、顔だけを動かして眺めているラブヒーロー。

そんな彼の頬に手が触れる。

クレーターの中に降り、ラブヒーローの顔の横に座り込んだアピールの手だ。

「ラブヒーロー……」

「すまない、アピール。……負けてしまった」

「しようがないよ。強かったから、あの人達……」

「……ああ、そうだな。本当に強い」

割れた赤いバイザーの隙間から、ラブヒーローの目が覗き見える。

彼の目は今まで世界の命運を懸けて戦っていたと思えないほど、穏

やかな物だった。

「おっさん」

クレーターの中に降りて来た麦わらの一味によって、上半身を起こされるルフィ。

その目は、ラブヒーローと同様に、穏やかな物だった。

「最後に1つ、聞いてもいいか？」

「なんだ」

「おっさんは……なんで世界中に、この計画を宣言したんだ？ 本当  
に成功させたいなら、ひっそりとやりやあいじゃねエか」

その質問を聞いて、ラブヒーローは天を仰いだ。

至極もつともな質問だ。本当に成し遂げたい計画があるのなら、世界に宣言せずにやった方がいいに決まっている。

世界中に超大型の海洋生物を発生させる。民衆の被害を避けるため、避難期間の10日を宣言するというのは、まだ理解できるが……。エンドポイントの場所をわざわざ公表するのだけは、どうにも理解できなかった。

警戒する麦わらの一味に、顔を向け、静かに言い放つ。

「そうだな。何度か……私は言ったな。」

私の計画を止める権利を与えるためだとか、子供じみた誤魔化しの言葉を。

——でも、本当は……この計画を実行することに対し、『迷っていた』からなんだ」

裂けた雲の隙間から、宇宙で瞬く星々が見える。

その無数の星々と同じように、この世界にも、無数の人々がいるのだ。

「海を人が渡れないようにすることで、『愛が失われない世界』を作る。

だが、この計画を実行すると——愛は失われぬが、『愛が新しく生まれることのない世界』になってしまうんだ。

愛とは、人と人同士が関わり合って生まれ、育まれ、紡がれる物。

……今ある愛を守るのが大切なのか、それとも新しく生まれる愛を大切にすべきなのか——それが、私にはわからなかった。

だから、世界中に宣言したんだ。

私を止めに来る……新しい愛を求める者がこの世界にいるのかどうかを、確かめるために」

割れたバイザーの隙間から、ラブヒーローがニコリと笑うのが見える。

屈託のない笑顔だった。

その表情を見て、警戒していた麦わらの一味は毒気が抜けたように構えを解く。

「大海賊時代に生まれ、たった2年と少しでここまでの絆……親愛を築き上げた者達が、私に打ち勝った。

……新しく生まれた愛が、私に打ち勝ったんだ。

こんなに嬉しいことはない。

今ある愛も大切だが……この混沌とした時代に生まれる新しい愛も大切なんだと、心の底から気づかされた」

「じゃあ、海を渡れなくするって計画は、もう」

「……ああ。

ここまでボコボコにされた上に、心がもう認めてしまったんだ。戦う理由もない。……計画は全て廃止だ」

それは事実上、ラブヒーローの口から放たれた、敗北宣言。

麦わらの一味はその言葉を聞いてホッと安堵したり、武器を鞘に戻したり、興奮のあまり近くの者とハイタッチする者までいた。

32億2000万の賞金首と、後戻りの効かない勝負。

そんな勝負に勝利したのだ、喜ばない方がおかしいという物だろう。

「ラブヒーロー。……計画がなくなっちゃったのなら……私、これからどうすればいいかな」

アピールが、小さな声でそう言った。

計画が成就し、死ぬ気でいた彼女にはこれからの予定が一切ない。目標もないのだ。

先行きが全く見えない所へ放り出されるというのは、強い恐怖を感じるものである。

「計画はなくなっただけど、これからも人を殺し続けるくらいなら、いつそ、死んだ方が——」

「……ん？ 一応言っておくが、これからやる事は山のようにあるぞ」

「え？」

困惑するアピール。

そんな彼女に、ラブヒーローはさも当然だと言う風に明るい口調で言葉を続けた。

「まず住む所を探さなきゃならないし、服とかも……ああそうか、その前に食料だ。修行の方法も考えないと」

「……えっ？」

「何が『えっ？』なんだ。自分から『幸せにして』と頼んできたんだろう？」

「いや、それは……言い間違いと言うか……」

小首をかしげるラブヒーロー。

どうやらお互いの間で、何か考え方の行き違いがあるようだ。

頬に添えられたままのアピールの手を掴み、力強い言葉を発する。「死ぬとか殺すとか、そういうのはしない。

確かにお前は、能力を暴走させて多くの人を殺した。街を壊した。罪悪感を感じて死にたくなるのも分かる。

……だけど、死んで償って、それで終わりは駄目だ。

インペルダウンに入って償うのが一番いいんだが……脱獄事件が起きて、こんな風になってしまったからな。



だから今度は、実の能力の制御方法を学んで、覇気を習得して。その罪を償い切れるまで、世界中を巡って人を助け続けるんだ。だから、心配するな。

お前が罪を償い切って、『幸せになれる』ように……私が手伝ってやる」

その言葉を聞いて。

アピールは一度顔を伏せ、唇を糸のように細く結び。

ラブヒーローの首の、喉仏の辺りをバチン！と強く叩いた。

「痛ッ」

「……私の罪って、償い切れるのかな……？」

「……ありきたりな言葉だが、この世に償えない罪はないそうだ。手探りでもいい、少しずつでもいいから、誰かを助けることから始めてみよう。そうすればいつかきつと、償えるさ」

「そうなのかな。……でもきつと、ただ逃げて死ぬより、そっちの方がずっといいよね……」

麦わらの一味の歓声の中に小さく混じる、嗚咽の声。

薄く空気の壁を張り、この声が他の者の耳に届かないようにした。こんな声を聴かれるのは少し恥ずかしいだろう。

ラブヒーローは胸に暖かい涙が落ちるのも厭わず、アピールの手を優しく握り続けた。

「おい、エースの弟!! 無事かよい!!」

バサバサと青い炎の翼をはためかせながら舞い降りてきたのは、白ひげ海賊団の一番隊隊長であるマルコ。

クレーターの中に居る麦わらの一味と、その横に倒れているラブヒーローの姿を見て、ぎよつと目を見張る。

「……本当にラブヒーローを倒しちまったのか。全く、末恐ろしい奴

「だよい……!」

ニヤリと笑ったマルコだが、すぐに顔を横に振ってその笑みを消し、再度ルフィに向けて言葉を放つ。

「海から飛び出してきたカイドウの攻撃で、防衛線に隙が出来ちまつた! そこから海軍がここに向けて大量に進んできてる!! お前たちの船はもう島の裏側に移動させた、すぐに逃げるんだよい!!」

その言葉を聞いて麦わらの一味は戦慄し、特にウソップやナミやチョッパーは顔を青ざめた。

今のこの状態で海軍とぶつかれば、全滅は免れない。

それにこのボロボロの状態で、果たして島の裏側にある船まで逃げる事ができるのか?

かなり厳しいだろう。追いつかれる確率の方が圧倒的に高い。

「……………全員、さっさと逃げろ」

バン!と地面に手を突き、ゆっくりと体を起こすラブヒーロー。

何か嫌な物を感じたのか。ルフィがゾロの背中に担がれながら、大声を出した。

「待てよおっさん! おっさんもボロボロなんだろう!? 俺達の船で一緒に逃げよう!!」

「…………モンキー・D・ルフィ。私には責任があるんだ。ここまでの事をしでかしてしまった、責任がな」

「でも!!」

ラブヒーローは、アピールが手首を掴んでいるのに気付いた。

バイザーの奥でニコリと優しい笑みを浮かべ、瞬時に彼女の額をデコピンで弾く。

頭蓋骨の中の脳が振動により一瞬でシェイクされ、軽い脳震盪のよくな物を起こし、アピールは気絶した。

「私からの頼みを、聞いてくれるか。…………アピールを、『世界のゴミ捨て場』という名前のあった島まで連れて行ってやってほしい」

「嫌だ!! 自分でやれよ!!」

「…………頼む。アピールには、『絶対に行くから、その島で待っていてく

れ』と伝えてほしい」

「……………でもよオ!!」

駄々をこね続けるルフィ。いくらラブヒーローでも今の状態で海兵と戦えば無事では済まないのは、この場の全員が分かっていた。

ルフィの脇腹を肘で強く叩くゾロ。そして声を荒げる。

「いい加減にしろ!! お前は船長だ、駄々をこねて仲間の命を危険に晒すのが役目じゃねエ!!」

「……………」

「……………それに! こういう頼みは……………黙って引き受けるのが、漢つてもんだ」

ゾロがそう言うと、ルフィは何も言い返せずに口をつぐんだ。

倒れないように腕で支えていたアピールの体を、そつと持ち上げるチョップ。医者である彼ならば、大切な人物である彼女を預けるにふさわしいだろう。

「ありがとう。じゃあな」

クレーターから飛び出すラブヒーロー。見聞色で海軍が大量に向かってきている方向を察知し、睨む。

そんな彼の背中を見届けながら、逃げていく麦わらの一味。

ゾロに背負われていたルフィは必死に口を閉ざしていた。

だが次第に我慢できなくなり、しかし駄々はこねず、ラブヒーローに激励の言葉を贈った。

「——おっさん!! 絶対死ぬなよツ!! また、またいつかどつかで会おうなッ!!」

ルフィの言葉に、ラブヒーローは振り返らない。

ただ静かに、サムズアップした右手を彼に見せた。……………それだけで十分だった。

「来たか……」

ラブヒーローがそう呟く。

彼の前には、ザツザツと足音を揃えて歩いてくる海兵たちの姿があった。

海軍大将の姿は見えない。恐らく海岸線で戦っているのだろうか？

「ラブヒーロー……」

列挙する海兵たちの一番先頭に立ち、ラブヒーローの事を強く睨んできている男。

男の名はゼファア。

右腕に機械の腕を装着し、高級そうな葉巻を咥えている。

「その傷は……まさか。お前、負けたのか」

「ああ。麦わらの一味に……な」

ドヨヨツと海兵たちに動揺が広がる。

30億越えの懸賞金首が負けた。しかも、五人目の皇帝と呼ばれる新進気鋭のルフィが率いる海賊団にだ。

今後海軍の中で、ルフィに対する警戒度は更に上昇するだろう。

懸賞金も上がるかもしれない。

だがゼファアにとって、今、そんな事はどうでも良かった。

「……なんだかわ変わったな、お前。いや……違う。戻ったな、昔に」

「戻る？ 昔に？ ……ふむ」

ラブヒーローは顎を抑え、小首をかしげる。

数秒後、ニヤリとあくどい笑みを浮かべ、ゼファアに対して挑発的に指をくいくいと動かして見せた。

「昔となると、確か、一人称は私ではなく『俺』だったか？ ゼファア」

「!! ……フツ、ハツハツハ! とんだクソガキに戻りやがったな、貴様!」

天竜人を殺した時から、おかしくなっていたラブヒーローなら絶対に言わないような、小気味のいい冗談。

それを聞いて、ゼファーは彼が完全に昔へ戻ったのだと確信した。自分では彼の辛さや悩みを解消することは出来なかった。

しかし麦わらの一味がラブヒーローを倒すことで、おそらく彼の苦悩を何処かへ吹っ飛ばしたのだろう。

あのルーキー海賊のガキ共がよく勝てたもんだと心の中で感心しながら、ラブヒーローの方を見た。

お互いに目を合わせて睨み合い、好戦的な笑みを浮かべる。

ラブヒーローが構えた瞬間、海兵たちがそれに反応するように武器を構えた。

「孫へのプレゼント代として俺の首を持っていったらどうだ? ゼファー」

「抜かせ。海兵は賞金首を倒しても、懸賞金は支払われねエよ」

「そうだったのか。クソだな」

「ああ。確かにクソだが……退職金は増えるかもしれんな」

その言葉を聞いて鼻で笑う、傷だらけのラブヒーロー。一生海兵を辞める気などなくせに、退職金の事を考えるか、と。

この数の海兵、そしてゼファーに、姿は見えないものの海軍大將まで控えている。

正直、勝ち目はかなり薄い。

それでも、なお。

ラブヒーローは背後にいる麦わらの一味を逃がすため、ここを退く気は一切なかった。

「——ラブヒーローはここで終わりだ。だがな……」

貴様らには、新時代麦わらの一味を追いかけるよりも前に——旧時代の人間を、超えて行って貰おうか!!」

海軍とラブヒーローの衝突が始まる。

やがてその戦いには海軍大將も参加し、戦闘は更に苛烈を極めた。

——そしてラブヒーローが起こした事件の、翌日。  
ニュース・クーがばらまく、世界経済新聞の号外にて。

『ラブヒーロー死亡』の記事が、一面を飾ったのだった。

## ラブヒーローのいなくなった世界で

エンドポイントでの戦闘から、2週間。

ラブヒーローから預かったアピールを彼の言った通り、世界のゴミ捨て場に連れていき、麦わらの一味は新世界の冒険を再開した。

麦わらの一味、特にルフィはラブヒーローが島に来るまで待つと言ったものの。

アピールはその好意を断り、1人で待たせてほしいと言った。

「……………」

ルフィは、サニー号の船首に座っている。

この辺りの天候は安定していて、麦わらの一味はサニー号の至る所で、各々の好きなことをしていた。

サンジとゾロは相変わらず喧嘩をしている。

それを見てロビンとナミは笑い、チョップパーは傷が悪化しないかおろおろして、ウソツプは呆れ顔をしていた。

フランキーは船の整備をしつつそれを眺め、ブルックはナミのパンツを除こうとしている。

みんな、楽しそうだ。

ルフィはそれを遠くから見てニシシと笑い、大海原の向こうに視線を向ける。

(…………ラブヒーロー。オレ、おっさんには感謝してるんだ)

麦わら帽子のつばを、指でなぞる。

（仲間と協力することの大切さ、信じ合うことの大切さ……俺、おっさんとの戦いでそれを改めて、実感することができた。本当にありがとう）

右の手を、握ったり開いたりする。

ラブヒーローの白い武装色の硬さが未だに手に残っている。彼が使う、世界最硬度の武装色……。勝負には勝てたが、覇気の練度では全く敵わなかった。

（俺達、もっと強くなるよ。おっさんを余裕で倒せるくらい、もっともっと強くなって。）

いつかおっさんが認めるくらい、立派な海賊になってみせる。そして、ラフテルにあるワンピースを手に入れて――）

ルフィは立ち上がり、両腕を天に掲げ、水平線に向かって叫んだ。

「――海賊王に、俺はなる!!」

その声は、遠く遠く、この世界の海中に聞こえるのではないかと思うほど、大きく響いた。



雲がなく、照り付けるような太陽の日差しが窓から入り込む、  
シャツキー、s ぼったくりBAR。

「……………」

レイリーは眉間にしわを寄せながら、カウンター席で酒を飲んでい  
た。

彼のすぐ傍には、世界経済新聞が乱雑に開かれた状態で置かれてい  
る。

開かれているそのページは、『ラブヒーロー死亡』の見出しと共に、  
彼の白タイツスーツ姿の写真が載っている物だった。

ラブヒーローの写真のすぐ横に、酒の注がれたグラスを置く。

数秒そのグラスを見つめ、そしてすぐに、ため息交じりに呟いた。

「…………何をやっているんだか、私は」

年を取ってから感傷に浸りやすくなったのかもしれない。ラブ  
ヒーローは危うい生き方をしていた男だ、いつかこうなることも予期  
できていたはずなのに。

自分の行いに呆れ返り、グラスを回収しようとした時。

——チリンチリン。

BARの扉が開き、取り付けられている鈴の音が心地よく響いた。

その来店した男は、カウンターに座っているレイリーを見て声を掛  
ける。

「——レイリー。…………その新聞の横にある酒は何だ？」

「ッ!？」

その声に、レイリーはすぐに振り返った。

扉を開けた男は、筋骨隆々とした身長3mの男。

赤色の布、その上にピンク色のハートマークが大量にプリントされ

たパツパツのアロハシャツを着ている。

裾が膝上辺りまでの白い短パンを履いており、こちらも足の筋肉によってパツパツになってしまっていた。

そして顔には。

左目の下から首に掛けて、特徴的な黒い傷跡があった。

ロジャーと共に海を航海していた時、何度も船を襲撃して来たラブ・ヒーローと、同じ傷。

驚いた様子のレイリーは、目を見張ったまま声を出す。

「生きていたのか、ラブヒツ——」

彼の声を、右手を挙げて遮る男。

「レイリー。ラブヒーローは死んだよ。今は……『ラノア』だ」

その言葉を聞いて、レイリーは少し考え込み、納得のいったようにニヤリと笑った。

「……そうか、なるほどな。さ、こっちで一緒に飲もうじゃないか。何があったか聞かせてくれ」

ラノアはレイリーの横に座り、自分の訃報が記された新聞を捨て、酒入りのグラスを持った。

まずグラスの中の酒を軽く口に含み、飲み込んだ後、レイリーの方に向く。

「とりあえずだが。なぜ私が生きているかと言うと……まあ、ゼファーが色々やってくれたお陰だ」

あの最後の海軍との戦い。

いくら海軍が四皇勢力との戦闘で消耗しているとはいえ、海軍大将が2人、元海軍大将が1人という戦力のの前ではさしものラブヒーローも勝ち目がなかった。ルフィ達との戦闘で消耗している状態なら尚更だ。

なのでラブヒーローは最初から逃げる方法を考えていた。

その逃げる方法とは即ち、『海中に身を隠す』事である。能力者は海に入れば脱力し、泳ぐ事ができず、溺れ死ぬ。

しかし力が限りなく抜けたとしても、自身の能力を任意でオンオフする事はなんとかできるのだ。

口の中に仕込んだ複数の圧縮空気。これの圧縮を息苦しくなる度に解除する事で、酸素ボンベの代わりにする。

そして同様に体のあちこちに圧縮空気を仕込み、海底に面する部分の圧縮空気を一気に解除する事で、海底から海上へジェット噴射のよう脱出できる。

ある程度の深さまで潜れば見聞色の覇気も届かないので、数日ほど海底で過ごしてから脱出すれば、海軍が島から去った後に悠々と逃げられるという訳だ。

実際、この作戦は途中までは上手く行っていた。

海軍大将2人の苛烈な攻撃に吹き飛ばされ、海の中に叩き落とされる。

そのまま深い海底へと沈んでいき、作戦が成功したと密かに安堵した瞬間。

暗い海中を照らし尽くすほどの光の雨が無数に降り注いだ。黄猿の八尺瓊勾玉だ。

見聞色すらも届かない深さだった筈なのに、どうして撃ってきたのかは分からない。恐らく覇気など関係なしの勘だろうが。

消耗した状態で黄猿の攻撃を受ければ即致命傷になる。

ジェット噴射用の圧縮空気を用いて光弾を回避するものの、最終的にたどり着いたのは、想定よりも更に深い深い海の底。

しかもジェット噴射用の圧縮空気は全て使い切ってしまう、太陽の光すら届かない海の底に取り残される事になった。

海王類が自身の体を偶然引っ掛け、海上に連れていってくれることを期待する日々。

口の中の空気を節約しながら消費するも、一週間が経った頃について切れ、酸欠で意識が朦朧とし始める。

朦朧とする意識。何も見えない暗闇の中。  
意識が途切れる間際に感じたものは、冷たい海水の温度ではなく。

機械のアームが力強く自身の腕を掴み、勢いよく引つ張り上げる感  
触だった。

気が付けば、白のタイツスーツを脱がされ病院服を着て何処かの病  
院のベッドで寝つ転がっていた。

何も分ならず病室でボーツとしてしているとゼファーが現れ、自身を海  
の底から引つ張り上げた事と、死体を上手く偽装した事を聞かされた  
のだった。

その話を聞いて、レイリーが顎髭を撫でながら答える。

「ゼファー……か。あの堅物がよくそんな事をしたな」

「なんでも、その助けた件と偽装工作の件で今までの恩はチャラ、だそ  
うだ。」

まあそんなこんなで、ラブヒーローの名を捨てて、今はただのラノ  
アとして生きている。愛を守る活動は……表立っては出来なくなっ  
たな」

その含みのある言葉に、レイリーは違和感を覚えた。

シャツキーに酒を注いでもらいながら、ラノアに問いかけ続ける。

『表立っては出来なくなった』？ なら裏では、その愛を守る活動と  
やらは続けているのか？」

「ああ。……といってもまあ、それもまた色々あつてな。厳密には裏  
ではないんだ、ちよつとややこしいんだが……」

「ほう。一体何がどうややこしいんだ？」

そう聞かれたラノアは、口で説明しようとするが、中々言葉が上手  
く出てこない。

数秒ほど手をわきわきと動かしながら言葉を考えていたが、やがて

諦める。そして左腕のアロハシャツの裾を、レイリーに見えるようゆっくりとまくり上げた。

「簡潔に言うとな。……『海賊』になった」  
「何!？」

ラノアが見せた左肩には、海賊が使うドクロのマークがあった。入れ墨を入れたという感じではないので、恐らくシールだろう。

そのドクロは、両目に十字の傷があり、非常に特徴的な丸い『赤鼻』が付いている。

「こ、この赤鼻は……まさか!？」  
「そう。」

私は今、王下七武海の『千両道化のバギー』率いる、バギーズデリーバリーの一員なんだ」

口を開け、目を見張り、驚愕の表情を浮かべるレイリー。  
グラスの中の酒をかつこみ、額に手を当てて考えるが、いくら考えても理解が追いつかない。

バギーとラノアの力の差は別次元と言ってもいい、それにラノアは元々海賊がそこまで好きではないのだ。だからロジャーの誘いだつて断った、そう聞いている。

なのに、なぜかバギーの海賊団の一員に加わっている。一体何がどうなつて、傘下に下つたのかが皆目見当もつかない。

頭を手で抑えつつ、レイリーはラノアに言った。

「……い、一体何があったんだ？ 詳しく説明してくれないか」  
「まあそうだろうな……分かった。アレは……——」

ほわほわと、ラノアが天井を見上げて、記憶を掘り返し始めた。

「……アピールに、今必要な栄養は………」

ラノアはとある島に食料の買い出しへ来ていた。

アピールと2人で暮らしている、元『世界のゴミ捨て場』には何も  
ない故、買い物はこうして他の島へ来なければいけないのだ。

身長3m、筋骨隆々の体にパツパツのアロハシャツを着ているため  
衆目を集めるがラノアは気にしない。

財布の中を覗く。

いつかの活動で、お礼として貰って持っていた宝石や金銀のアクセ  
サリーを換金したおかげで財布の中身は潤っている。だが使い続け  
ていれればいずれなくなってしまいう額だ。

余裕のあるうちに、何とか金を稼ぐ手段を考えなければならぬ。

「金……か……」

自分一人なら金などなくても困らなかつた。

食料などそこらの島で猛獣を仕留め、それを食べればいいのだから。服は余り持たず同じ物を使い続ける主義だし、何処でだって寝れるから宿代も必要ない。大体の物は自然から取り、それを自分で加工して使っていた。

だが誰かと一緒。

特に女性ともなると、流石にそんな事をしていられないのは色々疎いラノアでも分かつていた。

食料や服以外にも色々和金はかかる。

歯ブラシとかヘアブラシとかの日用品とか……あと教育、とかだろ  
うか。

読み書きと計算ぐらいなら教えられるが、それ以上となると自信はない。何せ自分自身も、マトモな教育は受けたことがないのだから。

……そもそもアピールは読み書きと計算は完璧にできるので、ラノアが教えられることは覇気の扱い方ぐらいしかなかった。

「力仕事なら、何とか……ん？ 何処だ？ ここは」

そんな風に考えながら歩いていると、いつの間にか商店街から外れ、よくわからない地区に入り込んでしまっていた。

しかも、見るからに治安が悪そうだ。臭気を放つゴミの汁が道の脇に溜まっていたり、血が乾いて凝固した跡が建物の影の至る所に見えたり。

すぐに引き返そうと思ったその時。

「キャー……ッ!!」

と、少し先にあつた酒場の中から、女性の悲鳴が聞こえた。

流石に悲鳴が聞こえては見逃せない。足に力を込め、すぐにその酒

場の中へと突っ込む。

「ん？ なんだデカイ兄ちゃん、なんか用かア？」

酒場の中では、海賊らしき男が酒場の店員らしき女性の首を掴んでいた。

その海賊らしき男の周りには、ボコボコにされ倒れている、これまた海賊らしき男が3人。

一体どういう状況なのか分からないが……とりあえず愛が育まらない、治安を著しく乱すような行為をしているのは確かだ。

女性の首を掴む男の腕の関節を外し、額へのデコピンで意識を奪い、そのまま酒場の外へ背負い投げの要領で放り投げた。

パンパン！と手で服に付いた埃を払う。

すると、倒れていた海賊たちがゆっくりと起き上がり始めた。奴の仲間か？ と思い、身構えた瞬間。

「おい兄ちゃん!! めちゃくちゃ強エじゃねーか!!」

「今兄ちゃんがやったのは名のある賞金首だぜ！ 俺達はいいつをぶっ倒しに来てたの……まあ、返り討ちにあっちまってよ」

「それで殺されそうになったところを、こっちのねーちゃんが叫んじまって、首掴まれてたのよ。本当に助かったぜ!!」

気安く、ラノアの背中を叩きまくる3人。

……恐らくこの3人は賞金首狩りで、あの賞金首を倒そうとしていたところ、返り討ちにあつた……という感じか。なるほど、理解はできる。

「いや、いいんだ。それより、あの賞金首は海軍へ連れて行かなくてもいいか？」

「あ、オレオレ！ 俺行ってくるぜ！」

3人の内の1人が元気よく手を上げ、賞金首の男を縛り上げに行つた。

数時間は意識が戻らない程度に落としたから、近くの海軍基地に連行するくらいなら大丈夫だろう。



そうして酒場から出ようとした時、ラノアの手首がガシツと掴まれた。

「なあ兄ちゃんよ。俺達と一緒に来ねえか？」

「何だつて？」

「俺達と組まねえかつて事よ！ 兄ちゃんくらい強エなら、俺達大歓迎だぜ！！ な、どうだ？」

ラノアは、手首を掴む手を払う。

「悪いが、そういうのは……」

「なら、金に困つてねえか？ 結構儲かるんだぜ！ 兄ちゃんくらい強いならもつと稼げる！！」

「……金、か……それは……」

アピールに幸せに暮らしてもらうためには、何かと金が入り用だ。そのためには慣れない仕事をするよりも、賞金首狩りをする方が稼げる……かもしれない。

ラノアは己の中の天秤で、賞金首狩りの仕事が愛を乱すか乱さないかのジャッジを行う。

そして結局、陽気な男達に連れられ、話だけでも聞きに行くことになったのだった。

「まず、お頭と会わないとな」

「入ると決まった訳じゃないが……」

「まーまー、話を聞くだけでも一応会つとかねえとな」

船で海を進んでいると、とある島が見えてくる。

その緑豊かな島の海岸近くには、赤い布の巨大なテントがあった。天井は赤と白が交互に並んだ布で作られている。

どこかの国で見た、サーカスという奴のテントに似ている。なんとも陽気そうな雰囲気か漂っていた。

「かなりでかいな。組織的な賞金首狩りなんて聞いたことはないが……」

「着いたぜ兄ちゃん。もうお頭に話は通してるからよ、すぐに会える

ぜ」

「ああ、分かった」

船を降り、男達に連れられ、テントの中に入る。

中は草と土の地面に丸いテーブルがいくつもおかれ、そこで何十人もの男達が飲み食いをしていた。

これが全員賞金首狩りだとしたら、とんでもない大組織だ。

何故今まで知らなかったのだろうか。

「お頭!! 到着しました!!」

横に居た男が、テントの上の方に向かって叫ぶ。

丸テーブルがいくつも並んでいるこの場所を見下ろすように、二階部分にテラスが設置されていた。

そのテラスに、こちらへ背中を見せて座っている男が1人。

相当な巨漢だ。少なくとも6 m以上はある。

「フッフッフ……そうか、着いたか」

低い声。

その声と共に、一階部分で飲み食いしていた男たちはシンと静まり返った。それだけ恐れられているということだろうか。

……というかこの声。どこかで聞き覚えが……。

バツと、テラスに居た巨漢が振り返り、ラノアに向かって顔を見せた。

「よく来たな派手馬鹿野郎!! 俺様は王下七武海、千両道化のバギー!!

新しくうちへ来て、がつぱり稼ぎたい馬鹿野郎がいるって……聞いて……」

「………久しぶり」

.....

「……………な、なんちゆう奴を連れてきてんだこの派手馬鹿野郎共オオオ!!」

「ええっ!? な、なんで怒るんですかバギー船長!!」

ラノアの横にいた男たちは、突然バギーに叱責され驚愕の表情を浮かべる。

彼らが焦る中、ラノアは冷静に事を見つめ、自分が壮大な勘違いをしていたことに気付いた。

(……バギーズデリバリー……海賊派遣会社か。あの賞金首を倒してほしいと、依頼が来てたと。海軍に賞金首を届けに行けるのも、王下七武海 of 海賊団だから当然……あーそうか、そうだな)

流石に、海賊に加わる気はない。

その場で踵を返し、バギーに手を振る。

「帰る。じゃあな」

「ちよおつと待てやラブヒーロー!! ちよつと待て、待てって言うてんだろ!!」

「何だ」

だらだらと冷や汗を流すバギー。

今ここでラブヒーローが来たのは誤算も誤算だが……発想の転換をしよう。

事前の連絡で、奴が金に興味を持っていたのは知っている。

ここで上手い事交渉が出来れば……四皇クラスの力を持つラブヒーローを、バギーズデリバリーに引き込むことができるかもしれないのだ。

一番の稼ぎ時に最高戦力のハイルデイン率いる巨人海賊団が抜け

たバギーは、圧倒的な戦力を持った男が現れた高揚感で、少しおかし  
くなっていた。

(もしここでこいつを取り込みりゃあ、四皇へ一気に近づける!)

そんな思惑を持っていたバギーだったが。

不用意に『ラブヒーロー』という名を口にしたのがまずかった。

つい先日にあれだけの事件を起こしたラブヒーローを、バギーズデ  
リバリーの海賊たちが知らない訳がなかった。

ざわざわと騒ぎ始める海賊達。

「おい！ ラブヒーローってあの天竜人殺しの……！」

「ああ、32億2000万の大賞金首だ……！」

「しかもついこの間、死んだってニュースが出回ったはずなのに、なん  
で生きてやがんだ……!?!」

「そもそも本当にラブヒーローなのかよ？ 手配書は全部へんちくり  
んな格好で、素顔なんて1つも写ってねえ……！」

そんな風に騒ぎ始めた彼らを見て、ラノアはため息を吐く。

ここまで正体がバレてしまっっては口封じをする他ない。せつかく  
ゼファーに偽装工作をしてもらったのに、こんなにすぐ生きているこ  
とが世間にバレる訳にはいかないのだ。

「ミニッツ・コア小さな太陽」

右手を天井に向け、直径3mの太陽を生み出した。テントの中に熱  
気が吹き荒れ始める。

明らかな攻撃行為を始めようとしたラノアに、海賊たちは武器を構  
え始めた。

衝突しそうになる両者を見て、慌てふためき、必死に手を振りなが  
ら声を出すバギー。

「おいおいおい待て待て待て!! 野郎共、ラブヒーロー、どっちも落ち  
着きやがれエ!!」

「バギー船長！ こいつは!!」

「俺様の言う事が聞けねエってのかア!? いいから黙って、大人しく話を聞けエ!!」

バギーの叱責を聞いて、渋々と言った風に、大人しく座る海賊達。「!」

その様子を見てラノアは心底驚いた。

この海賊たちの中には、明らかにバギーよりも強そうな者も混じっている。なのに全員が、興奮状態にあってもバギーの言う事を聞いている。恐れられているのではなく、全員がバギーを指導者として認めている。それ程までに統率が取れているのだ。

ラノアは太陽を消し去り、右手を下げる。

攻撃を解除した彼を見てバギーは内心ほっと胸をなでおろしつつ、ビシィツ!と人差し指で彼を指した。

「よくし!・てめエらに、まず俺とこの男の関係を話してやる。

このラブヒーローつつ男はだな、俺様に乗っていた海賊王の船を何度も襲撃し、その度に返り討ちにされていた男よ!!」

そして俺様はこいつと、何度もしのぎを削って戦った敵同士……つてことだ」

……言い方がこすい。

確かにバギーが言っていることは何一つ間違っていないが……。別に毎度しのぎを削るほど実力は拮抗していなかっただろうに。

この言い方だと、まるでバギーがラブヒーローを撃退していたように聞こえる。

事実、海賊たちは目をキラキラと輝かせ、明らかにおかしな勘違いをしているように見えた。

「やっばすげエえバギー船長、32億の賞金首を何度も撃退しちまうなんて……!」

「流石だ船長!! 俺、あんたに付いてきて本当によかったぜ!!」

「言い方がなにか胡散臭いんだガネ」

ラノアがその言葉を否定しない物だから、海賊たちの興奮は更に上がっていく。

バギーは嘘を言っていないし、海賊達に至っては勝手に勘違いしているだけ。それをわざわざ咎める気もない。……バギーは、そんなラノアの性格を熟知しているため、こんな大それたことを言っただけなのだ。

興奮がある程度盛り上がり切った所で、バギーが腕を大きく振って叫ぶ。

「——落ち着け派手馬鹿野郎どもオ!!」

その言葉でシンと静まり返る、海賊達。

静寂の中で、誰もが興味津々な目をバギーに向けている。そんな中彼は、わざとらしく腕を組み、昔を懐かしむように柔らかく話し始めた。

「……ラブヒーローよ、確かに昔はお前と何度もやりあつたぜ……。

だがな、それは昔の話だ。

あれから20年ちよつと。俺様は王下七武海となった!!

そしてこれから四皇の座を奪い、そして海賊王の座を、俺様は取りに行く!!

——俺の傘下に下りやがれ、ラブヒーロー!!

この未来の海賊王が率いるバギーズデリバリー、その最高戦力……Sクラス海賊の座に、お前を加えてやる!!」

場の空気を完全に支配した上で言い放った、バギーの言葉。

完璧に決まったと、心の中で自分を褒めたたえてしまうぐらいに、綺麗に事が進んだ。

加入間違いなし、これからのプランをどうするかと先走った考えを浮かべていたところで——。

「断る」

ラノアの低い声が、テントの中に響いた。

数秒その言葉を理解できなかつたバギー。そして頭の中で『断る』という言葉の意味がしつかりと理解できたとき、唾を飛ばすほどに声を荒げた。

「んだとこの野郎!!」

ためエ金に困ってんだろ!? うちのSクラス海賊になりや金には不自由しねエ!! 悪い話じゃねエだろ!!」

「そういう事じゃない。……その言葉を口にする覚悟の問題だ、バギー」

白い武装色を両拳に纏い、ラノアが敵意をバギーに向ける。

彼は霸王色の覇気を持つていないため、周囲の人間は誰も気絶しない。ただ、今この場にいる誰もが、不用意に動けば殺されると本能で理解するほどの圧を発していた。

「私は32億2000万ベリーの賞金首。異名は天竜人殺し。」

王下七武海の貴様が、天竜人を殺した私を傘下に入れる……これがどれだけ海軍と世界政府を挑発する行為なのか、分かるか？

私がここに居るのがバレれば、このバギーズデリバリーは滅亡する。その覚悟を持って口にしたのか聞いているんだ」

もつともな言葉だ。興奮の冷めた海賊たちもラノアの言葉に同意せざるを得ない。

天竜人を殺した人間を海賊団に入れるなど正気の沙汰ではないのだ。

海軍からバスターコールを受ける可能性が大きい。それに、海軍大将が直々に海賊団を潰しに来るだろう。

そのリスクを理解しての言葉なのかどうか、ラノアは聞いていた。

ピリつく空気の中、冷や汗を流すバギー。

だがその冷や汗を吹き飛ばすように顔を振り、大声で言い返した。

「——そんなの理解してねエと思ってるんのか、この野郎!!」

俺様は海賊王になろうとしてるんだぞ!?

天竜人を殺したとかなんだとかで、いちいちビビッてられるかってんだッ!!」

——そう、言い切ったバギー。

サイファーポールがこの場に居れば、即座にバギーは命を狙われていただろう。

世界政府を完全に敵に回す言葉を放った彼に対する反応は——  
惜しめない賞賛だった。

パチパチと拍手の音が鳴り響き、口笛がピューピューと吹かれる音が歓声に混じって聞こえる。

「流石だ、船長!! あんたやっぱすげエよ!!」

「そうだよな、海賊王になる男が天竜人なんかにビビってられるかってんだよ!!」

「絶対場の雰囲気と勢いで言ってるガネ」

彼らの反応を見て、ラノアは口角を少し上げる。

空気の壁を展開、バギーのいる二階のテラスまで一気に飛び上がり、彼の体をポンと叩いた。

「私が言うのもなんだが……キツパリと言い切ったな、バギー。世界政府の耳に入ったら死ぬぞ」

「てツ、てめエ! ここまで言わせて入らなかつたら承知しねエぞ!」

「わかっている。あそこまで男らしく言い切られたらな。それに……」

お前の、私よりも強い点も見つけたしな」

「はア?」



バギーが、理解不能と言った顔で首をかしげる。

「……数の力と言ったか？　この連中は海賊とは思えないほど統率が取れている。……一人ぼっちだった私にはない力だ」

「何意味不明なこと語ってやがんだお前。おかしくなったのか？」  
「……………」

覇気で固めた右足で、バギーの足先を強く踏みつける。

「痛ッ！　てめエ何しやがんだ!!」

「うるさい。……とにかく、私もバギーズデリバリーに加わろう。

……条件付きでだが」

何の遠慮もなく、ズカズカと幹部のみが立ち入りを許可される二階部分へ入っていくラノア。

「お、おい！　何だその条件付きって!!　ふざけんじゃねエぞ!!」

バギーはゆっさゆっさと体を揺らし、ラノアを追いかけた。

「大体、こんな事があって、バギーズデリバリーに加わったんだ」  
「なるほど、海賊派遣会社か……！」 中々面白い物をやっているもの  
だ、アイツも。……それで？ その条件と言うのは、何なんだ？」

レイリーは、先ほどの話から、その条件と言うのが『愛を守る活動』  
と関連していることに気が付いた。

「話が早くて助かる」と、ラノアは実際に使われている派遣依頼書を  
レイリーに見せた。

『Class : S

Name : 無し

Picture : 無し

Money : \$1,000,000

※依頼を断ることがあります。』

元ラブヒーローであつた事がバレないように、写真も付けず、名前  
も書いていない。それは分かるのだが……。

レイリーが眉間にしわを寄せながら言った。

「……殆ど何も書いてないじゃないか。これで依頼が来るのか？」

「それが意外にな。100万ベリーという、他と比較して破格の値段  
で呼べる最高戦力と言うのが目を引くらしい」

「ふむ。確かに、お前をたつた100万ベリーで呼べるなら、安い方か  
……」

そしてレイリーは明らかに目を引く、一番下の『依頼を断ることが  
あります』という点に目を付けた。

その文を指さし、ラノアに問いかける。

「これが、その愛を守る活動とやと関係してるのか？」

「ああ。これで、愛を乱すことになりそうな依頼は全て弾いているん  
だ。そうすれば自ずと……」

「依頼をこなすという名目で、愛を守る活動ができる……という訳か。  
なるほど、考えたな」

その依頼書を片付け、ラノアは酒を口に含む。

グラスの中の酒をちようど飲み干してしまった所で……『ぷるぷるぶる』という電伝虫の特徴的なコール音が服の中から聞こえて来た。懐から小型電伝虫を取り出し、スピーカー状態で、通話をオンにする。

『あ、もしもし、依頼つす。えくと……グランドライン前半の国にLE VEL6の海賊が率いる海賊団が攻めて来たので、倒してほしい……との事らしいつす』

「……分かった。その依頼は受けよう、一体どこの国だ？」

ガタリと椅子から立ち上がりつつ、その国の名前を聞いた後、通話を切った。

BARの玄関扉に手を掛け、半開きにしながら、振り返ってレイリーに左手を上げる。

「すまない、レイリー。依頼が入った」

「ああ。……また今度飲み直さないか？ 今度はとびっきりの物について、話してやろう」

「とびっきりの物？」

「——ワンピースについて、だ」

グラス片手にそう言ったレイリー。

この世界に生きる海賊なら、誰もが知りたがる『ワンピース』についての情報。

無論、ラノアも興味がないわけではない。あの海賊王だけが手に入れたと噂の大秘宝。それについて、聞けるものなら聞いてみたい。しかし。

ラノアは少し顔を逸らした後、何か遠くを見つめるような、優しい笑顔をレイリーの方に向けた。

「悪いが、その話は聞かないことにしよう。また別の話題で飲み直そう」

「……ワンピースに興味がないのか？」

「ないわけじゃない。けど……もう、ワンピースの正体が何か、聞く相手は決めてるんだ」

その言葉に何かを察し、フツと笑みを浮かべるレイリー。  
誰に聞くつもりなのか。凡そ分かっている。だが、聞かずにはいられない。

「一体、誰に聞くつもりなのかね？」

分かっているくせにとラノアは思いつつ、答えずにはいられない。  
次の海賊王が誰か……。この先の海に強者は腐るほどいるが、もうラノアには、あの男以外には考えられなかった。

「モンキー・D・ルフィ 未来の海賊王」

バン！と扉を開け放ち、空へ飛び立つラノア。  
依頼が来た国までは、10分も飛び続ければ到着するだろう。  
顔を隠すために、小さくしたバギーズデリバリーの布を頭に巻く。  
ロジャー海賊団に襲撃してた時はいつもこんな風に布を頭に巻いていた、懐かしい感覚だ。

「……私を倒したんだ。新世界の強者達だって、きっと倒せる。」

——絶対、海賊王になれよ」

小さく呟くように、彼に向けて送った言葉。

……絶対に届くはずはないのだが。

グランドラインの前半にいるラノアに向けて、新世界の方から。

『海賊王に俺はなる』……と、力強い言葉が返って来た気がした。

ニヤリと笑う。

そう遠くもないうちに、ワンピースの正体が知れそうだと。

空を飛ぶ。

ロジャーから貰った、ラブヒーローという名の男は死んだ。

しばらくは、アピールと共に……罪を償い続ける旅をしよう。

まあ彼女が能力の制御と覇気の習得が出来るまでは、あの島で修行の日々を続けるのだが。

空を飛ぶ、愛を守る、白い一筋の光は消えた。

愛を守るヒーローはこの世から消え去った。

世界の何処かで、今もなお、愛は失われるのだろう。

だけど、それと同時に、世界の何処かで愛は生まれる。

私はラブヒーローにはなり切れなかった。

全ての愛を守り切れるヒーローにはなれなかった。

だから、せめてこの手の届く範囲で精いっぱい——誰かの愛を、守ろうと思う。

神様でもない、凡人の私にはこれが限界なんだ。

それに気づくまでに、遠い遠い回り道をしてしまった。

でももう迷わない。迷っている時間なんかはない。手の届く誰かの愛を守る、そのために、迷って何かいられない。

「誰か、誰か、お母さんを助けてよーっ!!」  
とある国で。

街を攻める海賊団の1人が、足を怪我して動けない女性と、その女性の側にしゃがみ込んで泣く子供に、鈍く光るサーベルを振り下ろそうとした。

——その瞬間。

パキン!とサーベルが根元から叩き折られ、その海賊の顎が下から上へ、白い拳にぶん殴られた。

海賊の体は5mほど上空へ浮かび上がり、意識を失ったまま、地面へ落下する。

「大丈夫か?」

少女に手を伸ばす、ドクロのプリントされた黒い布を巻く大男。

明らかに警戒している少女は、その男に問いかけた。

「……おじさん、誰?」

「私か? 私はな……ふむ」

少し悩んだ後。

男はこう答えた。

「……『白いおっさん』だ。」

「……変な名前……」

少女のもつともな言葉が炸裂した。

—完—

## 蛇足

海兵と成りし貴方はそれでも生きていく

——コツ、コツと。

硬い地面を足先で叩き、ゆったりとした速度で歩く大男がいた。

右手には全身が火傷だらけで気を失っている海賊の髪を掴んでいる。懸賞金が億越えの、グランドラインに住む海賊だ。

大男の行く先に、幾人もの海兵が立っている。

海兵達は男の姿を見るなり冷や汗を流し、一寸の乱れもない敬礼をして、ハキハキとした声で言い放った。

「お疲れ様です、『少将』殿!!」

敬礼する海兵たちのアーチを当然と言った様子で歩む男。

その体軀は3mにも及び、見る物に威圧を与える強靱な筋肉で覆われている。

睨まれた瞬間、思わず縮みあがってしまうような鋭い目つき。そんな彼の顔には、左目から首に掛けて黒く痛々しい傷跡が残っていた。

『英雄の再来』『ゼファアの懐刀』『異常者』という、物騒な二つ名を持つ大男。

ある者は彼を畏怖し、ある者は彼を信頼し、ある者は彼に嫌悪を抱いている。

しかし誰が何と言おうと、彼の功績はまさに御伽噺で語られるような、目覚ましい物であった。



幼少期、当時海軍大将であったゼファアの紹介で海軍に入軍。そのままゼファアに師事し数年の修行を経て、その目覚ましい才能を開花させる。

18歳の時、億越えの海賊を3人討伐、佐官に昇進。

21歳の時、4つの海賊団が集まって出来た総額15億の海賊連合を単独で壊滅させる。

それを皮切りに、次々と目覚ましい功績を積み立て、24歳で海軍少将に至る。

そして現在、26歳になった海軍少将の大男。

今まさに新世界の海賊を半殺しにし、本部へと帰って来た男。

彼の名は——『ラノア』と言った。

敬礼を解いた海兵が、ラノアに恭しい声色で問いかける。

「少将殿。今日は新世界の方にいらっしやると聞いたのですが……どうして本部へ？」

「ああ。七武海の定例会議だ。お鶴さんの代わりに出席するようにと通達が来た」

本来参加予定であった海軍中將のお鶴さんが、新世界で突如乗っていた軍艦の船底に穴が開き、航行不可能なため本部へ戻ってこれないとのこと。

その代わりとして一番フットワークが軽く、新進気鋭の海兵として頭角を現すラノアが呼び出されたのだった。

勝手知った本部の廊下を進み、会議室の大扉の前へ辿り着いた。

見事なレリーフが彫り込まれたその扉に、何度も見慣れているからか特に感動することもなく、片手で押し開ける。

「申し訳ありません。遅れました、センゴク元帥」

「いい。今日も億相当の海賊を捕まえてきたことは知っている。……座れ」

ラノアは円形のテーブルに並んだ椅子……その中の一番下座に座る。

七武海に選ばれるような大海賊は、面子という奴を気にする。よつてこういつた会議で集まる時、下座は常に空きがちだ。

そういつた格式を気にしないラノアは扉に近いからお構いなしに座るが。

机に脚を乗せていた七武海『ドフラミンゴ』が「フッフッフツ」と歯を覗かせて笑う。

「お〜お〜。新進気鋭の海軍少将様は相変わらずえれエ目つきをしてやがるぜ。……なあ、鷹の目?」

「……………フン」

この場に集まる七武海は4人。

天夜叉『ドンキホーテ・ドフラミンゴ』

鷹の目『ジユラキュール・ミホーク』

スリラーバーグ海賊団船長『ゲッコー・モリア』

砂漠の支配者『サー・クロコダイル』

全員が押しも押されぬ大海賊。不参加の者もいるが……現七武海の主力はこの4人。

残り3人は例えいようがいまいがどうにかなるレベルだ。

それに、今日の会議の議題は。

『七武海の主力が1人増える』事についてである。

「知っている者もいるだろうが……今日の議題は、新しく加入する七武海についてだ」

「キ〜ツシツシツシ〜！ 情けねえ、たった一人の海賊に全員ぶつ殺されたんだって？ 仲間なんて作るからだ……」

——ゲッコー・モリアは既に情報を掴んでいたようだ。

彼の言う通り、新世界に鎮座していた七武海率いる海賊団が、たった1人の海賊に皆殺しにされた。その現場を実際に見に行つたが、正に悲惨。暴虐の限りを尽くしたと表現するのが正しい。

「それにしても、だ。殺された奴はコソコソ身を隠すのが得意だったはずだが……」

クロコダイルがそう進言する。

今回殺された七武海は悪魔の実を食べていた。自然系・キリキリの実を食べた全身霧人間で、船ごと霧に包み、身を隠すのが得意だった。

奇襲や闇討ちが非常に達者で、正体が分からないまま敵に回せば厄介だが……種が分かればそう強くもない。

「ああ。だが実際、殺されたことは事実なのだ。そうだろう、ラノア少将」

「はい、私がこの目で確認しました。……なんなら、今ここで死体もお出ししますが」

ラノアは悪魔の実の1つ、ギチギチの実を食べた全身圧縮人間。

生き物は小さく圧縮することができないが、ただの物となった死体なら圧縮することができる。

「いらん！……全く、昔はそんな事をする奴では……」

「……死んだ者の話を長々と聞く気はない。さっさとその新しい七武海とやらを紹介してもらおう」

黒刀『夜』を背中に携えたミホークが、腕を組みながら言った。

それに賛同するように、ドフラミンゴがフツフツと笑う。全員、死者を雅に弔う気持ちなどないということだ。

元帥が視線をこちらに向ける。

新しい七武海を部屋に入れろという事らしい。ゆつくりと椅子を引いて立ち上がり、会議室の大扉を開いた。

又ウツと部屋に入ってきたのは、身長が7mに及ぶほどの大男。

感情を感じさせない無機質な顔つきは、ただそこにあるだけで只人を威圧する迫力がある。

扉を開けて数歩入った所で、部屋の中を見回す。

そして低く静かな声で、名を名乗った。

「……………『バーソロミュー・くま』だ」

この場にいる全員が確信する。

生半可な実力を持った、見掛け倒しの海賊ではない。

真の実力を持った、強者であると。

そこからの会議はつつがなく進んだ。

今回の会議のポイントは、新しい七武海が現七武海の面々に認められるかどうか。

その点、バーソロミュー・くまはしつかりとした実力を持っていた。

生半可な実力なら、ドフラミンゴ辺りが突っかかっていただろう。会議を終えた瞬間に七武海達が立ち上がり、そろそろ部屋の外から出ていく。

今回新たに加わったバーソロミュー・くまも彼らに着いて行くように歩み始めるが。

「……………」

ラノアの方を誰にもバレないように、ほんの一瞬だけ、一瞥する。それに何を言うまでもなく、ラノアは目を伏せた。

センゴク元帥が部屋から出たのち、ラノアも同じように部屋から出る。

会議室には、静寂が再び訪れた。

夜も更け切った頃。

正義のロープをはためかせた、身長3mの男が空を飛んでいた。

いや、空を飛ぶというのは厳密には違う。圧縮した空気に足を乗せ、空気を一気に解放、体を前方に吹っ飛ばすという事を何度も繰り返しているだけだ。

「……………」

今宵は新月。

星の光すら呑み込む海の闇の中に、ポツンと、森に覆われた島があった。

ラノアはその島にめがけて飛び降り、浜辺に着地する。

舞い上がる砂煙を剛腕で一気に払いのけた。

そうするとすぐに、彼の前に、7mほどの身長を持った男が闇の中から現れる。

「尾行は、されていないな」

「ああ。大丈夫だ」

懐から小石を出し、その辺に放り投げる。

瞬間、その小石が膨張し、人が腰かけるのにちょうどよい大きさの岩になった。

ラノアはその岩に腰掛ける。

「無事に七武海になることができたな」

「ああ……。海賊としてもう少し名を上げて成るつもりだったが、確かに、七武海を殺した方が確実に手っ取り早い」

キリキリの実、全身霧人間。

正体を隠すのが非常に得意な男。この広い海で彼の居所を掴むのは殆ど不可能と言ってもいい。

……何の関係も情報も持っていない、部外者の話ならだが。

「七武海の居場所の情報提供、感謝する」

「ああ」

新進気鋭の海兵。

最年少で海軍少将まで成りあがったゼファアの教え子、ラノア。海軍でそれなりの地位に居る彼は、七武海の居場所も全て把握している。

七武海の中で最も弱い者の居場所を、革命軍であるバーソロミュー・くまに横流ししたのだ。

……それはつまり。

彼の正体が——打倒世界政府をもくろむ革命軍へ情報を流す、『スパイ』であることを示していた。

「革命軍の様子はどうか？」

「順調だ。俺が七武海となった事で、更に計画は進む」

「そうか……。こちらも良い報告がある。」

——海軍中将への昇進の誘いが来た」

その言葉に、くまは小さく目を見張った。

ラノアはまだ26歳。海軍少将ですらまだ早すぎるレベルなのに、もう中将へ昇進するのかと。

「海軍中将ともなれば、今よりもっと海軍の機密に触れる事ができるし……。なにより、あの天竜人に接触する機会も増えるはずだ」

足元に落ちていた石を拾い上げ、手の中で弄ぶ。

彼は天竜人に母親を殺されるといふ凄惨な過去を持っていた。

しかし、天竜人……世界貴族という存在を世界が許す限り、何処にでもありふれているような、そんな過去。

幼年期の自身には受け止めきれず、記憶喪失という形で忘れてしまっていた過去。

——…それを、17歳の頃。

ゼファーに付き添って行ったシャボンディ諸島にて。

自身の母を殺した『ゴルモンド聖』が、再び女性を撃ち殺すところを見て、その記憶を取り戻してしまったのだ。

もはや怒り心頭という言葉では言い表せない。

『愛を守る』という信念すらかなぐり捨て、思わずその辺り一帯を吹き飛ばしそうになったほどだ。

その時はゼファーに止められ実行はしなかったが、怒りは消えない。

天竜人を殺す。

だがこの世界の最高権力者と戦うのには、民衆——誰かの『愛』が失われるのは避けられない。

極限の選択。

その2択でラノアは、何を犠牲にしても、誰かの愛を失うとしても、天竜人をぶち殺すことを選択する。

その時から、愛を守るために戦う温和な海兵は——憎き天竜人を皆殺しにするため、革命軍と手を組んだのだった。

ラノアは手の中の石を握り潰し、顔を俯けたまま、くまに話しかける。

「海軍中将の次は海軍大将を目指す。……だがその為には、次期海軍大将と言われる3人の誰かを殺さなければいけない」

ボルサリーノ、サカズキ、クザン。

3人とも次期大将確実と言われるだけの實力を持っている。今真正面からやり合っても、勝てる可能性は非常に低い。

だがこのうちの1人を、それも海軍にバレないように殺さなければならぬ。

難しいが……絶対にやり遂げてみせる。

ふと、水平線の向こうから太陽が顔を覗かせているのに気が付いた。

いつの間にか随分と時間が立っていたようだ。ラノアは立ち上がり、朝日の方に体を向ける。

暖かな朝日に全身が包まれるのを感じながら、正義のローブをはためかせる。

そのままポツリと、そよ風に掻き消えるような声量で呟いた。

「……母さん。俺は、優しいラノアにはなれなかったよ」

……それでも……。

この世界を滅茶苦茶に滅ぼしてでも、母さんの仇だけは打ってみせるから。

朝日を見つめるその瞳には、常人には理解できないほどの——憎悪の炎が灯っていた。

革命の日は近い。



『し… 起き… しほ…』

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

海賊と成りし貴方はそれでも生きていく

「ラブヒーロー。最後の島……俺達と一緒に来ねえか？」  
「！」

あくる日。

オーロジャクソン号の船上にて、ロジャーからそう勧誘を受けた青年……ラブヒーロー。

「お前とはもう長い付き合いだ。海賊と襲撃者なんて珍妙な関係だが……面白れエ関係だった。

だから……最後の旅だけ、仲間として俺に付き合ってくれやしねえか」

青年は目を閉じ、軽く息を吸って。

「断る」

……と短く言い放った。

ロジャーはその答えに少し残念そうで、しかし予想もしていたような、そんな表情を浮かべる。

「おう、そ——」

「——……『ただし』、だ」

青年が人差し指を立てて、少し気恥ずかしそうに言う。

「海賊の誘いに乗るわけにはいかない。だがもし、今ここで戦って負け、『着いてこい』と命令されたのなら……私は従う他ないだろう。命は惜しいからな」

「……フツ」

とどのつまり。

ラブヒーローとしての体裁からかプライドからか、簡単に海賊の誘いに乗るわけにはいかない。

だがそれはそれとして、ロジャーの最後の旅に誘われたのは嬉しく……着いて行けるのならば着いて行きたい。

その気持ちかせめぎ合った結果。

『決闘で負けたなら着いて行っても仕方ない』という結論に行きついたのだった。

拳を武装色で黒く染めたロジャーが、指の骨をポキポキと鳴らす。

「へっ、体だけ一丁前にデカくなったガキンチョが。行きたいなら行きてエって素直に言いやがれ！」

「……今まで何度も戦い、全て負けているが、今回も負けるという確証はないぞ」

ロジャーの拳とは対照的に、青年が自身の両拳を白く染めた。

彼特有の武装色——『白い覇気』によるものだ。

全くの同時。

勢いよく振りかぶった右拳が、互いの顔面にぶつかりそうになり——。

——数時間後。

全身を真っ赤に腫れあがらせたラブヒーローと、一発だけ顔に良いのを貰ってしまったロジャーが、息切れしながらその場に座っていた。

「クク……やるようになったじゃねえか」

「……どうも……」

ロジャー海賊団の面々は、ラブヒーローを手厚く歓迎した。

その際、彼は見慣れない男が海賊団に混じって騒ぎ散らかしているのに気付く。

じつと奇抜な髪をしたその男を見ると、彼が、ズンズンと大股

で近づいて来た。

そして、ラブヒーローの右手を掴んで無理やり握手し、上下に勢よく振る。

「お前がラブヒーローかあゝ！ この船に乗ってる奴から話は聞いている！」

「お、おお……誰だ？ 見慣れない顔だが……」

「ああ！ 俺の名前は『おでん』！ よろしくな!!」

——それが、ラブヒーローの人生を左右する出会いであった事に、その時はまだ気付かなかった。

ロジャー海賊団と寝食を共にし、一カ月。

目的が目前に迫った所で、バギーが高熱を出してぶっ倒れた。

「たゝのむウゝゝゝ！ ラブヒーロー、今すぐ治してぐれゝえゝゝ!!」

「無理。」

「はえゝエよー！」

仕方なくバギーを近くの島の宿に泊め、看病役としてシャンクスも置いて行く。

一番年の近い2人を置き、最後の占めへと向かった。

——そして、最後の島に到着する。

長く空を飛び回っていた私でさえ、一度も見たことのない島だった。

船を降り、しばらく歩き回って。

私たちは確かに……最後の島に残された大秘宝『ワンピース』を見た。

ジョイボーイなる男が一体どんな人物だったのか分からないが、ただ一つ確信できた事がある。

あんなおかしな宝を残すような、とんでもない奴だって事だ。

この世界の歴史における最大の謎、空白の1000年。

その答えを知ったからと言って、何がどう変わる訳でもない。

私は過去の記憶を失ったラブヒーローのままだし、これから先、思  
い出す気配もなかった。

病に体を侵されたロジャーの言で、ロジャー海賊団は解散。

船長もいなくなり、他の仲間たちもそれぞれの故郷や大切な人がい  
る場所に帰ることになった。

私もすぐに船を去っても良かったが……小さい頃から色々な意味  
で、この海賊団の皆には世話になった。

その礼として、全員が無事に目的地へ辿り着くまで戦力の1人とし  
て残る事にしたのだ。

……月光が海に反射するのを眺めつつ、ボーツと偵察を行っている  
時。

背後からカランカランと下駄の音を響かせながら、1人の男が近づ  
いて来た。

「ラブヒーロー、ちよつといいか?」  
「どうした」

背後に居たのはおでんだった。

彼が持っていたワイン入りのジョッキを受け取り、互いに軽く飲ん  
でから、話し始める。

「俺はこの後、ワノ国に帰って開国の準備をしようと思ってるんだ」  
「そうか」

「そこでなんだが……どうだ、一緒にワノ国に来てみねエか?」  
……ワノ国。

侍という強力な人物たちが守る鎖国国家。

内部の情報は全く漏れず、私も訪れた事がない。

「その国には俺の子がいる。船と一緒に乗っていたのは少しの間だが……お前はいい奴だ。それに俺以上に色々な場所の話を知っている。そんな世界中の話を、どうか、俺の子に話してやってくれねエか？」  
「ふむ……………」

確かに。

ロジャー海賊団の船はここ暫く、グランドラインの中を彷徨っていた。それに乗っていたおでんは当然、グランドライン内にある島しか知らない。

だが私はグランドラインの中も外も飛び回っているおかげか、訪れた島の数なら確実におでん以上だ。

その旅の話を、『国に置いて来た子供』に話して欲しいと……。

……国に、置いて来た……。

「……………聞くが、その子供たちは……………今何歳だ？」

「ん？ 兄のモモの助は3歳、妹の日和は1歳だ」

「ハハハ、そうかそうか。まだまだ可愛い盛りで親に甘えたり年  
齢だな！ ハハハハハ」

ラブヒーローが瞬時に、右拳を白い覇気で固める。

「旅に出ずしつかり側にいてやれツツ!!」

「うごアあ!?!」

おでんの右頬を、白い拳で容赦なく殴り抜いた。

月日が経ち、ラブヒーローはおでんと共にワノ国の浜へと降り立った。  
た。

だが、おでんから伝え聞いていたワノ国の美しい光景とやらは、何  
処にも見当たらなかった。

「……………」

民はオロチという男の圧政で苦しみ、マトモな食糧にありつけず、  
餓死している者もいた。

武器工場から流れ出る排水で土壌が汚染され、美しい景色を彩る花々は枯れ果てていた。

おでんの妻はオロチに手を貸す百獣海賊団という奴らの刺客に、足を負傷させられていた。傷口は塞がっているが、後遺症のせいで足は綺麗に動かせない。

普通であれば、悪政を敷くオロチに民が従う訳がない。

だがバックにいるカイドウ率いる百獣海賊団の暴力が、オロチへの反逆を不可能なものにしていた。

ワノ国の現状を聞いて、肩を震わせるほどの怒りを沸かせるおでん。

だが、その側で話を聞いていて、ラブヒーローがおでんと同じ程にブチギレていた。

「行くなら手伝う。多少……色々と吹き飛ばがな」

「ああ……」

おでんの家臣達が静止するのも聞かず、2人は敵のいる城へ駆け出した。

曲がりなりにもロジャー海賊団の一員だった2人だ。雑兵など相手にならない。

2本の刀から飛び出す覇気の斬撃と、熱を圧縮させた太陽が飛び交う。

怒りに身を任せながらもその動きは完璧で、殆ど無傷のまま、オロチのいる城の大広間へと辿り着いた。

「おでん!! なっ、なんだその横にいる男は!」

「俺の……友達だ!!」

素早く斬りかかるも、おでんの刀は不可視の障壁に弾かれた。

オロチの背後にいた老人が語り始める。悪魔の実の一つ、『バリバリの実』の能力で、絶対に破れないバリアを作れるとの事だそうだ。

「クソ! 出てこいオロチ!!」

「キョキョキョ……無駄無駄。悪魔の実の能力は絶対! お前も海賊やってたんなら分かるだろ、おでん!!」

オロチの家臣の片割れが憎たらしげな顔でそう言うのを傍目に。  
ラブヒーローが、トン、と静かにバリアに触れた。

「悪魔の实の能力は絶対。破れないというのなら破れない。ならば破らなければいい。」

………エアブレイク……… 大気崩壊ツツ!!」

バリアの中の空気が圧縮される。

ラブヒーローの能力は圧縮。

体の近くにあるものを小さく縮め、一気に解き放つ能力。

全力で攻撃したって、この透明なバリアは破れないが。

バリアの中の空気を圧縮し、能力者本人を攻撃する事など造作もないのだ。

バリバリの実能力者である老人を気絶させ、もう1人の家臣の首を掴んで地面に押さえ込む。

おでんの目の前には、何の防御も味方もいない、哀れな圧政者が1人いた。

「あ………ああ………」

「………オロチツ!!」

彼が振り下ろす2対の刃は確かに、オロチの体を捉える。

ワノ国を苦しめていた圧政者は今、討伐された……。

「ん………」

ムクリと、身を起こす。

しばしの昼寝のお陰か、懐かしい夢を見ていたようだ。

あの後、百獣海賊団はワノ国からは搾り取れないと見て、すぐに撤



退した。

戦わずに済んでよかったのか、しっかりと叩き潰すべきだったのかは、今も分からない。

オロチの討伐がなされてから25年。

衰えたワノ国の復興を手伝うという名目で滞在を続け、いつの間にか。

「お父様、おはようございます」

……娘ができていた。

復興途中で知り合った女性と何やかんやあつて結婚し、何やかんやあつて娘ができた。

何故こうなつたのだろう。

誰かに裏で糸を引かれていると思つてしまふぐらいスムーズに結婚まで進んだ気がするが、後の祭りだ。

今はワノ国の片隅で武道場を開くしがない一家である。

「ああ、おはよう……」

「お父様、今日はおでん様のお城へ行かれる予定では……？」

「……そうだった。ありがとう」

娘の頭を撫でながら、立ち上がる。

すぐに支度を済ませて空に飛び上がった。

復興が完全に終わったワノ国の上空で、青い水平線を眺めながら、少し、ひとりごちる。

結局の所……私の記憶は戻らなかった。

『世界のゴミ捨て場』と呼ばれたあの島にたどり着く以前の事は全く思い出せない。

自分の親や生まれ故郷の事とか、どうやって能力を手に入れたとか、何故ここまで愛にこだわるのだとか。

しかし……。

思い出せないのなら、思い出せないままで、いいのではないかと今は思う。

全てを知った所で必ずいい結果になるとは限らない。  
私は凡人。ラブヒーローという大層な名だが、今は、家族を守るの  
が精一杯だ。

記憶喪失という、胸にぽっかりと空いた穴を抱えてはいるものの。  
今が幸せなら……それでいい。

ゆっくりと、過去の自分に踵を返し。

再び空を飛び始め、おでんの元へと向かうのだった。

『——起きて!!』

何にも成れなかった貴方はそれでも生きていく

「起きて!!」

——バシヤツ!!

「ぐぬあツ!?!」

海水を顔面にぶちまけられ、勢いよく身を起こした。

ぶるぶると顔を振って髪に纏わりつく水気を払い、側で心配そうに私の顔を覗き込むアピールを見る。

「……………」

しばらく気を失っていたようだ。

頭を押さえ、気絶する前の記憶を無理やり掘り起こす。

——事の発端はたしか、アピールが『料理を披露したい』と言い始めたからだっただけだ。

調理の様子すら『サプライズ』と言って見せてもらえず、大人しく椅子に座って待っていると。

運ばれてきたのは、虹色に光り輝くドロドロのスープだった。

「……………」

一体何をどうしたら食べ物虹色になるのか。

流石にキツイと思ったが、アピールが期待に満ちた瞳と満面の笑みをこちらに向けているため、食べないという選択は選べなかった。

恐る恐る口に運んだ瞬間。

クソまずツ……刺激的な味が口の中に広がり、脳みそが一回転したような感覚に襲われ。

意識を一瞬で失い、背後へ頭からぶつ倒れたのだった。

「…………ごめんなさい！」

アピールが頭を下げ、大声で謝る。

「料理はあんまり得意じゃなくて…………でも、いつも作ってもらってるから、今日ぐらいはって…………！」

「いや、いいんだ。…………それより、井戸から水を汲んできてくれないか？ 海水を洗い流したい」

本当に怒ってはいない。

彼女の好意からの行動だということはラノアも理解しているからだ。

ただ、人間がただただまずい料理を食べただけで気絶するとは思えない。

一刻も早く彼女がどんな食材を使ったのかを調査する必要がある。そのため、アピールに少し離れた井戸へ水を汲んでくるようお願いした。

「ちよ、ちよっと待っててね！」

「ゆっくりでいいからな。……………よし、行ったか。さて」

アピールが見えなくなるところで立ち上がり、彼女が調理していた場所へと近づく。

普段使っている台所は割と悲惨な有様になっていた。

厚み3センチはあるまな板が中央でぶった切れ、鍋の蓋がドロドロに溶けている。

腕のいい鍛冶職人に頼んで作った包丁は粉々に砕け散り、その破片がまきびしのように地面に散乱していた。

「……………まあ、調理道具はどうでもいいか」

道具は後でバギーの所から拝借するとして、問題は食材の方だ。

鍋の中におたまを突っ込み、中にある材料をすくいあげる。

大半はニンジンやじゃがいも等のごくありふれた食材だったが、たった1つ。

明るい桜色をしたキノコが、ぶつ切りの状態で入っていた。

「これは……」

その形状には見覚えがあった。

強い幻覚・催眠作用を持つそのキノコの名は、『イセカイキノコ』。食した者に即座に強い眠気をもたらし、夢の世界へといざなう。

そしてその夢の中で……『もし過去に、別の道や選択肢を選んでいたらどうなるか?』という幻覚を見せるのだ。

ありもしない世界に縋ってキノコを食べ続け、衰弱死する者が毎年100人は現れると言う……立派な危険指定毒キノコである。

「……」

知らずとはいえ、毒キノコを他人に食べさせるのは本当に良くない。いや本当に。

イセカイキノコをゴミ箱に投げ捨て、スープをキッチリと処分する。

彼女には申し訳ないが、毒入りスープなど危なすぎてそのままにはできない。

「ふう……」

処理を終えてもまだ、アピールは戻らない。

軽く息を吐き、少し歩いて、水平線が良く見える所まで移動した。

日光がらんと降り注ぐ中、ポソリと呟く。

「……もしもの世界、か」

今まで無数にあった、人生を左右する選択。

1つでも違う選択を取っていれば、今の私はここに立っていないだ

ろう。

ラブヒーローにならなかった世界がある。

母の事を思い出せず、誰かの愛を守らず、自らの愛を大切に守った世界がある。

もしかすると……人を人と思わないような、正真正銘の悪魔と成った世界だってあるかもしれない。

無数に存在する世界の中には、今の私よりも幸福だった世界もあるだろう。

だが……。

幸も不幸も味わい尽くした末の、今の人生に……後悔は万に一つもない。

「水汲んできたよー!!」

アピールの声が聞こえる。

不幸だらけの人生に戻る時間が来たようだ。

何処の世界でも見ていたであろう、美しい水平線に踵を返す。

そして、水入りのバケツを持って走って来る彼女に手を上げて返事をした。